御笠団印出土地周辺遺跡２　―太宰府市の文化財　第98集―

平成20年

太宰府市教育委員会

太宰府市の文化財 第98集

御笠団印出土地周辺遺跡２

―第３、４、５、６、11次調査―

平成20(2008)年

太宰府市教育委員会

太宰府市の文化財 第98集

御笠団印出土地周辺遺跡

－第３、４、５、６、11次調査－

平成20（2008）年

太宰府市教育委員会

序

本書は、太宰府市坂本の御笠団印出土地周辺遺跡における埋蔵文化財発掘調査報告書です。

調査地は大宰府政庁跡の北西の後背丘陵地、四王寺山の南麓に位置し、古代の軍団印が出土していることから軍団に関わる遺構の展開が期待されていました。

今回の調査では古墳時代から平安前期の整地を伴う建物や墳墓の跡が確認され、政庁周辺域の歴史を知る上で貴重な成果を得ることができました。

本書が学術研究はもとより文化財への理解と認識を深める一助となり、広く活用され、ひいては文化財愛護の精神が高揚することを心から願っております。

最後になりましたが、本調査に対しご理解ご協力いただきました関係各位ならびに諸機関の方々に心からお礼申し上げます。

平成20年3月
太宰府市教育委員会
教育長　關　敏治

例言

1. 本書は太宰府市坂本3丁目で行われた御笠団印出土地周辺遺跡の発掘調査報告書である。
2. 遺構の実測には、国土調査法第II座標系を利用した。したがって本書に示される方位は特に注記のない限りG.N.（座標北）を示し、本文中に記される遺構の角度もこれを基準としたものである。
3. 本書に掲載される遺構番号は、以下の要領で理解される。なお遺構の性格を表記する記号については、SA柵列跡、SB掘立柱建物跡、SD溝、SF道路状遺構、SI住居跡、SK土坑、ST墳墓、SX その他の遺構などであり、略号として以下のように記載している。

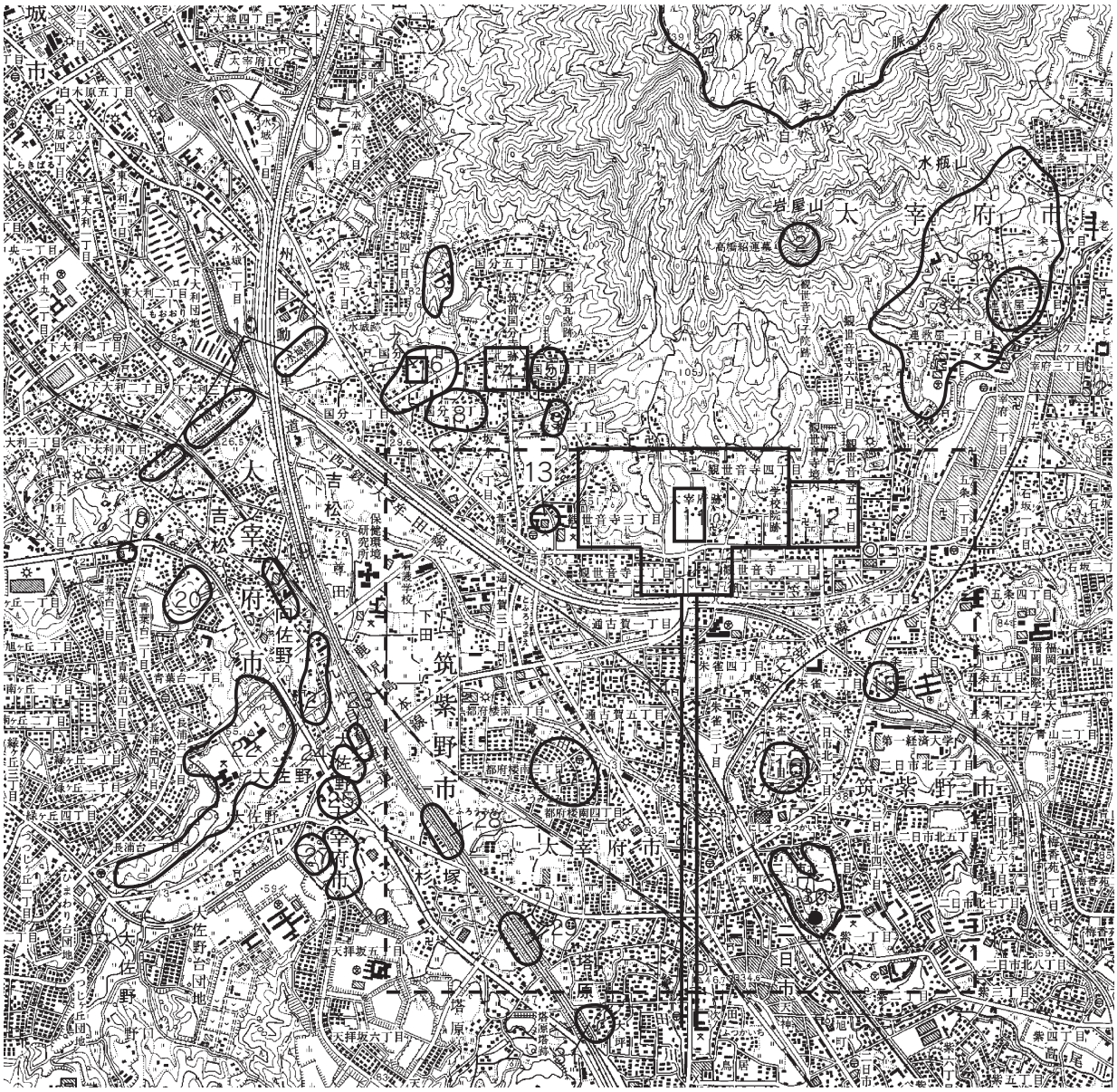
御	3	SX	001
遺跡名	調査次数	遺構種別	遺構番号

4. 本報告に係わる遺構写真、遺物写真、遺構番号台帳、遺物計測表、出土遺物一覧については付属のCD－ROMに収容している。
5. 遺構の実測及び写真撮影は調査担当者の他、山田ふみ、候寧彬（中国陝西省考古研究院）、上村英士（現筑後市教育委員会）が行った。
6. 各調査地点の全体図は手測りによる実測図からデジタルトレースを行い浄書した。
7. 遺構の空中写真撮影は(有)空中写真企画（代表、壇睦夫）が行った。
8. 出土した鉄製品の保存処理は狭川麻子・山中幸子・下川可容子、安芸朋江、鈴木弘江が行った。
9. 遺物の実測は、調査・報告担当者のほか、久味木理恵、木戸雅美、久家春美、福井円、森部順子が行った。
10. 表入力・写真整理は市川晴美、瀬戸口みな子、寺田道子、原理絵が行った。
11. 遺物の整理接合・復元作業は久保喜代香、中村房子、馬場由美、が行った。
12. 遺物の写真撮影は(有)文化財写真工房（代表、岡紀久夫）と山村信榮、柳智子が行った。
13. 図の浄書は、調査・報告担当者および遺物実測者が行った。
14. 本書に用いた分類は以下のとおり。

    土器・・・・『大宰府条坊跡II』（太宰府市の文化財第７集）1983
    「九州地方の古墳時代の土器」『日本土器事典』小田富士雄1996
    須恵器・・・『宮ノ本遺跡II　－窯跡篇－』（太宰府市の文化財第10集）1992
    陶磁器・・・『大宰府条坊跡XV　－陶磁器分類－』（太宰府市の文化財 第49集）2000
    瓦・・・・・『大宰府史跡出土軒瓦・叩打痕文字瓦型式一覧』九州歴史資料館2000
15. 執筆は城戸康利および山村と下高大輔がおこない、編集は、山村が担当した。

目次

Ⅰ．調査地の歴史的環境 ……（山村）2
Ⅱ．調査体制 ……（山村）3
Ⅲ．各調査の概要
Ⅲ-1　第３次調査……（下高）6
1．調査に到る経緯
2．基本層位
3．遺構
4．遺物
5．小結
Ⅲ-2　第４次調査……（山村）12
1．調査環境
2．層位等
3．遺構
4．遺物
5．小結
Ⅲ-3　第５次調査
1．調査に到る経緯 ……（城戸）32
2．基本層位 ……（下高）32
3．遺構 ……（下高）32
4．遺物 ……（下高）32
5．小結 ……（城戸・下高）34
Ⅲ-4　第６次調査
1．調査に到る経緯 ……（城戸）36
2．基本層位 ……（下高）36
3．遺構 ……（下高）36
4．遺物 ……（下高）45
5．小結 ……（城戸・下高）65
Ⅲ-5　第11次調査 ……（山村）66
1．調査環境
2．層位等
3．遺構
4．遺物
5．小結
Ⅳ．まとめ……（山村）136



1.大野城跡
2.岩屋城跡
3.陣ノ尾遺跡
4.筑前国分寺跡
5.辻遺跡
6.国分松本遺跡
7.筑前国分尼寺跡
8.国分千足町遺跡
9.御笠団印出土地
10.水城跡
11.大宰府政庁跡
12.観世音寺
13.遠賀団印出土地
14.大宰府条坊跡(破線内)
15.君畑遺跡
16.般若寺跡
17.市ノ上遺跡
18.神ノ前窯跡
19.原口遺跡
20.篠振遺跡
21.前田遺跡
22.宮ノ本遺跡
23.雛川遺跡
24.フケ遺跡
25.尾崎遺跡
26.脇道遺跡
27.殿城戸遺跡
28.剣塚遺跡
29.唐人塚遺跡
30.峯・峯畑遺跡（●は峯火葬墓）
31.桶田山遺跡
32.太宰府天満宮(安楽寺跡)
33.浦城跡
34.原遺跡

fig.1 太宰府市とその周辺の遺跡（1/30,000）

Ⅰ．調査地の歴史的環境

調査地は昭和２年（1927）に畑の耕作によって出土した「御笠団印」（国重要文化財）の出土地（太宰府市坂本３丁目 757 番地の 1）を挟んだ南北の隣地に位置する。地理的に遺跡は大城山（四王寺山）の南西裾部分の微高地上にあり、大宰府政庁跡の北西約 500m の後背地にあたる。調査地点は小規模な丘陵間の谷部をならして造成した平坦面に展開している。

既往の調査では本報告地点の西北側において、御笠団印出土地周辺遺跡第７・８・９・10 次調査が報告され、正方位に制約された溝や小ピットからなる区画と掘立柱建物、竪穴住居跡からなる集落が検出されている。竪穴住居は九州須恵器編年の Ⅳ 期のものと Ⅳ ～ Ⅵ 期のものがあるとされ、それらが７世紀末頃に整地で均されて区画と掘立柱建物群からなる遺跡構成に変容するようである。さらにそれを踏襲しつつ小規模に改変されたものが９世紀末から 10 世紀初頭頃まで利用され続けている。

fig.2 御笠団印出土地周辺遺跡　調査位置図（1/5,000）（史 ･･･ 大宰府史跡、条 ･･･ 大宰府条坊跡　御 ･･･ 御笠団印出土地周辺遺跡　国 ･･･ 国分寺跡、辻 ･･･ 辻遺跡）

Ⅱ.調査体制

各調査および整理作業を実施した年度の調査体制は以下のとおりである。

（昭和63 ／ 1988年度）御笠団印出土地周辺遺跡第3次調査

総括	教育長	藤　寿人
庶務	教育部長	西山義則（63年12月1日～）
	社会教育課長	花田勝彦（～ 63年11月30日）
		関岡　勉（63年12月1日～）
	文化財係長	鬼木冨士夫
	主　　事	岡部大治（63年12月1日～）
		白水伸司
		川原和典（～ 63年11月30日）
調査	技　　師	山本信夫（調査担当）
		狭川真一（調査担当）
		緒方俊輔
	技師（嘱託）	山村信榮

（平成元／ 1989年度）御笠団印出土地周辺遺跡第4次調査

総括	教育長	藤　壽人（～元年6月30日）
		長野治己（元年8月8日～）
庶務	教育部長	西山義則
	社会教育課長	関岡　勉
	文化財係長	鬼木冨士夫
	主　　事	岡部大治　白水伸司
調査	技　　師	山本信夫（調査担当）
		狭川真一　緒方俊輔　城戸康利　山村信榮
	技師（嘱託）	中島恒次郎

（平成3 ／ 1991年度）御笠団印出土地周辺遺跡第5次調査

総括	教育長	長野治己
庶務	教育部長	中川シゲ子
	文化課長	佐藤恭宏
	埋蔵文化財係長	富田　譲
	文化振興係長	大田重信
	主任主事	岡部大治　川谷　豊
調査	主任技師	山本信夫　狭川真一
		城戸康利（調査担当）
		緒方俊輔
	技　　師	山村信榮　中島恒次郎　塩地潤一
	技師（嘱託）	田中克子（3年10月1日～）

（平成5 ／ 1993年度）御笠団印出土地周辺遺跡第6次調査

総括	教育長	長野治己
庶務	教育部長	中川シゲ子
	文化課長	佐藤恭宏

	埋蔵文化財係長	高田克二
	文化振興係長	大田重信
	主任主事	岡部大治　川谷　豊
調査	技術主査	山本信夫（5年10月1日～）
	主任技師	山本信夫（～ 5年9月30日）
		狭川真一
		城戸康利（調査担当）
		緒方俊輔　山村信榮　中島恒次郎
	技　　師	塩地潤一
	技師（嘱託）	田中克子
		重松麻里子（5年6月1日～）
		井上信正（5年7月1日～）

（平成6 ／ 1994年度）御笠団印出土地周辺遺跡第11次調査

総括	教育長	長野治己
庶務	教育部長	白木三男
	文化課長	花田勝彦
	文化財保護係長	高田克二
	文化振興係長	大田重信
	主任主事	岡部大治　川谷　豊
	主　　事	今村江利子
調査	技術主査	山本信夫
	主任技師	狭川真一　城戸康利
		山村信榮（調査担当）
		中島恒次郎　重松麻里子
	技　　師	井上信正
	技師（嘱託）	田中克子（～ 6年7月31日）
		下川可容子

（平成18 ／ 2006年度）整理作業

総括	教育長	關　敏治
庶務	教育部長	松永栄人
	文化財課長	齋藤廣之
	保護活用係長	久保山元信
	調査係長	永尾彰朗
	主任主査	齋藤実貴男
		吉原慎一（7月1日～）
	事務主査	大石敬介（～ 6月30日）
調査	主任主査	城戸康利（整理担当）
		山村信榮（整理担当）
		中島恒次郎
	技術主査	井上信正
	主任技師	高橋　学　宮崎亮一
	技師（嘱託）	柳　智子　下高大輔

（平成19 ／ 2007年度） 整理報告

総括	教育長	關　敏治
庶務	教育部長	松永栄人(～ 9月30日)
		松田幸夫(10月1日～)
	文化財課長	齋藤廣之
	保護活用係長	久保山元信（～ 9月30日）
		菊武良一（10月1日～）
	調査係長	永尾彰朗
	主任主査	吉原慎一　齋藤実貴男
調査	主任主査	城戸康利（整理担当）
		山村信榮（整理担当）
		中島恒次郎
	技術主査	井上信正
	主任技師	高橋　学　宮崎亮一
	技師（嘱託）	柳　智子　下高大輔（整理担当）
		大塚正樹　端野晋平

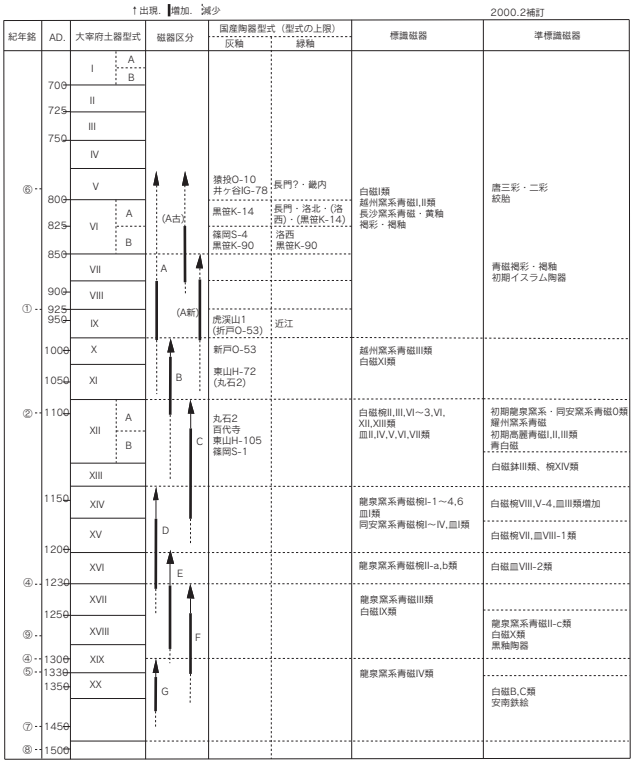


図3　大宰府土器型式と国産陶器・貿易陶磁器編年

紀年銘資料
①A.D.927　延長5年,大宰府74次SD205A溝
②A.D.1091 寛治5年,平安京左京4条1坊SE8井戸
③A.D.1224 貞応3年,大宰府33次SD605溝
④A.D.1304 嘉元2年,大宰府109.111次SD3200溝
⑤A.D.1330 元徳2年,大宰府45次SX1200池
⑥A.D.784　延暦3年,長岡京102次SD10201溝
⑦A.D.1459・1465 長禄3・寛正5年,福岡市井相田CII・SG16池
⑧A.D.1501 文亀元年,大宰府70次SD1805溝
⑨A.D.1265 文永2年,博多62次713土壙

文献
①九州歴史資料館　「大宰府史跡昭和56年度発掘調査概報」1982
②田辺昭三・吉川義彦　「平安京跡発掘調査報告左京四条一坊」1975 平安京調査会
③九州歴史資料館「大宰府史跡昭和49年度発掘調査概報」1975
④九州歴史資料館「大宰府史跡昭和63年度発掘調査概報」1989
⑤九州歴史資料館「大宰府史跡昭和52年度発掘調査概報」1978
⑥長岡京市埋蔵文化財センター「長岡京市埋蔵文化財調査報告書第1集」1988
⑦福岡市教育委員会「井相田C遺跡II」「福岡市埋蔵文化財調査報告書179」1988
⑧九州歴史資料館「大宰府史跡昭和56年度発掘調査概報」1982
⑨福岡市教育委員会「博多48」「福岡市埋蔵文化財調査報告書397」1995

fig.3 大宰府土器形式と国産陶器・貿易陶磁器編年

Ⅲ．各調査の概要

Ⅲ-1　第3次調査

1.調査に到る経緯

本調査は、太宰府市坂本3丁目（旧大字国分字掘田）754-4・15における専用住宅建設に伴って実施した（fig.2）。当該地は御笠団印出土地の西方隣接地に位置し、さらに本調査地の西隣においては過去に九州歴史資料館調査課（以下、九歴とする）によって住宅建築に伴う事前調査が行われている（大宰府史跡第64次調査、九州歴史資料館1980）。その結果、8世紀後半の埋甕を伴う竪穴状遺構を検出、この遺構を覆っていた包含層（暗灰茶色土層）・表土層からは一部平安時代に降るものもあるが、そのほとんどは奈良時代後半の遺物が多量に出土している。しかしながら、御笠団に関する遺構・遺物は確認されていないのが現状である。これらのことから、九歴の過去の調査を踏襲して当該地周辺を「御笠団印出土地周辺遺跡」と呼称し、本調査次数を第3次調査として、記録保存のための発掘調査を実施した。調査期間は、昭和58年11月24日から同年12月5日である。開発対象面積300㎡、調査面積55㎡を測る。調査は、山本信夫・狭川真一が担当した。

2.基本層位

基本層位は上位から1.2mが真砂土による盛土層、それから旧耕土層・暗茶灰色土層があり地山に達する（fig.4）。遺構検出は暗茶灰色土層まで除去後、地山直上において実施した。なお、今回の調査で確認した暗茶灰色土層と、先述の九歴による調査で確認された暗灰茶色土層は同一層と考えられる。

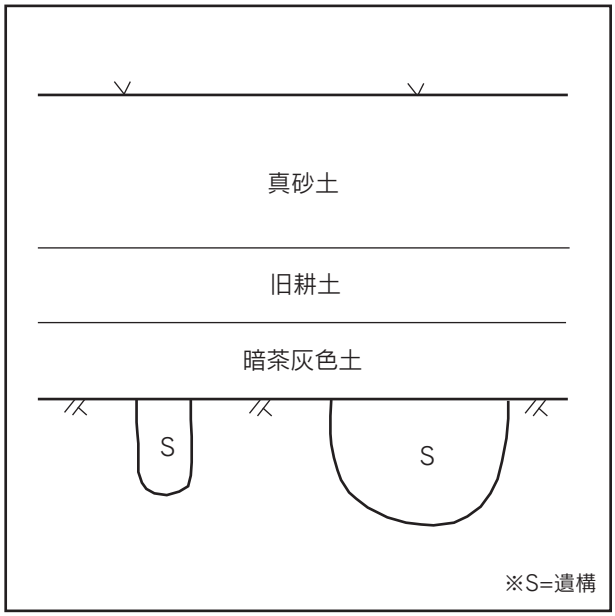


fig.4　土層模式図

3.遺構

調査区のほぼ全域で、奈良時代から平安時代にかけての土坑とピット群が散在していた（fig.5・6）。ここでは主要遺構のみを解説し、その他については「遺構配置図」(fig.6)と「出土遺物一覧表」（CD-ROM収納）を参照されたい。

土坑

3SK001（fig.5、写真3）

調査区の北西隅においてその一部を検出した。検出した最大幅は2m強・深さ0.9m程度である。埋土は多量の土器・瓦類を包含しており、その規模から廃棄土坑と考えられる。出土遺物から平安時代初頭頃と考えられる。

fig.5　遺構全体図（1/100）

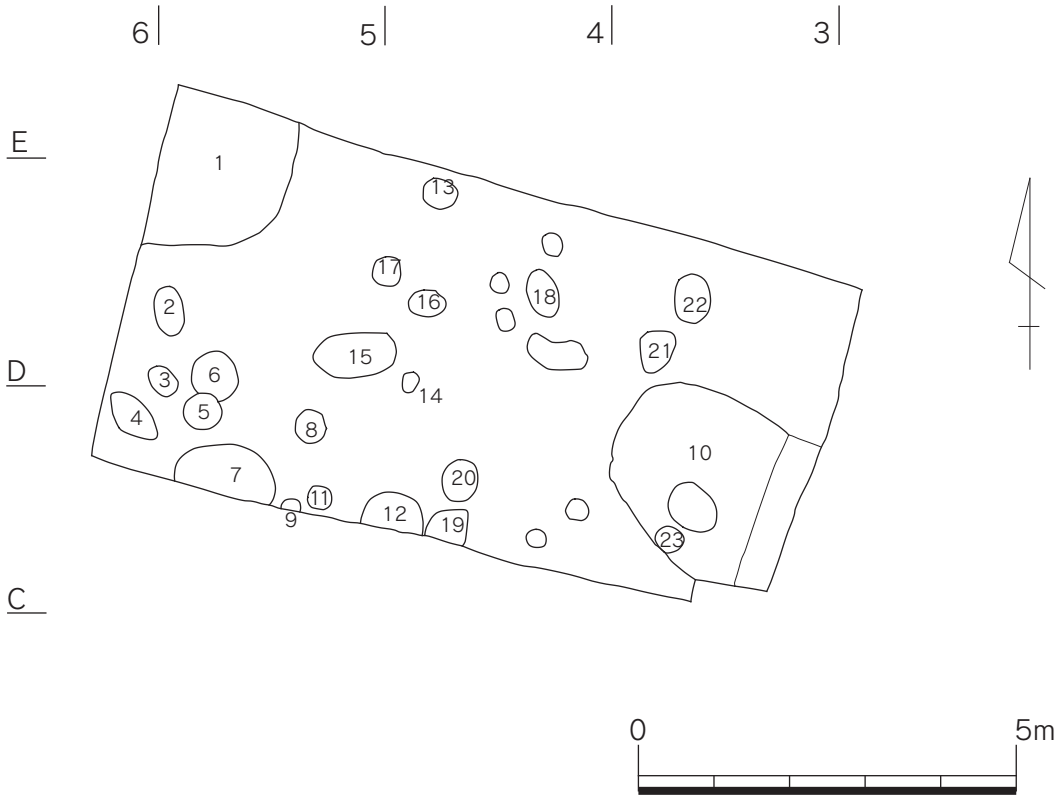


fig.6　遺構配置図（1/100）

3SK012（fig.5、写真1・2）

調査区のほぼ中央南端で一部を検出した。検出した最大幅1m弱・深さ0.3m弱である。出土遺物から奈良時代と考えられるが、先の3SK001と同時期の可能性もある。

その他の遺構

3SX020（fig.5、写真1・2）

調査区のほぼ中央南側において検出した。幅0.5m程度・深さ0.2mの規模である。出土遺物から遺構の時期は決定しがたいが、上記報告遺構と同時期の可能性がある。

4.遺物

各遺物の計測値及び須恵器・土師器の供膳具における底部切離しと内底の調整技法については、すべて「出土遺物計測表」（CD-ROM収納）に記載しているので参照されたい。

土坑出土遺物

3SK001出土遺物（fig.7）

須恵器

坏a（1） 破片。基本的に内外面ともに回転ナデ調整で、色調は淡褐灰～淡褐灰白色を呈する。胎土は緻密だが、軟質である。焼成はやや良好。

坏c（2 ～ 4） すべて破片。2は内外面とも回転ナデ調整。色調は暗灰色を呈し、胎土は緻密、硬質を呈する。焼成は良好。3は内外面とも回転ナデ調整で、底部のみ回転ヘラ削り後にナデ調整。色調は淡褐灰～淡褐灰白色を呈する。胎土は緻密だが、軟質である。焼成はやや良好。4は内面全体に漆が付着している。体部内外面ともに調整不明だが、底部は回転ヘラ切り後にナデ調整、高台は回転ナデ調整を行う。漆付着部以外の色調は淡灰色～淡茶灰白色を呈し軟質である。胎土は緻密で、焼成はやや良好。

椀（5） 破片。基本的に内外面ともに回転ナデ調整。色調は暗茶褐色～淡茶褐色を呈し、胎土は緻密で硬質である。焼成はやや良好。

皿a（6） 破片。内外面ともに回転ナデ調整、その後に内面見込み部分は不定方向のナデ、底部外面は粗いナデ調整を施する。色調は外面底部と断面は淡橙色～淡黄灰色、その他は淡黄灰色～灰色を呈する。胎土は緻密で、焼成はやや良好。

甕（7） 破片。基本的に内外面ともに灰色を呈する。胎土は緻密。焼成良好。

土師器

坏d（8・9） ともに口縁部が一部破損している程度であり、残存度が高い。内面と体部外面上位は回転ナデ後にミガキ調整。底部外面は回転ヘラ削り後ナデ調整。色調は暗橙褐色～淡黄褐色を呈し、胎土は密で、焼成は良好。

坏a×椀a（11） 破片。内外面ともに基本的に回転ナデ調整。色調は内外面ともに淡灰橙褐色を呈する。胎土は密、焼成はやや良好。

皿a（10） 破片。底部は回転ヘラ削り調整、他は摩耗が著しく調整不明瞭。色調は暗橙褐色を呈する。胎土は密、焼成はやや良好。

器種不明（12） 墨書が確認できる部位不明の小破片。上面は回転ナデ後にナデ調整、下面はヘラ切り痕跡がある。色調は淡灰黄色を呈し、胎土は密、焼成は良好。なお、墨書は判読できなかった。

瓦類

丸瓦（13）　色調は凹凸面ともに淡茶白色を呈し、胎土は密。焼成はやや不良。

土製品

移動式竈（14）　焚口付近の破片。色調は内面が暗茶褐色、外面が淡灰橙褐色～淡灰橙色を呈する。下位部は内外面ともに黒茶褐色～黒褐色に変化している。胎土はやや密で、焼成はやや良好。

3SK001 下層出土遺物（fig.8）

須恵器

蓋（5）　破片。内外面ともに回転ナデ調整。色調は内外面ともに淡灰褐色～淡灰青色を呈する。胎土は緻密で、焼成はやや良好。

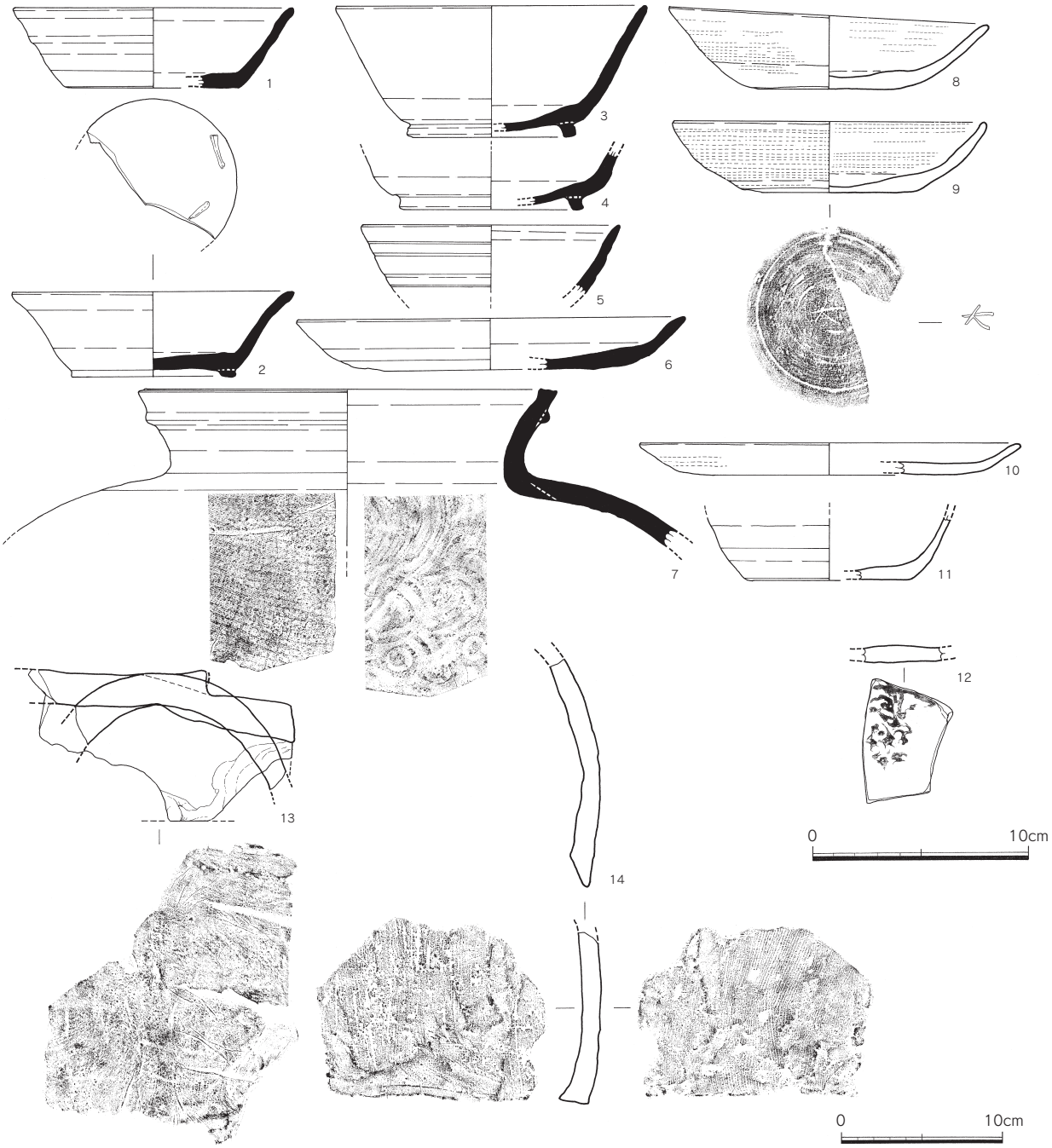


fig.7　3SK001出土遺物実測図（13と14はS=1/4、その他はS=1/3）

坏ａ（1 ～ 3）　1・3 は口縁部から体部にかけての一部が欠損しているのみで残存度が高い。色調は両者とも内外面ともに淡白灰褐色を呈する。胎土は密で、焼成はやや良好。軟質。2 は破片。色調は内外面とも灰色を呈する。胎土は緻密で、焼成・還元とも良好。硬質。

皿ａ（4）　破片。色調は灰色を呈する。胎土は緻密で焼成・還元ともに良好。

鉢（6）　破片。内面に回転ナデ後にミガキ調整が確認できる。色調は内外面ともに淡灰色。胎土は緻密。焼成良好。

瓦類

平瓦（8）　色調は灰色を呈し、胎土は緻密だが、0.5 ～ 1㎜程度の砂粒子を含む。焼成は良好。

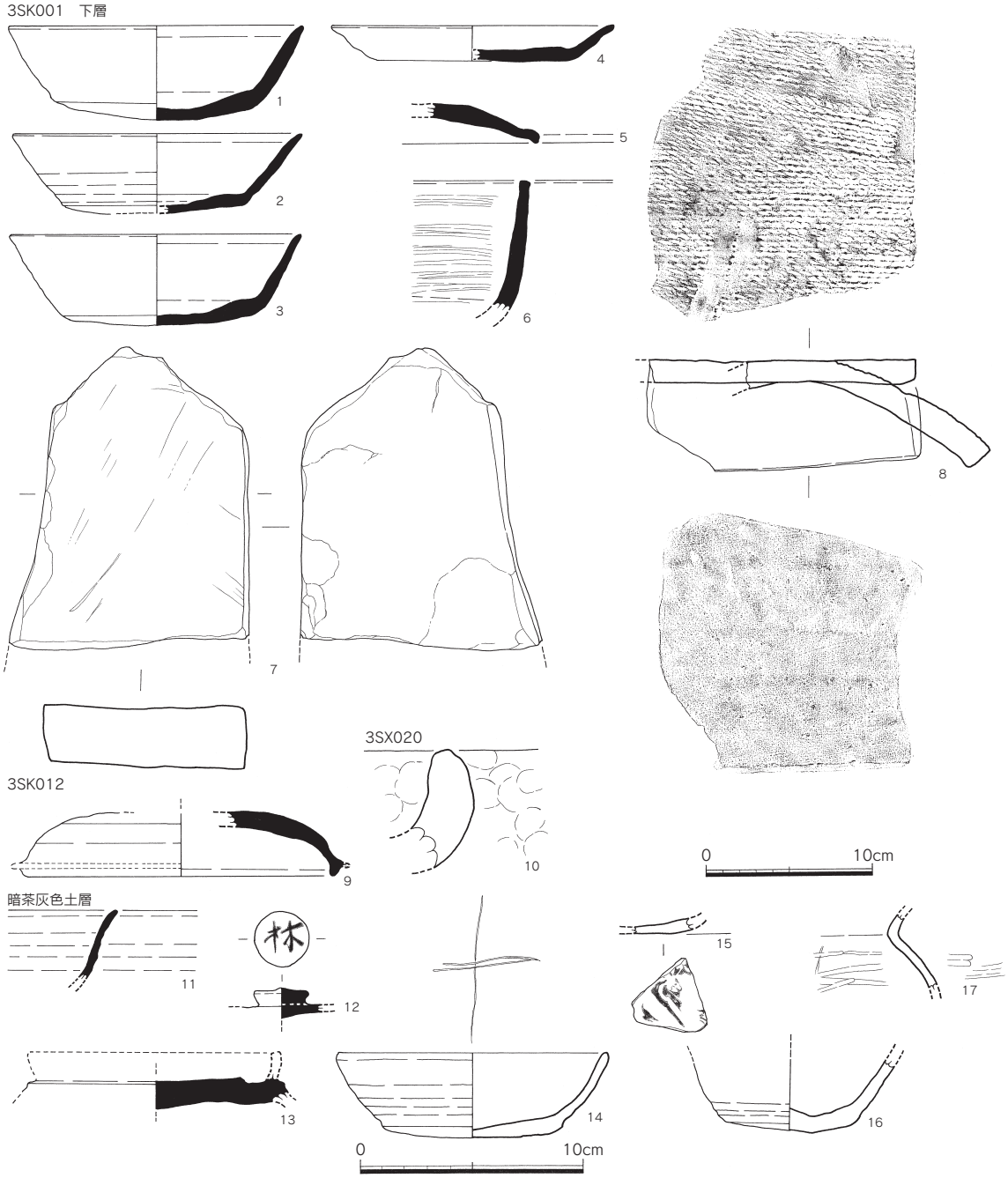


fig.8　3SK001下層・3SK012・3SX020・暗茶灰色土層出土遺物実測図（8はS=1/4、その他はS=1/3）

石製品
砥石（7）　砂岩製。色調は淡褐灰色を呈する。
3SK012 出土遺物（fig.8）
須恵器
蓋 1（9）　口縁部から体部にかけての破片。色調は淡橙色を呈し、焼成は良好で還元は不良。胎土緻密。
3SK020 出土遺物（fig.8、写真 1・2）
土製品
トリベ（10）　注口の残存部分。色調は口縁部付近が黒灰色の付着物があり、その他の内外面ともに淡白灰色を呈する。胎土はやや粗い。
各層出土遺物
暗茶灰色土層出土遺物（fig.8、写真 3）
須恵器
蓋（12）「林」墨書のある小破片。色調は淡白灰色を呈する。胎土は密で、焼成・還元ともに良好。
坏（11）　破片。内外面ともに回転ナデ調整。色調は内面が灰褐色で外面が淡赤灰褐色を呈する。胎土は緻密で、焼成・還元ともには良好。硬質。
円面硯（13）　破片。色調は淡灰色を呈する。胎土は緻密で、焼成・還元ともに良好。硬質。
土師器
坏 d（15）　外面に墨書がある破片。色調は淡橙色を呈する。胎土は密で、焼成は良好。
坏 e（16）　破片。基本的に内外面ともに回転ナデ調整。色調は淡白橙色を呈する。胎土は緻密で、焼成は良好。硬質。
坏（14）　口縁部が欠損しているが残存率が高い。口縁部に歪みがあり、内外面ともに回転ナデ調整。色調は内面口縁部が明橙色、底部が淡黄褐色で、外面が淡褐黄色を呈する。胎土は密。焼成良好。
黒色土器 B 類
壺（17）　破片。色調は内外面ともに黒灰色を呈する。胎土は緻密で、雲母を含む。焼成良好。

5. 小結

調査の結果、奈良時代から平安時代初頭頃にかけての遺物が出土する数基の土坑とピット群を調査区全域において散在的に検出した。中でも 3SK001 は他の土坑に比べると規模が大きく、埋土中の遺物包含量が多く、平安時代初頭頃の一種の廃棄土坑であった可能性がある。ピット群については、建物・柵などの遺構になる可能性は低く、調査区近辺においての何らかの生活痕跡を把握することができるに留まる。よって、本調査においては、当初想定されていた御笠団に直接関わるような遺構・遺物を見出すことはできなかったが、御笠団印出土地の周辺には軍団が存在していた時期に相当する何らかの生活痕跡が存在することは確実といえる。今後の調査に期待したい。

【参考文献】
九州歴史資料館 1980「第 64 次調査」『大宰府史跡　昭和 54 年度発掘調査概報』

Ⅲ -2　第 4 次調査

1 . 調査環境

御笠団印出土地周辺遺跡第 4 次調査地点は太宰府市大字国分字堀田 756 にあり、現場は御笠団印出土地の東にあり、大城山（四王寺山）の東裾部分の微高地上に当たる。調査地点は丘陵間の谷部をならして造成した平坦面を呈す。

調査期間は昭和 64 年 1 月 9 日から 3 月 30 日までであり、調査面積は 200㎡である。調査は山本信夫が担当した。

2．層位等

今回の調査では遺構面は暗褐色土を除去した上面と、調査区中央から北側にあった茶褐色土を除去した下面の 2 面が検出された。復元される柵や建物は上面で検出された。下面もピットが見られたが、調査区内において建物等の復元には至らなかった。

3 . 遺構

柵列

4SA105（fig.10、写真 2・3）

調査区の北側の上面で検出された 4 間の掘立柱式のもので、柱穴は直径 0.2m、深さは深いもので 0.4m を測る。方位はN－ 2° 17′－ W を採るほぼ南北方向のものである。柱間は a － b 間は 2.0m、b － c、c － d 間は 1.6m、d － e 間は 1.2m を測る。

4SA110（fig.10、写真 2・3）

調査区の北側の上面で検出された 3 間の掘立柱式のもので、柱穴は直径 0.2m、深さは深いもので 0.3m を測る。方位はN－ 20° 0′－ W を採る南北方向のものである。柱間は 2.0m 等間である。

掘立柱建物

4SB100（fig.10、写真 2・3）

2 間× 2 間の南北棟である。柱穴は直径 0.4m、深さは深いもので 0.3m を測る。柱間は南北の桁方向は a － b、f － g 間は 2.6 mで、b － c、e － f 間は 2.0 mである。方位はN－ 19° 48′－ W を採る。方位は 4SA110 とほぼ同じである。

溝

4SD005（fig.10、写真 2・4）

調査区南側で検出された溝である。東側は途中で立ち上がって、消滅している。溝の規模は長さ 9 m、幅 0.5 ～ 0.7 m、深さ 0.3 mを測る。南に弧を描く形状を呈しているが芯の方向を採ればN－ 42°－ E を採る。

土坑

4SK006（fig.10、写真 4）

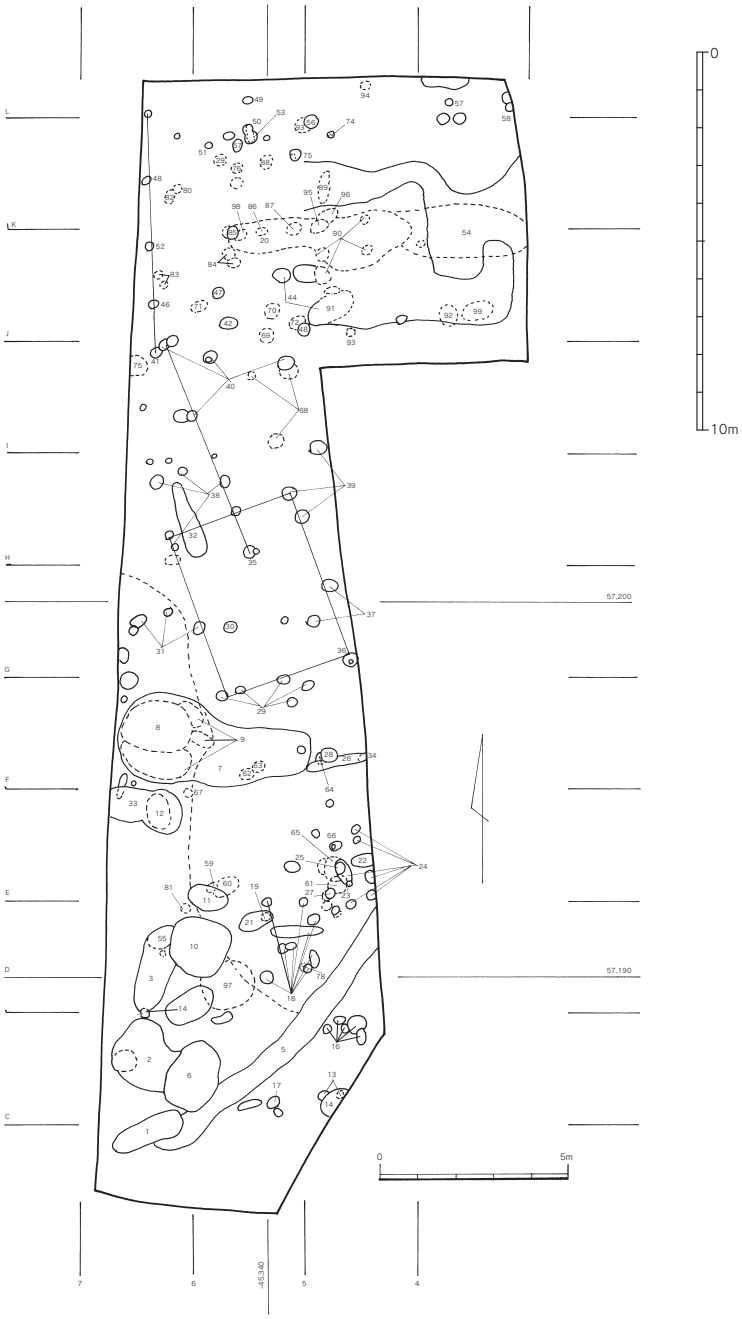
調査区南側で検出された土坑である。土坑の形状は南北に長い楕円形を呈す。土坑の規模は長さ 1.9 m、幅 1.5 m、深さ 0.2 mを測る。

4SK007（fig.10、写真 8）

調査区南東側で検出された土坑である。4SK008 に切られる。土坑の形状は南北に長い楕円形を呈す。土坑の規模は長さ 2.85 m、幅 2.1 m、深さ 0.15 mを測る。

4SK008（fig.10、写真 4）

調査区南東側で検出された土坑である。土坑の形状は円形を呈す。土坑の規模は幅 1.4 m、深さ 0.3 mを測る。



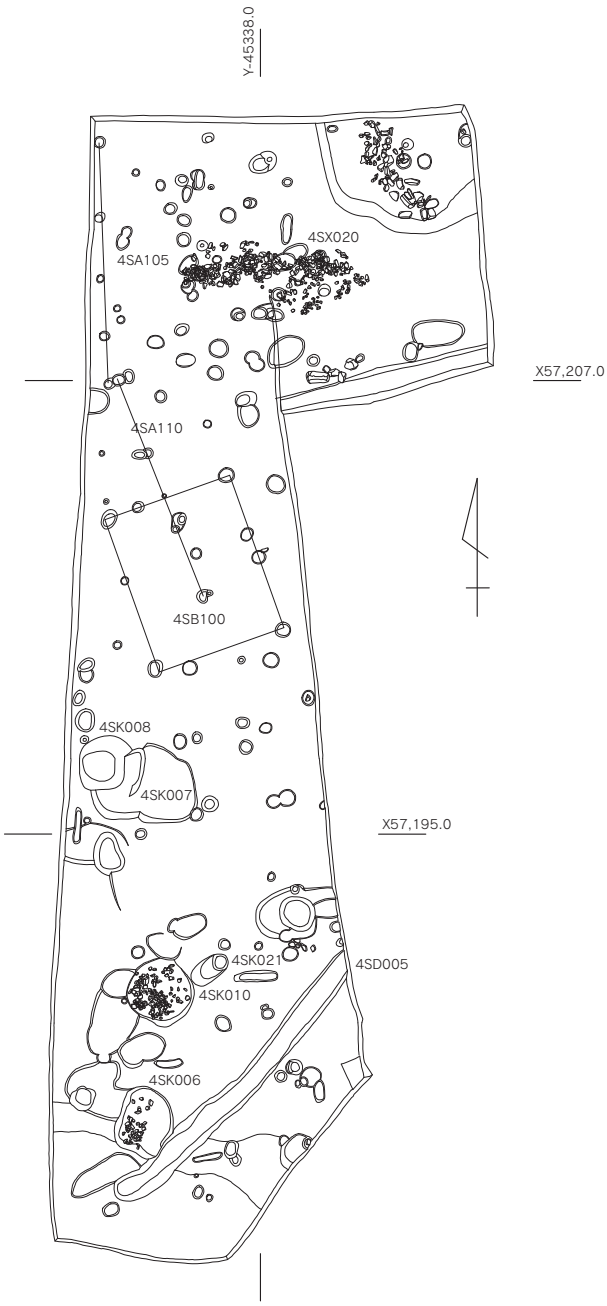


fig.9　第 4 次調査遺構全体図（S=1/200）　fig.10　第 4 次調査遺構配置図（S=1/200）

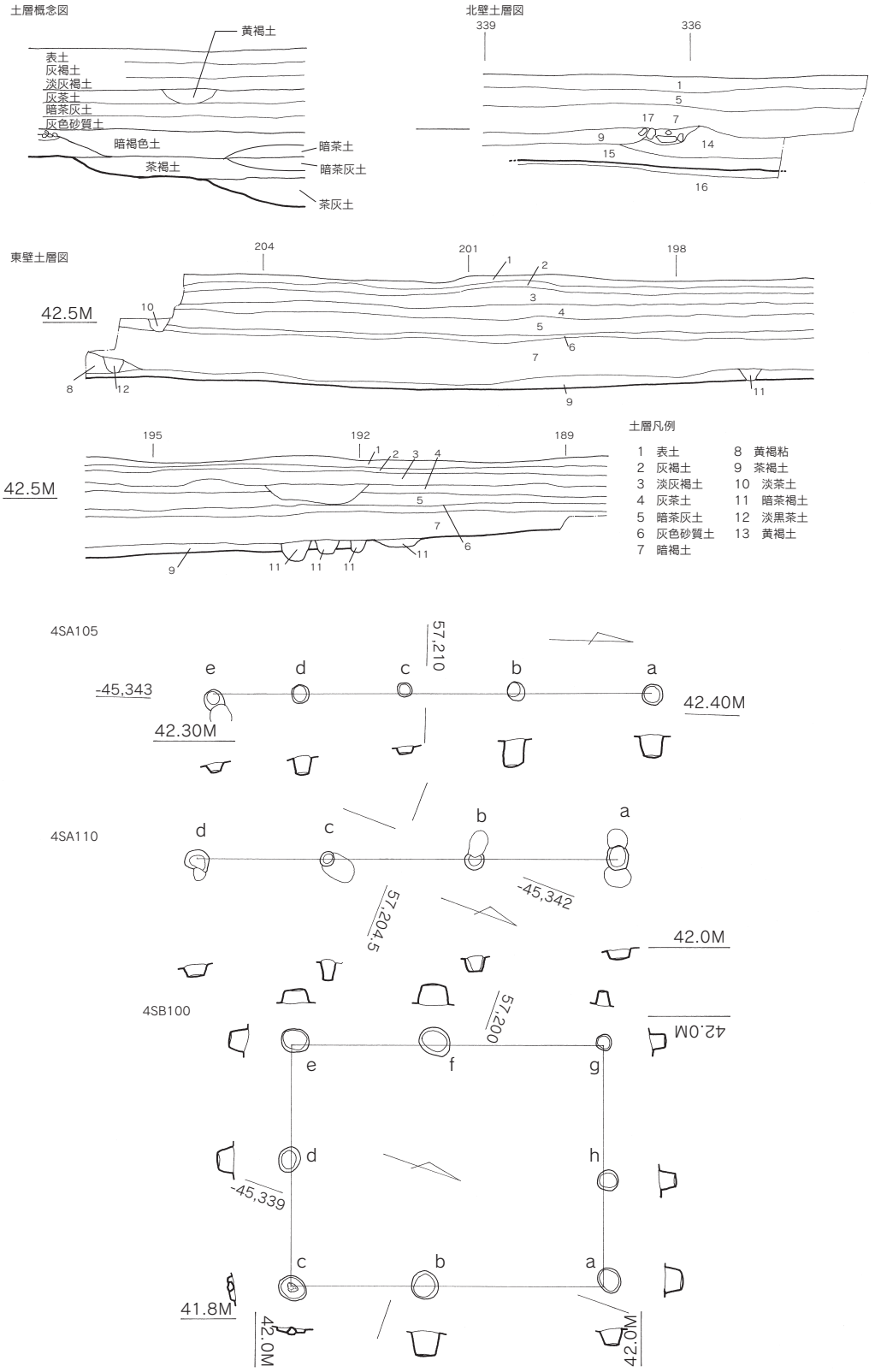


fig.11　第４次調査土層略図、北・東壁土層図、4SA105、4SB100実測図（S=1/80）

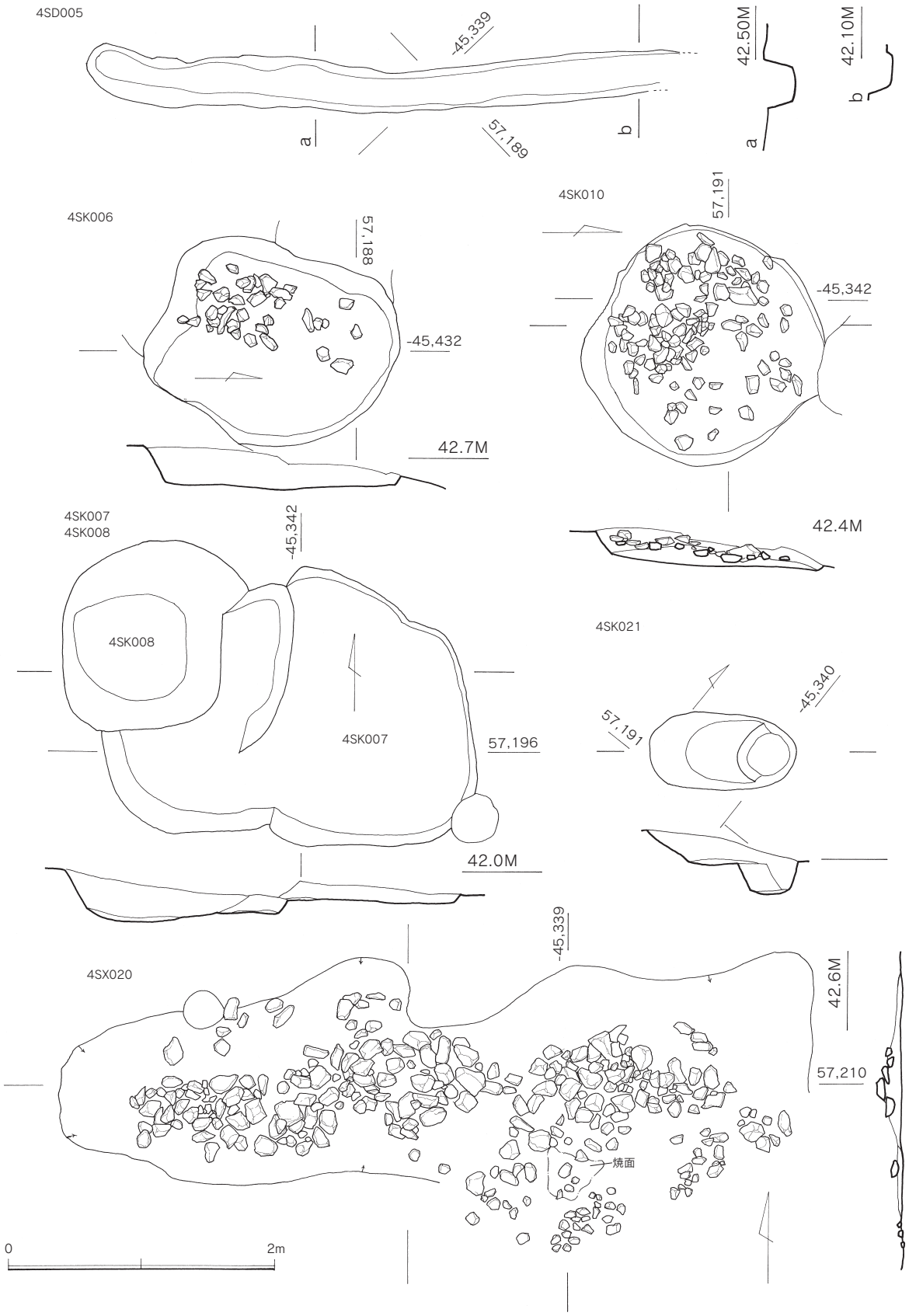


fig.12　4SD005、4SK006・007・008・010、4SX020実測図（S=1/80）

その他の遺構

4SX020（fig.12、写真3・9）

調査区北側で暗褐色土を除去した時点で検出された礫群と黄茶色粘質土からなる帯状遺構。東西に長い不定形な平面形である。規模は長さ5.6m、幅2.0m、高さ0.2㎝を測る。礫の下面に焼土が面を成す箇所があり、礫は基本的に東西方向に延びるが焼土がある部分では南側に乱れており、お互いに関連があったことも考えられる。

4．遺物

溝出土遺物

4SD005出土遺物（fig.12、写真1）

土師器

椀c（1） 橙色の胎土を持ち、高台は体部外側につけられ、外に開き気味の形状を呈す。

越州窯系青磁

椀（2） 低く斜きを持つ高台で、畳付けの部分は白色の目跡が付着する。オリーブ色を呈す。蛇の目高台である。I-1類。

瓦

平瓦（3） 斜格子の叩き目を持つ瓦質の平瓦である。

金属関連遺物

鉱滓（4） 4は芯が鉱物質で黒色を呈し多孔質である。

土坑出土遺物

4SK007出土遺物（fig.12、写真2）

緑釉陶器

皿（1） やや上げ底気味の円盤状高台を持つもので、胎土は若干黄味を帯びた白色の精良な土が用いられ、表面にはごく薄い緑色味を帯びた釉がところどころ残存する。

4SK010出土遺物（fig.12、写真2）

土師器

坏c（1） 平坦な底部から急角度で体部が立ち上がる。高台は外開き気味。二次的に火を受けたものか、内面が若干黒色化する。

須恵器

小甕（2,3） 硬質で外開きの口縁端部の外は凹状になる。焼成は硬質で外側が茶色に焼き上がる。肥後系の製品の可能性がある。3も焼成は硬質で茶色傾向の色調を呈すもので平行刻み目の叩きと、同心円の充て具痕を有す。

黒色土器A

椀（4） 底から体部がボウル状に立ち上がる形状を呈し、高台は外開きである。内面にはミガキの痕跡が見られ黒色化する。胎土はくすんだ橙色を呈す。大宰府土器編年Ⅵ期相当のものである。

瓦

平瓦（5） 縄目の叩きを有す瓦質のもので、内外面にたたら引きの弓の痕跡が残る。

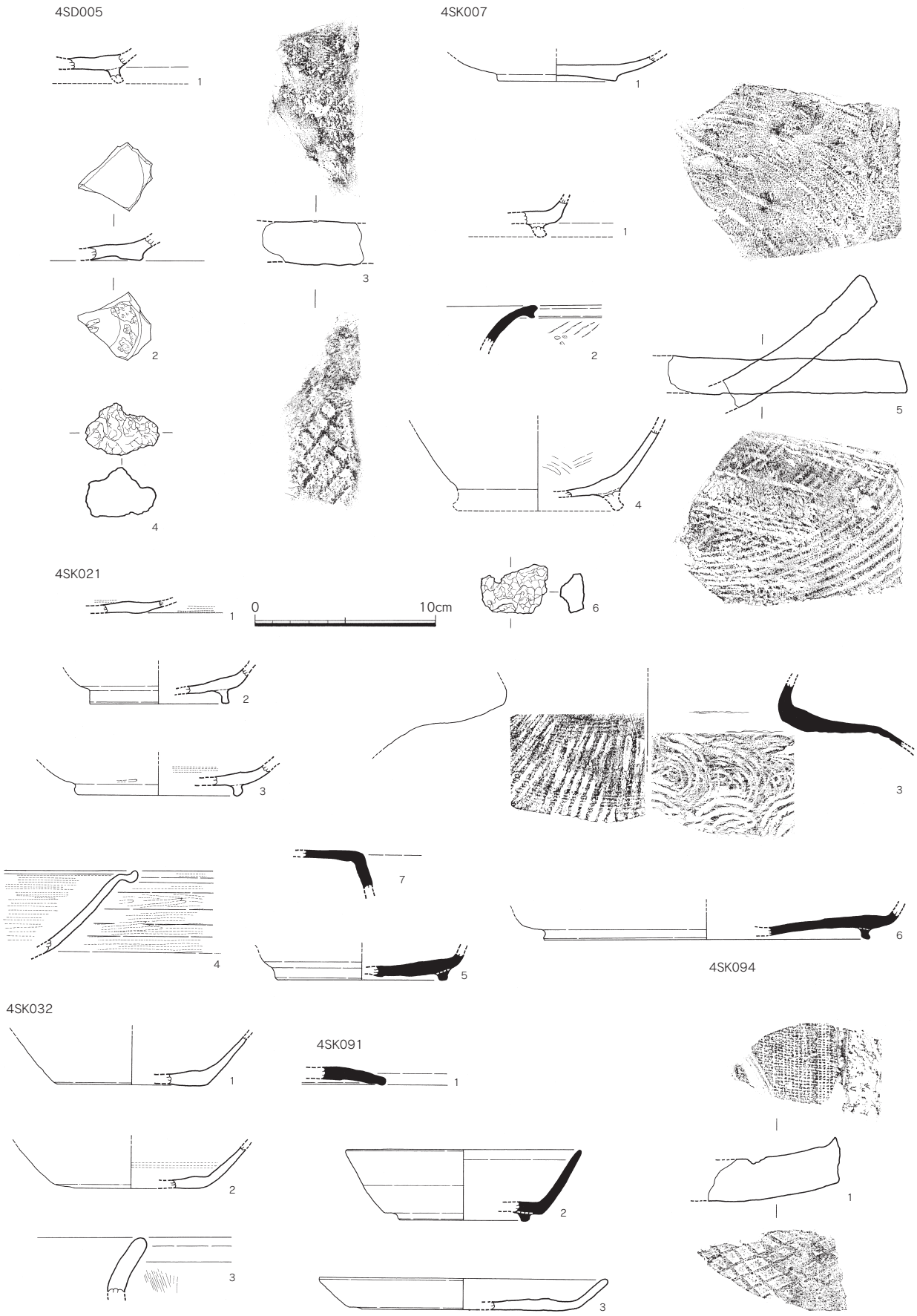


fig.13　4SD005,SK007,010,021,032,091,094出土遺物実測図（S=1/3）

4SK021 出土遺物（fig.13、写真 3）
土師器
坏 d（1）　小片で残りが悪いが平板な底から斜め横方向に体部が延びる形状を呈す。内面にミガキの痕跡がある。橙色を呈す。
小坏 c（2）　平坦な底が若干体部がわで斜めに立ち上がる。高台は下方に真っ直ぐ延びる形状。橙色を呈す。
椀 c（4）　平坦な底が若干体部がわで斜めに立ち上がる。高台は短めで下方に真っ直ぐ延びる。磨耗するが内面にミガキの痕跡があり、外底部にはヘラケズリが施される。橙色を呈すが、外面に黒味がかかる。
鉢（4）　体部は直線的に外にに開く形状で、口縁端部は上方に跳ね上げる形状をなす。内外面ともにミガキ b で仕上げられる。橙色を呈す。
須恵器
坏 c（5）　短く外に開く形状の高台を持つ。８世紀でも前半のものか。
大皿 c（6）　端部がやや短く外に開く形状の高台を持つ。硬質で灰色を呈す。
壷蓋（7）　天井部が回転ヘラケズリで成形され、体部へはきつく屈曲する。硬質で灰色を呈す。
4SK032 出土遺物（fig.13、写真 4）
土師器
坏 a（1）　底部は平坦で体部は直線的に外にに開く形状である。内面は回転ナデで仕上げられる。橙色を呈す。
坏 d（2）　底部はやや中央が外側に膨らみ、体部は直線的に外にに開く形状である。内面はミガキ b で仕上げられる。橙色を呈す。
甕（3）　外側に緩くカーブを描く口縁で、体部外面には縦方向にハケが施される。橙色を呈す。
4SK091 出土遺物（fig.13、写真 4）
須恵器
蓋（1）　口縁端部が若干段を持つ形状で、天井部外面はヘラ切り後にナデて仕上げられる。焼成は軟質。
坏 c（2）平坦な底部に体部がやや湾曲して斜めに立ち上がる。高台は下方に真っ直ぐ短く延びる形状。暗灰色で硬質。
土師器
皿 a(3)　平坦な底部に体部がやや湾曲して斜めに立ち上がる。底部外面はヘラ切りのまま。橙色を呈す。
4SK094 出土遺物（fig.13、写真 4）
瓦
平瓦（1）　斜格子のタタキ目を有し側辺は分割の切り込みが浅く入り、大半は割った状態のままで未処理である。硬質で白灰色を呈す須恵質焼成のもの。
その他の遺構出土遺物
4SX014 出土遺物（fig.14、写真 5）
金属関連製品
鉄滓（1）　芯は黒色の金属質のもので、表面は明茶色の鉄錆に覆われる。
4SX020 出土遺物（fig.14、写真 5・6）
黒色土器 A 類
椀 c（1）　平坦な底部に体部がやや湾曲して立ち上がる。内面はミガキ a を、底部外面は回転ヘラケズ

リを施す。内面は燻しにより漆黒色を呈す。
越州窯系青磁
椀（2）　ケズリ出しの内側が浅い形状の高台で、くすんだ緑色の釉が全面に掛けられる。畳付けに白色の目跡が残る。I-2 系統のものか？体部は意図的に連続して打ち欠かれている。
須恵質土器
筒状製品（3）　筒状を成し内面はごく荒いナデで、外面には 2 条の M 字突帯が付けられる。円筒埴輪のようでもあるが、突帯は土器的な様相である。
瓦
平瓦（4 ～ 6）　4 と 5 は縄目のタタキを有し、6 には斜格子のタタキが施される。焼成は 4 のみ須恵質で他は軟質である。5 の側辺はケズリで調整されている。
金属関連製品
鉄滓（7,8）　7 は鉄錆に覆われた鉄塊状遺物で、8 芯は黒色の鉱物質のもので、表面は明茶色の鉄錆に覆われる。
石製品
砥石（9）　方柱の棒状を成し、1 面のみが光沢のある滑面で他の面は平坦であるが滑面までには発達していないが、２面で刀創のような線状の傷がある。刃部の研ぎ出しに用いられたものか。材質は灰白色の泥岩である。
4SX022 出土遺物（fig.15、写真 6）
須恵器
小坏 c（1）　平坦な底で若干体部が斜めに立ち上がる。高台は下方に真っ直ぐ延びる形状。軟質で茶色を呈す。
椀 c（2）　平坦な底で体部は斜めに直線的立ち上がる。高台は短めで外開き気味に延びる。硬質で灰色を呈す。
瓦
平瓦（3 ～ 4）　板目の入る擬似格子気味の平行刻み目のタタキを有す。焼成は硬い土師質でくすんだ橙色を呈す。
4SX024 出土遺物（fig.15）
瓦
平瓦（1）　板目の入る擬似格子気味の平行刻み目のタタキを有す。焼成は硬い土師質でくすんだ橙色を呈す。外側は多少黒ずんでいる。11SX022 のものと同質のものである。
4SX029 出土遺物（fig.15、写真 6）
須恵器
蓋（1）　若干先端が垂下する形状。硬質な焼成。
坏 c（2）　平坦な底部に体部がやや湾曲して斜めに立ち上がる。高台は開き気味の形状。軟質。
土師器
蓋（3）　若干先端が垂下する形状。くすんだ橙色で内面は黒く煤のようなものが付着する。
4SX038 出土遺物（fig.15、写真 6）
弥生土器
甕（1）　内面は斜めに立ち上がり、底部は平坦な形状。弥生中期の須玖 II 式。
4SX043 出土遺物（fig.15、写真 7）

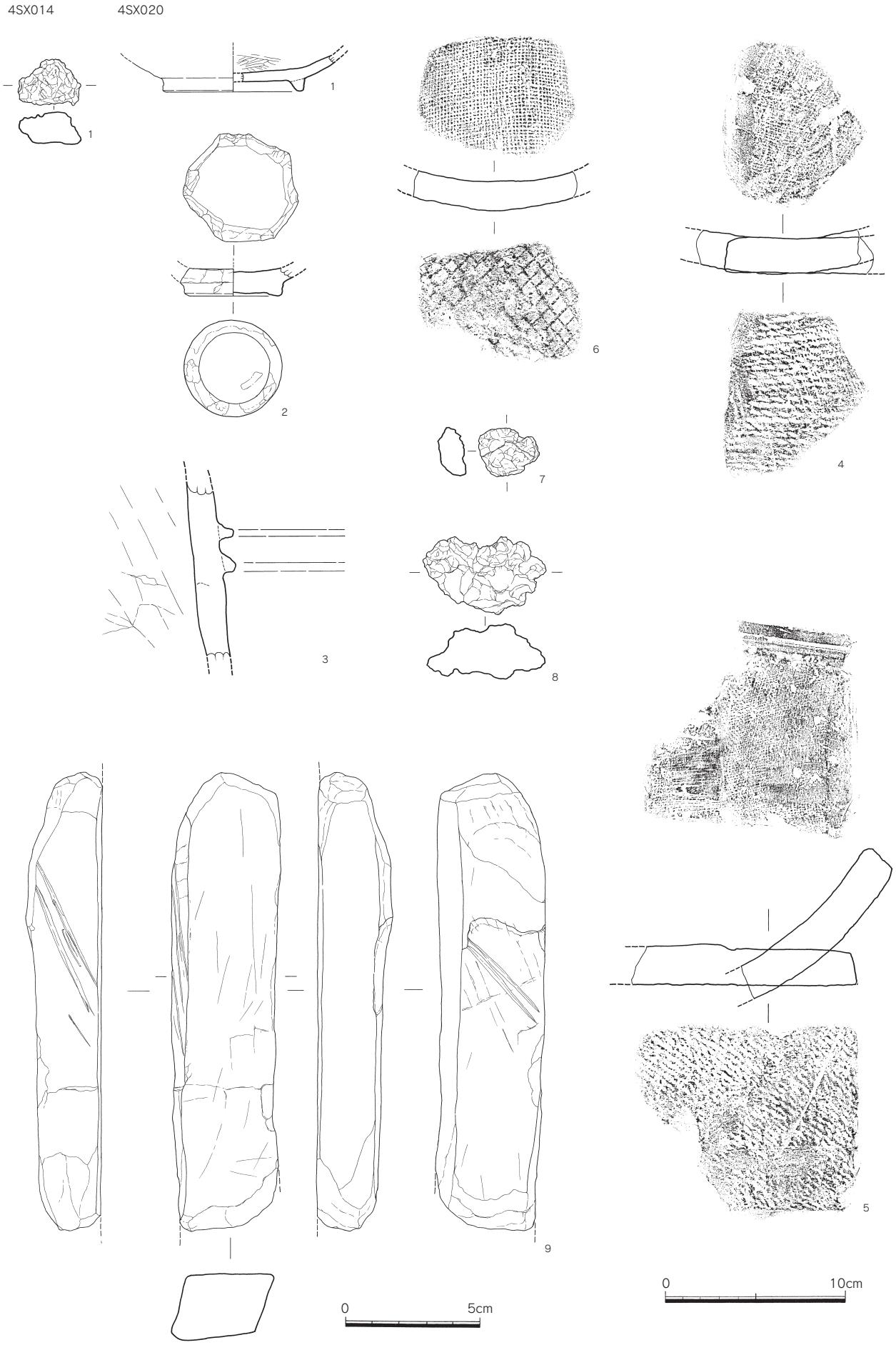


fig.14　4SX014,020出土遺物実測図（S=1/3,1/2）

瓦
軒丸瓦（1）　外縁の鋸歯文帯が残存する。焼成は軟質で白灰色を呈す。8 世紀の老司式。
4SX050 出土遺物（fig.15、写真 6）
緑釉陶器
椀（1）　カーブの形状から椀と判断した。軟質で胎土は淡橙色を呈し、釉は光沢があり薄いうぐいす色を呈す。京都洛北系の製品か。
4SX054 出土遺物（fig.15 ～ 17、写真 07 ～ 12・御笠 11 次写真 14）
土師器
坏 a（1）　平坦な底で体部は斜めに直線的立ち上がる。底はヘラ切りのままで未処理。淡橙色を呈す。
坏 d（2 ～ 4）　2 は端部が若干内に入る口縁部で、他は外に開いて立ち上がる体部から底部。ミガキ b が見られる。淡橙色を呈す。
皿 a（5）　平坦な底で体部は斜めに直線的立ち上がる。底はヘラ切りのままで未処理。内面にミガキはない。橙色を呈す。
須恵器
坏 a（6）　平坦な底で体部は斜めに外開きに立ち上がる。底はヘラ切りのままで未処理。焼成はやや軟質で灰白色を呈す。
坏 c（7,8）　平坦な底で高台は開き気味に延びる形状。硬質で灰色を呈す。
皿 a（9）　底上げ底気味で体部は内反り気味に延びる形状。硬質で灰色を呈す。
壷 a（10）　短く上方に立ち上がる口縁を持つ。硬質で外面は黒灰色、内面は灰色を呈す。
壷（11 ～ 16）　11 と 12 は外開きの高台を持つ a か b タイプで、16 は格子目のタタキきを持つ平底の形状を呈す。13 ～ 15 は朝顔形に開く形状を持つ口縁のタイプで、15 は大型の e タイプである。焼成は全て硬質で灰色～暗灰色を呈す。15 のみ外面が光沢のある茶色を呈す。単線の波状文を施す。肥後系の製品か。17 は回転成形後に側面から押して方柱状に変形させている。その際の痕跡を縦方向の工具によるナデによって消している。
甕（18 ～ 22）　口縁端部は 18 が側面に平坦な部分を有す a タイプで、20,22 は端部が垂下するタイプで、21 が上方に折れる b タイプである。全て硬質の焼成で灰色から黒灰色を呈し、21 のみが茶色系の色調である。肥後系の製品か。
黒色土器 A 類
椀（23）　体部の外側に高台の付く形状で、内面が黒色化する。VI 期前後のものか。
緑釉陶器
小坏（24）　丈の高い円柱状の高台から斜めに体部が立ち上がる。軟質で胎土は淡橙色を呈し、釉は光沢がありごく薄い緑色を呈す。京都洛北系の製品か。
長沙窯系青磁
椀（25）　円盤状の高台からやや湾曲しながら体部が立ち上がる。胎土は精製されたもので淡橙色から淡灰色を呈し、越州窯系のものとは異なる。釉は薄いオリーブ色を呈し内面はかなり擦れて剥落している。坏のような小型の製品かもしれない。
瓦
丸瓦（26）　玉縁のある部位があり、斜格子のタタキを有す。やや軟質の須恵質焼成の製品。
平瓦（28 ～ 29）　28 は斜格子、他は縄目のタタキを有す。焼成は 27 が硬い須恵質で他は軟らかい瓦質。
石製品

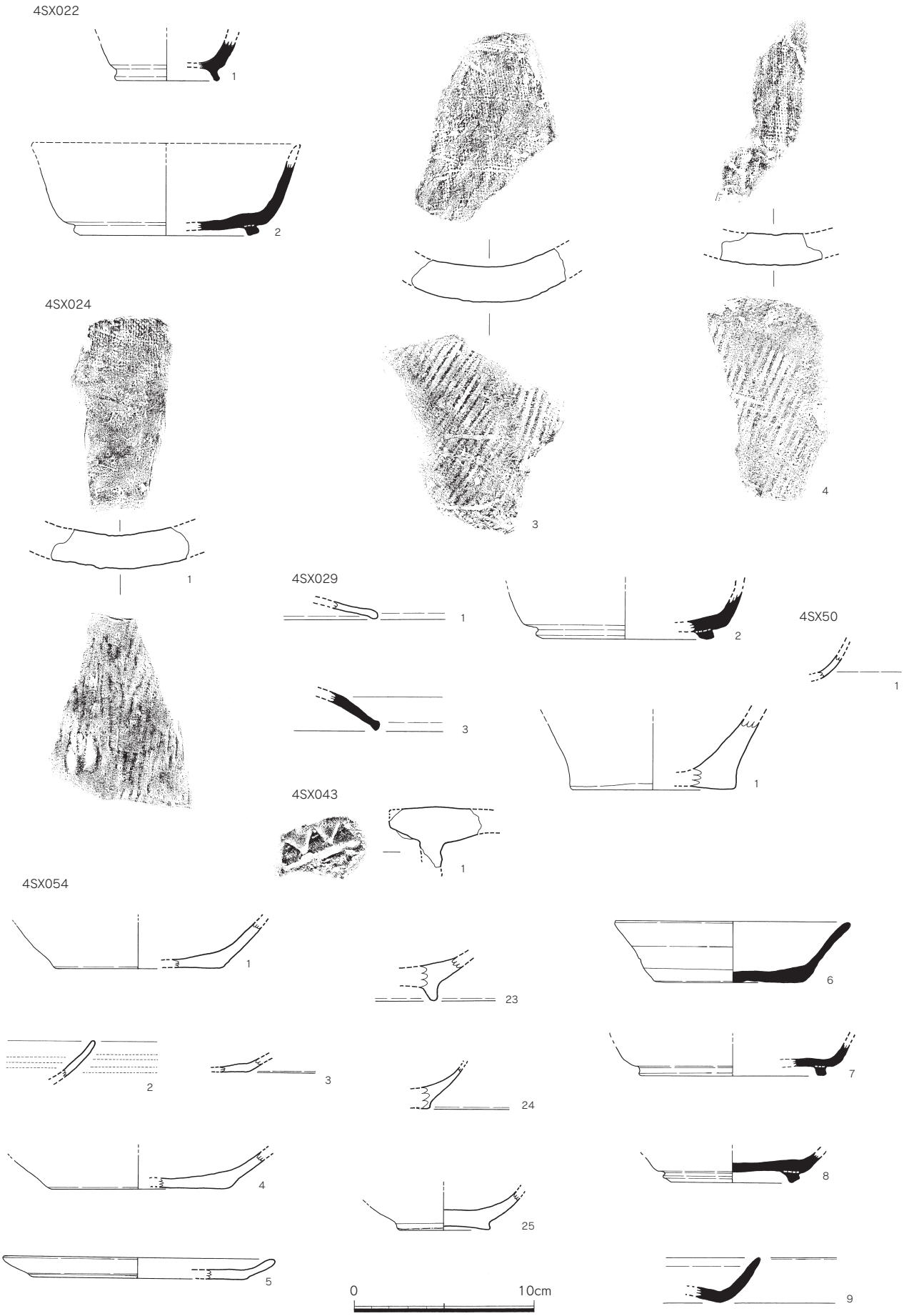


fig.15　4SX022,024,029,038,043,050,054出土遺物実測図（S=1/3）

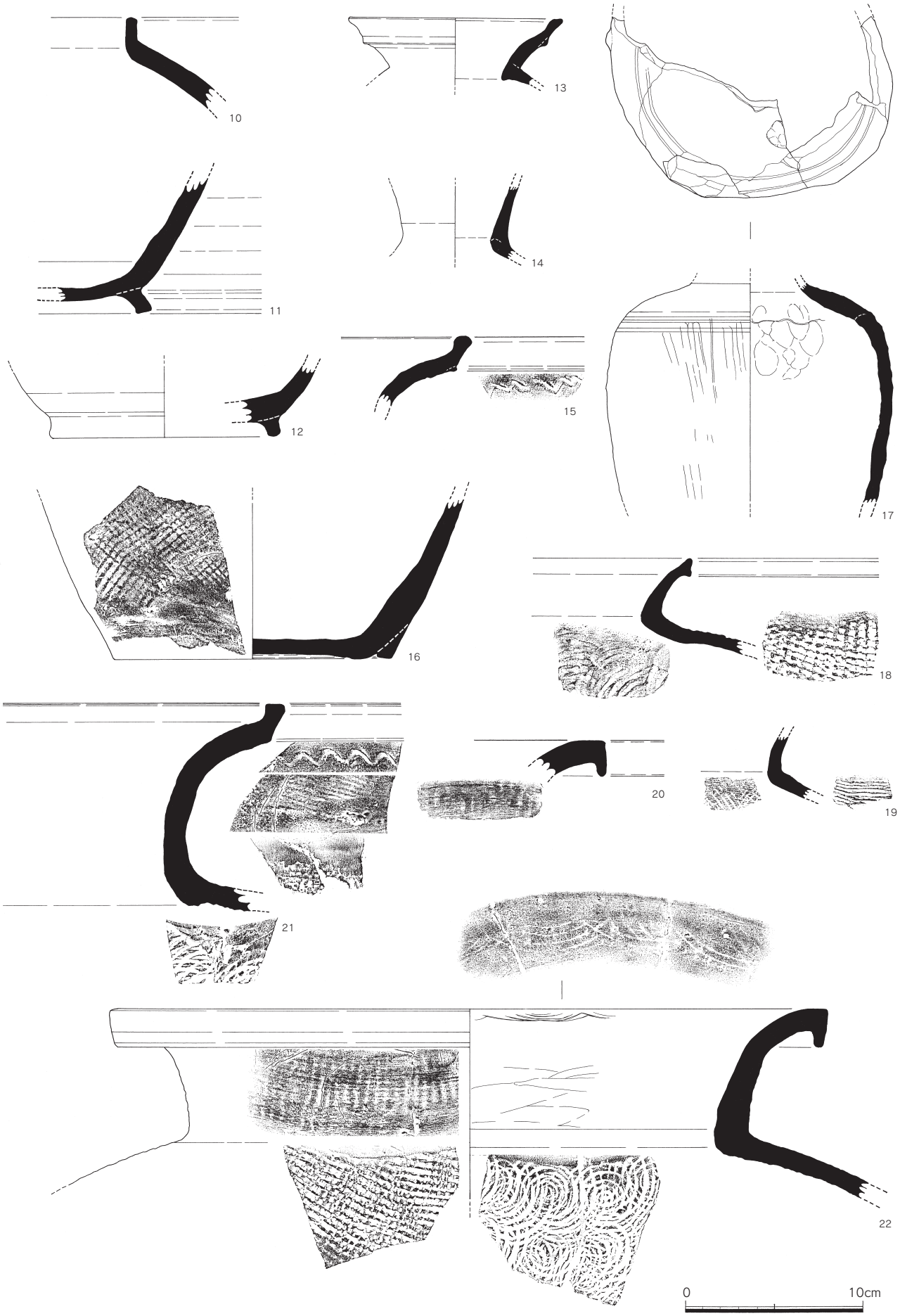


fig.16　4SX054出土遺物実測図（S=1/3）

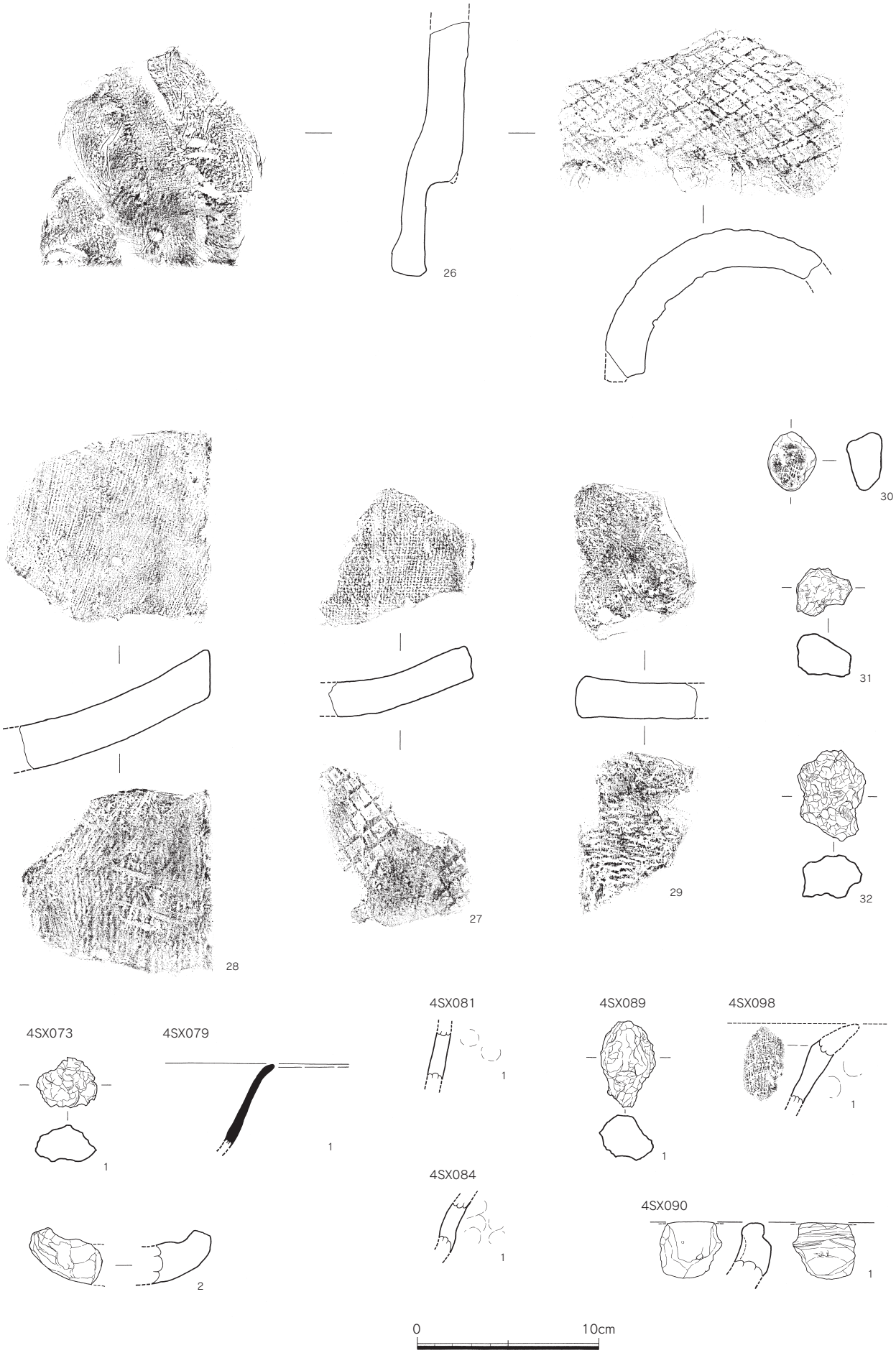


fig.17　4SX054,073,079,081,084,089,090,098出土遺物実測図（S=1/3）

瓦玉（30） 硬い土師質で橙色を呈す瓦を楕円形に内欠いたもの。
金属製品
鉄滓（31,32） 芯は黒色の金属質のもので、表面は明茶色の鉄錆に覆われる。
4SX073出土遺物（fig.17）
金属関連製品
鉄滓（1） 鉄錆に覆われた鉄塊状遺物である。
4SX079出土遺物（fig.17）
須恵器
坏（1） 端部が外に開く形状のもので、外はくすんだ茶色、内面は灰色～茶色を呈す。硬質な焼成で、肥後産の可能性があるものである。
4SX081出土遺物（fig.17）
製塩土器
壺（1） 筒状のもので、土はザラザラで橙色を呈す。内面の布目はわからない。I類か。
4SX084出土遺物（fig.17）
製塩土器
壺（1） 外に開く形で、土はきめが細かく淡い橙色を呈す。内面の布目は不明。II-b類か。
4SX089出土遺物（fig.17）
金属関連製品
鉄滓（1） 鉄錆に覆われた鉄塊状遺物である。芯がもろく劣化が著しい。
4SX089出土遺物（fig.17）
土製品
坩堝（1） 肉厚のカップ状のもので、土はきめが細かく淡い灰色を呈す。口縁外側に紐が数条食い込んだ痕跡がある。内面には黒味のタール状のものが付着する。
4SX098出土遺物（fig.17）
製塩土器
壺（1） 外に開く形状で、土はきめが細かく淡橙色を呈す。内面に布目あり。II-a類。
各土層出土遺物
茶灰土出土遺物（fig.18、写真14）
須恵器
坏蓋（1） 九州須恵器編年のⅣ型式に属すもので口縁端部が折れて垂下する形状のもの。天上部から体部は回転ヘラケズリを施す。一条のヘラ記号が残る。焼成は硬質で灰白色を呈す。
坏身（2） 同じくⅣ型式に属すもので口縁端部は短く内に立ち上がる。底部から体部は回転ヘラケズリを施す。焼成は硬質で淡灰色を呈す。
小甕（3） 側面に平坦な部分を有すタイプで、焼成は硬質で黒灰色を呈す。
茶褐土出土遺物（fig.18、写真14・15）
土師器
坏d（1） 平坦な胴部から内側に反りながら立ち上がる体部を持つ。内外面に回転を利用したミガキbが施される。
甕（2,3） 淡橙色を呈すもので、2は鍬先状に若干のカーブをもって中央が厚い形状の8世紀的な形状を持つ口縁部で、3はケズリとユビ押さえによる成形の把手部分である。

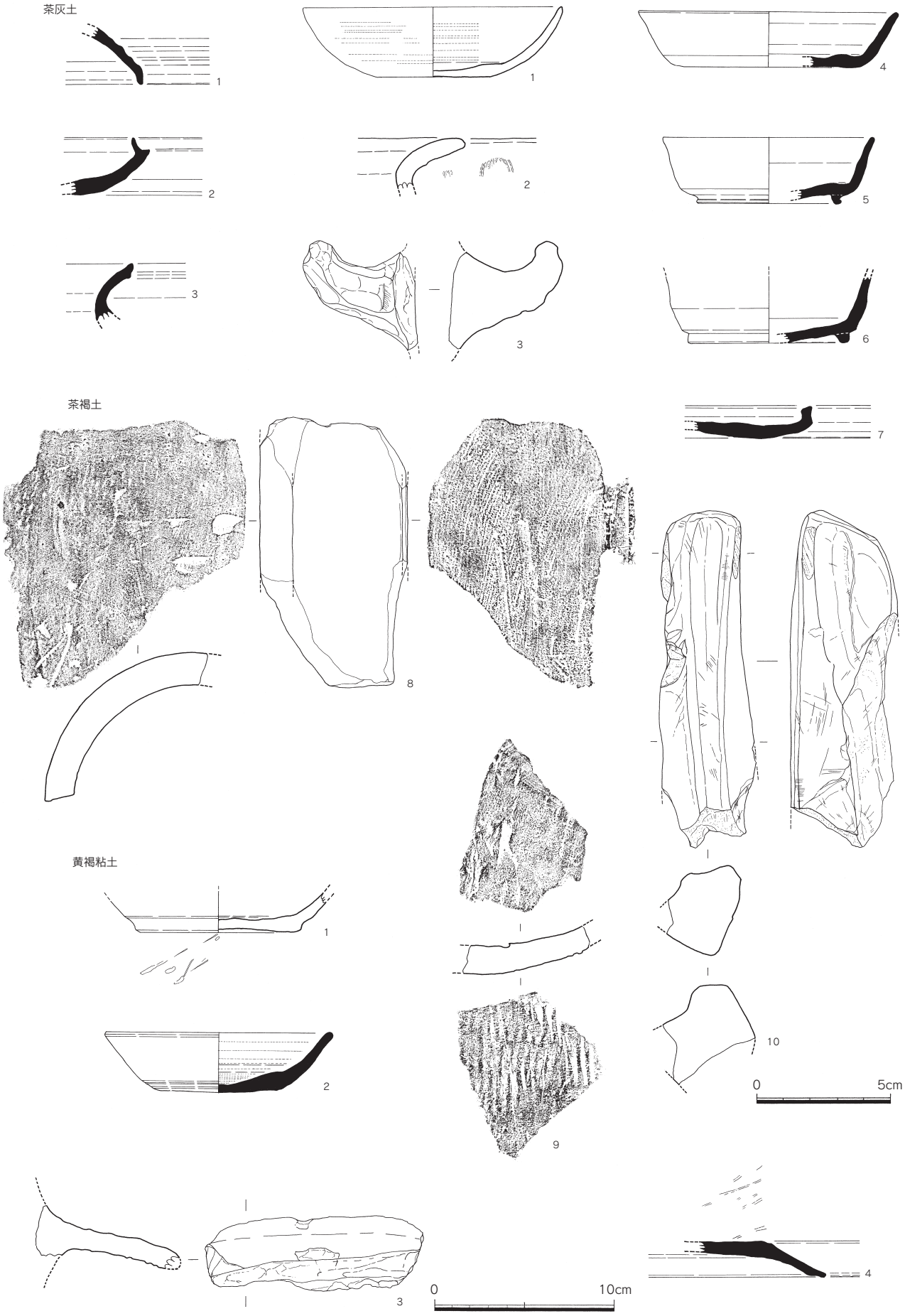


fig.18　茶灰土、茶褐土、黄褐粘土出土遺物実測図（S=1/3,1/2）

須恵器
坏a（4）　平坦な底で体部は斜めに外開きで直線的に立ち上がる。底はヘラ切り後にナデを施す。焼成はやや硬質で灰色を呈す。
坏c（5,6）　平坦な底で高台は開き気味に延びる形状。硬質で灰黒色を呈す。
高坏b（7）　口縁端部が短く上方に屈曲する形状で、底部は力強い回転ヘラケズリを施す。硬質で暗灰色を呈す。
瓦
丸瓦（8）　タタラ引きの弓切りの痕跡の上にナデがあり、その上に縄目のタタキを有す。側辺は分割の深い切り込みの痕跡があり、外側は割り取ったままで未調整。焼成は軟らかい須恵質。
平瓦（9）　平行刻み目のタタキを有す。内面には布目が見られる。焼成は硬い土師質でくすんだ橙色を呈す。
石製品
砥石（10）　棒状の多面が筋状に窪むもので、玉類などの球体の研磨などに用いられたものと思われる。黒色の泥岩で対馬に同質の石材があるとされている。
黄褐色粘土層出土遺物（fig.18・19、写真15・16）
土師器
坏a（1）　平坦な底部から外開きに体部が立ち上がる。底部はやや厚めで側辺が窪むことから円盤状に見える。底部はヘラ切り後ナデられる。明橙色を呈す。
坏c（5）　平坦な底で高台は開き気味に延びる形状。内面にミガキbを施す。
坏d（2,7）　底部は内面の中央がやや凹み、体部は内にカーブを持って開く形状である。内面はミガキbで仕上げられる。７は外底部に板状圧痕がある。明橙色を呈す。
移動式カマド（3）　焚口の庇の部位で、本体の側は剥離した口は平坦である。全体に荒い筋状のナデが残る。上面は多少丁寧なナデとなる。淡橙色を呈す。
須恵器
蓋（4）　平坦な天井部から体部は直線的に延びる。端部は丸く収められるに止まる。天上部はヘラキリの後板状圧痕がつく。焼成は硬質で灰白色を呈す。
坏a（4）　平坦な底で体部は斜めに外開きで直線的に立ち上がる。底はヘラ切り後にナデを施す。焼成はやや硬質で灰色を呈す。
坏c（6）　平坦な底で高台は開き気味に延びる形状。硬質で淡茶灰色を呈す。
壷a（8）　肩の部位は回転を利用したカキ目が施され、その上に平行刻みのタタキが一定間隔に見られる。硬質で灰茶色を呈す。芯はくすんだピンク色で酸化焼成環境であったことを示している。
黒色土器A類
椀c（9）　平坦な底部で断面三角形の短い高台の付くもので、内面が黒色化する。内面の磨きは中央付近は一方向、外側は円弧を描いている。VI期前後のものか。
緑釉陶器
皿（10）　斜めに体部が広がる形状。胎土は軟質で淡橙色を呈し肌理の細かな粗目。釉は残存が悪いがごく薄い緑色と口縁内側の一部に斑状の濃緑色のものを重ねて施す。いわゆる緑釉緑彩の製品で京都洛北系の所産か。
白磁
椀（11）　足の長い先細のケズリ込みの高台を有すII類のもので、体部は連続して意図的に打ち欠かれる。

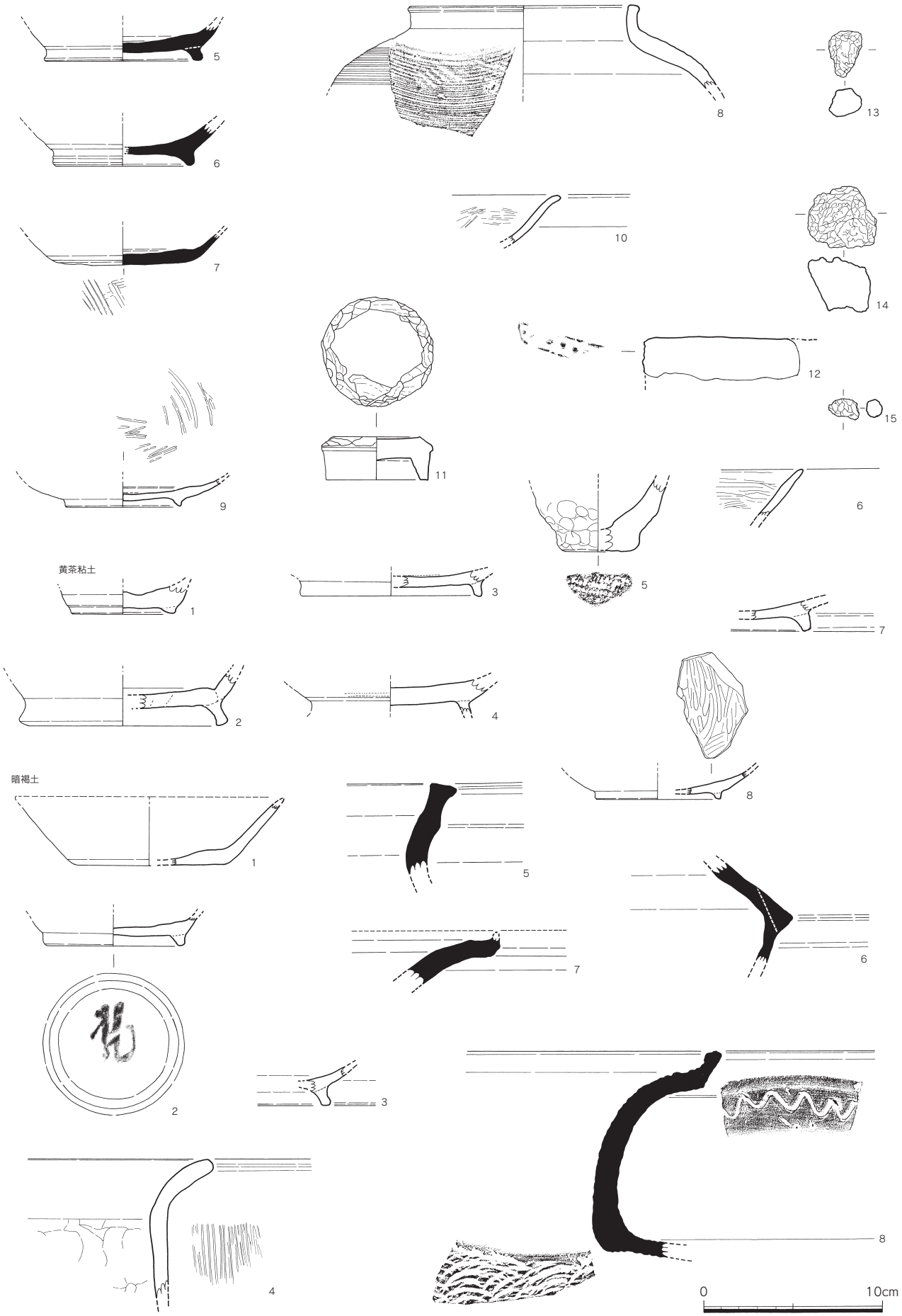


fig.19　黄褐粘土、黄茶粘土、暗褐土出土遺物実測図（S=1/3）

瓦
軒平瓦（12）　正面上端部の朱文帯が残されるもので、焼成は軟質で灰白色から橙灰色を呈す。
金属製品
鉄滓（13 ～ 15）　芯はタール状で黒色の鉱物質のもので、表面は明茶色の鉄錆に覆われる。15は鉄塊系遺物か。
黄茶色粘土層出土遺物（fig.19、写真17）
土師器
小坏c（1）　底部の外側にごく低い高台を有す。橙色を呈し、赤褐色の混和材が胎土中に見られる。
坏c（2 ～ 4）　底部の外側に外開きの高台を有す。2と4は内面にミガキbが見られる。橙色を呈す。
坏（5）　手づくねで成形された盃状の小坏で底部外面に縄目のような圧痕が残る。製塩関連の遺物か。
黒色土器A類
椀（6 ～ 8）　6は先の細い口縁を持つもので、7,8は平坦な底部で断面三角形の短い高台の付くもので、内面が黒色化する。内面の磨きは手持ちで施される。
暗褐土層出土遺物（fig.19・20、写真18・19）
土師器
坏a（1）　平坦な底で体部は斜めに外開きで直線的に立ち上がる。底はヘラ切りのまま。淡橙色を呈す。
椀c（2,3）　2は平坦な底部で断面三角形の短い高台の付くもので、底部外面に墨書が施される。判読は難しい。3は外開き気味の高台。淡橙色を呈す。
甕（4）　淡橙色を呈すもので、鍬先状に若干のカーブをもって中央が厚い形状を持つ口縁部で、体部外面にハケ目が施される。
須恵器
壷（5,6）　5は口縁外面が浅いM字に窪む形状を持つ未分類のもので、焼成は硬質で外面が光沢のある茶色を呈す。6は玉葱形の体部中央の破片で、屈曲部に断面三角形の粘土帯が貼り足されるeタイプのもの。両者とも肥後系のものか。
甕（8）　口縁端部が上方に折れて立ち上がる形状のbタイプもの。口縁直下に単線の波状文があり、頸の部位にもタタキが薄っすら残される。焼成は硬質で外面が光沢のある茶色を呈す。肥後系のものか。
越州窯系青磁
椀（9 ～ 11）　9は輪高台で内面の4箇所に白色の目跡が残る。焼成は下面が酸化して褐色化している。釉は酸化して白色化する。I-2aないしb類。10はケズリ込みの浅い輪高台で目跡が内外面に残る。釉調はくすんだオリーブ色を呈す。I-2aウ類。11はケズリ込みの蛇の目高台で細かい貫入が入る光沢のあるオリーブ色の釉が掛かる。I類。
瓦
平瓦（12 ～ 14）　斜格子の刻み目のタタキを有す。内面には布目が見られる。焼成は12は瓦質、13は土師質14は硬い須恵質。
石製品
砥石（15）　欠損しているが本来は方柱状のもので2面が滑面で使用されていた。砂岩製。
円礫（16）　白色の平たい円礫で碁子の可能性がある。
巡方（17）　帯飾りの方形を呈す巡方であり、表面は半光沢に磨かれ、裏面は糸かがりの穴が縦に二つ穿たれる。蛇紋岩製で緑色を呈す。
金属製品

fig.20　暗褐色、表土出土遺物実測図（S=1/3,1/2）

鉄滓（18,19）　芯は多孔質の黒色を呈す金属質のもので、表面は明茶色の鉄錆に覆われる。
表土出土遺物（fig.20、写真20）
須恵器
坏c（1）　底部の外側にごく低い外開きの高台を有す。硬質で灰色を呈す。
壷f（2）　口縁断面がN字に屈曲して上に延びる形状のもので、硬い灰色の焼成。
越州窯系青磁
壷（3）　茶灰色の肌理の細かい粘質の胎土を持ち、光沢のあるオリーブ色の釉を施す。
瓦
専（4）　焼成は軟質でくすんだ黒灰色を呈す。
軒丸瓦（5）　鴻臚館式の蓮華文を持つのもで、焼成は軟質で表面は白灰色、芯は黒色を呈す。
石製品
砥石（6）　4面を縦方向に使用する方柱状のもので黒色の泥岩製である。

5.小結

この調査地点は、御笠団印出土地のすぐ南側にあたり軍団関係の遺構を予想したがこれに直接関係する遺構は認められなかった。

しかし、小規模な建物や金属生産に関連する遺物は官衙の付属施設などの可能性もあり、その延長で軍団との接点もある可能性は残されている。

Ⅲ-3　第5次調査

1. 調査に到る経緯

本調査は、太宰府市坂本３丁目（旧大字国分字掘田）757-10 における個人住宅建設に伴って実施した（fig.2）。当該地は御笠団印出土地の北方隣接地に位置し、さらに本調査地の近隣においては本書の先に報告した第３次調査などが行われている。その結果、御笠団に関する遺構・遺物は確認されていないが、軍団が存在した時期の何らかの生活痕跡が確認されているのが現状である。本調査は第５次調査として、記録保存のための発掘調査を実施した。調査期間は、平成３年９月 17 日から同年 10 月 22 日である。開発対象面積 500㎡、調査面積 200㎡を測る。調査は、城戸康利が担当した。

2. 基本層位

基本層位は、上位から真砂土による盛土層、それから遺物を包含している暗褐色土層・茶色土層があり地山に達する（fig.21）。遺構検出は茶色土層まで除去後、地山直上において実施した。なお、調査直前に開発対象地に対して南北にトレンチを設置した結果、標高が高い開発対象地の北側は削平が著しいことを確認したので、標高の低い部分である遺構残存度が高い南側に対して本調査区の設定を行った。

3. 遺構

調査の結果、遺構密度が調査区の西側に偏った位置関係で、主に奈良時代後半にかけての土坑１基とピット群を検出した（fig.22・23）。ここでは主要遺構のみを解説し、その他については「遺構配置図」（fig.23）と「出土遺物一覧表」（CD-ROM 収納）を参照されたい。

土坑

5SK005（fig.22、写真６・７）

調査区の北西側において検出した。規模は最大幅 1.5m・深さ 0.2m 程度で、円形で浅い。具体的な遺構の性格については不明である。遺構の時期は出土遺物から８世紀後半と考えられる。なお、出土遺物中には弥生土器も確認した。

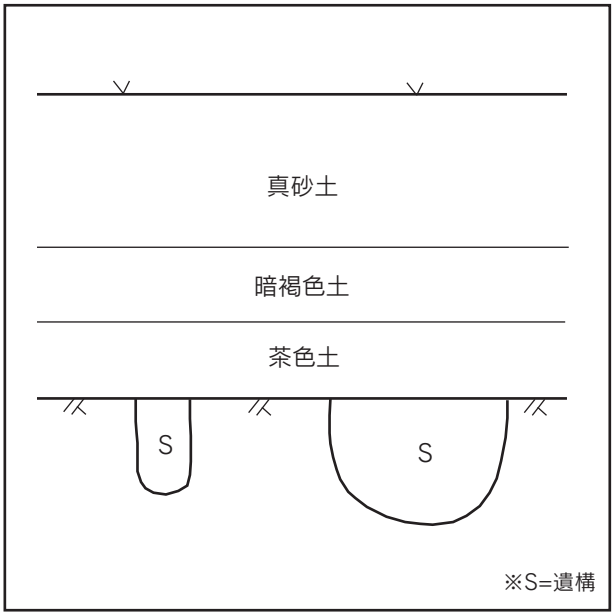


fig.21　土層模式図

4. 遺物

各遺物の計測値及び須恵器・土師器の供膳具における底部切離しと内底の調整技法については、すべて「出土遺物計測表」（CD-ROM 収納）に記載しているので参照されたい。

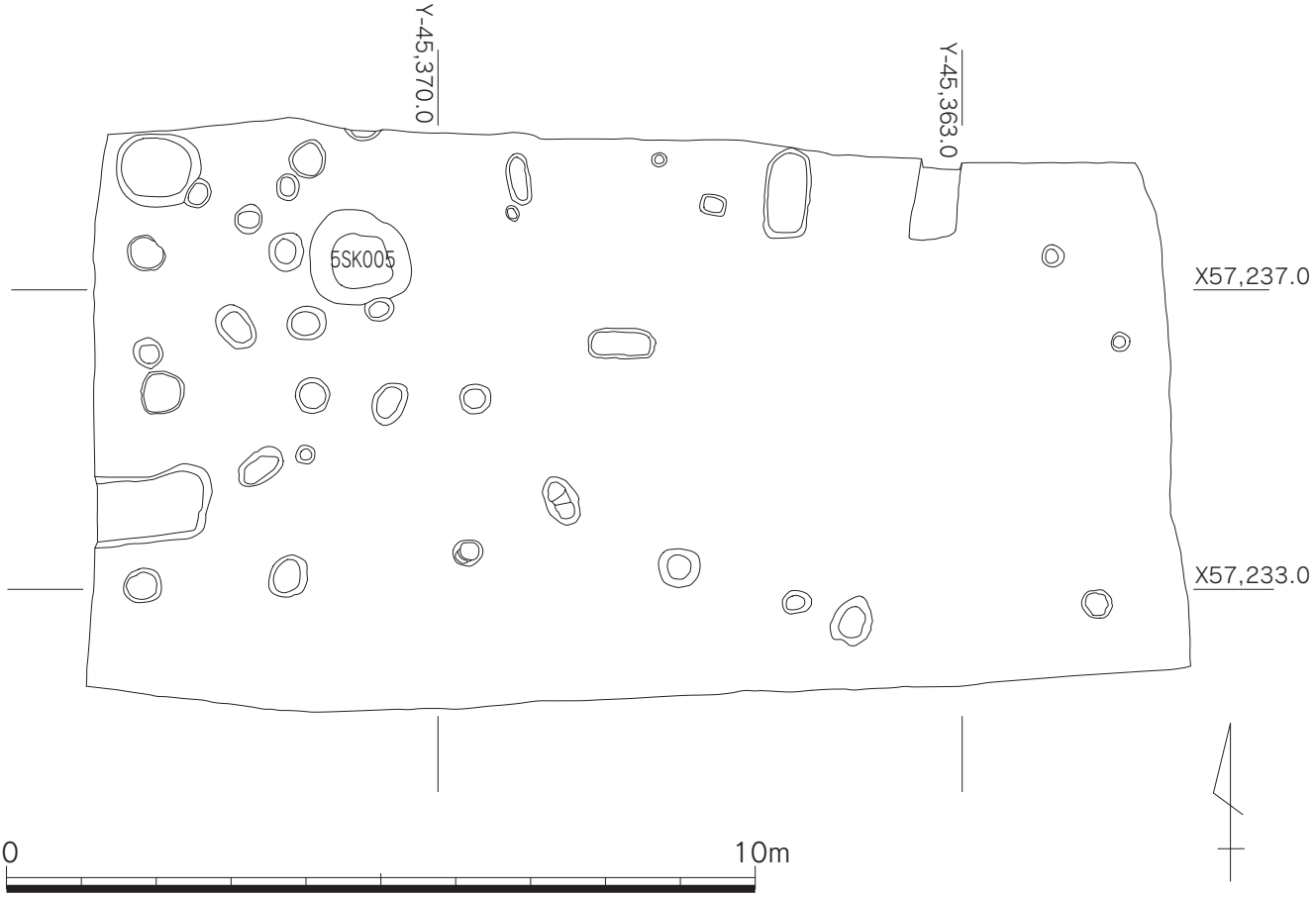


fig.22　遺構全体図（S=1/100）

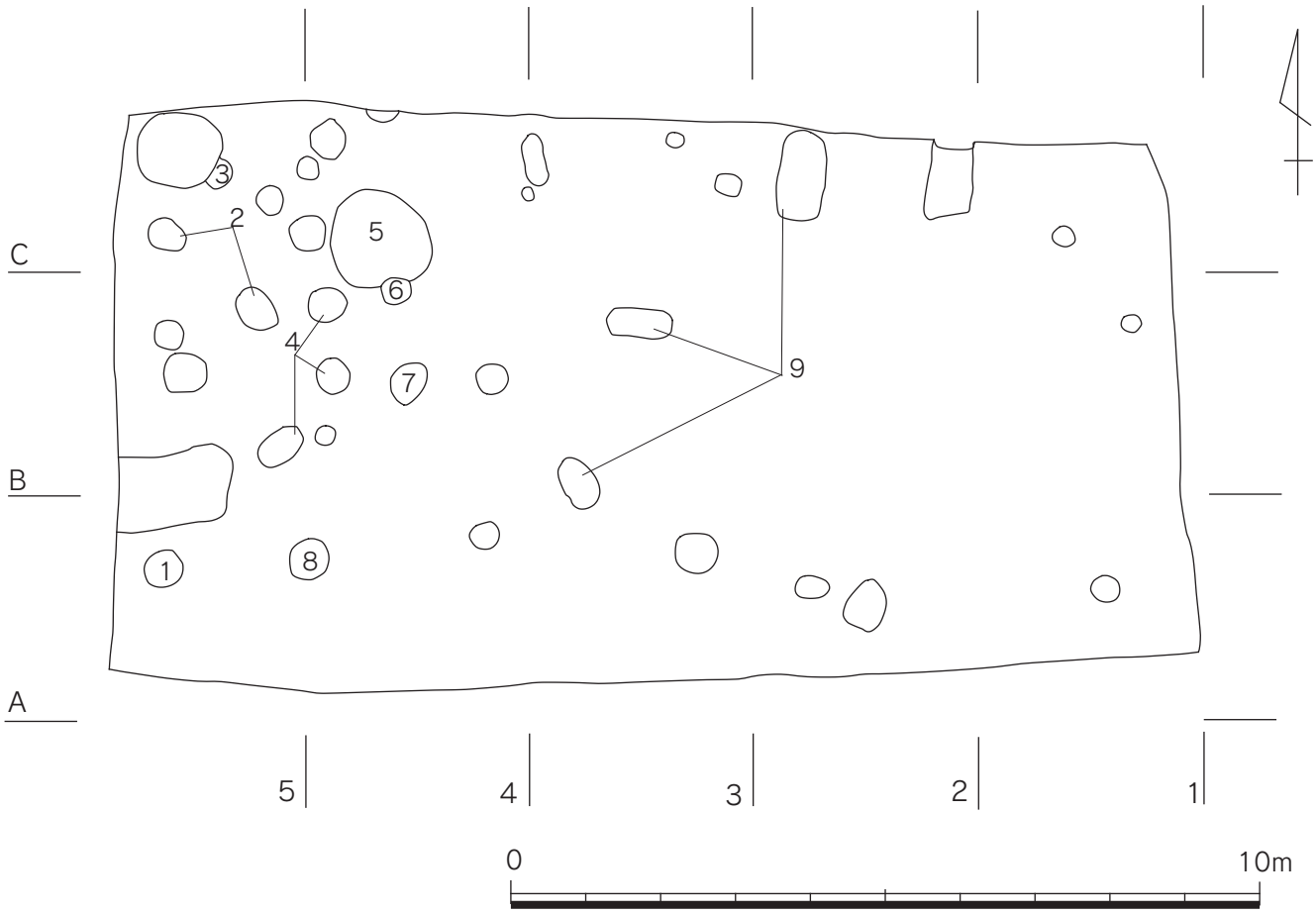


fig.23　遺構配置図（S=1/100）

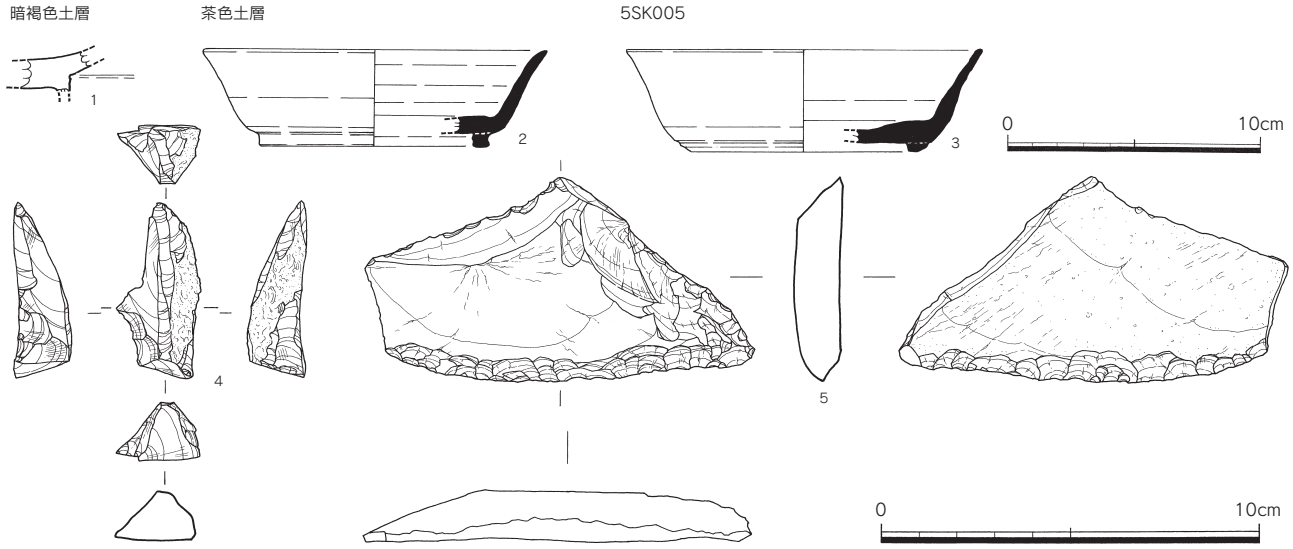


fig.24　出土遺物実測図(4と5はS=1/2、その他はS=1/3)

土坑出土遺物

5SK005 出土遺物（fig.24）

須恵器

坏 c3（3）破片。基本的に内外面ともに回転ナデ調整。色調は内外面ともに淡灰色を呈しており、焼成・還元ともに良好。胎土は緻密で、硬質。

各層出土遺物

暗褐色土層出土遺物（fig.24、写真 1 ～ 4）

緑釉陶器

椀（1）　破片。釉は緑白色で光沢度が高く透明度が低い。内外面ともに薄く施されているが、剥落が著しい。素地の色調は薄灰色で、胎土は密だが、やや軟質である。

石製品

コア片？（4）　黒曜石である。

スクレイパー（5）　安山岩製である。

茶色土層出土遺物（fig.24）

須恵器

坏 c3（2）　破片。基本的には内外面ともに回転ナデ調整であるが、内面見込部分は不定方向のナデ調整。色調は内面が淡白灰色、外面が青灰色を呈しており、焼成・還元ともに良好。胎土は緻密で硬質。

5.小結

本調査地は、昭和 2 年 4 月の農作業中に御笠団印が偶然発見された地点（武谷 1927）の北隣であり、標高 50m 程の台地上に位置する。本調査で印を伴っていた遺構が検出される可能性も十分に考えられた。調査の結果、遺構面は既に調査区北側を中心に削平をされており、浅いピット群が散漫に検出された。ピット群埋土からは 8 世紀後半代を中心とした土器が出土しており、一部弥生時代の土器も存在する。御笠団印に直接関わる遺構は検出されなかった。なお、現地表面から遺構面までは約 0.7m あり、包含層を

形成している。包含層は奈良時代の土器を多く含んでいることと、先述の遺構が検出されたことを勘案すると、当該期において当地にて何らかの生活が営まれていたことは確実といえる。また、御笠団印発見の顛末によれば、偶然鍬先にあたった深さは一尺あまりとされており（武谷 1927）、現地表面が大きく改変されていなければ、包含層中に印が含まれていた可能性が強い。

今後は印の発見以降の土地の改変の調査と、今回検出した包含層の来歴を調べなければならないと考える。

【参考文献】

武谷水城 1927「基肄軍団と御笠軍団」『筑紫史談』41　筑紫史談会

Ⅲ-4　第6次調査

1.調査に到る経緯

本調査は、太宰府市坂本3丁目（旧大字国分字掘田）52における個人住宅建設に伴って実施した（fig.2）。当該地は御笠団印出土地の南東方向に位置し、さらに本調査地の北隣は本書の先に報告した第4次調査が、南隣においては本書の後に報告する第11次調査が行われている。その結果、御笠軍団に関する遺構・遺物は確認されていないが、軍団が存在した時期の何らかの生活痕跡が確認されているのが現状である。本調査は第6次調査として、記録保存のための発掘調査を実施した。調査期間は、平成5年4月20日から同年8月4日である。開発対象面積1100㎡、調査面積500㎡を測る。調査は、城戸康利が担当した。

2.基本層位

遺構面は二面確認した（fig.25・26）。基本層位は、上層から表土層である茶黒色土層、遺物包含層である暗茶色土層があり、これらを除去した面を第一遺構面として調査した。この遺構検出時に出土した遺物は、すべて暗茶色土層出土遺物として取上げている。第一遺構面は、調査区西側が暗茶色土層、調査区東側が明褐色土層、これらの間の凹み部分に相当する調査区中央付近を南北方向に暗褐色土層があり、これら三種類によって形成されている。なお、暗褐色土層の下層には暗黄褐色土層を確認した。また、これらの土層をすべて除去した面を第二遺構面として調査した。この遺構検出時に出土した遺物は、この面を形成している暗黄茶色土層出土遺物として取上げている。なお、暗黄茶色土層の下層には調査区の一部において縄文土器を包含していた褐色粘土層を確認しており、これを除去すると礫混じりの地山に達する。現地形からも想定できるが、この地はかつて四王寺山から派生してきた尾根に挟まれた谷状地形であったことを確認した。

3.遺構

先述の通り、遺構面は二面確認しており、第一遺構面においては溝・土坑・墓・ピット群などを検出した（fig.28・29）。特にピット群に至っては、調査区全域において切り合った状態で密集的に存在したことを確認した。これらは主に8～10世紀代に相当する遺構群である。また、第二遺構面においては溝・土坑・ピット群などを調査区全域において散在的に確認した（fig.30・31）。これらは主に7世紀後半代の遺構群である。ここでは遺構面毎に主要遺構のみを解説し、その他については「遺構配置図」（fig.29・31）と「出土遺物一覧表」（CD-ROM収納）を参照されたい。

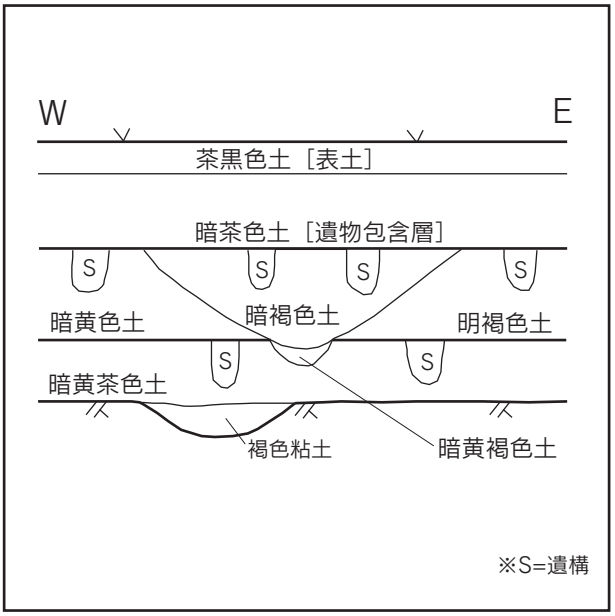


fig.25　土層模式図

第1遺構面検出遺構

溝

6SD005（fig.28）

調査区南側中央付近で幅1m程度の規模で北東から南西方向に検出した。これは、北東側と南西側の埋土を確認した結果、土中を通って調査区外へ続く可能性が高いことが判明した。このことから、調査区内において検出した溝状遺構は、調査区の地下を北東から南西方向へ向かって掘削された地下水路が陥没した部分であることを確認した。肥前系陶磁器破片の出土から江戸期の遺構と考えられる。これは、調査区の北東に現存する坂本旧池から南西方面の水田へ繋がる地下水路であった可能性が極めて高い（太宰府市2001）。

6SD050（fig.28）

調査区中央西側寄りでやや西に振った状態で南北方向に検出した。規模は幅1m程度・深さ0.2m程度である。遺構の性格については不明である。遺構の時期は、出土遺物から奈良時代後半代と考えられる。

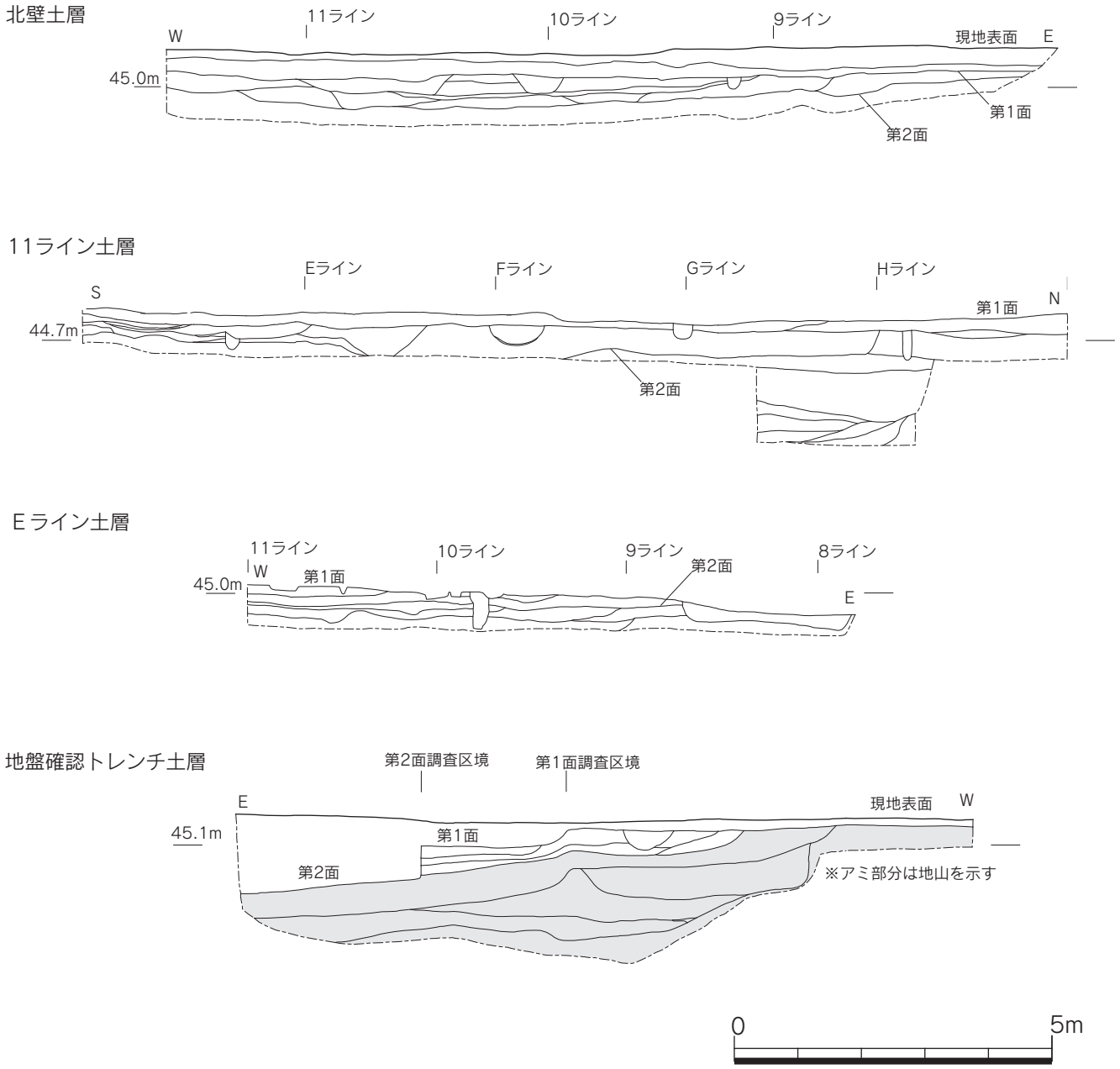


fig.26　調査区壁面土層図（S=1/100）

土坑

6SK001（fig.28）

先述の6SD005の西隣で検出。6SD005と同様の過程を経て土坑状に遺構形成されたものと考えられる。

6SK010（fig.28）

先述の6SD005の東側で検出。遺構の性格は上記6SK001と同様と考えられる。

6SK015（fig.28）

上記の6SK010に切られた状態で検出。6SD005に伴う近世地下水路の二度に渡る崩落の痕跡と想定。

6SK038（fig.28）

幅2×1m程度・深さ0.1m強で楕円形で浅い。出土遺物から8世紀後半代の遺構と考えられる。

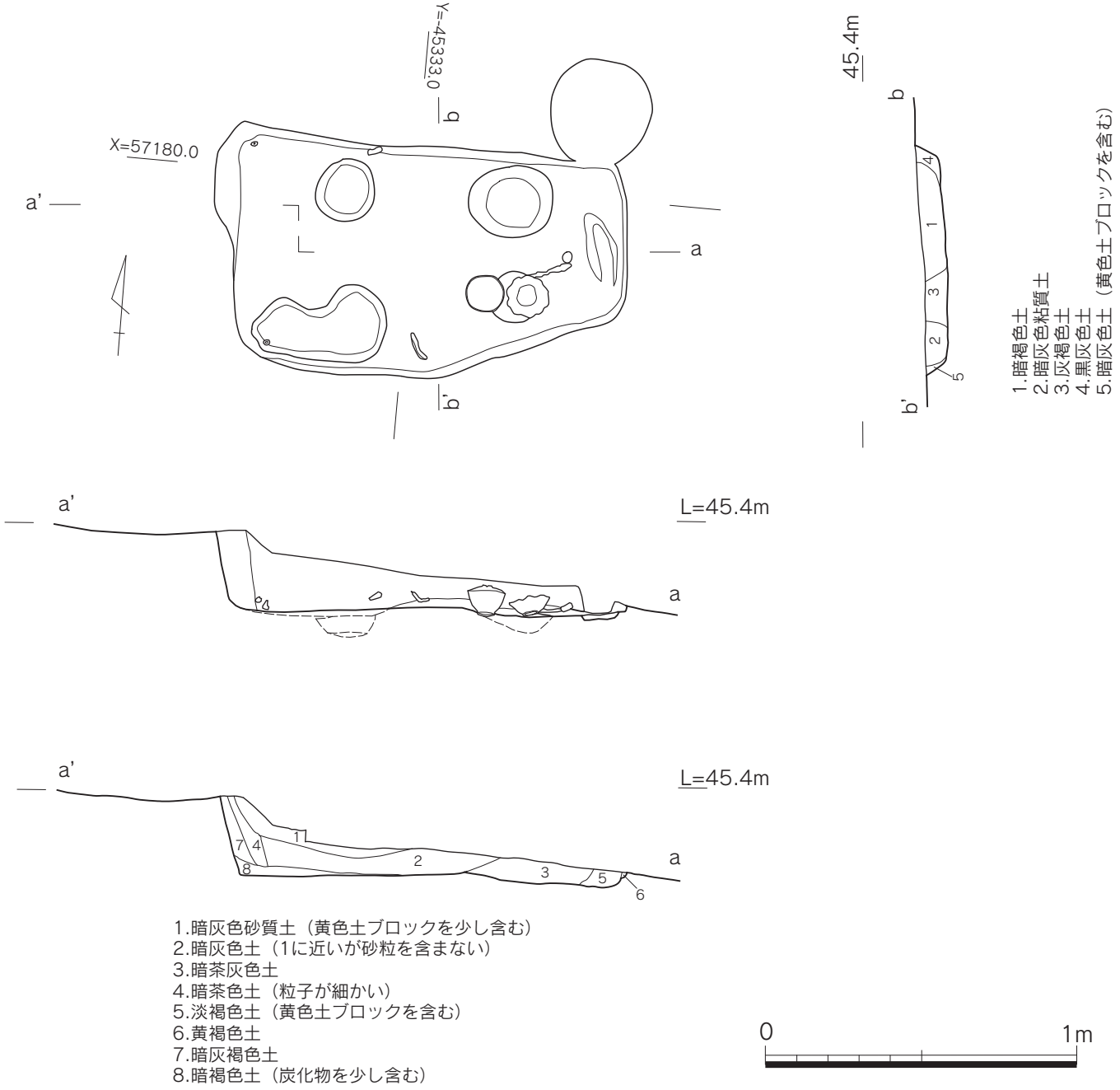


fig.27　6ST100遺構実測図（S=1/20）

fig.28　第1遺構面遺構全体図（S=1/150）

fig.29　第1遺構面遺構配置図（S=1/150）

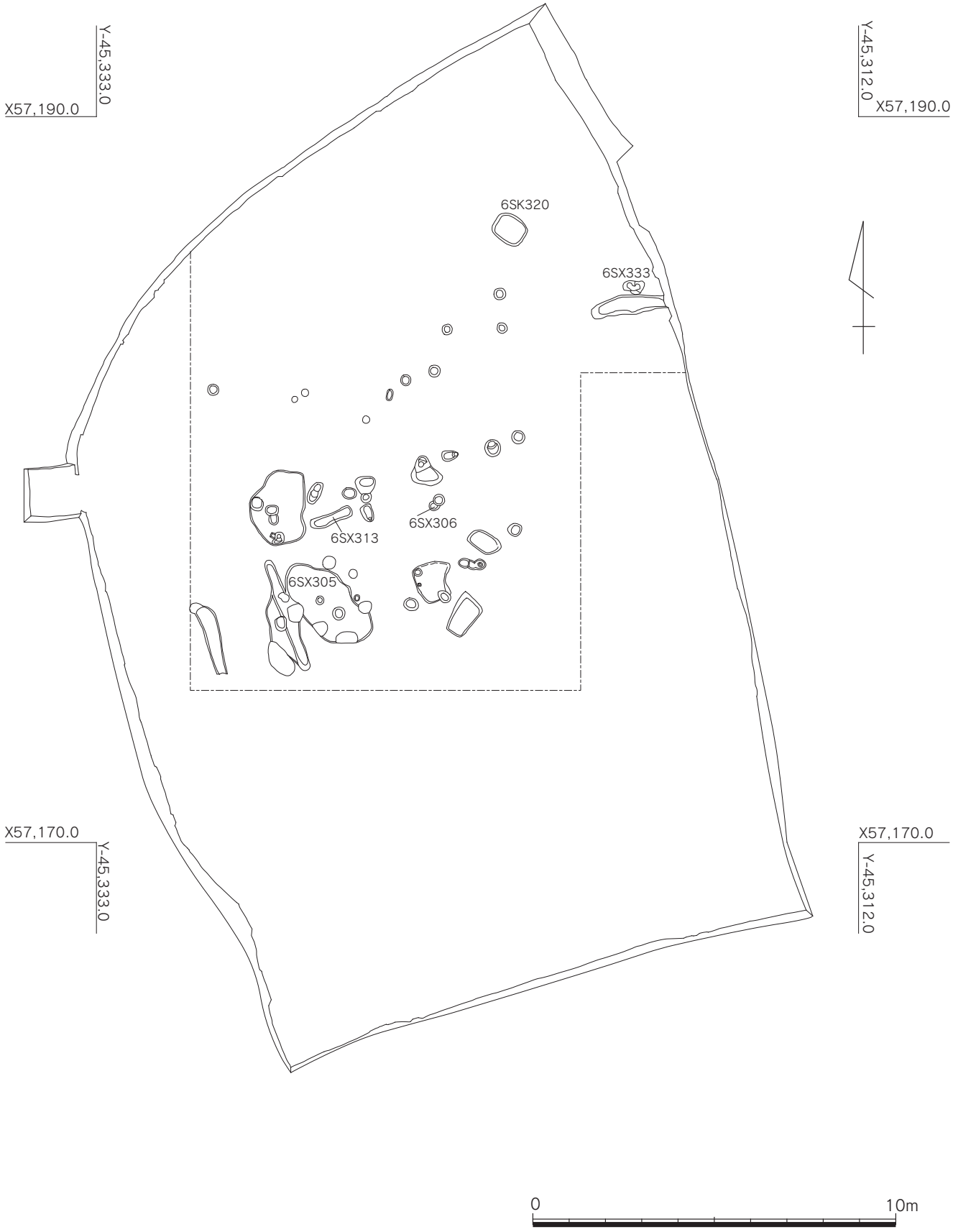


fig.30　第2遺構面遺構全体図（S=1/150）

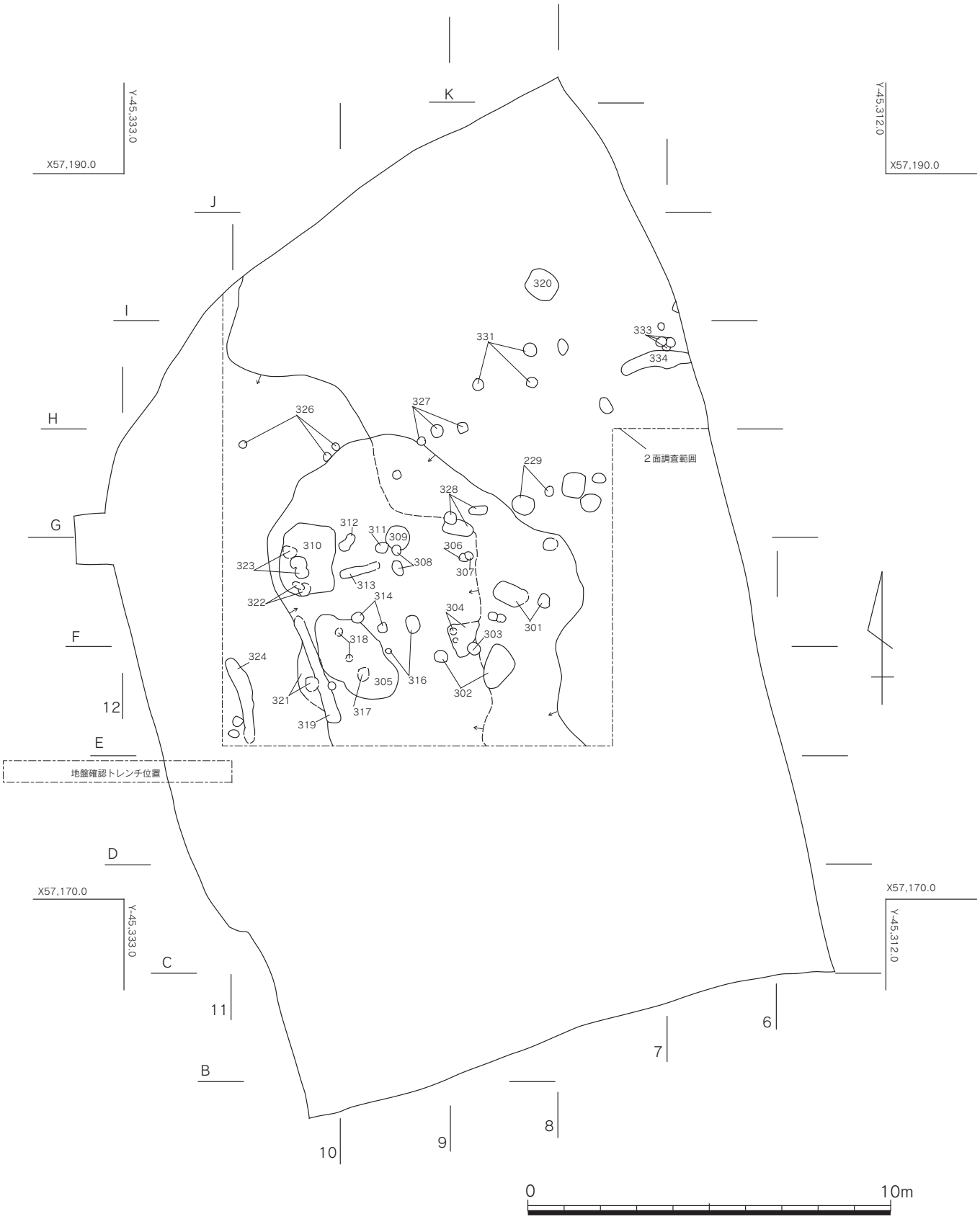


fig.31　第2遺構面遺構配置図（S=1/150）

6SK045（fig.28）

幅2×1.4m程度・深さ0.2弱で楕円形で浅い。出土遺物から奈良時代後半代と考えられる。

6SK056（fig.28）

幅1.4×0.8m程度・深さ約0.05mで長方形状を呈しており、浅い。奈良時代後半代と考えられる。

6SK075（fig.28）

幅4×3m程度・深さ0.2m弱で不定楕円形で浅い。出土遺物より奈良時代後半代と考えられる。

6SK133（fig.28）

幅1×1m強・深さ0.15m程度で円形で浅い。出土遺物より平安時代前期の遺構と考えられる。

墓

6ST100（fig.27・28、写真13 ～ 19）

調査区中央西側で検出。幅1.8×0.8m程度で長方形状を呈している。その四隅から出土した木質の残る釘から木棺墓と考えられる。出土遺物より平安時代初期の遺構と考えられる。

6ST200（fig.28、写真20）

調査区の北東側で検出。幅1.8×1.4m程度で長方形を呈している。人頭大よりも少し小振りの石が多数出土した。出土遺物より平安時代後期頃の遺構と考えられる。

その他の遺構

6SX043（fig.28）

幅0.4×0.4mの円形で深さ0.25mのピットである。出土遺物より奈良時代後半代と考えられる。

6SX055（fig.28）

調査区北西隅で検出。埋土は黄白色土であり、その形状から整地土と考えられる。奈良時代後半頃。

6SX068（fig.28）

幅0.4×0.4m弱の不定円形で深さ0.2m程度のピット群。出土遺物より奈良時代後半代と考えられる。

6SX071（fig.28）

幅0.2×0.2m程度・深さ0.1m程度の円形ピット群。出土遺物より9世紀代と考えられる。

6SX097（fig.28）

幅0.4×0.4m弱の円形で深さ0.4m程度のピット群。出土遺物より9世紀代と考えられる。

6SX103（fig.28）

掘方幅1×1m弱の不定円形で最大深0.4m程度のピット。柱穴である可能性がある。

6SX104（fig.28）

幅0.5×0.4m程度の楕円形で深さ0.1m程度のピット。出土遺物より奈良時代後半代と考えられる。

6SX131（fig.28）

幅0.5×0.5m程度で深さ0.4m程度のピット群。出土遺物より平安時代前期頃と考えられる。

6SX138（fig.28）

幅0.4×0.4m弱の円形で深さ0.2m程度のピット群。出土遺物より奈良時代後半代と考えられる。

6SX141（fig.28）

幅0.4×0.4m弱の円形で深さ0.3m程度のピット群。出土遺物より平安時代前期と考えられる。

6SX151（fig.28）

調査区西側隅で確認した溜まり状遺構。出土遺物より奈良時代後半代と考えられる。

6SX154（fig.28）

幅0.3×0.3m程度の円形で深さ0.05m程度のピット群。

6SX158（fig.28）

幅0.4×0.4m程度の円形で深さ0.2m程度のピット。古代。

6SX173（fig.28）

最大径0.9m程度・深さ0.3 ～ 0.5m程度のピット群。出土遺物から9世紀代の遺構と考えられる。

6SX177（fig.28）

幅0.4×0.4m弱・深さ0.2m強のピット群。出土遺物から奈良時代後半～平安時代前期と考えられる。

6SX191（fig.28）

幅0.2×0.2mと0.6×0.6m程度・深さ0.25mのピット群。出土遺物より奈良時代後半～平安時代前期。

6SX222（fig.28）

幅0.2×0.2m強・深さ0.15 ～ 0.3m程度のピット群。古代。

6SX227（fig.28）

幅0.3×0.3m程度の円形を呈するピット。古代。

6SX252（fig.28）

幅0.8×0.6m程度・最大深約0.6mの長方形を呈するピット。出土遺物より平安時代前期。

6SX257（fig.28）

幅0.4×0.4m・深さ約0.25mの不定円形のピット。出土遺物より平安時代と考えられる。

6SX262（fig.28）

幅0.3×0.3m・最大深0.3mの長方形を呈したピット。出土遺物より奈良時代後半代～平安時代前期。

6SX274（fig.28）

幅0.8×0.8m・深さ0.4mの円形を呈したピット。出土遺物より9世紀後半代と考えられる。

6SX289（fig.28）

幅0.3×0.3m前後・深さ0.1 ～ 0.4m程度の円形を呈したピット群。出土遺物より平安時代。

6SX293（fig.28）

幅0.2×0.2m・深さ約0.3mのピット。古代。

第2遺構面検出遺構

土坑

6SK320（fig.30・32、写真21）

調査区北東側で検出した。幅1×0.8m・深さ0.3m弱の長方形を呈する。埋土は焼土で、下層は炭化物層である。時期決定に至る遺物も出土せず、遺構の性格についても不明。但し、当遺構が掘削されていた土層とこれを覆っていた土層から7世紀後半代の可能性は高い。

その他の遺構

6SX305（fig.30）

調査区中央やや西寄りで検出した。深さ0.05m程度の溜まり状遺構。出土遺物より奈良時代である。

6SX306（fig.30）

幅0.2×0.2m・深さ0.1m強の円形のピット。出土遺物は鉱滓のみ。

6SX313（fig.30）

長径1.2m・短径0.2m程度で深さ0.15mの溝状遺構。出土遺物より奈良時代である。

6SX333（fig.30）

調査区北東側で検出した。幅0.3×0.3mの円形状のピット群。

4.遺物

各遺物の計測値及び須恵器・土師器の供膳具の底部切離しと内底の調整技法については「出土遺物計測表」(CD-ROM)に記載しているので参照されたい。

第1遺構面検出遺構出土遺物

溝出土遺物

6SD005出土遺物（fig33）

須恵器

坏c（1） 破片。内外面ともに回転ナデ調整。色調は内外面ともに淡白灰色を呈する。胎土は緻密で、焼成・還元ともに良好。

小皿a（2） 色調は内外面ともに淡灰色を呈する。胎土はやや密で焼成・還元とも良好。

壺（3） 破片。色調は内外面ともに暗灰色を呈する。胎土はやや密で、焼成・還元とも良好。

瓦類

平瓦（7） 色調は淡白灰色を呈し、焼成・還元とも良好。

石製品

平丸玉（4～6） 5･6は石英。7は変成岩。

6SD050出土遺物（fig.33）

須恵器

蓋c3（9） 胎土は緻密で、色調は白灰色を呈し、焼成良好・還元やや良好。

坏c（10・11） 両者とも色調は内面が淡白灰色、外面が灰色を呈し、焼成・還元ともに良好。

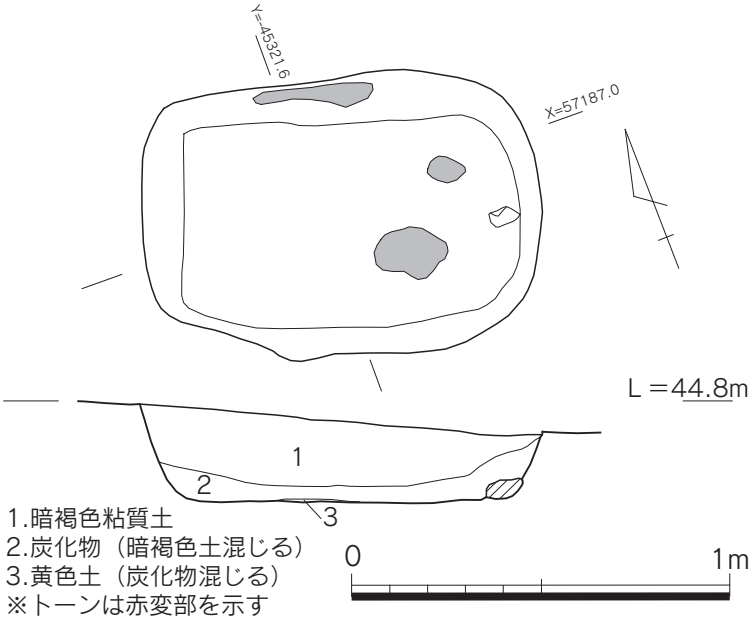


fig.32　6ST320遺構実測図（S=1/20）

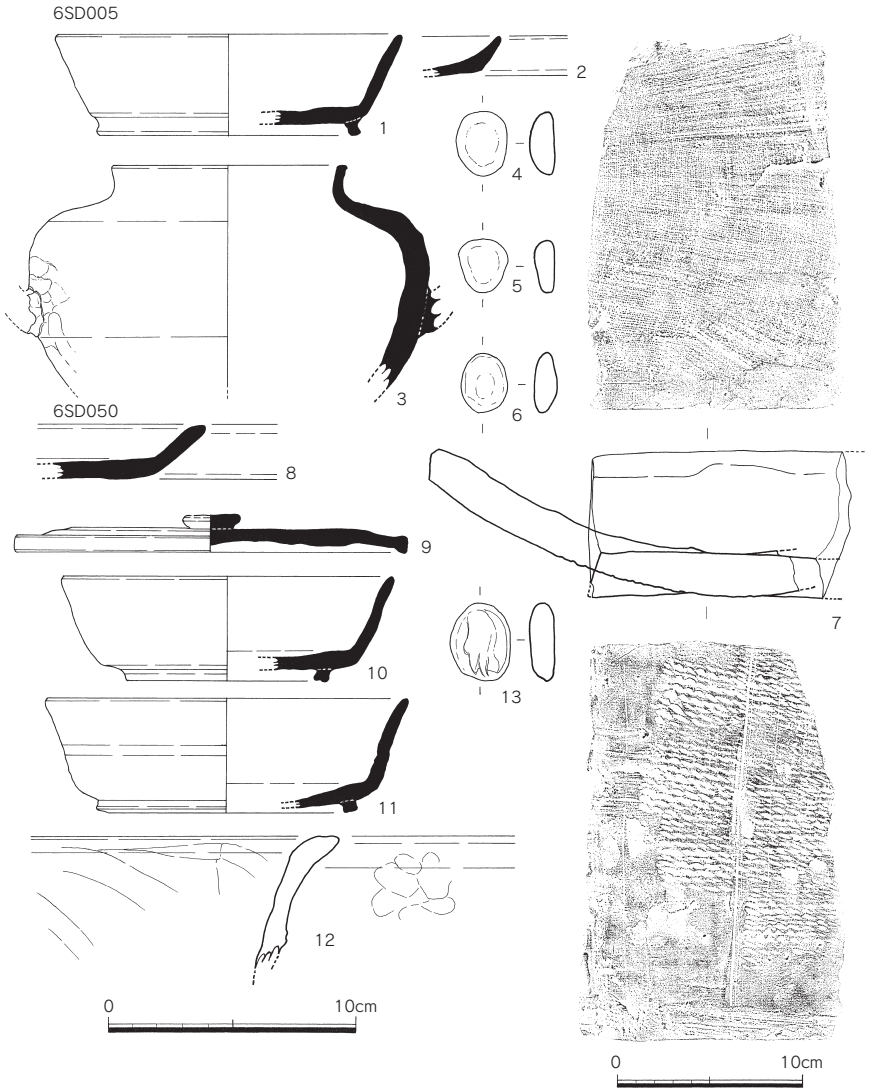


fig.33　溝遺構出土遺物実測図

(4～6・13はS=1/2、7はS=1/4、その他はS=1/3)

皿a（8）　色調は内外面ともに淡灰色を呈し、焼成・還元ともに良好。胎土は緻密で硬質。
土師器
甕（12）　色調は内面口縁部付近が淡黒橙色、残りが淡橙色を呈し、焼成は良好。胎土は粗い。
石製品
平玉石（13）　変成岩である。

土坑出土遺物

6SK001出土遺物（fig34・35、写真1）
須恵器
小坏a（1）　色調は外面口縁部付近が暗灰色、その他が灰色を呈し、焼成・還元ともに良好。胎土は密。
土師器
坏a（2）　調整は磨耗により不明である。色調は内外面ともに淡白黄色を呈する。胎土は緻密。焼成は良好であるが、やや軟質。
瓦類
平瓦（15・16）　15は色調が淡灰色を呈しており、焼成良好・還元やや良好。胎土は密。16は色調が淡白褐色を呈しており、焼成良好・還元不良。胎土はやや密。

6SK010出土遺物（fig.35）
瓦類
平瓦（17）　色調は淡白褐色を呈しており、焼成良好・還元やや良好。胎土は密。

6SK015出土遺物（fig.34・35）
土師器
皿（3）　内外面ともに磨耗により調整不明。色調は淡褐黄色を呈し、焼成良好。胎土は緻密だが、やや軟質。
金属製品
止め具（18）　鉄製品。端部欠損。
釘（19・20）　両者とも鉄製品。

6SK038出土遺物（fig.35）
石製品
平丸玉（23 ～ 25）　23は石英。24・25は変成岩。

6SK045出土遺物（fig.34）
須恵器
蓋c3（4）　調整はすべて回転ナデ調整。色調は内外面ともに灰褐色を呈し、焼成・還元ともに良好。胎土は密で硬質。
坏a（5）　口縁部から体部の内外面ともに回転ナデ調整。色調は内外面ともに淡白褐灰色を呈し、焼成・還元ともに良好。胎土は緻密で、硬質。

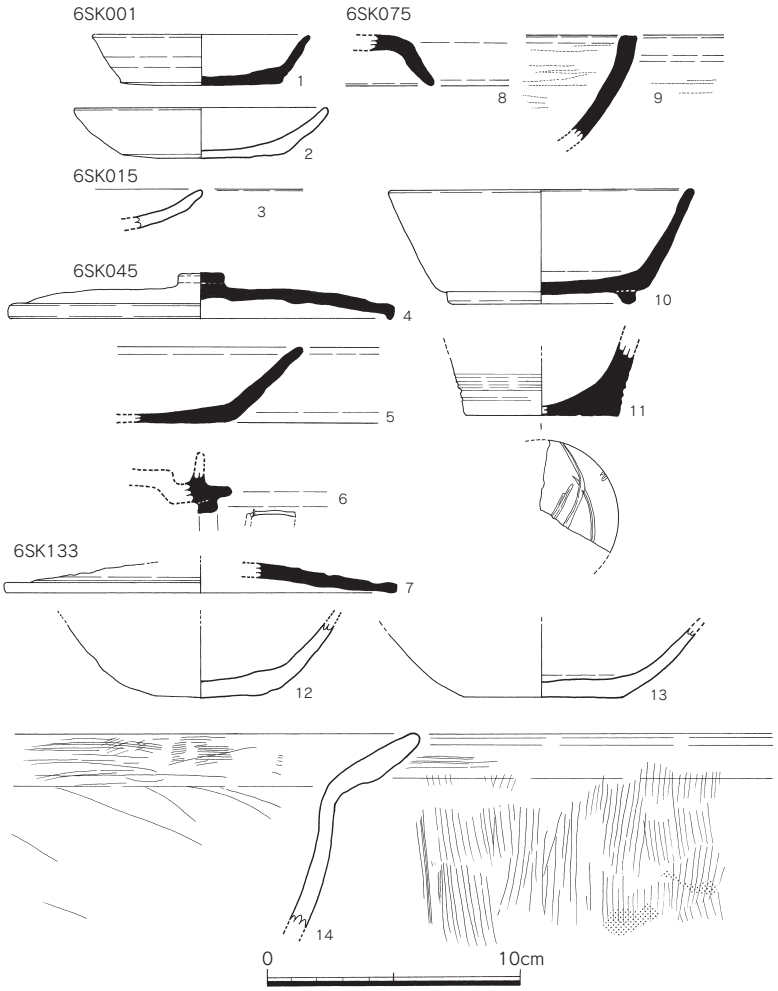


fig.34　土坑遺構出土遺物実測図（1）（S=1/3）

円面硯（6）　小破片。回転ナデにより調整。色調は褐灰色を呈しており、焼成・還元ともに良好である。胎土は密だが、やや軟質である。なお、脚部底面は削り調整が施され、透かしがある。

6SK056出土遺物（fig.35）

石製品

平玉石（26・27）　両者とも変成岩である。

6SK075出土遺物（fig.34・35、写真2・3）

須恵器

蓋（8）　外面上部は回転削り後に回転ナデ調整、内面上部は不定方向のナデ調整で他は回転ナデ調整である。色調は内外面ともに淡褐灰色を呈し、焼成・還元ともに良好。胎土は密で硬質。

坏c（10）　破片。内面見込みは不定方向のナデ調整、体部内外面ともに回転ナデ調整である。色調は内

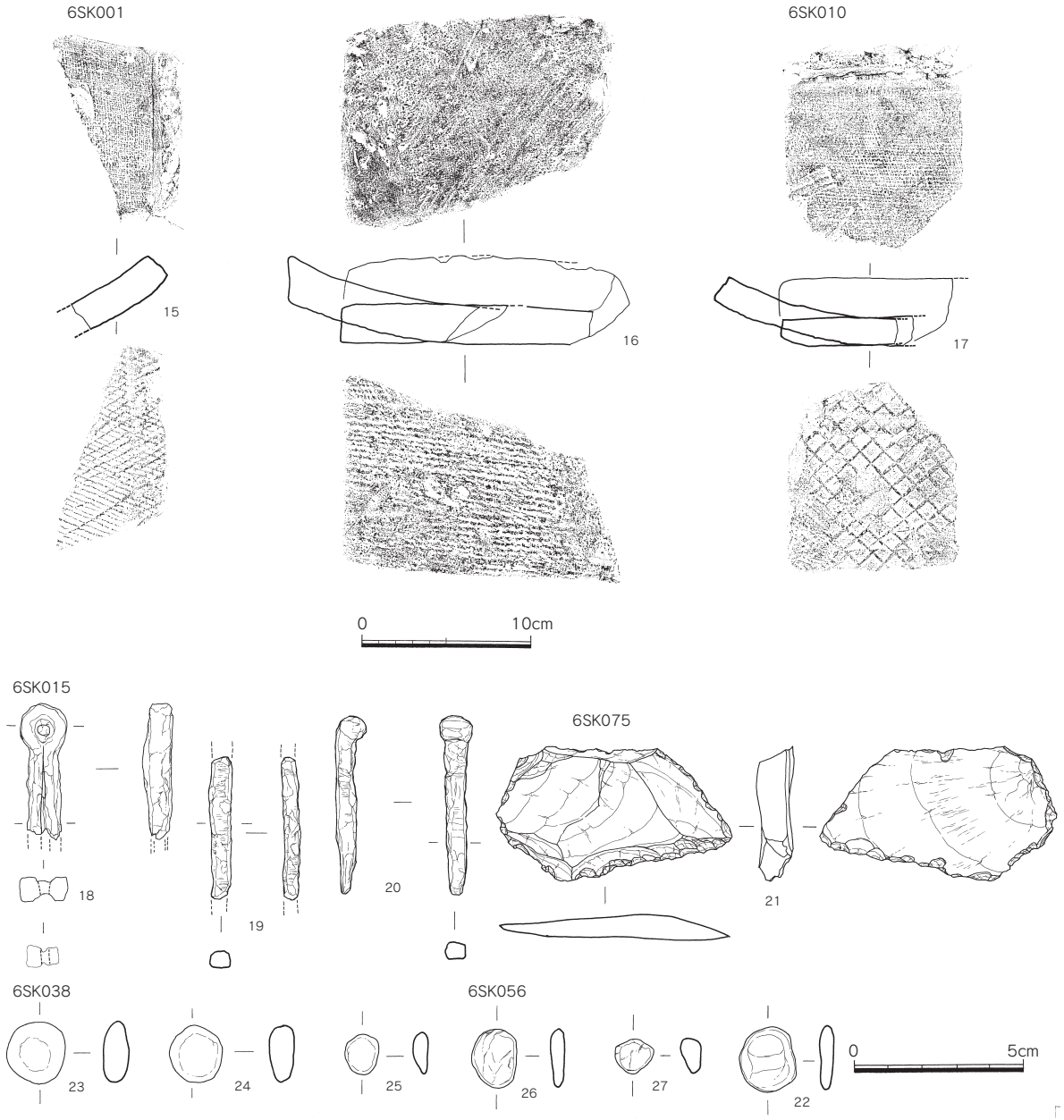


fig.35　土坑遺構出土遺物実測図(2)(15 ～ 17はS=1/4、その他はS=1/2)

外面ともに淡白灰色呈し、焼成・還元ともに良好。胎土は密で硬質である。
小壺（11） 小破片。内面は横ナデ調整、外面は回転ナデ調整。色調は内外面ともに灰色を呈し、焼成・還元ともに良好である。胎土は緻密で硬質である。
鉢（9） 破片。色調は明橙茶褐色を呈しており、焼成やや良好・還元不良である。胎土はやや粗く、やや軟質。
土師器
坏d（12・13） 両者とも破片である。内外面ともに橙茶褐色を呈しており、焼成は良好。胎土はやや粗く、軟質である。
甕（14） 破片。色調は内外面ともに淡褐白黄色を呈し、焼成は良好である。胎土はやや粗く、やや軟質気味である。体部外面下部に炭化物が付着している。
石製品
平玉石（22） 変成岩である。
スクレイパー（21） 安山岩製である。
6SK133出土遺物（fig34）
須恵器
蓋4（7） 破片。外面は回転ヘラ切り後に粗いナデ調整、端部は回転ナデ調整、内面は回転ナデ後に不定方向のナデ調整。色調は外面が灰色を呈しており、内面が淡白灰色を呈しており、焼成・還元ともに良好。胎土は緻密で硬質。
墓出土遺物
6ST100出土遺物（fig36、写真4～7）
須恵器
長頸壺（1） 体部外面は回転ナデ調整。色調は灰色を呈し、焼成･還元ともに良好。胎土は緻密で硬質である。
越州窯系青磁
坏Ⅰ-2b（2） 釉は光沢・透明度ともに低い。色調は黄白～緑灰色を呈する。内外面ともに薄く施釉され、口縁端部は剥落気味。畳付は釉が掻き取られ、露胎。素地は灰色を呈し､胎土は緻密であり硬質である。内面見込み部分と畳付部分に目跡がある。口縁端部は二枚ずつに分かれた5弁の花形で、体部外面には5本の浅い篦押圧縦線が入る。

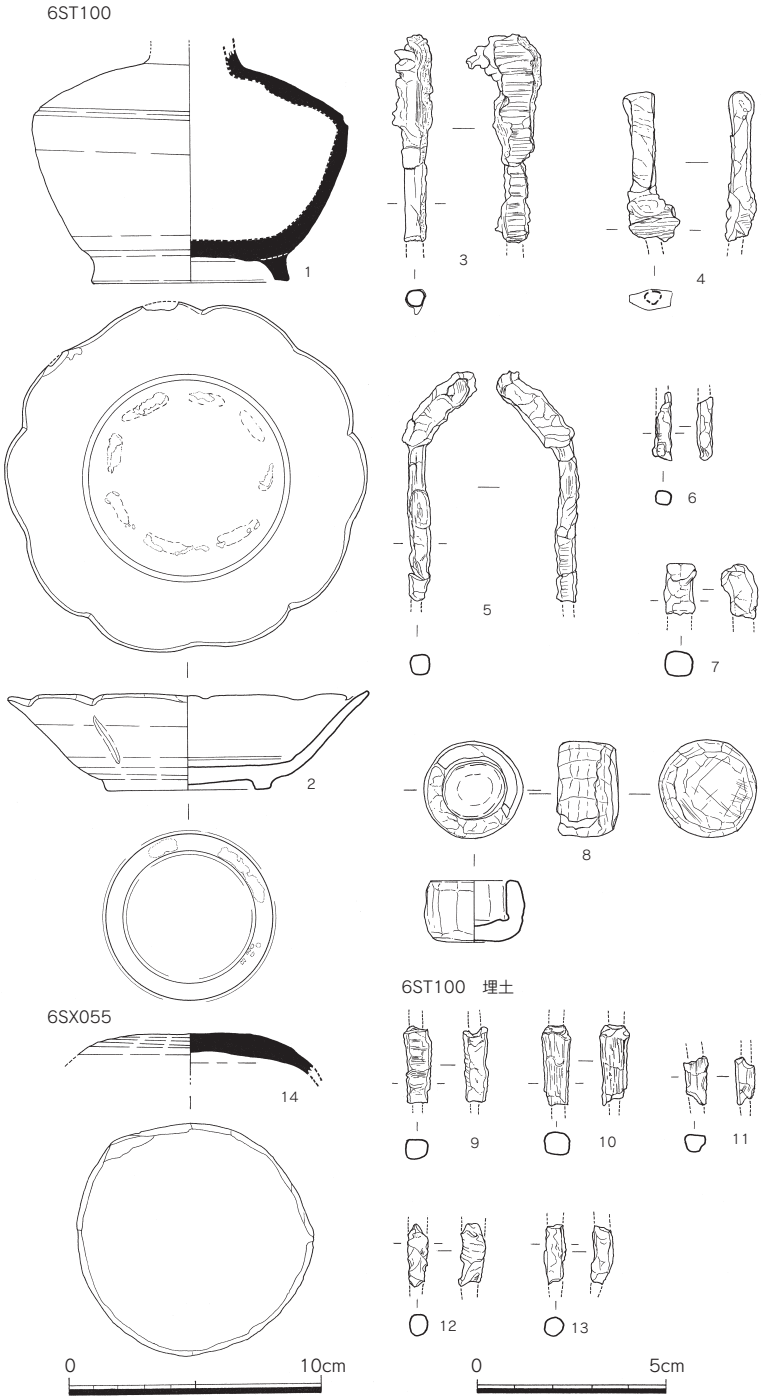


fig.36 墓遺構・整地土層出土遺物実測図
(1・2・14はS=1/3、その他はS=1/2)

石製品
器種不明（8・15）　8は滑石製品。削り出し成形。15は水晶である。
金属製品
釘（3～7）　すべて鉄製である。
6ST200出土遺物（写真8）
石製品
器種不明（16）　赤紫色を呈した輝緑凝灰岩である。
その他の遺構出土遺物
6SX043出土遺物（写真30）
金属製品
鉱滓（32）「出土遺物計測表」「写真」(CD-ROM収納)参照。
6SX055出土遺物（fig.36）
須恵器
蓋（14）　外面は回転ヘラ削り、内面は回転ナデ後不定方向のナデ調整。口縁部は別途使用目的のために故意に打ち掻かれる。色調は内外面ともに暗灰～暗茶灰色を呈し、焼成・還元ともに良好。胎土はやや密だが硬質。
6SX068出土遺物（fig.38）
石製品
砥石（31）　砂岩製である。
6SX071出土遺物（fig.37）
須恵器
坏（1）　破片。内面見込部分は不定方向のナデ調整、体部は内外面ともに回転ナデ調整。色調は内面が淡褐灰色、外面が淡白灰色を呈し、焼成・還元ともに良好。胎土は緻密だが、やや軟質気味である。
6SX097出土遺物（fig.37）
須恵器
坩堝×トリベ（2）　破片。色調は体部内面から口縁端部にかけては淡灰茶色を呈し、体部外面は淡黄茶色を呈している。焼成・還元ともやや不良。胎土はやや粗く、軟質。
6SX103出土遺物（fig.37）
須恵器
坏a（3）　小破片。内面見込部分は回転ナデ後に不定方向のナデ調整、体部内外面ともに回転ナデ調整。色調は外面が淡茶褐～淡橙色を呈し、内面が淡橙色を呈する。焼成良好・還元不良。胎土は密で硬質。
金属製品
釘（22）　鉄製である。
刀子（21）　鉄製である。
6SX104出土遺物（fig.37）
須恵器
蓋c3（4）　口縁端部の一部が欠損しているのみでほぼ完形品である。色調は内外面ともに淡白灰色を呈しており、焼成・還元ともに良好。胎土は密で硬質。

6SX131出土遺物（fig.37）
土師器
皿a（5）破片。体部内外面ともに回転ナデ調整。内面見込部分磨耗により調整不明。外面底部は磨耗しているがわずかに回転ヘラ切り痕あり。色調は淡灰橙白色を呈し、焼成良好。胎土は密だが、やや軟質。
6SX138出土遺物（fig.37）
須恵器
甕a（6） 破片。口縁部は回転ナデ調整。色調は淡茶灰褐色を呈し、焼成･還元ともに良好。胎土は密で、硬質である。
6SX141出土遺物（fig.38）
瓦類
丸瓦（29） 色調は凹面が灰～黒灰色、凸面が淡灰色を呈しており、焼成・還元ともに良好。胎土は緻密でやや硬質。
6SX151出土遺物（fig.37）
須恵器
蓋3（7） 破片。口縁部付近は回転ナデ調整。色調は灰色、外部口縁端部のみ黒灰色を呈する。焼成・還元ともに良好。胎土は緻密で、硬質。
高坏（8） 脚部は全て回転ナデ調整。坏部分内面見込部分は不定方向のナデ調整。色調は灰色を呈して、焼成・還元ともに良好である。胎土は緻密で、硬質である。
鉢a（9） 内外面ともに回転ナデ調整。色調は淡灰色を呈し、焼成･還元ともに良好である。胎土は密で、やや硬質である。なお、縁端部外面に調整時の工具痕を確認できる。
6SX154出土遺物（fig.37）
須恵器
鉢a（10） 内外面ともに回転ナデ調整。色調は淡灰色を呈し､焼成･還元ともに良好である。胎土は密で、やや硬質である。
6SX158出土遺物（写真30）
金属製品
鉱滓（33）「出土遺物計測表」「写真」(CD-ROM収納)参照。
6SX173出土遺物（fig.37）
須恵器
壺（11） 破片。色調は内面が暗灰色、外面が淡褐灰色を呈する。焼成・還元ともに良好。胎土は密で、硬質である。
6SX177出土遺物（fig.37、写真9・10）
陶器
器種不明（12） 小破片。釉は暗茶黒色を呈しており、全体的に施釉される。素地は灰色を呈しており、胎土は緻密で硬質。焼成は良好。
6SX191出土遺物（fig.37）
土製品
鞴羽口（13）小破片。色調は外面が淡灰～淡黄灰白色、内面が淡橙白～淡茶褐色を呈する。吹口付近で熱変が確認できる。胎土はやや密で、硬質である。

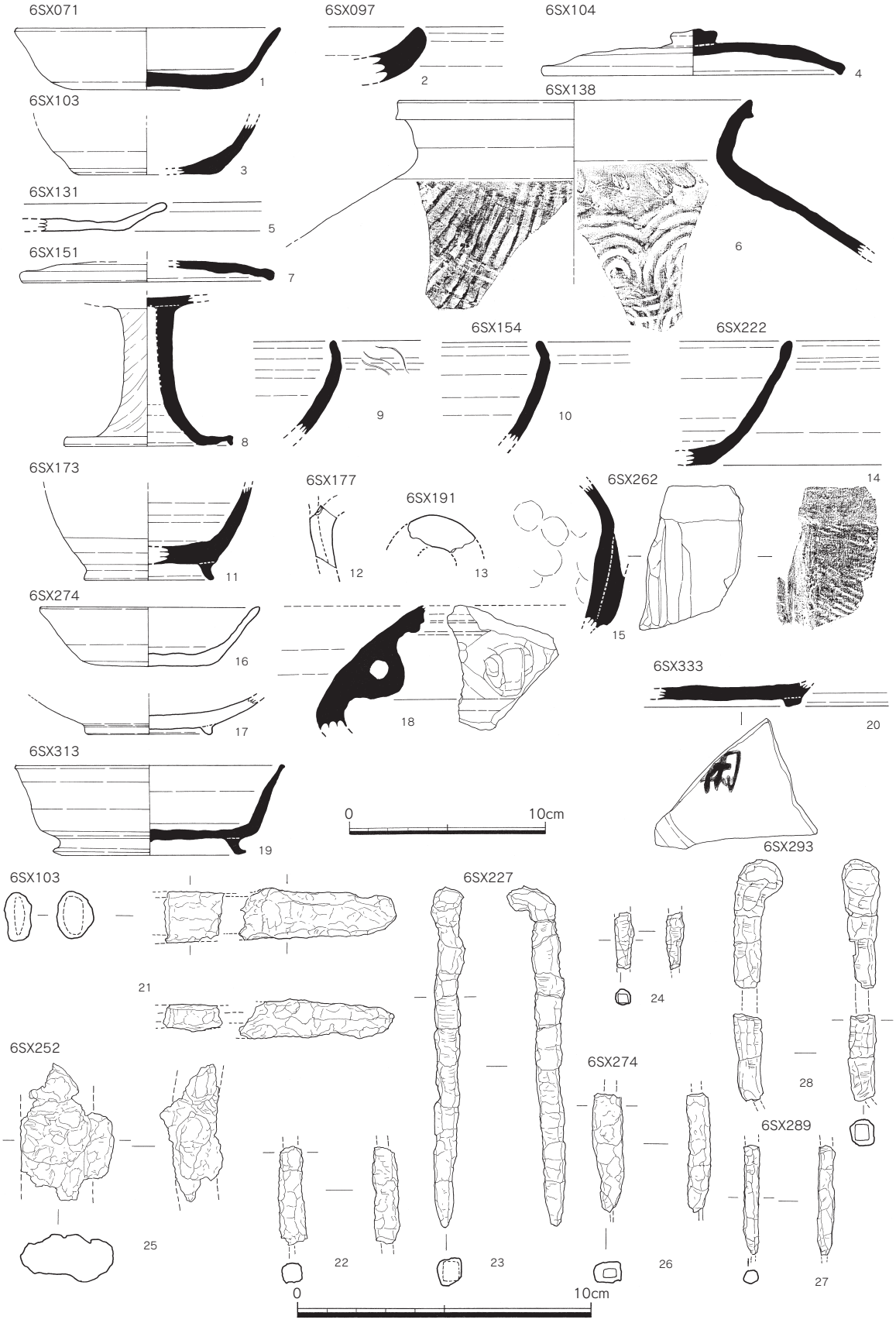


fig.37　その他の遺構出土遺物実測図(1)(1 ～ 20はS=1/3、その他はS=1/2)

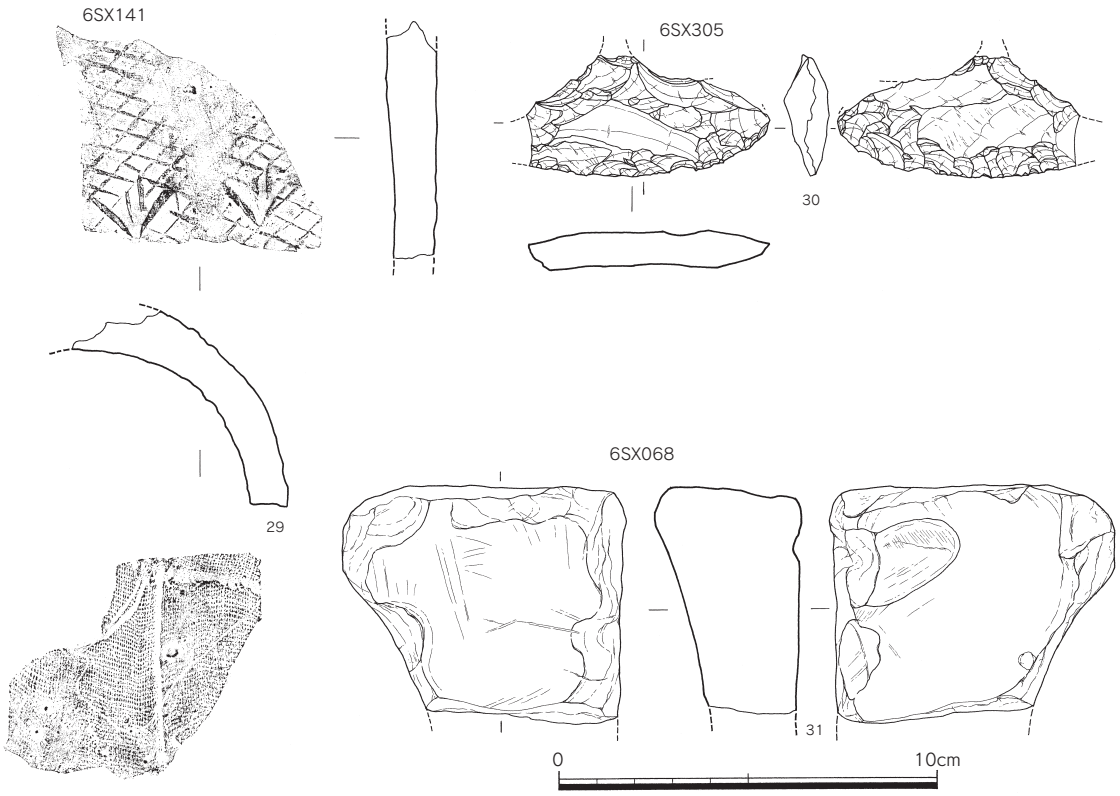


fig.38　その他の遺構出土遺物実測図(2)(29はS=1/4、その他はS=1/2)

6SX222出土遺物（fig.37、写真11）

須恵器

小鉢（14）　破片。体部内面から外面上部は回転ナデ調整、外面下部は回転ナデ後にナデ調整、内面見込部分はナデ調整、底部はヘラ切り後にナデ調整。色調は内外面ともに淡白灰色を呈し、焼成・還元ともに良好である。胎土は緻密で、硬質である。

6SX227出土遺物（fig.37）

金属製品

釘（23・24）　両者とも鉄製である。

6SX252出土遺物（fig.37）

金属製品

鉄塊（25）　長径4.7㎝、短径3.2㎝、厚さ1.7㎝の鉄塊である。

6SX257出土遺物（写真30）

金属製品

鉱滓（34）「出土遺物計測表」「写真」(CD-ROM収納)参照。

6SX262出土遺物（fig.37）

須恵器

甕（15）　色調は内面が灰色、外面が淡灰色を呈し、焼成･還元ともに良好である。胎土は密、やや硬質。

6SX274出土遺物（fig.37、写真12）

須恵器

壺×甕（18）　色調は内面が白灰～黒灰色、外面が黒灰色を呈しており、焼成・還元ともに良好である。

胎土はやや粗いが硬質である。
土師器
坏a（16）　内外面ともに回転ナデ調整、底部は磨耗が著しく調整不明瞭。色調は内外面ともに淡白橙色を呈し、焼成はやや良好。胎土は緻密だがやや軟質である。
緑釉陶器
皿（17）　破片。釉は緑色を呈し、光沢度高く、透明度低い。内外面ともに薄く施釉されるが、剥落著しい。素地は淡白橙色を呈し、胎土は緻密だが軟質である。
金属製品
釘（26）　鉄製である。
6SX289出土遺物（fig.37）
金属製品
釘（27）　鉄製である。
6SX293出土遺物（fig.37）
金属製品
釘（28）　鉄製である。
第2遺構面検出遺構出土遺物
その他の遺構出土遺物
6SX305出土遺物（fig.38）
石製品
石匙（30）　安山岩製である。
6SX306出土遺物（写真30）
金属製品
鉱滓（35）「出土遺物計測表」「写真」(CD-ROM収納)参照。
6SX313出土遺物（fig.37）
須恵器
坏c（19）　体部内外面ともに回転ナデ調整、内面見込部分不定方向への丁寧なナデ調整。色調は内面が淡灰色、外面が淡褐灰色を呈しており、焼成・還元ともに良好。胎土は密で、やや硬質である。
6SX333出土遺物（fig.37、写真13）
須恵器
大椀c×皿c（20）　底部に墨書あり。判読はできなかった。色調は内外面ともに淡白灰色を呈し、焼成良好で還元はやや良好。胎土は密でやや軟質気味。
各層出土遺物
暗茶色土層出土遺物（fig.39・40、写真15 ～ 18）
須恵器
蓋a3（6）破片。外面上部は回転ヘラ切り後に粗いナデ調整、その他は回転ナデ調整。色調は内外面ともに淡白灰色を呈し、焼成・還元ともに良好。胎土は密で硬質。
坏a（4）　色調は内外面ともに淡白灰色を呈し、焼成良好・還元やや良好。胎土は密で、やや硬質。
壺（2・3）　2は内外面ともに回転ナデ調整。色調は内面が淡白灰色、外面が淡灰色を呈し、焼成・還元ともに良好。胎土は密で硬質。3は内外面ともに回転ナデ調整。色調は内外面ともに褐灰色を呈し、焼成・還元ともに良好。胎土は緻密で硬質。

器種不明（5）　色調は灰～暗灰色を呈し、焼成・還元ともに良好。胎土は緻密で硬質。
土師器
坏a（7 ～ 9）　いずれも破片である。色調は、7が内外面ともに淡白黄色、8が淡褐橙色、9が内面淡橙色で外面白橙色を呈する。7･8は焼成良好でやや硬質。9は焼成やや不良で軟質。いずれも胎土は精良。
椀c（11 ～ 14）　いずれも破片である。11は色調が内外面ともに淡褐黄色を呈し、焼成良好。胎土は精良でやや硬質。12は色調が内外面ともに淡白黄色を呈し、焼成良好。胎土はやや精良で軟質気味。13は色調が内面淡白黄色、外面淡白黄～淡灰色を呈し、焼成良好。胎土は精良でやや硬質。14は色調が淡褐黄色を呈し、焼成良好。胎土はやや粗く、やや軟質。
椀c1（15）　破片。色調は高台が淡白黄色で、その他が内外面ともに明橙色を呈し、焼成良好。胎土は粗く軟質気味。
大椀c（16）　破片。高台は回転ナデ調整で、その他は名で調整。色調は内外面ともに淡褐灰色を呈し、焼成は良好。胎土は精良で、やや硬質気味。
皿a（17）　色調は淡褐黄色を呈し、焼成良好。胎土はやや精良で、軟質気味。
取手（18）　色調は内面が淡褐黄色、外面が淡褐橙～暗褐茶色を呈する。焼成は良好。胎土は粗いがやや硬質である。
脚付坏×鉢（19）　高台が回転ナデ調整で、その他はすべて磨耗により調整不明。色調は内外面ともに淡橙褐白色を呈し、焼成良好。胎土は粗く、やや軟質気味。
製塩土器
焼塩壺b（20）　色調は淡白褐色を呈し、焼成は良好。胎土はやや粗く、軟質気味である。
越州窯系青磁
椀Ⅰ（21）　釉は内外面ともに淡緑灰色を呈しており、薄く施す。素地は淡灰白色を呈しており、胎土は緻密である。焼成良好で、硬質である。
椀Ⅱ-b（22）　釉は淡緑灰色を呈しており、内面の一部のみ確認できる。露胎は暗灰赤色、素地は淡灰色を呈している。胎土はやや密で、焼成良好。
椀（23）　破片。釉は淡緑灰色を呈しており、光沢・透明度ともにやや不良で薄く施されている。化粧土は淡灰色を呈し、露胎は淡茶赤色を呈する。素地は淡灰色を呈しており、焼成良好。胎土は緻密。
灰釉陶器
坏（24）　釉は淡緑灰色を呈し、発色はやや不良。素地は淡白灰色を呈し、胎土は精良である。
皿（25）　釉は淡緑灰色を呈し、発色はやや不良。一部外面に施釉されてない部分があり、回転ナデにより調整されていることが確認できる。素地は淡白灰色を呈し、胎土は精良である。
緑釉陶器
椀×皿（27）　釉は暗緑灰色を呈しており、薄く施されている。光沢度は高く、透明度は低い。素地は淡茶赤色を呈しており、胎土は緻密である。焼成は良好。
白磁
坏（26）　釉は光沢・透明度ともに高く淡白色である。素地は淡白褐色を呈し、焼成良好。
瓦類
丸瓦（35・36）　35は色調が淡赤茶色を呈しており、焼成良好・還元不良。胎土はやや密で硬質。36は色調が淡灰褐色を呈し、焼成・還元ともにやや良好。胎土はやや粗く、軟質気味である。

平瓦（37･38） 37は色調が淡白灰色を呈し、焼成良好･還元やや良好。胎土は緻密だが、やや軟質気味。38は色調が淡褐灰色を呈し、焼成・還元ともにやや良好。胎土は緻密でやや硬質。

石製品

砥石（28） 砂岩製である。

器種不明（29・30） 29は淡灰赤色を呈した滑石である。30は頁岩製である。

丸玉（31・32） 31は石英である。32は安山岩である。

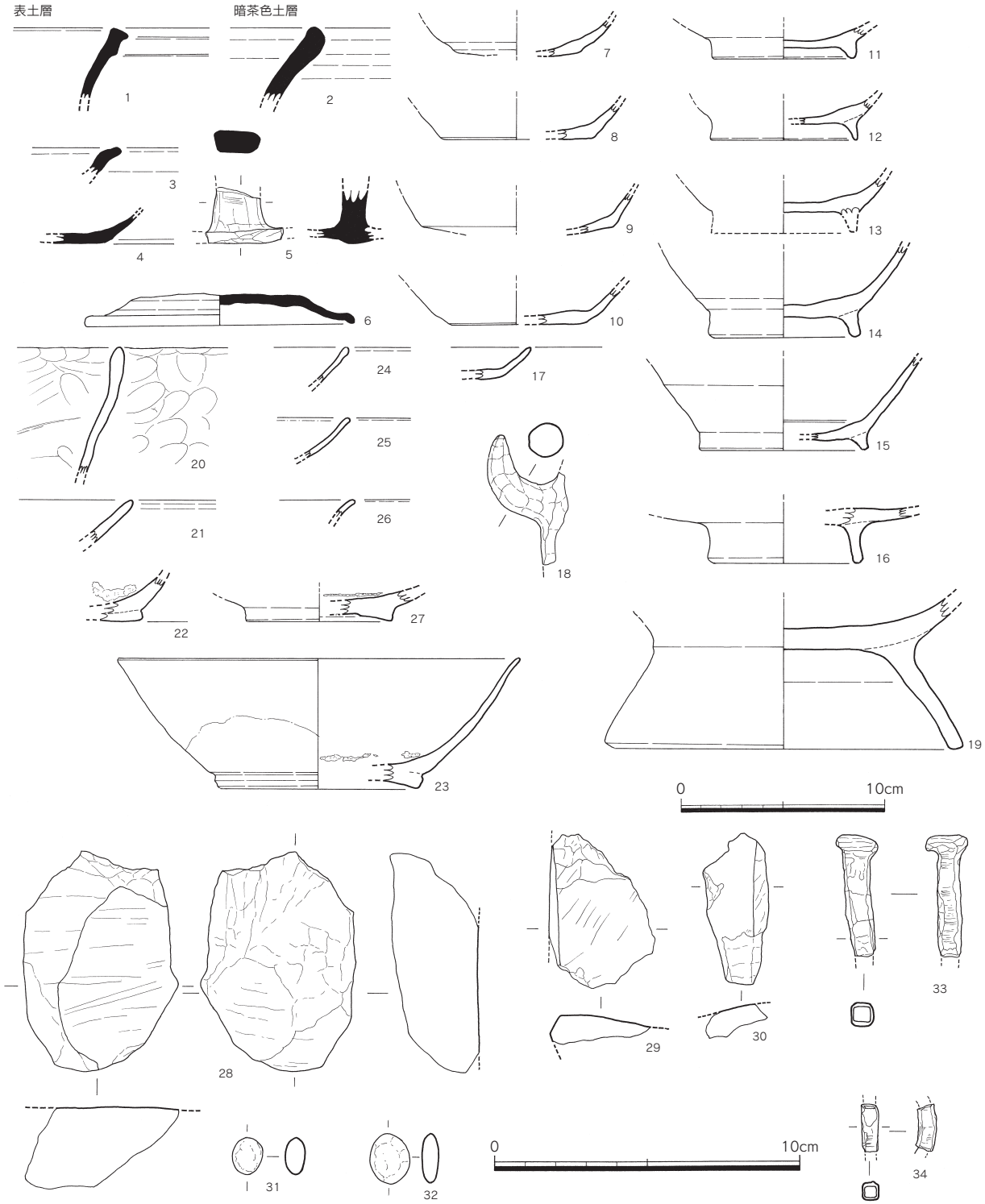


fig.39 表土・暗茶色土層出土遺物実測図(28 ～ 34はS=1/2、その他はS=1/3)

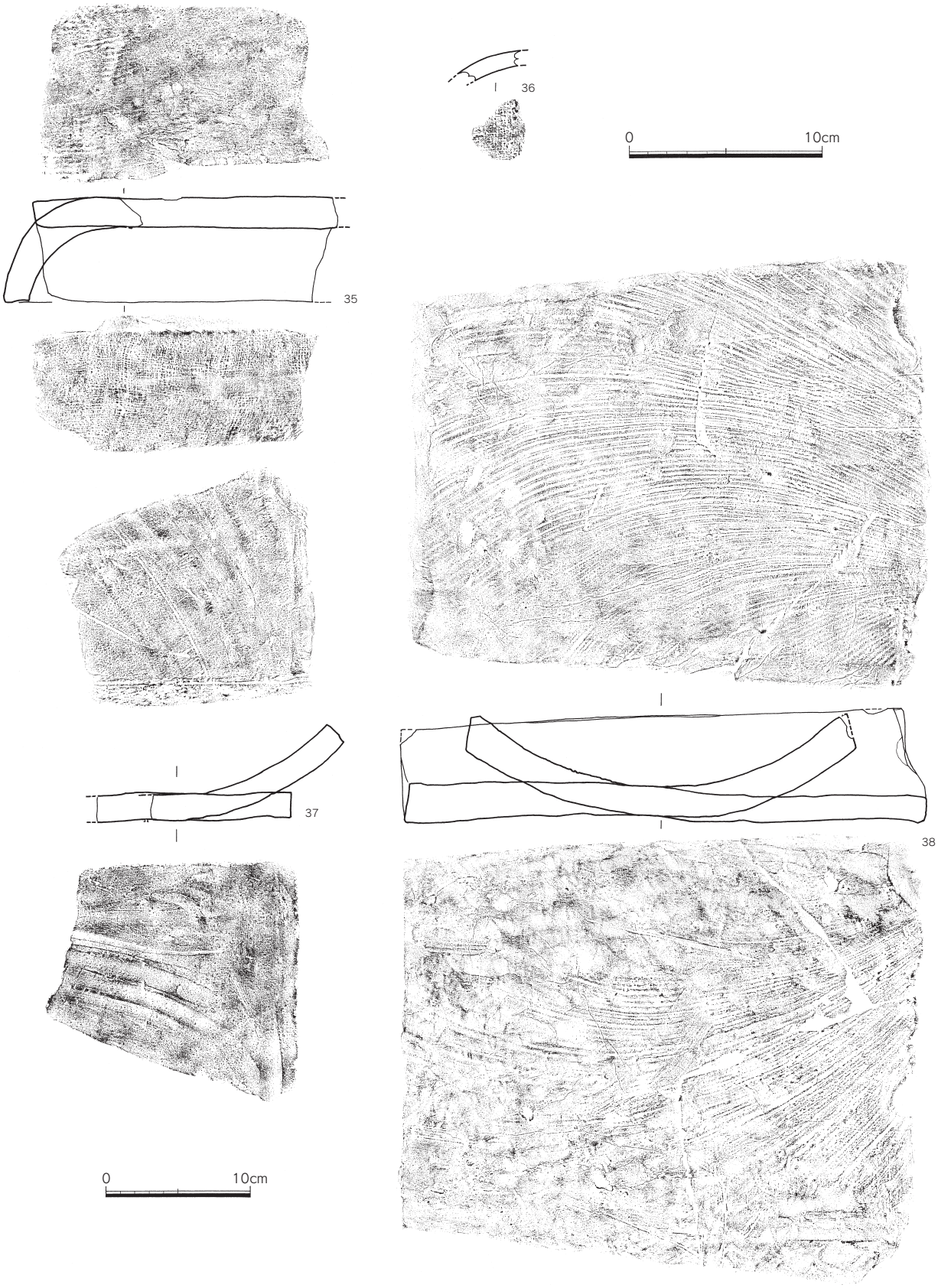


fig.40　暗茶色土層出土遺物実測図(2)(36はS=1/3、その他はS=1/4)

金属製品
釘（33・34） いずれも鉄製品である。
暗褐色土層出土遺物（fig.41・42、写真19 ～ 24）
須恵器
蓋1（4） 破片。外面上部は回転ヘラ削り、内面上部は回転ナデ後に不定方向のナデ調整、その他は回転ナデ調整。色調は外面が淡灰褐白～淡灰茶色、内面が淡灰茶褐色を呈しており、焼成良好・還元やや不良である。胎土は緻密で、やや軟質気味である。
蓋3（1 ～ 3） いずれも破片である。1は色調が内外面ともに淡灰色を呈しており、焼成・還元ともに良好である。胎土は緻密でやや硬質。2は色調が内外面ともに灰色を呈しており、焼成・還元ともに良好。胎土は緻密で硬質。3は色調が内外面ともに淡灰赤色を呈しており、焼成良好・還元やや良好である。胎土は緻密で硬質。
蓋（5） 破片。色調は内外面ともに淡灰色を呈し、焼成・還元ともに良好。胎土は密で硬質である。
大蓋c3（6） 破片。色調は内外面ともに淡白灰色を呈し、焼成良好・還元やや良好である。胎土は緻密で、あるが、軟質気味である。
坏a（7 ～ 10） いずれも破片である。7は色調が内外面ともに灰色を呈し、焼成・還元ともに良好である。胎土は緻密で硬質。8は色調が内外面ともに淡灰色を呈し、焼成・還元ともに良好。胎土は緻密でやや硬質。9・10は色調が内外面ともに淡白灰色を呈し、焼成良好・還元やや良好。胎土は密でやや硬質。
坏c（11 ～ 20） いずれも破片である。11は色調が内面暗灰茶色、外面暗茶灰色を呈し、焼成良好・還元やや良好である。胎土は密でやや硬質。12・17は色調が内外面ともに淡灰色を呈し、焼成・還元ともに良好である。胎土は緻密で硬質。13・14・16・19は色調が内外面ともに淡白灰色を呈し、焼成・還元ともに良好。胎土は緻密で硬質。15は色調が内外面ともに灰色を呈し、焼成・還元ともに良好。胎土は緻密で硬質。18は色調が体部外面のみ淡灰色を呈し、その他が白灰色を呈する。焼成・還元ともにやや不良。胎土は密だが軟質気味である。20は色調が内面淡灰赤色、外面灰色を呈する。焼成良好・還元やや良好。胎土は密で硬質である。
大坏c（21） 破片。内面見込は不定方向のナデ調整、体部内面から口縁部外面にかけて回転ナデ調整、体部外面は回転ナデ調整後にナデ調整。色調は内外面ともに淡白灰色を呈し、焼成良好・還元やや良好。胎土は緻密でやや硬質である。
皿a（22 ～ 26） いずれも破片である。22は色調が灰色を呈しており、焼成・還元ともに良好。胎土はやや粗いがやや硬質気味である。23・25・26は色調が淡白灰色を呈しており、焼成・還元ともに良好。胎土は密で硬質である。24は色調が淡灰色を呈しており、焼成・還元ともに良好である。胎土は緻密で硬質である。
高坏b（28・29） いずれも破片である。28は色調が内面灰色、外面淡白灰色を呈し、焼成・還元ともに良好。胎土は密で硬質である。29は内外面ともに灰色を呈しており、焼成・還元ともに良好。胎土は密で硬質である。
高坏（27・30） いずれも破片である。27は色調が内外面ともに灰色を呈しており、焼成・還元ともに良好である。胎土は緻密で硬質。30は色調が内外面ともに淡灰色を呈しており、焼成・還元ともに良好である。胎土は密で硬質である。
甕（31 ～ 33） 31・32は破片である。色調は淡褐灰色を呈しており、焼成・還元ともに良好。胎土は密でやや硬質である。33は欠損部分が多いが残存度は高い。色調は淡白橙色を呈しており、焼成良好・還元不良である。胎土は緻密でやや硬質である。

鉢（34・35）　34は内外面ともに回転ナデ調整。色調は淡灰色を呈しており、焼成・還元ともに良好。胎土は密で、やや硬質。35は色調が灰色を呈しており、焼成・還元ともに良好。胎土は緻密で硬質。
壺蓋（36）内外面ともに回転ナデ調整である。色調は淡白灰色を呈しており、焼成・還元ともに良好。胎土は緻密で硬質気味である。
壺a（38）　破片である。内外面ともに回転ナデ調整。色調は淡白灰色を呈しており、焼成・還元ともに良好である。胎土はやや密で硬質である。
壺b（39）　破片である。色調は内面が灰色、外面が暗灰色を呈しており、焼成・還元ともに良好である。胎土は緻密で硬質である。
壺（37）　内外面ともに回転ナデ調整。色調は淡白灰色を呈しており、焼成・還元ともやや不良。胎土は緻密だが、やや軟質である。
横瓶（41）　破片。色調は内外面ともに暗灰色を呈しており、焼成・還元ともに良好である。胎土は緻密で硬質である。
甑の底（40）　棒状で長軸の両端が欠損している。色調は暗灰色を呈しており、焼成・還元ともに良好である。胎土は緻密で硬質である。なお、把手の可能性もある。
土師器
坏c（42）色調は淡褐黄色を呈する。焼成はやや良好。胎土は密だが、やや軟質気味である。
坏d（43・44）　いずれも色調は淡橙色を呈しており、焼成良好。胎土は精良でやや硬質気味である。
椀c×坏c（48）　色調は内外面ともに橙色を呈しており、焼成良好。胎土はやや粗く、やや軟質気味。
高坏（45）内外面ともに磨耗が著しく調整不明。色調は内面が淡黄色、外面が淡橙色を呈する。焼成はやや良好。胎土はやや粗く軟質である。
甕（46・47）　46は色調が内外面ともに淡橙色で焼成良好。胎土はやや粗く、やや硬質である。47は色調が内外面ともに淡白黄色を呈する。焼成やや良好。胎土は粗いが硬質である。
甑（49）　把手部分である。色調は淡橙色を呈し、焼成良好。胎土はやや密で硬質である。
器種不明（50）　色調は淡白灰色を呈し、焼成はやや良好。胎土は精良で硬質気味。
製塩土器
焼塩壺Ⅱ－b（53 ～ 57・59）　いずれも破片である。53は色調が内外面ともに橙色を呈しており、焼成良好である。胎土はやや精良でやや硬質気味である。54は色調が内外面ともに淡黄褐色を呈しており、焼成良好である。胎土はやや精良でやや硬質気味である。55 ～ 57は色調が内外面ともに淡橙色を呈しており、焼成良好である。胎土はやや粗く、軟質気味である。59は色調が内外面ともに淡茶灰色を呈しており、焼成良好。胎土は粗くやや軟質気味である。
煎熬土器（60）　色調は内面が淡茶色、外面が淡赤褐色を呈しており、焼成良好である。胎土は粗く軟質気味である。
器種不明（58）　色調は内面が淡白黄赤色、外面が淡黄色を呈しており、焼成良好である。胎土は精良であり、やや硬質気味である。
黒色土器B類
椀（51）　色調は内外面ともに黒色を呈する。焼成良好。胎土は精良で硬質気味である。
越州窯系青磁
椀Ⅰ（52）　釉は淡灰緑色を呈し、内外面ともに薄く施される。素地は淡灰白色を呈し、胎土は精良。

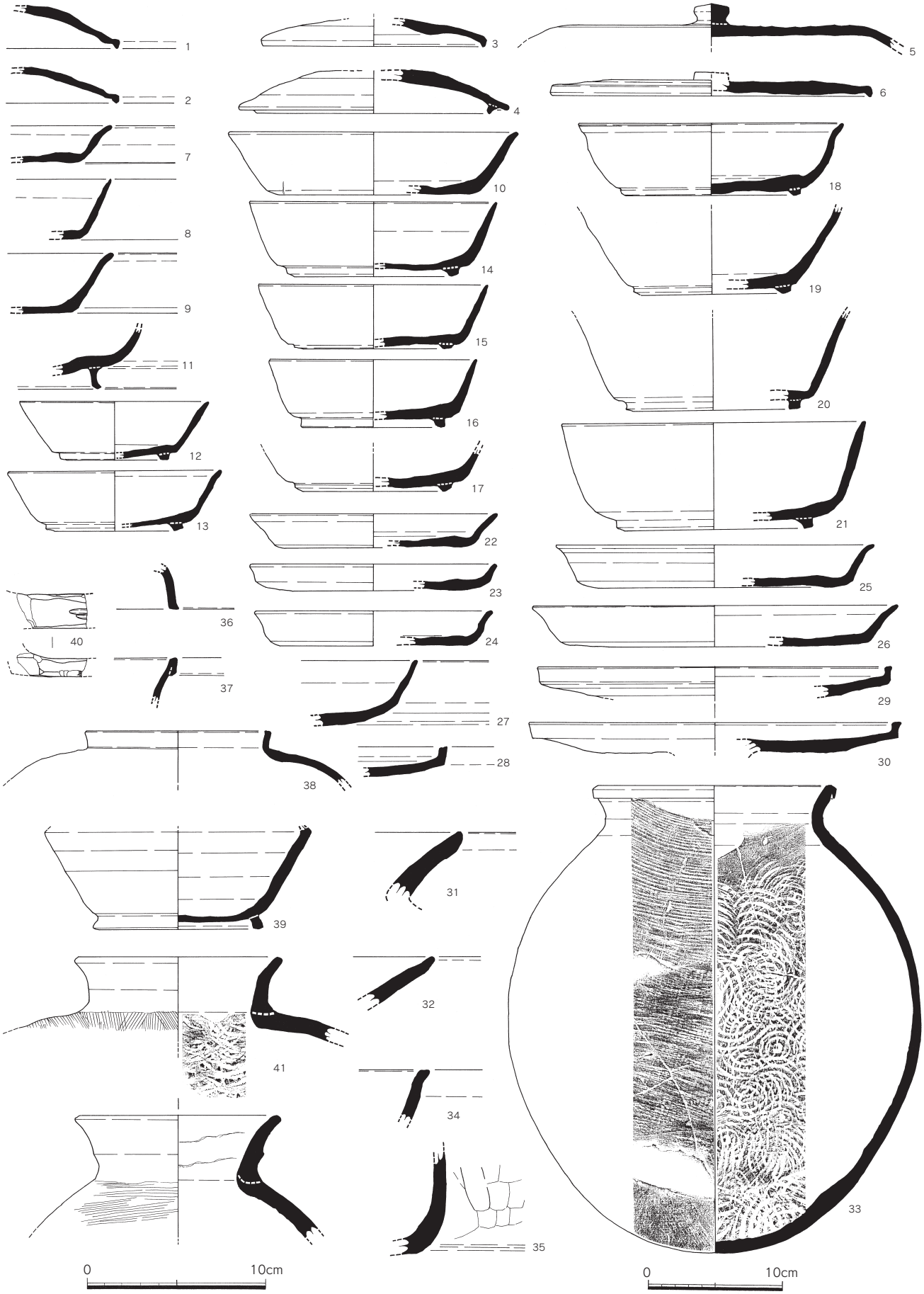


fig.41　暗褐色土層出土遺物実測図(1)(33はS=1/4、その他はS=1/3)

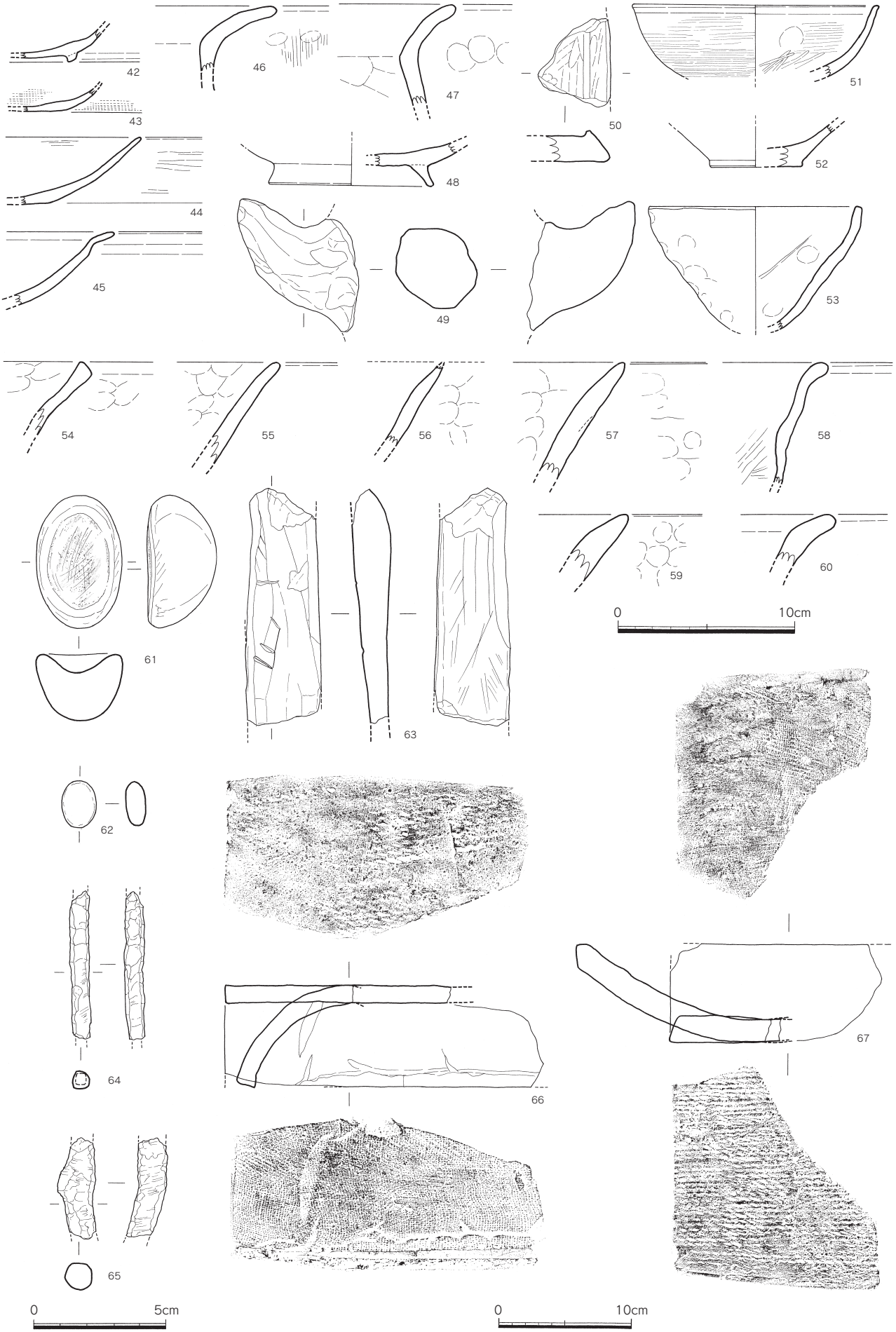


fig.42　暗褐色土層出土遺物実測図(2)(66・77はS=1/4、61 ～ 65はS=1/2、その他はS=1/3)

瓦類
丸瓦（66）　色調は凹凸面ともに淡白灰色を呈する。胎土はやや粗く、焼成・還元ともに良好である。
平瓦（67）　色調は凹面が淡白色、凸面が淡白灰色を呈する。胎土はやや粗く、焼成良好・還元やや良好である。
石製品
砥石（63）泥岩製である。
平玉（62）　蛇紋岩製か。
用途不明品（61）　石材不明である。
金属製品
釘（64・65）　いずれも鉄製品である。
暗黄色土層出土遺物（fig.43・44、写真25 ～ 30）
須恵器
蓋c1（1）　色調は内外面ともに赤みを帯びた暗灰色を呈しており、焼成・還元ともに良好である。胎土は緻密で硬質である。
蓋c3（8）　色調は内外面ともに白灰色を呈しており、焼成・還元ともに良好である。胎土は緻密で硬質である。
蓋1（2・3）　いずれも破片である。2は色調は内外面ともに明灰色を呈しており、焼成・還元ともに良好である。胎土は緻密で硬質である。3は色調は内外面ともに灰色を呈しており、焼成・還元ともに良好である。胎土は緻密で硬質である。
蓋2（6）　破片である。色調は内外面ともに淡白灰色を呈しており、焼成・還元ともに良好である。胎土は密でやや硬質気味である。
蓋3（4・5・9）　いずれも破片である。4・9は色調が内外面ともに灰色を呈しており、焼成・還元ともに良好である。胎土は緻密で硬質である。5は色調が内外面ともに淡白灰色を呈しており、焼成・還元ともに良好である。胎土は緻密で硬質である。
蓋（7）　色調は内面灰色、外面暗灰色を呈しており、焼成・還元ともに良好である。胎土は密で硬質。
坏a（16・20）　16は残存度が高い。20は破片である。16は色調が内外面ともに灰色を呈しており、焼成･還元ともに良好である。胎土はやや密で硬質である。20は色調が内外面ともに淡赤茶色を呈しており、焼成良好・還元不良である。胎土は緻密で硬質である。
坏c（10 ～ 15・21 ～ 23・26 ～ 28）　10・15は色調が内外面ともに灰色を呈している。11・23は色調が内外面ともに赤みを帯びた淡灰色を呈している。12は色調が内外面ともに淡赤茶灰色を呈する。13は色調が内外面ともに赤みを帯びた暗灰色を呈している。14・22・27は色調が内外面ともに淡灰色を呈している。21・26・28は色調が内外面ともに暗灰色を呈している。これはいずれも焼成・還元とも良好で、胎土は緻密で硬質である。
大坏c（17・18）　いずれも破片である。17は内外面ともに明灰色を呈しており、焼成・還元ともに良好である。胎土は緻密で硬質である。18は内外面ともに灰色を呈しており､焼成･還元ともに良好である。胎土は密で硬質気味である。
椀c（18・19・25）　18・19は口縁部に欠損部分があるが、残存度が高い。25は破片である。18は色調が内面灰色、外面白灰から暗灰色を呈する。焼成・還元ともに良好。胎土は緻密で硬質。19は色調が内外面ともに灰色を呈しており、焼成・還元ともに良好である。胎土は密で硬質である。25は色調が内外面ともに明灰色を呈しており、焼成・還元ともに良好である。胎土はやや密で硬質気味である。

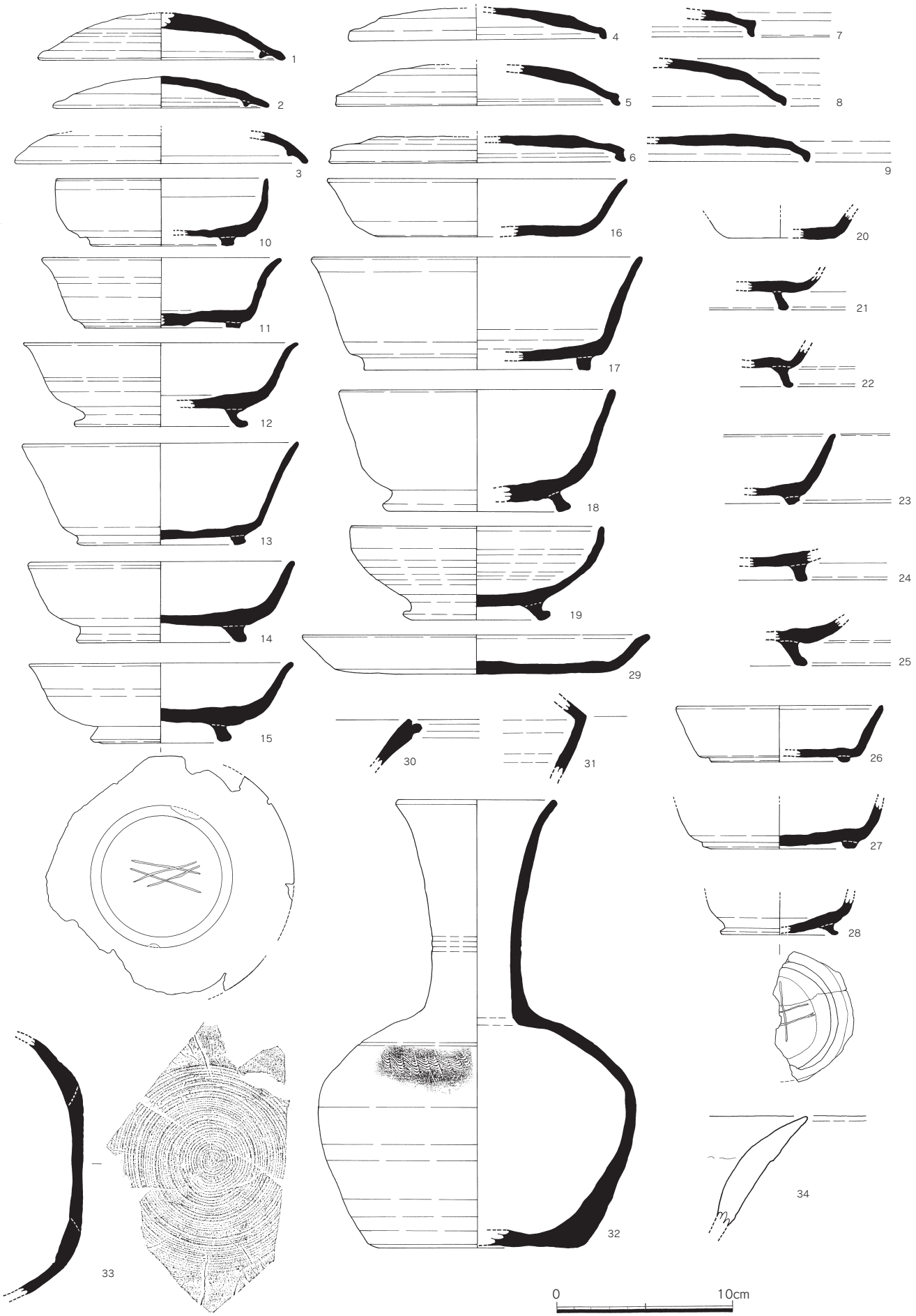


fig.43　暗黄色土層出土遺物実測図（1）（S=1/3）

皿a（29） 色調は内外面ともに淡白灰色を呈する。焼成良好。胎土は緻密で硬質である。

甕（30） 内外面ともに回転ナデ調整である。色調は内面淡褐灰色、外面暗茶灰色を呈しており、焼成・還元ともに良好である。胎土は密で硬質である。

壺b（31） 口縁と体部から底部にかけての欠損部分はあるが残存度は高い。色調は内外面ともに淡灰色を呈しており、焼成・還元ともに良好である。胎土は密で硬質気味である。

壺（32） 色調は内面が灰色、外面が暗灰色を呈する。焼成・還元ともに良好である。胎土は密で硬質である。

提瓶（33） 色調は内面が赤みを帯びた暗茶灰色、外面が暗灰赤色を呈しており、焼成・還元ともに良好。胎土は密で硬質。

製塩土器

製塩壺（34） 色調は内外面ともに淡橙色を呈しており、焼成良好である。胎土は粗いが硬質気味である。

瓦類

平瓦（35・36） 35は色調が凹凸面ともに淡白灰色を呈しており、焼成・還元ともに良好である。胎土は密で硬質気味である。道具瓦の可能性もある。36は色調が凹凸面ともに淡白色を呈しており、焼成良好・還元やや良好。胎土は緻密で硬質気味である。

金属製品（写真30）

鉱滓（37）「出土遺物計測表」「写真」(CD-ROM収納)参照。

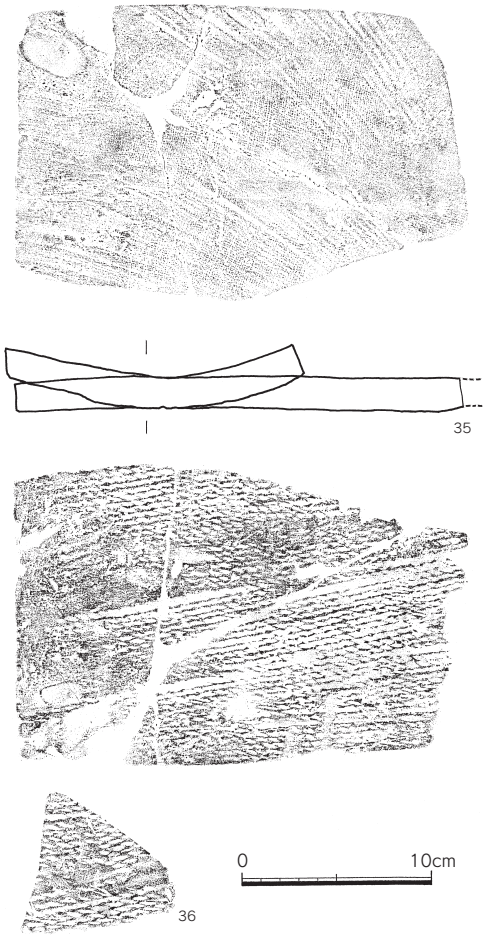


fig.44 暗黄色土層
出土遺物実測図（2）（S=1/4）

暗黄茶色土層出土遺物（fig.45）

須恵器

小蓋a1（1） 破片である。色調は内面灰色、外面淡白灰色を呈しており、焼成・還元ともに良好。胎土は緻密で硬質である。

甕（2） 破片である。色調は内外面ともに淡灰色を呈しており、焼成・還元ともに良好である。胎土は密で硬質である。

壺(3) 破片である。色調は内面淡灰色､外面暗灰～淡白灰色を呈しており､焼成･還元ともに良好である。胎土は緻密であり硬質である。

土師器

甕（4） 色調は淡黄褐色を呈しており、焼成良好である。胎土はやや粗いが硬質気味である。

壺（5） 色調は淡橙色を呈しており、焼成良好。胎土はやや粗いがやや硬質である。

石製品

スクレイパー（6・7） いずれも安山岩製である。7は斧形石器の可能性もある。

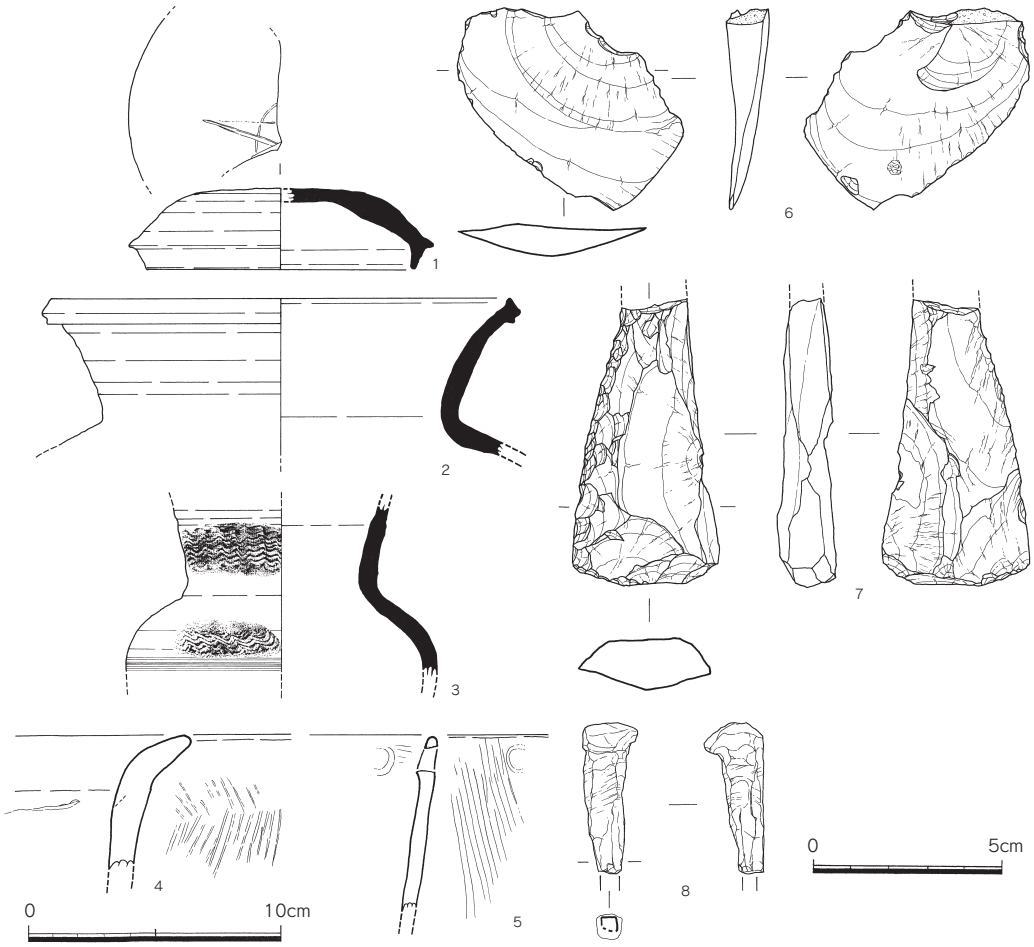


fig.45　暗黄茶色土層出土遺物実測図(6 ～ 8はS=1/2、その他はS=1/3)

金属製品

釘（8）　鉄製品である。

褐色粘土層出土遺物（fig.46）

須恵器

坏蓋 a（1）　内外面ともに回転ナデ調整。色調は内面淡白灰色、外面灰色を呈しており、焼成・還元ともに良好である。胎土は密で硬質である。

弥生土器

甕（2・3）　2 は口縁部の破片である。色調は淡白黄色を呈しており、焼成良好である。胎土は粗いがやや硬質である。3 は色調が内面淡茶赤色、外面淡橙色を呈しており、焼成良好である。胎土はやや粗いが硬質である。

表土層出土遺物（fig.39、写真 14）

須恵器

器種不明（1）　内外面ともに回転ナデ調整。色調は内外面ともに灰色を呈しており、焼成・還元とも良好である。胎土は密で硬質である。

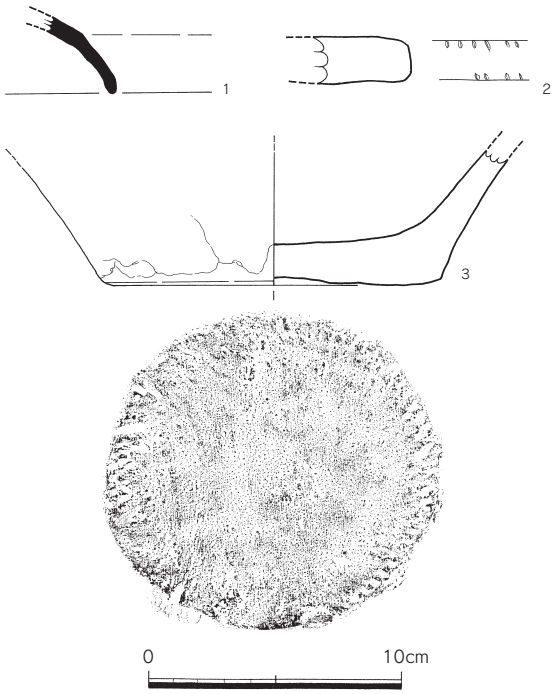


fig.46　褐色粘土層出土遺物実測図（S=1/3）

5.小結

本調査地は以前は畑に使用されていたが、現況は荒地である。大野城のある四王寺山の南裾部にあたり、標高45mほどの丘陵南斜面に位置する。かつて御笠団の印が発見された地点から南約100mで、第4次調査の南隣接地にあたる。今回の調査では軍団、特に御笠団関連の遺構の検出が期待された。

遺構面は大きく二分され、上層で8世紀後半～9世紀代、下層で7世紀代と考えられる。下層遺構群はピットと土壙で構成されており、特に焼土壙がめだっている。6SK320は土壙自体から遺物が出土しておらず、時期決定は困難であるが、6SK320を覆う層の遺物から想定して7世紀代とした。

上層はピットが稠密に存在し、8世紀後半には土地利用が頻繁におこなわれたことがわかった。6ST100は木質の残る釘とその位置から木棺墓と考えられる。掘方底面にある浅い窪みは棺を入れる際に木台を据えるなどしたものと考えている。越州窯系青磁坏I-1類と須恵器の頸部を打ち欠いた長頸壷を供献している。長頸壷は9世紀前半代のものと比定される。

調査地で軍団関係の遺構を明らかにすることはできなかったが、第4次調査に続き古代には、かなりの利用をされていた土地であることが判明した。

【参考文献】

太宰府市2001「4－1農業水利」『大宰府市史　環境資料編』

Ⅲ-5　第11次調査

１.調査環境

御笠団印出土地周辺遺跡第11次調査地点は太宰府市坂本3丁目54番地の1にあり、現場は御笠団印出土地の南、6次調査地点の南隣地にあり、大城山（四王寺山）の東裾部分、標高約45mの微高地上に当たる。調査地点は丘陵裾をならして造成した平坦面を呈す。畑地として利用されていた。

調査期間は平成6年10月12日から平成7年3月22日までであり、調査面積は1100㎡である。調査は山村信榮が担当した。

２．層位等

調査は排土の関係で東西に分割しておこない、便宜的に東区、西区と呼称している。層序は耕作土である灰色土とした表土層の下位に10世紀頃までの遺物を包含する茶褐色土、これを除去した面で11SB005,115や11SD165などの主要遺構が認められ、これを上層の遺構面として調査を開始した。さらにこの面の地盤を構成する11SX024とした整地層である乳灰色粘土層があり、この下面も11SX076,093や11SK095などの遺構が検出された（中層遺構面）。さらに11SX034,035とした整地層である茶色粘土層があり、この下面も生産関連遺構と考えられる11SX100などの遺構が検出された（下層遺構面）。さらにその基盤に11SX045、097、淡茶土とした整地層があり、その下面に無遺物の花崗岩風化土基盤層とそれに由来する砂礫地盤が見られた。

３．遺構

掘立柱建物

11SB005（fig.54、写真10）

西区北側の上層面で検出された1間×2間の南北棟である。北隣地の6次調査区では延長は確認されていない。柱穴は直径0.4 ～ 0.5mで直径0.2mほどの明確な柱痕跡が見つかっている。深さは深いもので0.3mを測る。建物の主軸方位はＮ－11° 18′－Wを採る。柱間は南北の桁方向はa－b間は1.5m、b－cは1.6m、a－f間は2.85m、e－ f 間は1.7m、e－dは1.6mである。直交軸を採ると柱位置が桁方向では対になっていない。8世紀中頃までの土器片が出土し埋没はそれ以降の所産である。

11SB040（fig.54、写真14）

西区北側中層面で検出された1間×3間の東西棟である。柱穴は直径0.2 ～ 0.4mで直径0.2mほどの柱痕跡があるものもある。深さは深いもので0.2mを測る。建物の主軸方位はＮ－1° 19′－Wを採る。柱間は南北の桁方向はa－b間は1.3m、b－cは1.75m、c－dは1.5m、d－eは2.05m、e－ f 間は1.6m、f－gは2.75mである。これも柱位置が桁方向では対になっていない。柱穴から遺物は出土していない。

11SB155（fig.54、写真11）

東区北側上層面で検出された1間×2間の南北棟である。柱穴は直径0.2 ～ 0.5mで柱痕跡は認知されなかった。深さは深いもので0.2mを測る。建物の主軸方位はＮ－21° 48′－Wを採る。柱間は南北の桁方向はa－b間は2.2m、b－cは2.6m、c－dは3.85m、d－eは2.3m、e－ f 間は2.5mである。11SB005に対してより西に振れている。出土した黒色土器や土師器坏の形状から9世紀前半頃以降の所産と考えられる。

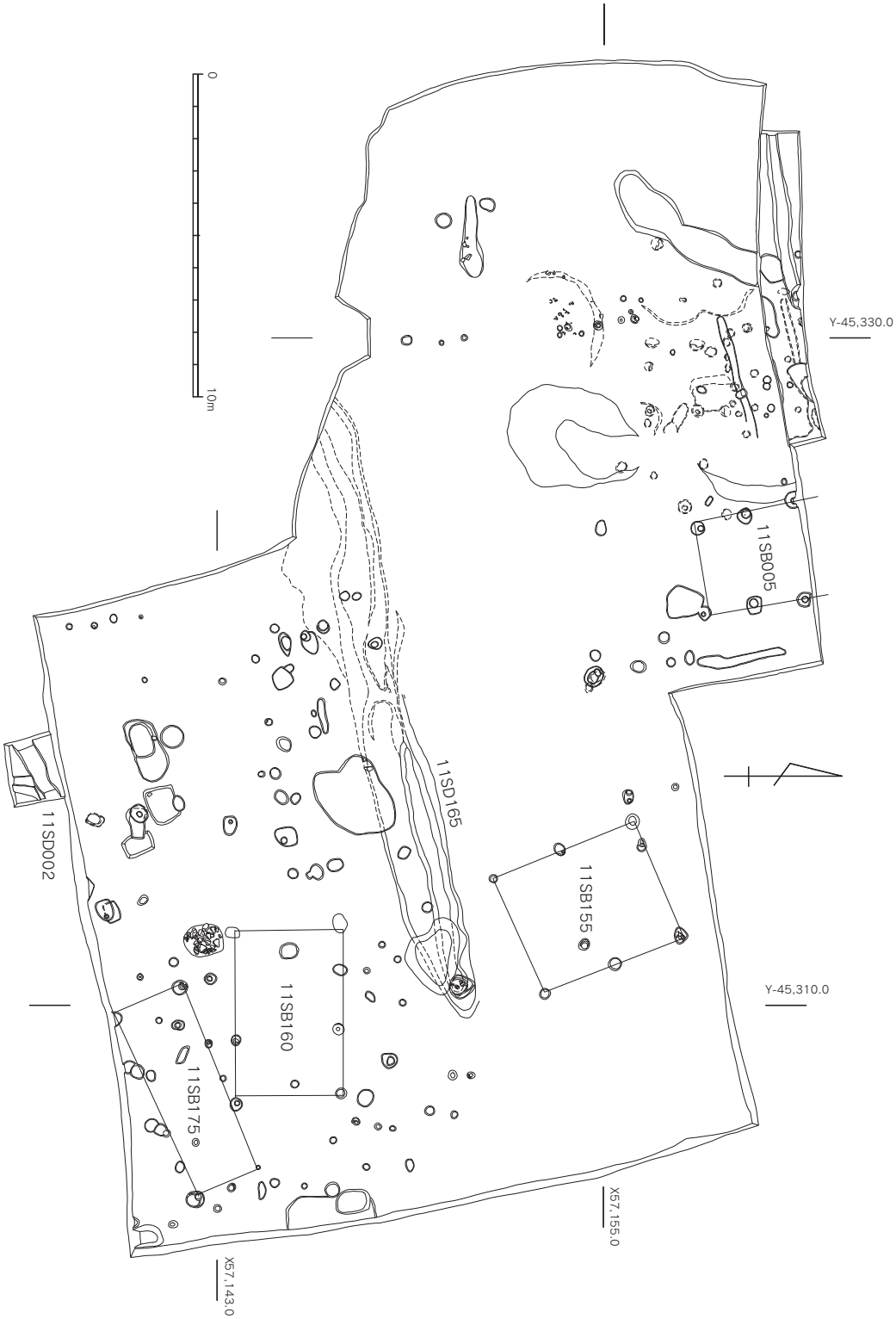


fig.47　第11次調査　上中層面遺構全体図（S=1/200）

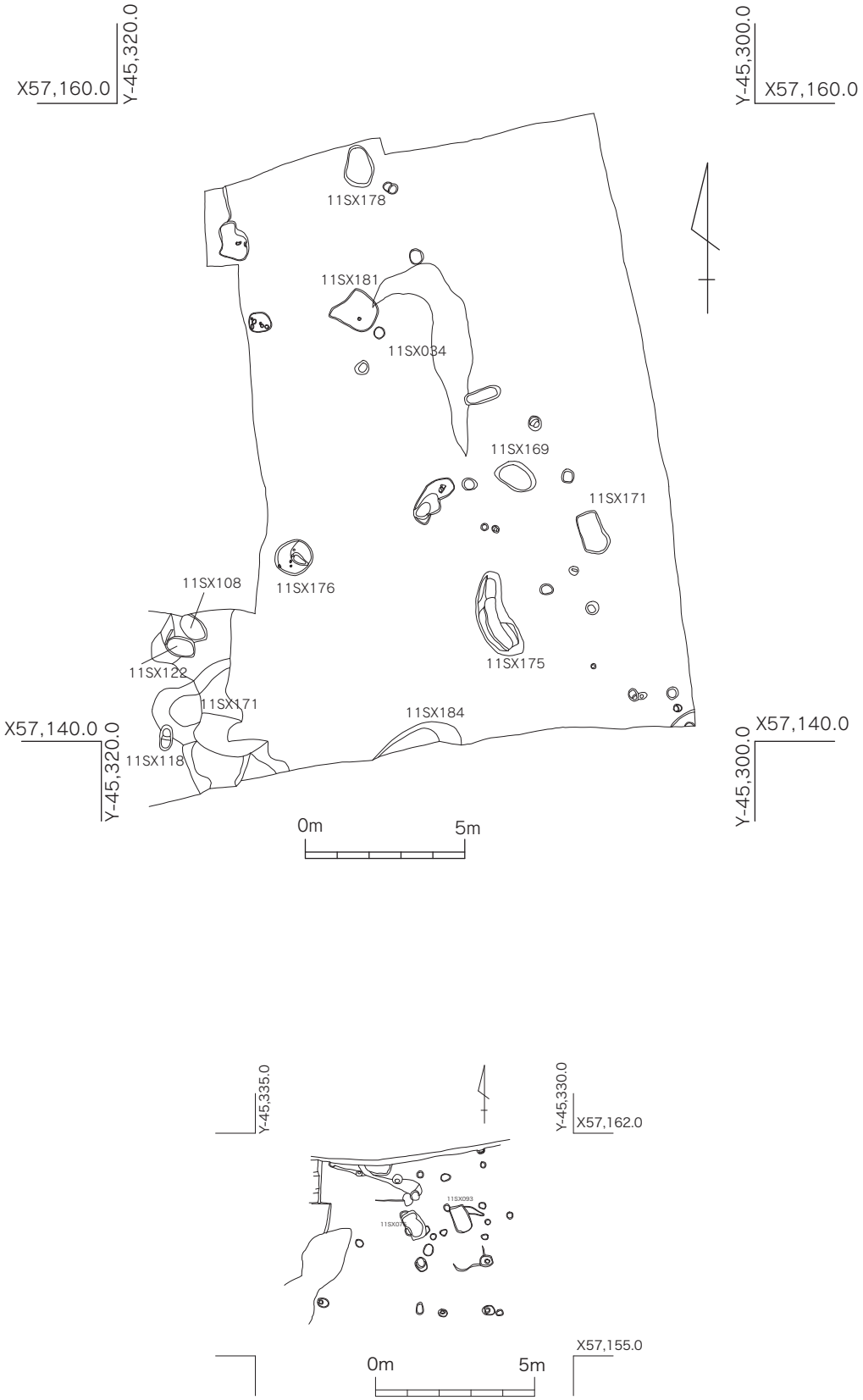


fig.48　第11次調査　下層面遺構全体図（S=1/200）

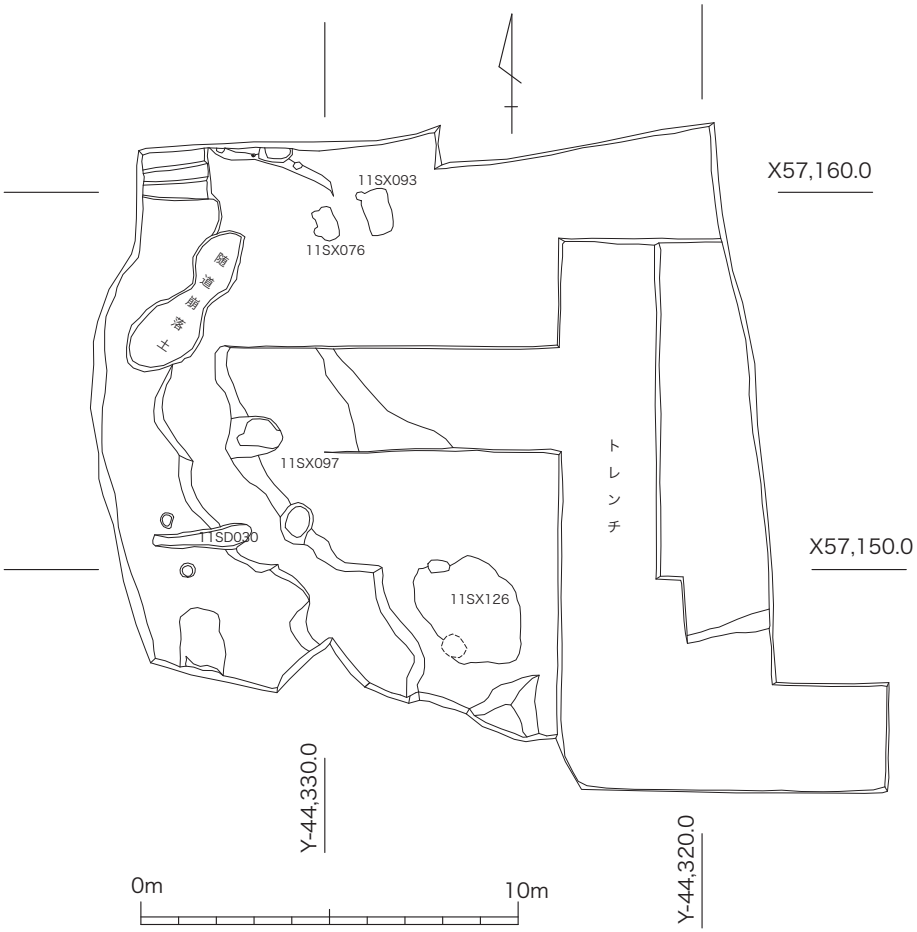


fig.49　第11次調査　最下層面遺構全体図（S=1/200）

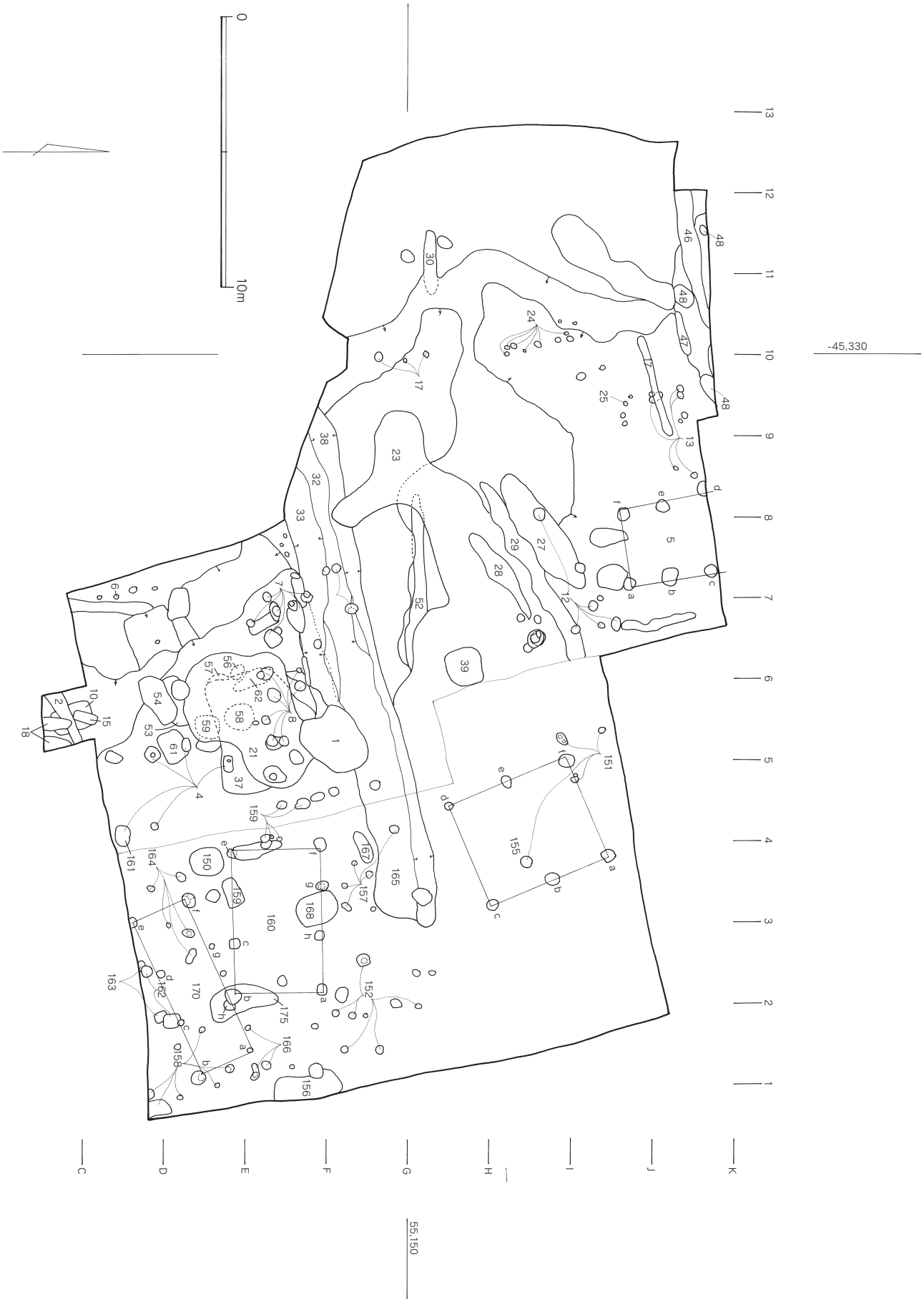


fig.50　第11次調査　上層面遺構配置図（S=1/200）

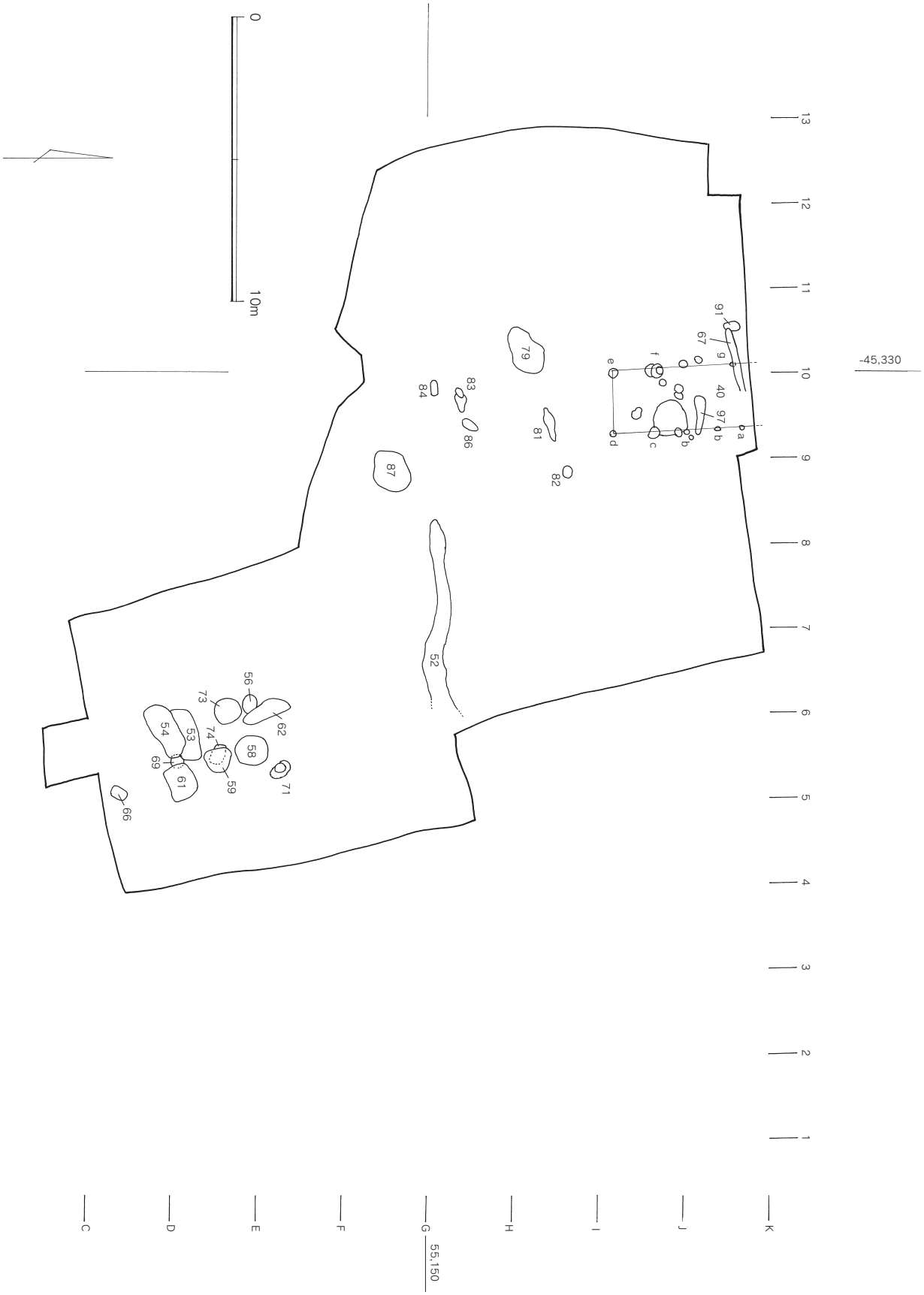


fig.51　第11次調査　中層面遺構配置図（S=1/200）

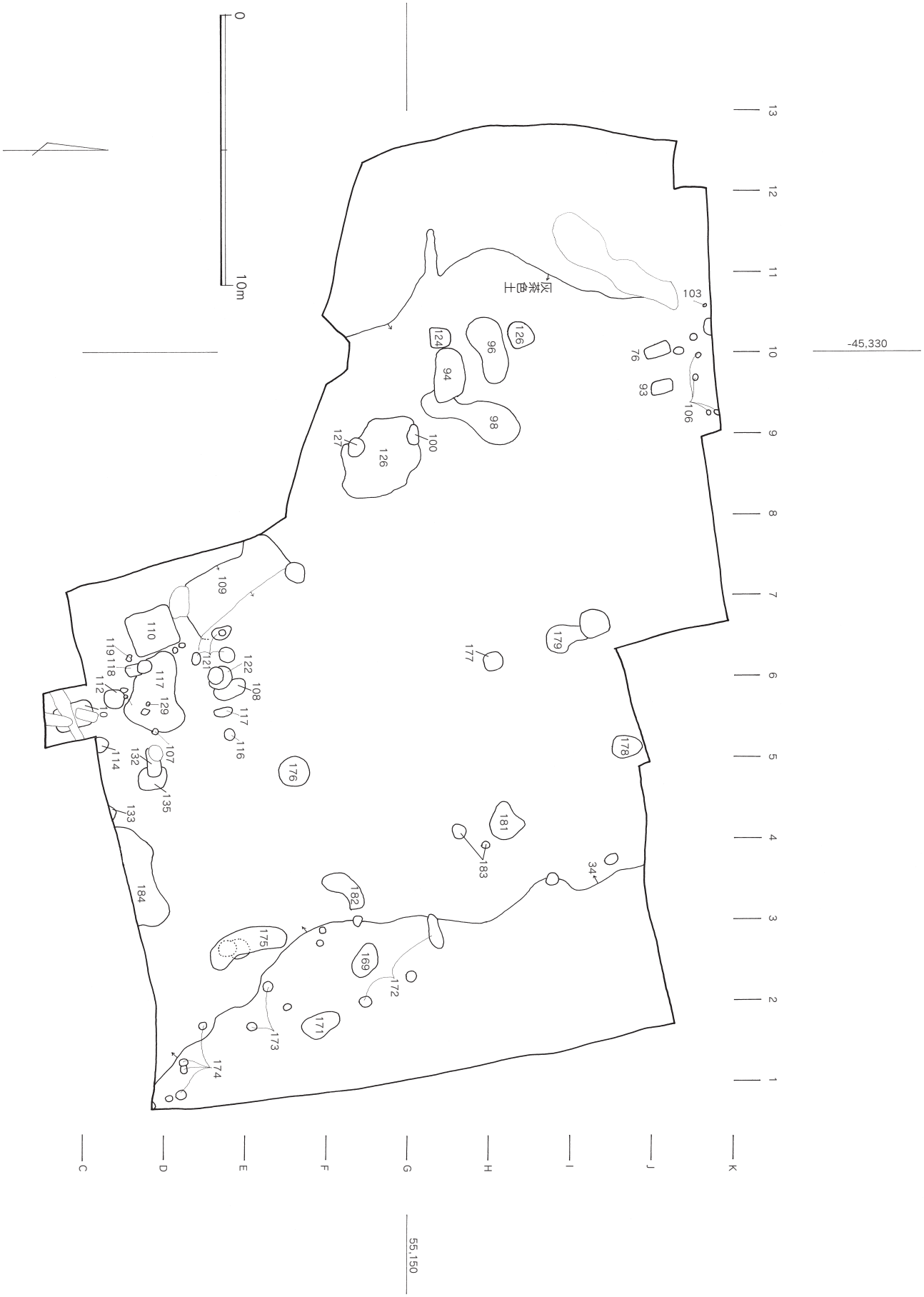
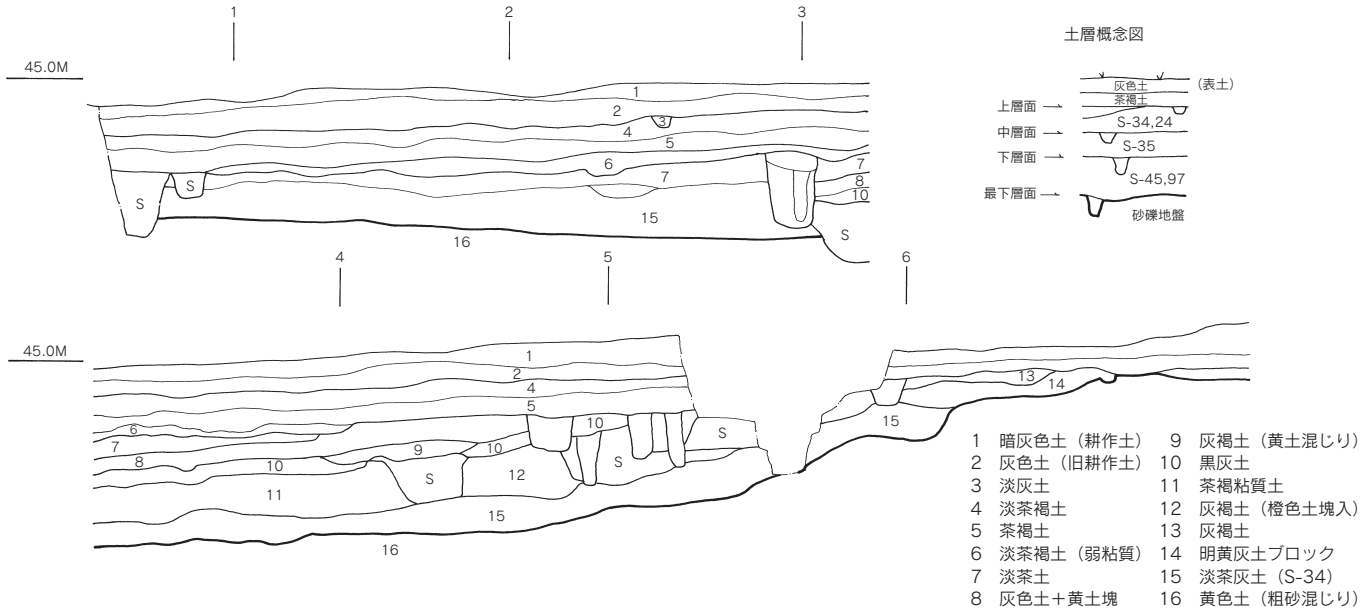
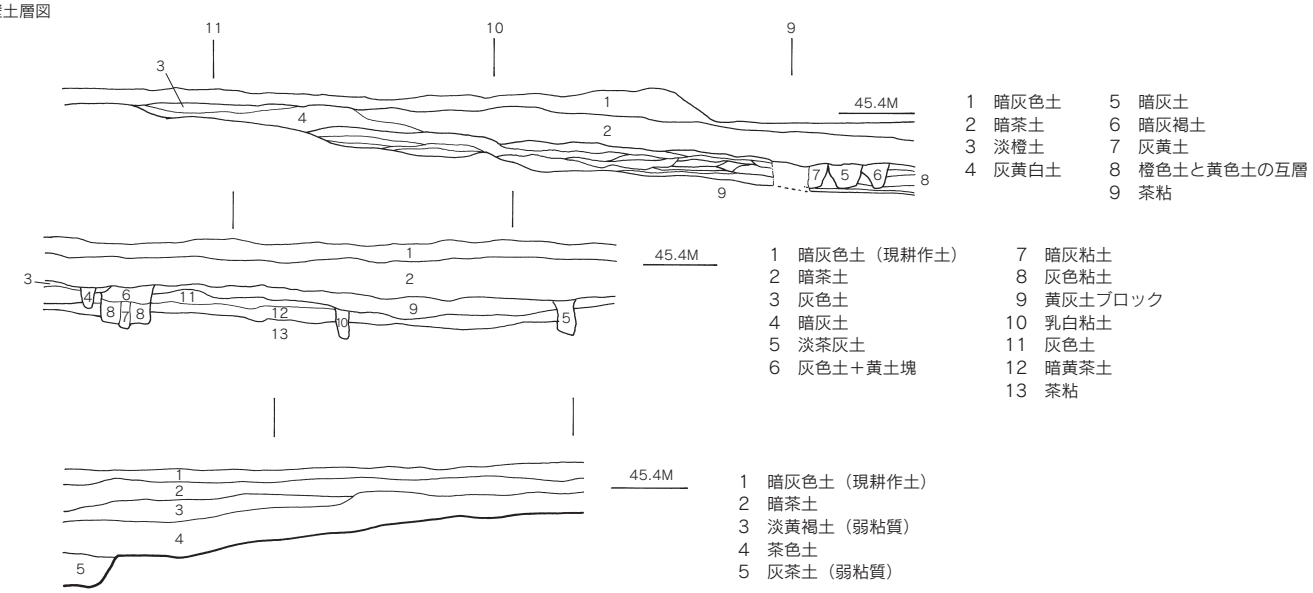


fig.52　第11次調査　下層面遺構配置図（S=1/200）

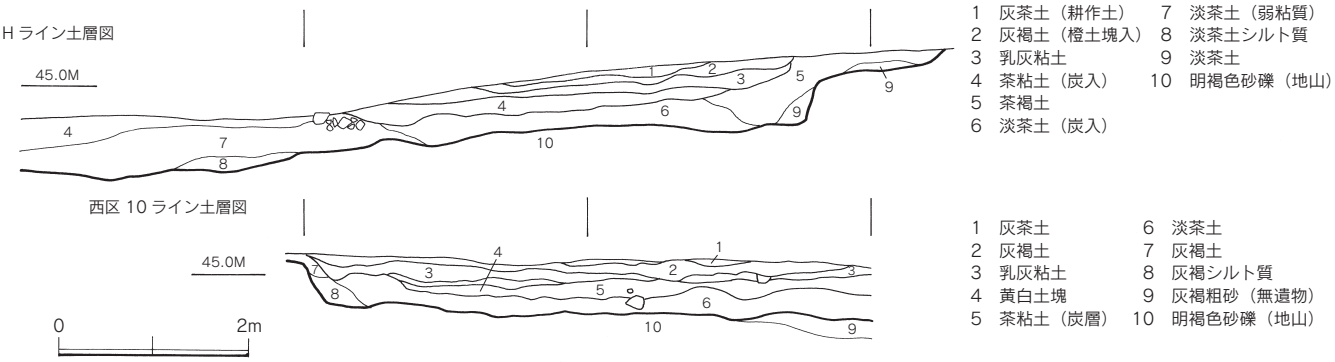
南壁土層図



北壁土層図



西区 H ライン土層図



西区 10 ライン土層図

fig.53　第11次調査調査区南壁、北壁、西区Hライン土層実測図（S=1/160）

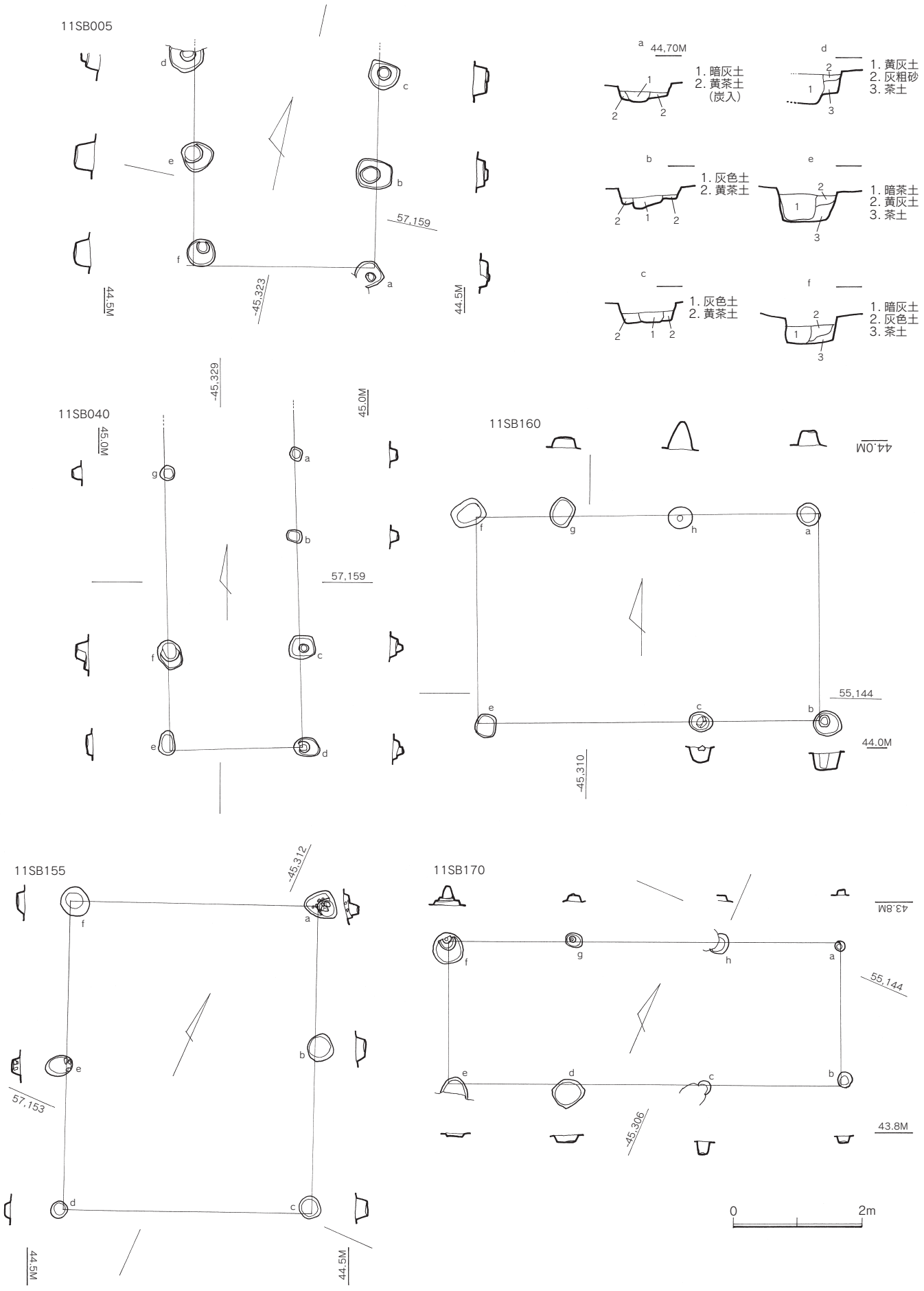


fig.54　11SB005,040,155,160,170遺構実測図（1/80）

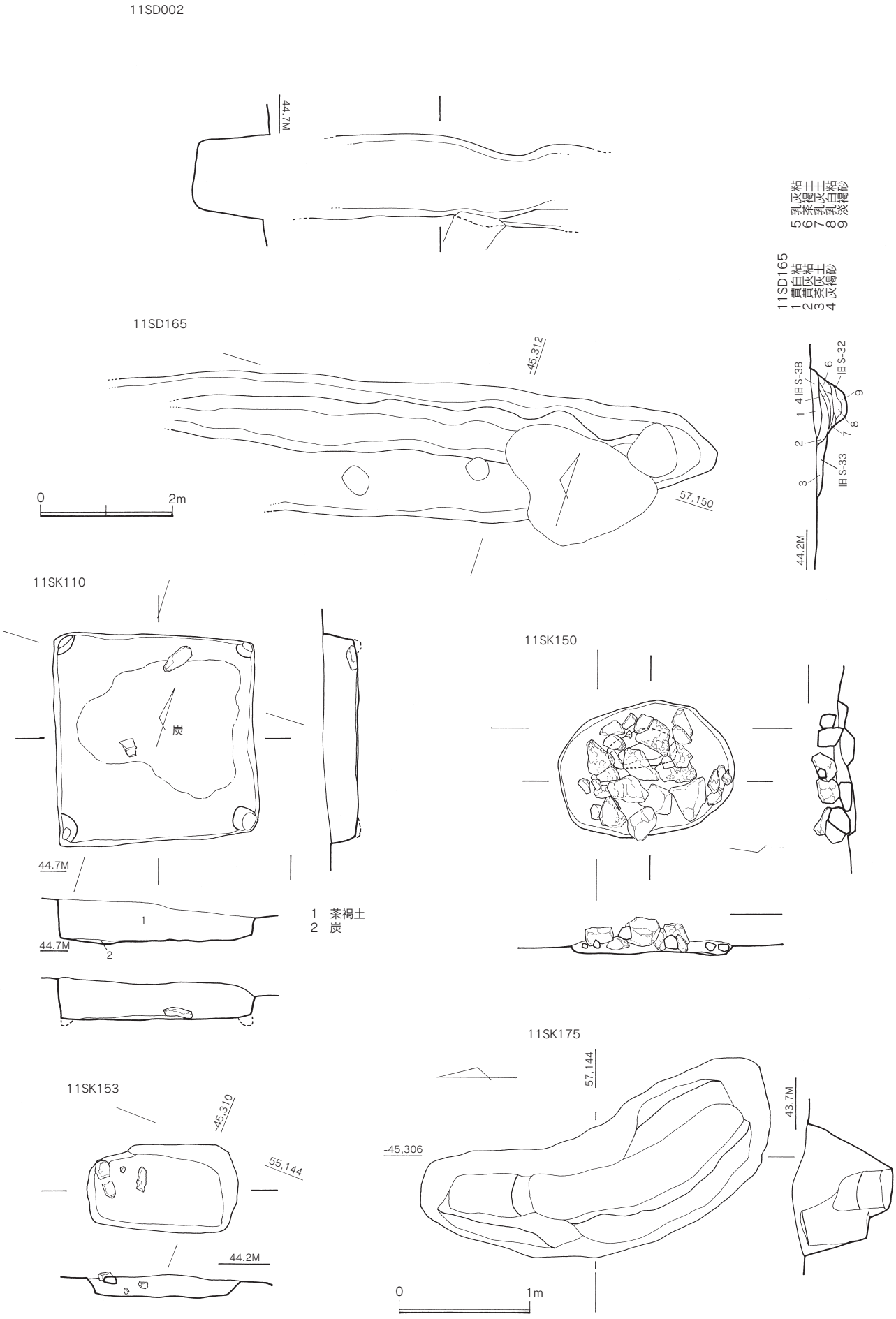


fig.55　11SD002,165,SK110,150,153,175遺構実測図（1/40,1/80）

11SB160（fig.54）

東区南側上層面で検出された1間×3間の東西棟である。（記録の不備でe,fの詳細なデータが提示できない。）柱穴は直径0.2 ～ 0.4mで、柱bで柱痕跡が見られた。深さは深いもので0.4mを測る。建物の主軸方位はN－1° 26′－Wで正方位に近い向きを採る。柱間は南北の梁方向はa－b間3.2m、東西の桁行b－c間は1.85m、c－e間は3.5m、f－g間は1.35m、g－h間は1.85m、h－a間は2.15mである。

11SB170（fig.54）

東区南側上層面で検出された1間×3間の東西棟である。柱穴は直径0.2 ～ 0.4mで柱痕跡は認知されなかった。深さは深いもので0.4mを測る。建物の主軸方位はN－64° 47′－Eを採る。柱間は南北の桁方向はa－b間は2.25m、b－cは2.1m、c－dは2.1m、d－eは1.9m、e－ f 間は2.25m、f－g間は1.9m、g－h間は2.3m、h－a間は1.9mである。11SD165に対してより西に振れている。越州窯系青磁片や緑釉陶器などが柱掘り方から出土していることから9世紀前半頃以降の所産と考えられる。

溝

11SD002（fig.55、写真12）

調査区東区南側上層面で検出された東西方向溝である。調査区を一部拡張した部分でのみ検出されたもので溝の規模は長さ2m、幅0.6m、深さ0.5mを測る。芯の方向を採れば後述の11SD165に近い方位を採るものと見られる。出土遺物から7世紀後半以降の埋没と考えられる。

12SD165（fig.55、写真3）

調査区中央で検出された東西方向溝である。調査時点では埋没層位ごとにS-38,32,33（新→古）と分割して掘った箇所もあるが基本的に一つの溝である。規模は長さ20m、幅2.0m、深さ0.6mを測る。方位はE－14° 34′－Nを採る。東側で途切れる。遺跡内の区画に係わる遺構の可能性がある。出土遺物から8世紀中頃以降の埋没と考えられる。

土坑

11SK110（fig.55、写真3・13）

調査区東区南側中層面で検出された土坑である。土坑の形状は正方形を呈す。土坑の規模は長さ3.2m、幅3.1m、深さ0.6mを測る。床の中央には炭が面で広がり、四隅には内側に若干傾斜する形状で深さ0.2mほどの穴が穿たれている。カマドなどの痕跡が明快でないため住居跡とはしなかった。作業小屋のような竪穴遺構の可能性がある。床面で丸瓦片が8世紀前半頃までの土器片とともに出土している。

11SK150（fig.55)

調査区西区南側上層面で検出された土坑である。土坑の形状は円形を呈す。土坑の規模は長さ1.3m、幅1.0m、深さ0.1mを測る。焼けた石が充填され下面東寄りに長楕円形の深さ0.1mほどのピットがある。8世紀中頃までの土器片が出土し埋没はそれ以降の所産である。

11SK153（fig.55)

調査区西区南側上層面で4SK150の隣で検出された土坑である。土坑の形状は長方形を呈す。土坑の規模は長さ1.75m、幅0.7m、深さ0.2mを測る。石が埋没土の上位で検出された。8世紀中頃までの土器片が出土し埋没はそれ以降の所産である。

11SK175（fig.55、写真20)

調査区西区南側上層面で検出された。形状は西に弧を描く溝状を呈す。土坑の規模は長さ2.6m、幅1.0m、深さ0.8mを測る。側面と北側に中段がある。下位が暗灰色土、上位に灰色土が堆積する。8世紀中頃までの土器片が出土し埋没はそれ以降の所産である。

11SK176（fig.56)

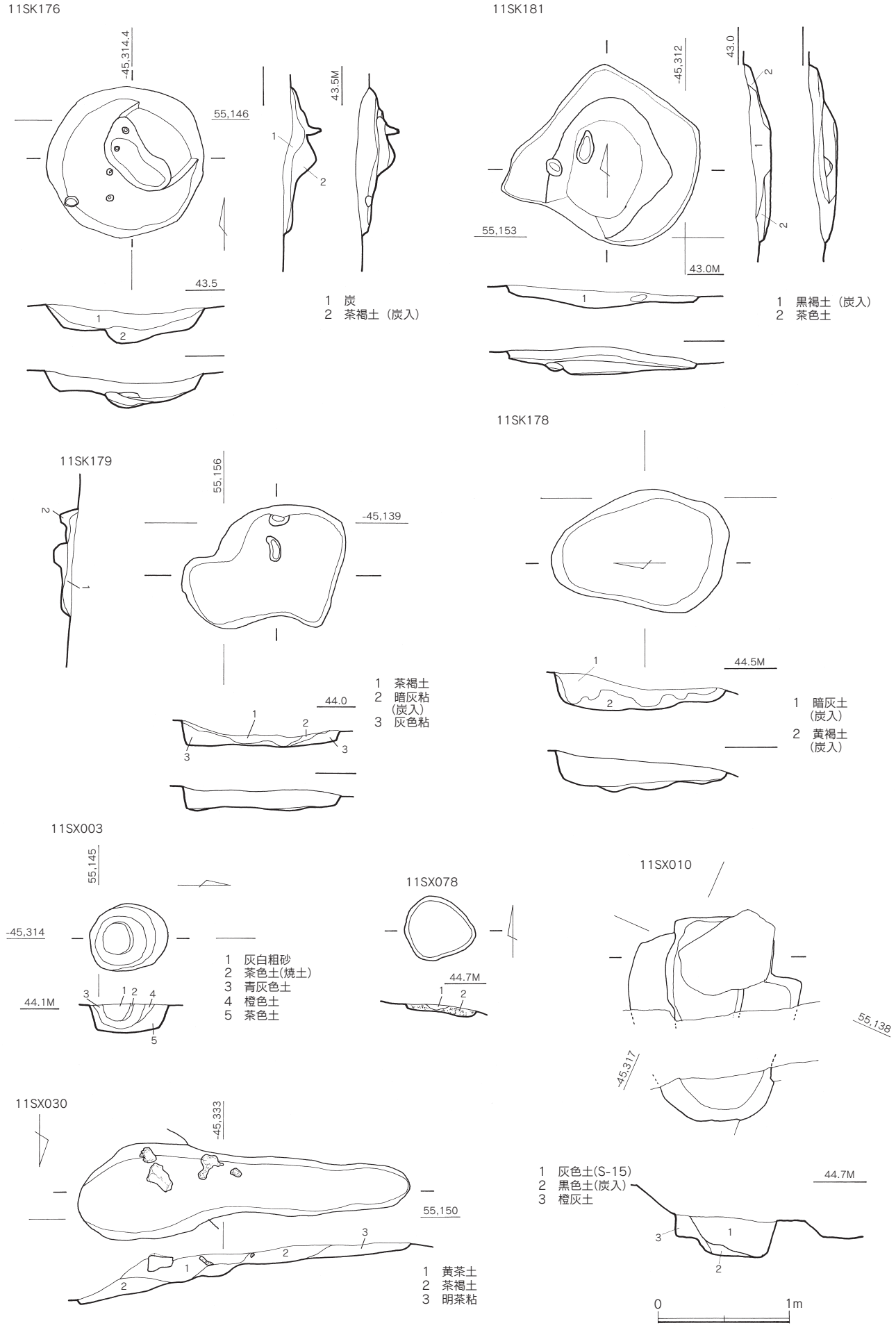


fig.56　11SK176,178,179,181,SX003,010,030,078遺構実測図（1/40）

調査区東区南側中層面でされた。形状は円形を呈す。規模は幅1.2m、深さ0.3mを測る。中央が一段深く窪む。灰色粘土が堆積する。

11SK178（fig.56）

調査区東区北側中層面でされた。形状は不定形な楕円形を呈す。規模は長さ1.3m、幅0.9m、深さ0.2mを測る。炭の混じる暗灰色土、黄褐色土が堆積する。

11SK179（fig.56）

調査区東区北側中層面で検出された。形状は楕円形を呈す。規模は長さ1.8m、幅1.1m、深さ0.25mを測る。茶褐色土、炭の混じる暗灰色粘土、灰色粘土が堆積する。

11SK181（fig.56）

調査区東区北側中層面で検出された。形状は不定形な円形を呈す。規模は長さ1.5m、幅1.4m、深さ0.3mを測る。中央が一段深く窪む。茶褐色土が堆積する。

その他の遺構

11SX003（fig.56）

調査区東区北側上層面で検出された。形状は楕円形を呈す。規模は長さ0.6m、幅0.4m、高さ0.3㎝を測る。平面で同心円状に5重の土色分布が見られ中心は灰白色、外に従い赤茶色、青灰色、橙色、茶色に推移する。円筒形の炉跡である。炉心には残滓はなかった。異物は出土していない。

11SX010（fig.56、写真12）

調査区東区南側中層面で検出された。形状は楕円形を呈す。規模は長さ2.5m、幅0.7m、深さ0.3mを測る。壁面の一部が被熱により赤色化する。

11SX030（fig.56）

調査区東区南側中層面で検出された。形状は溝状を呈す。規模は長さ1.3m、幅2.0m、深さ0.3mを測る。埋没土中に焼土塊が含まれる。生産関連の遺構に関係するものか。

11SX076（fig.57、写真14）

調査区東区北側中層面で検出された。形状は隅丸方形を呈す。規模は長さ0.95m、幅0.7m、深さ0.35mを測る。壁面の中位から上が被熱により赤色化する。埋没土の中位から以下には多量の炭が含まれる。床面に13箇所の浅い窪み、ないし刺突痕跡が見られる。

11SX093（fig.57、写真14）

調査区東区北側中層面で検出された。形状は方形を呈す。規模は長さ0.9m、幅0.55m、深さ0.4mを測る。壁面の中位から上が被熱により赤色化する。埋没土の中位から以下は炭の層となっている。床面に4箇所の浅い窪み、ないし刺突痕跡が見られる。

11SX078（fig.56）

調査区東区北側中層面で検出された。形状は楕円形を呈す。規模は長さ0.5m、幅0.5m、深さ0.1mを測る。

11SX081（fig.57）

調査区東区中央付近の中層面で検出された。形状は浅い溝状を呈す。規模は長さ1.2m、幅0.4m、深さ0.1mを測る。埋没土中に焼土塊が含まれる。生産関連の遺構に関係するものか。

11SX082（fig.57）

調査区東区中央付近の中層面で検出された。形状は楕円形を呈す。規模は長さ0.85m、幅0.6m、深さ0.2mを測る。出土した土器片はほとんど熱を受けている。

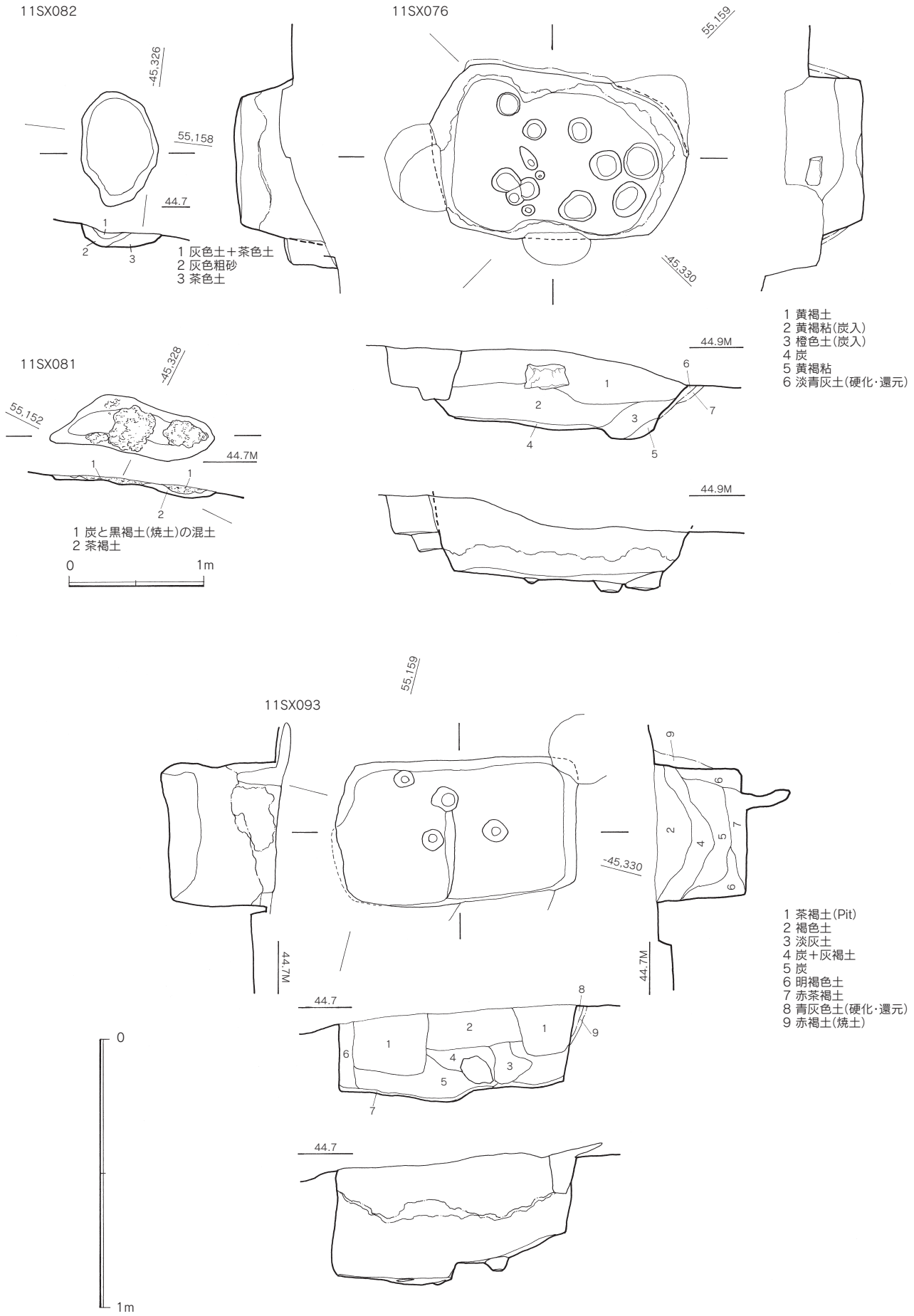


fig.57　11SX076,081,082,093遺構実測図（1/20,1/40）

11SX098（fig.58、写真15)

調査区東区東側の整地層11SX034の下層面で、礫と完形の土器が集中して検出された。何らかの行為に係わると推定されるが、遺物の分布などに規則性は積極的には指摘できない。規模は長さ3.5m、幅3.0mの範囲であった。

11SX100（fig.58、写真16・17)

調査区東区南側下層面で検出された。長さ1.2m、幅0.75m、高さ0.2mの盛り土の上に直径0.25mほどの壁面が焼けたPitが穿たれている。円筒形の炉跡の底部と考えられる。このマウンドを除去した下面から楕円形を呈す土坑が検出された。規模は長さ0.9m、幅1.35m、深さ0.3mを測る。中央からやや東寄りに長さ0.3m、太さ0.1mほどの方柱状の礫が床面から立てられた状態で検出されている。

11SX108（fig.60、写真12)

調査区東区南側中層面で検出された。形状は隅丸方形を呈す。規模は長さ1.05m、幅0.7m、深さ0.4mを測る。壁面南側の中位から上が被熱により赤色化する。埋没土の中位から以下は炭の混じる赤褐色土層となっている。壁面が崩落して形成された層であろう。

11SX117（fig.60）

調査区西区南側最下層面で検出された。形状は不定形な楕円形を呈す。規模は長さ4.0m、幅2m、深さ0.25mを測る。ゆるやかなすり鉢状の形状を呈す。

11SX124（fig.60）

調査区東区南側下層面で検出された。形状は楕円形を呈す。規模は長さ0.5m、幅0.5m、深さ0.2mを測る。底には炭が堆積し、西側壁面の一部は被熱により赤褐色化する。これも生産に係わる遺構か。

11SX126（fig.60）

調査区東区南側下層面で検出された。形状は東西に長い楕円形を呈す。規模は長さ4.4m、幅2.0m、深さ0.5mを測る。炭粒が埋没土全体に堆積していた。生産遺構に係わる溜まり状の遺構か。

11SX133（fig.59、写真18)

調査区東区南側調査区際の中層面で検出された。形状は方形を呈すものと見られる。規模は調査しえた状況では長さ0.6m以上、幅0.4m以上、深さ0.5mを測る。壁面は被熱により赤色化する。埋没土の下位は炭の堆積層となっている。

11SX135（fig.59、写真19)

調査区東区南側の中層面で検出された。形状は隅丸方形を呈す。規模は長さ1.05m、幅0.9m、深さ0.4mを測る。壁面は被熱により赤色化する。埋没土の大半は炭の堆積層となっている。

4．遺物

掘立柱建物出土遺物

11SB005b出土遺物（fig.61、写真1)

須恵器

蓋（1）　口縁の内側に断面形状が背の低い三角形を呈す返りを持つ。口縁の端部は丸く収められる。焼成は硬質で淡橙灰色を呈す。

坏（2）　ストレートでやや開き気味に広がる口縁部を持つ。硬質で黒灰色を呈す。

土師器

小甕（3）「く」の字に開く口縁を持つ。淡茶褐色を呈すが、内面は被熱のため褐色化する。

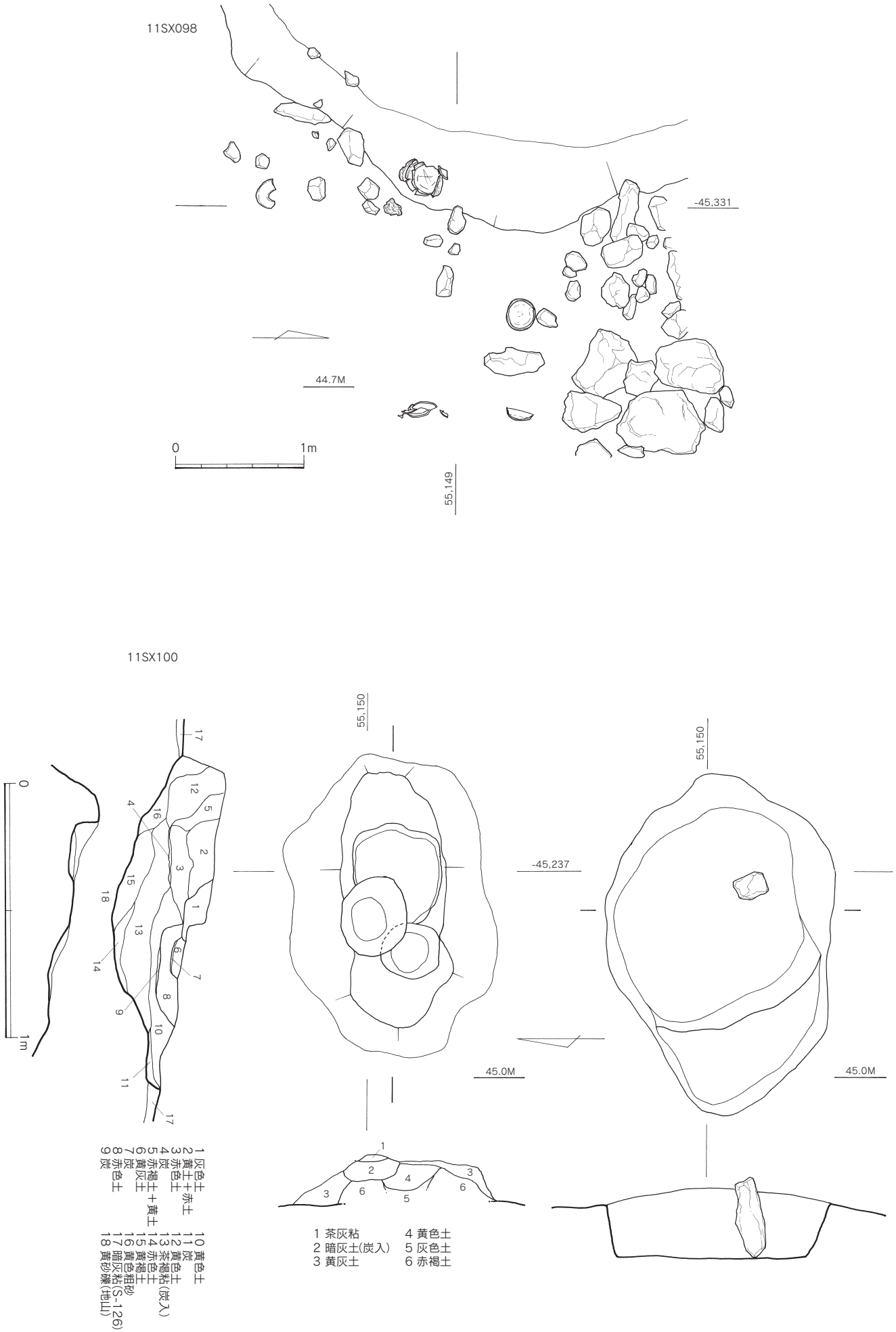


fig.58　11SX098,100遺構実測図（1/40・1/20）

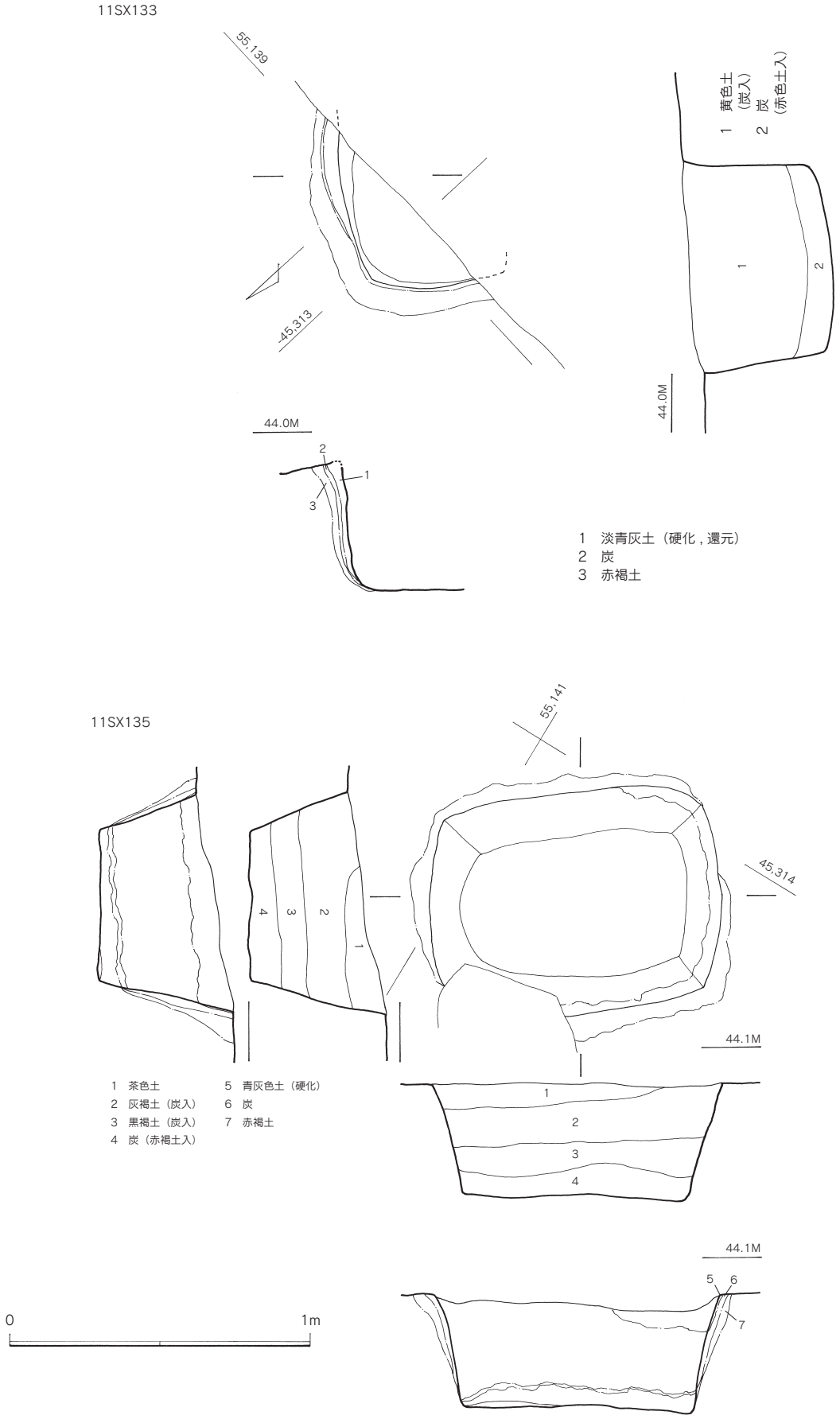


fig.59　11SX133,135遺構実測図（1/20）

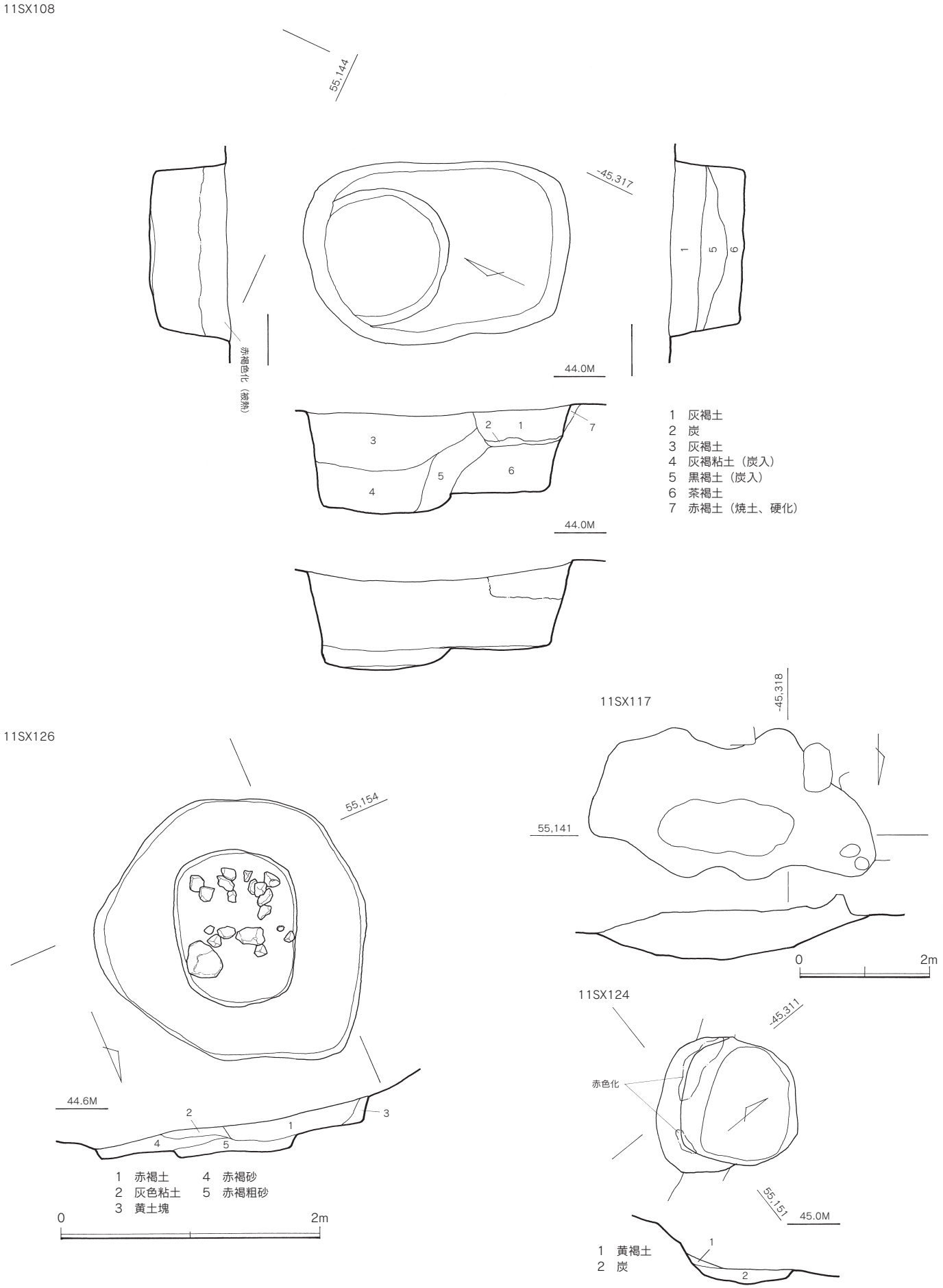


fig.60　11SX108,117,124,126遺構実測図（1/20,1/80）

11SB005d出土遺物（fig.61、写真1)

須恵器

坏c（5）　平坦な底で高台は若干開き気味に短く延びる形状。ストレートに立ち上がる口縁部を持つ。底部のベースは回転ヘラケズリが施される。焼成は硬質で灰白色を呈す。

11SB005f出土遺物（fig.61、写真2)

須恵器

坏c（5）　平坦な底で高台は若干開き気味に短く延びる形状。焼成は硬質で灰色を呈す。

11SB155a出土遺物（fig.61、写真1)

土師器

坏d（1）　底部は内面の中央がやや凹み気味で、体部内側にミガキbが見られる。

坏c（1）　平坦な底で高台は外側にあり若干開き気味に短く延びる形状を成す。淡橙色を呈す。体部外側下位にミガキbが微かに見られる。

11SB155b出土遺物（fig.61、写真1)

土師器

蓋（1）　端部が若干下方に垂下する形状を呈す。橙色を呈す。

坏（2 ～ 4）　2はややS字にカーブする形状を持ち、3は直線的に開く。4は平坦な底部から斜め横方向に体部が開く。3,4は体部の傾きからdタイプのものか。橙色を呈す。

瓦

平瓦（5）　小口と片側の側辺が残るものでヘラケズリにより処理されている。太目の縄目のタタキがあり、外面には目の細かな布痕跡が残る。須恵質の硬い焼成である。

11SB155e出土遺物（fig.61、写真2)

須恵器

蓋（1,2）　1は端部内側に細い沈線が入る。硬質で灰白色を呈す。2は端部が小規模な三角形を呈す。硬質で灰白色を呈す。

坏a（3）　やや底部が膨らむ形状を呈す。底部はヘラ切り後にナデを施す。硬質で白灰色を呈す。

土師器

坏c（4）　やや底部が膨らむ形状で高台は細身で高く方形を呈す。橙色を呈す。

11SB155f出土遺物（fig.61、写真2)

須恵器

坏c（1）　高台は丸みのある低い形状で底部外側に付けられる。焼成は軟質で灰色を呈す。

土師器

坏c（2）　高台が底部外側の体部の延長の位置に付けられる。

黒色土器A類

椀（3）　胎土は淡橙色で内面は茶黒色を呈す。

製塩土器

甕（4）　外面は目の細かな格子タタキと内面はハケ目が残る。橙褐色を呈す。

坏（5）　直線的な体部で外面はユビ押さえの、内面は布目が残る。I類。

11SB170b出土遺物（fig.61、写真2)

黒色土器A類

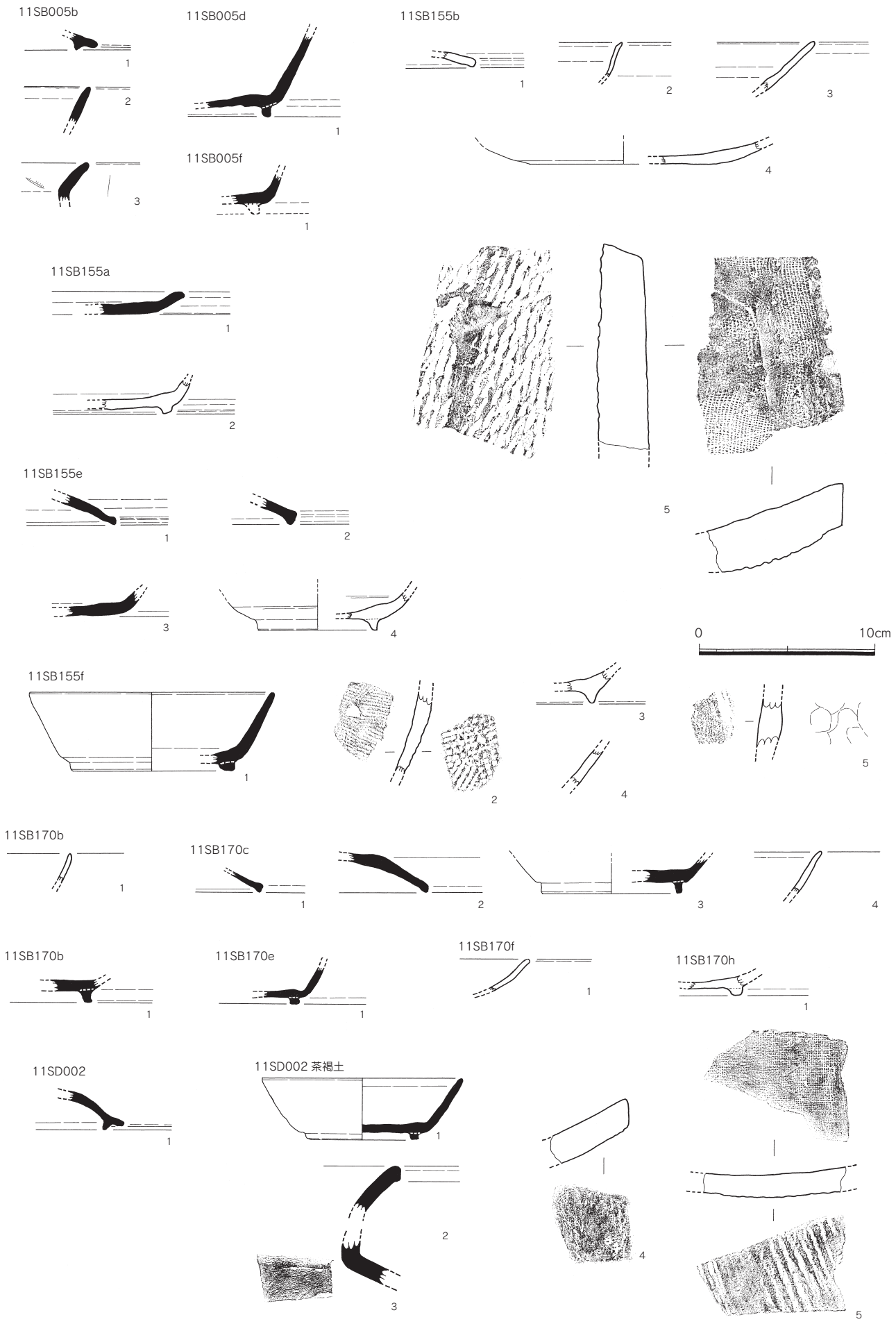


fig.61　11SB005,155,170,SD002出土遺物実測図（1/3）

椀（1）　口縁端部はやや内側にカーブを描く。胎土は茶黒色を呈し、内面は漆黒色を呈す。

11SB170c出土遺物（fig.61、写真2)

須恵器

蓋（1,2）　若干先端が小さな三角形を成す。焼成は硬質で灰色を呈す。

坏c（3）　平坦な底で高台は細身で方形を呈す。硬質で灰色を呈す。

越州窯系青磁

椀（4）　直線的に開く口縁の形状を呈す。胎土は緻密な灰色で釉は緑灰色を呈す。

11SB170d出土遺物（fig.61、写真2)

須恵器

坏c（1）　平坦な底で高台は細身で方形を呈す。軟質で白灰色を呈す。

11SB170e出土遺物（fig.61、写真2)

須恵器

坏c（1）　平坦な底で高台は低い方形を呈す。硬質で灰白色を呈す。

11SB170f出土遺物（fig.61、写真2)

緑釉陶器

小坏（24）　体部中央でゆるく屈曲して広がる形状。軟質で胎土は白灰色を呈し、釉はごく薄い淡緑色を呈す。京都洛北系の製品か。

11SB170h出土遺物（fig.61、写真2)

須恵器

坏c（1）　平坦な底で高台は低い方形を呈す。軟質で白灰色を呈す。

溝出土遺物

11SD002出土遺物（fig.61、写真3)

須恵器

蓋（1）　口縁の内側に断面形状が背の低い返りを持つ。焼成は硬質で淡灰色を呈す。

11SD002茶褐土出土遺物（fig.61、写真3)

須恵器

坏c(1)　平坦な底で高台は低い方形を呈す。体部は直線的に開く形状を成す。焼成は硬質で灰色を呈す。

甕（2,3）　硬質の焼成で、2は側辺に平坦面を作り出す口縁部で淡茶色を呈し、3はく字に屈曲する頸部で黒灰色を呈す。

瓦

平瓦（4,5）　縄目のタタキを有すもので、4の側辺はケズリで処理されており焼成は軟質の瓦質で暗灰色を呈す。5は薄手で焼成は硬い須恵質。

11SD042出土遺物（fig.62、写真3)

須恵器

蓋（1,2）　1は口縁の先端が若干垂下し、摘みは平板なボタン状を成す。天上部はヘラ切りのままだが、外側の一部がナデで処理される。2は端部の断面形状が小さな三角形を呈す。焼成は硬質で黒灰色を呈す。

坏c（3 ～ 5）　焼成は硬質で灰色から黒灰色を呈す。高台が外に開く形状を呈す。

皿a（6）　平坦な底部と直線的に開く口縁部を持つ。底部外面はヘラ切り後にナデを施しその上に板状

圧痕が残される。
高坏a（7） 裾の端部がS字に垂下する形状を呈す。焼成は硬質で黒灰色を呈す。
甕（8,9） 8はカーブを描く口縁部で、焼成は硬質で黒灰色を呈す。9は正格子目のタタキを有し、焼成は硬質で黒灰色を呈す。
土師器
坏c（10） 平坦な底部に体部が屈曲して斜めに立ち上がる。高台は外に開く形状。
甕（11） 把手の部位で橙色を呈す。
製塩土器
坏（12） 口縁端部が内側に入る形状で外面はユビ押さえが残る。II-b類。
11SD165黄白粘出土遺物（fig.62、写真4)
須恵器
蓋（1 ～ 3） 焼成は硬質で灰色～黒灰色を呈すもので、天井部は回転ヘラケズリを施す。1は丈の高いボタン状の摘まみを有す。
坏c（4 ～ 7） 平坦な底部に体部が屈曲して斜めに立ち上がる。高台は低い方形を呈す。底部外面はヘラ切り後にナデが施される。7のみヘラ切りのまま。焼成は6のみが軟質。
壷（8,9） 8は口縁外面が二条の沈線が入り、胴部には格子目のタタキが施される8世紀以前の様相のもの。焼成は硬質で黒灰色から灰色を呈す。9はなで肩の形状でナデで仕上げられる。焼成は軟質で白灰色を呈す。
土師器
甕（10,11） 10はゆるいく字を描く形状の口縁を持つ。11はなで肩の形状で胎土が紅橙色を呈す。製塩土器の可能性もある。
11SD165（S-32）出土遺物（fig.63、写真5)
須恵器
蓋（1） 端部が下に短く屈曲する。焼成はやや軟質で淡茶色を呈す。
坏c（2 ～ 4） 焼成は2のみ軟質で他は硬質で灰色から黒灰色を呈す。高台が外に開く形状を呈す。
大坏（5） 口縁が体部の途中から外に開く形状で、体部外面中央に二条の沈線が入れられる。焼成は硬質で青灰色から黒灰色を呈す。体部外面の横方向に傷状の沈線が二条入る。SX024で高台に付いたものが出土している。
高坏（6） 裾の端部がS字に垂下する形状を呈す。焼成は硬質で黒灰色を呈す。小高坏になるものか。
壷（7,8） 7は頸部に二条の沈線が入るもので、b類に属す。8は胴部から頸部に屈曲して移行する部分で小型の製品か。焼成は硬質で暗灰色を呈す。
甕（9,10） 9は口縁の側辺に平坦面を持つ小型の甕の口縁で、焼成は硬質で黒灰色を呈す。
10は胴部の肩付近に方形の穴を穿つ把手を有すもので、焼成はやや軟質で灰白色を呈す。
土師器

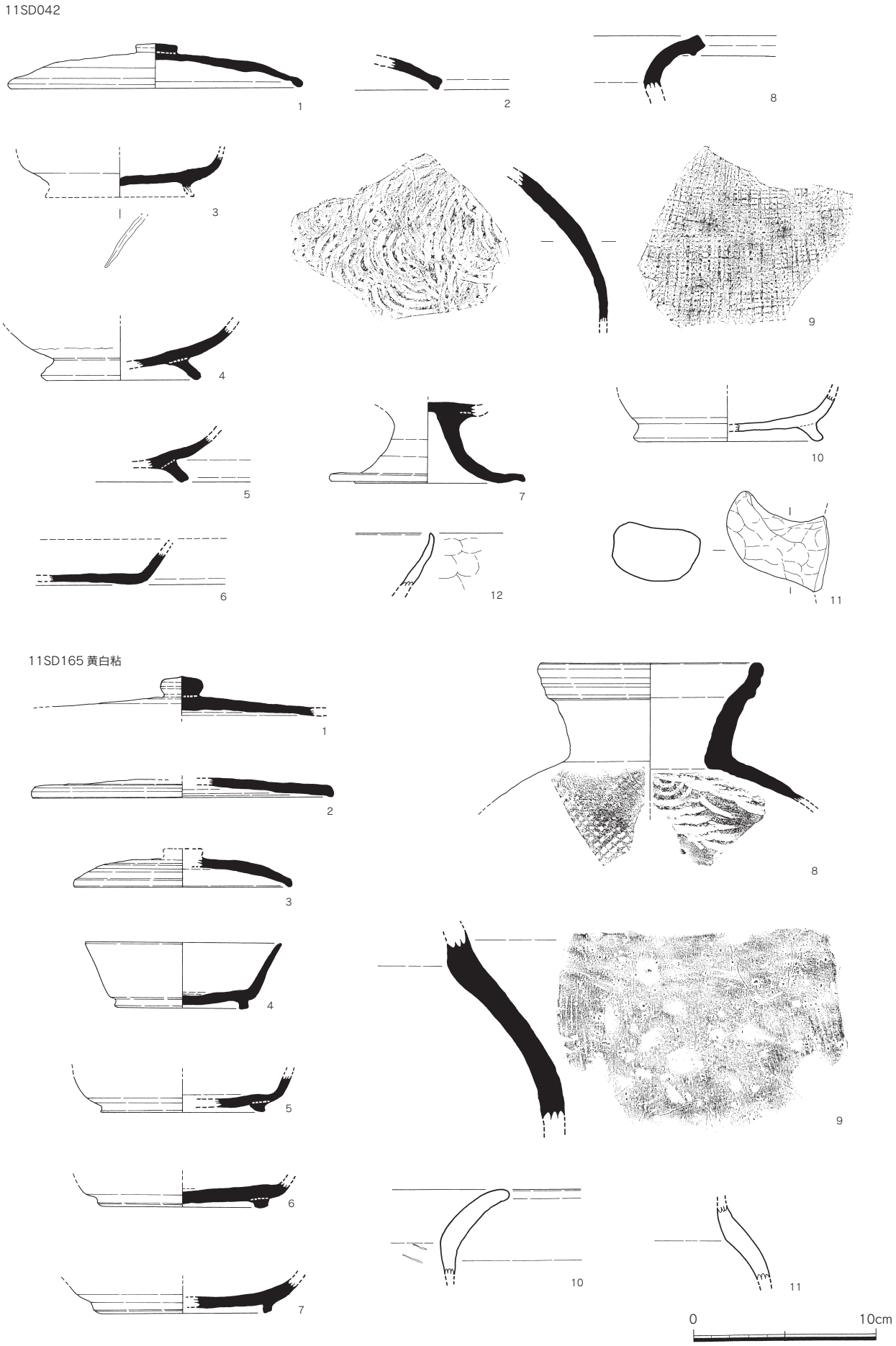


fig.62　11SD042,165黄白粘出土遺物実測図（1/3）

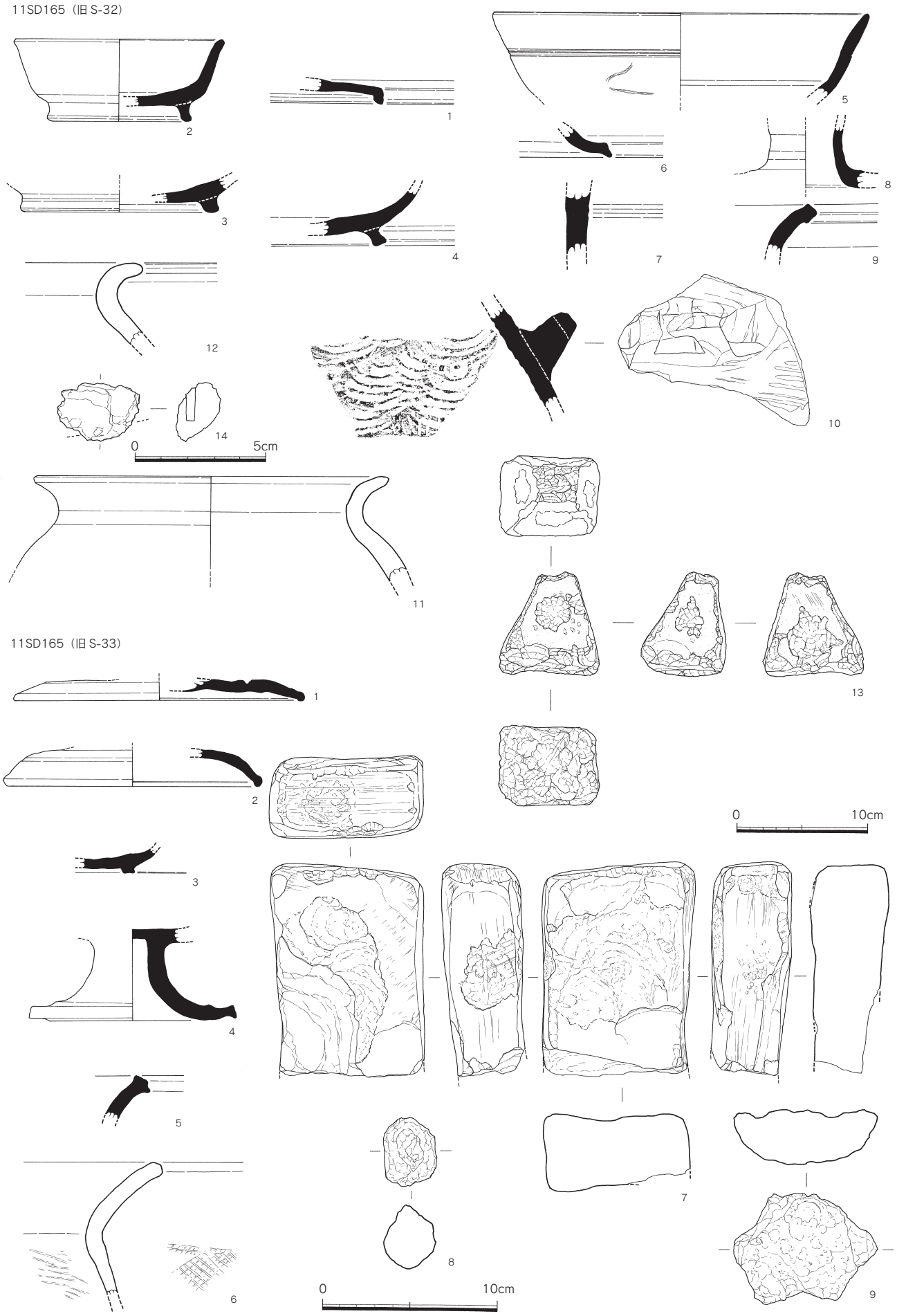


fig.63 11SD165出土遺物実測図（1/3,1/4）

甕a（11,12）　頸部から口縁部がゆるいカーブを描いて開く形状を成す。橙色を呈す。
石製品
打具（13）　側面観が三角形の形状を呈す。側辺には敲打によるくぼみが顕著に残る。灰白色に茶色縞が入る砂岩を素材とする。
金属製品
板状鉄製品（14）　断面が長方形を呈す長い板状の製品。用途は不明。
11SD165（S-33）出土遺物（fig.63、写真5)
須恵器
蓋（1,2）　1は薄い形状で口縁端部は特につくり出さない。焼成は硬質で黒灰色を呈す。2は天井部が平坦で口縁端部はあいまいな三角形を呈す。硬質で白灰色を呈す。
坏c（3）　高台が外に開く形状を呈す。硬質で灰白色を呈す。
高坏a（4）　裾の端部がS字に垂下する形状を呈す。焼成は硬質で淡青灰色を呈す。
小甕（5）　口縁端部が厚くなり沈線が入れられる。焼成は硬質で灰色を呈す。
土師器
甕b（6）　頸部から口縁部がゆるいカーブを描いて開く形状を成す。外面に擬似格子目のタタキを有す。明橙色を呈す。
石製品
台石（7）　本来は立方体の砥石であるが、使用の最終段階で各面の中心付近に敲打の窪みが形成される。灰黒色の泥岩製である。
金属製品
鉄滓（8,9）　8は全体に明茶色の鉄錆に覆われる球状のもので鉄塊系遺物とするほうが良いのかもしれない。9は黒色の金属質の芯に茶色の鉄錆が覆う椀形滓である。底面は深い半球形を呈す。

土坑出土遺物
11SK001出土遺物（fig.64、写真6)
須恵器
蓋（1 ～ 9）　焼成は硬質で灰色から白灰色を呈す。1 ～ 5は口縁端部があいまいな三角形を呈す。6は薄い形状で口縁端部は特につくり出さない。天上部はヘラ切りの後にナデられるが、3は回転ヘラケズリが施され、5と6はヘラ切りのままである。7は大型の製品で天井部に回転ヘラケズリが施される。
坏a（8）　底部は平坦で外面はヘラ切りのままである。焼成は軟質で灰白色を呈す。
坏c（9）　小ぶりの高台がやや内側に付けられる。硬質で灰白色を呈す。体部は直線的に開く。
高坏a（10,11）　9は坏部で体部が上方に延び、焼成は硬質で灰色を呈す。10は長脚の筒状部で焼成は軟質で白灰色を呈す。
鉢a（12）　口縁は内傾して端部がやや厚くなる。鉄鉢形のa3タイプか。焼成は硬質で黒灰色を呈す。
壷（13,14）　長頸壷で12は算盤玉形のbタイプの胴部でやや上の部分が潰れた形状を呈す。ヘラケズリは中位から下半部に及ぶ。13は玉葱形の胴部になるものと思われ、高台は外に開く古式の形状を呈す。焼成は硬質で外面は黒灰色を呈す。
土師器

甕（15,16）　ゆるく字形に開く口縁を有す。14は口縁の伸びが長く淡橙褐色を呈す。15は口縁が短く小型のものであろう。
製塩土器
坏（17,18）　三角錐のカップ状の口縁部で内面には布痕跡はない。橙褐色を呈す。II-b類。
11SK015出土遺物（fig.64、写真7)
須恵器
蓋（1）　口縁の内側に断面形状が背の低い三角形を呈す返りを持つ。焼成は硬質で灰色を呈す。
坏蓋（2）　九州須恵器編年のIV型式に属すもので天井部から口縁端部までゆるいカーブを描く形状のもの。外面は回転ヘラケズリを施す。3条のヘラ記号の沈線が残る。焼成は硬質で暗灰色を呈す。
11SK019出土遺物（fig.64、写真7)
須恵器
蓋（1）　口縁の端部は短い三角形につくられ内面に浅い沈線が入る。焼成は硬質で灰色を呈す。
坏c（2,3）　平坦な底で高台は開き気味に延びる形状。硬質で灰白色から灰色を呈す。
皿a（4）　底は平板で体部は内反り気味に延びる形状。底部はヘラ切り後にナデられる。
製塩土器
坏（16,17）　先の細る口縁部で内面には布痕跡はない。赤茶色を呈す。II-b類。
11SK039出土遺物（fig.64、写真7)
須恵器
蓋（1,2）　1は口縁の端部が折れて長く垂下する形状で焼成は硬質で灰白色を呈す。2は口縁の内側に低い返りを持つ。焼成は硬質で黒灰色を呈す。
坏c（3）　開きの高台形状のもの。硬質で黒灰色を呈す。
壷（4）　肩の張る形状の肩の部位で硬質で灰色を呈す。

土師器
甕（5）　頸部から口縁部がゆるいカーブを描いて開く形状を成す。淡橙色を呈す。
11SK054出土遺物（fig.64、写真8)
須恵器
小蓋(1,2)　口縁の内側に低い返りを持つ。1は天井部は回転ヘラケズリを施し焼成は硬質で灰色を呈す。2は天井部がヘラ切り後にナデを施したもので、焼成は軟質で灰白色を呈す。
坏c（3）　開きの高台形状のもの。硬質で黒茶色を呈す。底部外面に平行する二条のヘラ記号がある。
甕(4,5)　4は大きく外に反る形状の口縁部で外面上位に単線の波状文が施される。硬質で黒灰色を呈す。5は外面に平行刻みのタタキを有し、焼成は硬質で外は白灰色内面は黒灰色を呈す。
土師器
高坏(6)　短脚の形状のものと思われ､坏部の接合部の下から裾に向かって広がっている。淡橙色を呈す。
甕（7）　頸部から口縁部がゆるく開く形状を成す。淡橙色を呈す。
11SK110出土遺物（fig.65、写真9)
須恵器

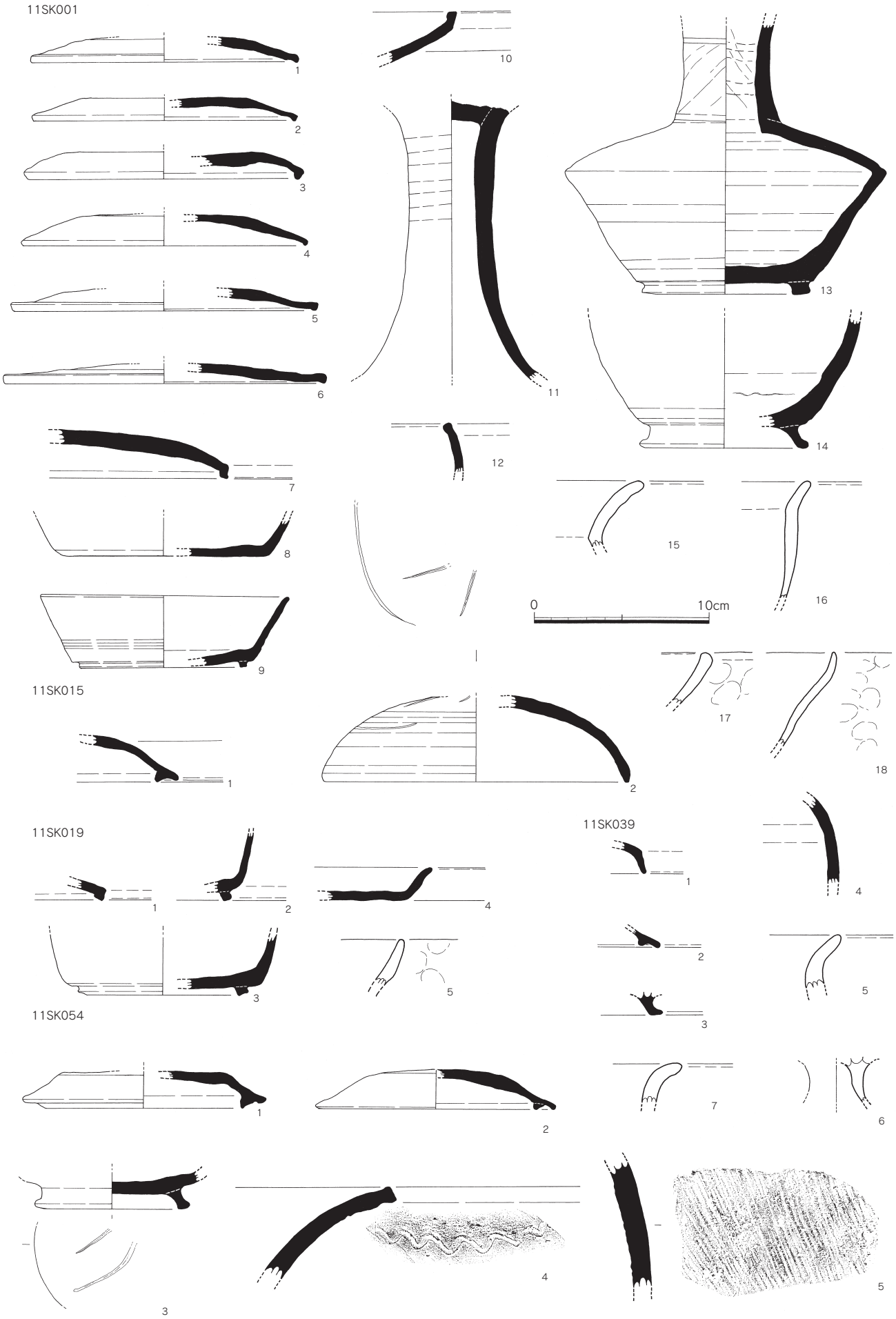


fig.64　11SK001,015,019,039,054出土遺物実測図（1/3）

蓋（1）　1は口縁の端部は短い三角形につくられる。焼成は硬質で灰色を呈す。
坏c（2,3）　底部は平板で、側辺から中央よりの内側に付けられた低平な角高台を持つ。硬質で黒灰色を呈す。
壷b（4）　球形の胴部から短く立ち上がる口縁部をもつもので、焼成は硬質で灰白色を呈す。
土製品
鞴羽口（5）　内径が3cmほどに復元されるもので、外面では図の上方に黒色の鉱物質の付着物があり、内面はやはり上方が黒色化する。全体には淡橙色を呈す。
金属関連製品
鉄滓（6 ～ 8）　芯は黒色の鉱物質で気泡の痕跡があり多孔質である。7は鉄塊系遺物の可能もある。
11SK150出土遺物（fig.65、写真9)
須恵器
蓋（1）　1は口縁の端部は短い三角形につくられる。焼成は硬質で淡灰色を呈す。
坏c（2）　底部は平板で、底部外側に付けられた低平な角高台を持つ。
11SK153出土遺物（fig.65、写真9)
須恵器
蓋（1,2）　口縁の端部は短い三角形につくられる。焼成は硬質で1は灰色、2は黒灰色を呈す。
11SK154出土遺物（fig.65、写真10)
須恵器
蓋（1,2）　1は低いボタン状の摘まみを持ち、焼成は硬質で灰色を呈す。2は口縁の端部は短い三角形につくられる。焼成は硬質で灰色を呈す。
坏c（3,4）　3は底部は平板で、底部外側に付けられた低平な角高台を持つ。焼成は硬質で黒灰色を呈す。4は平坦な底で高台は開き気味に延びる形状。硬質で灰色を呈す。
壷蓋（5）　平板な天上部は回転ヘラケズリを施される。硬質で灰色を呈す。
瓶（6）　玉葱形の胴部で欠損するが中心をはずした位置にラッパ状に開く口縁が付くものであろう。焼成は硬質で灰色を呈す。
壷（7）　玉葱形の胴部で高台は開き気味に延びる形状。肩から胴部にカキ目が施される。硬質で黒灰色を呈す。
11SK175出土遺物（fig.65、写真10・11)
須恵器
蓋（1 ～ 4）　1,3は口縁の端部が短い三角形につくられる。他は若干三角を意識した形状に止まる。焼成は1のみが軟質で灰白色を呈し、他は硬質で灰色を呈す。
坏a（5,6）　平坦な底部からゆるく体部に屈曲する形状を持つ。焼成は硬質で暗灰色を呈す。6は底部がヘラ切りのままで未調整。硬質で灰色を呈す。
土師器
坏c（7）　3は底部が平板で、底部外側に付けられた外開きの高台を持つ。硬質で灰色を呈す。
蓋（8）　口縁の端部が若干三角を意識した形状に成形される。内面にミガキbが施され淡橙色を呈す。
坏a（9）　平坦な底部からゆるく体部に屈曲する形状を持つ。淡橙色を呈す。

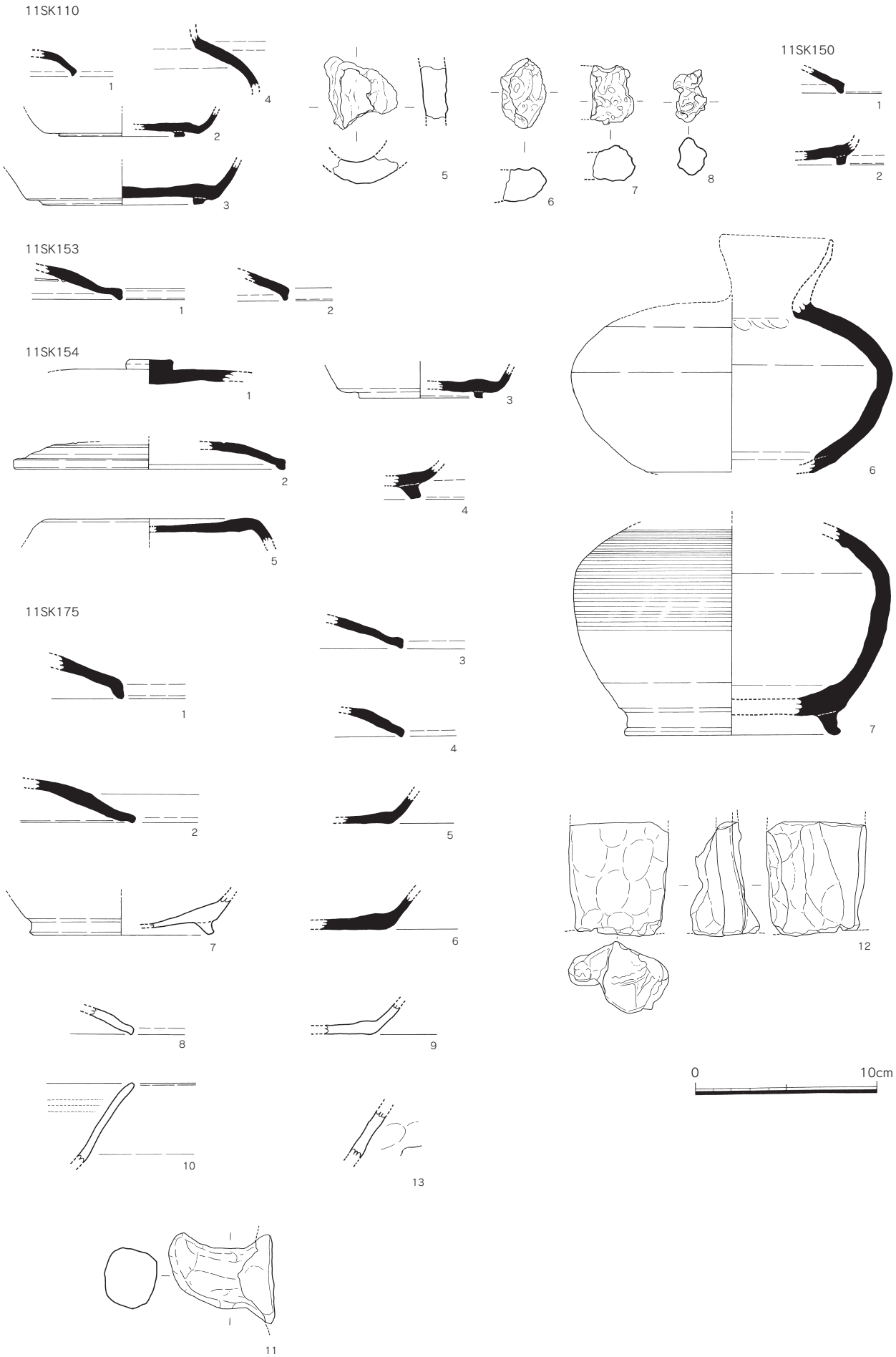


fig.65　11SK110,150,153,154,175出土遺物実測図（1/3）

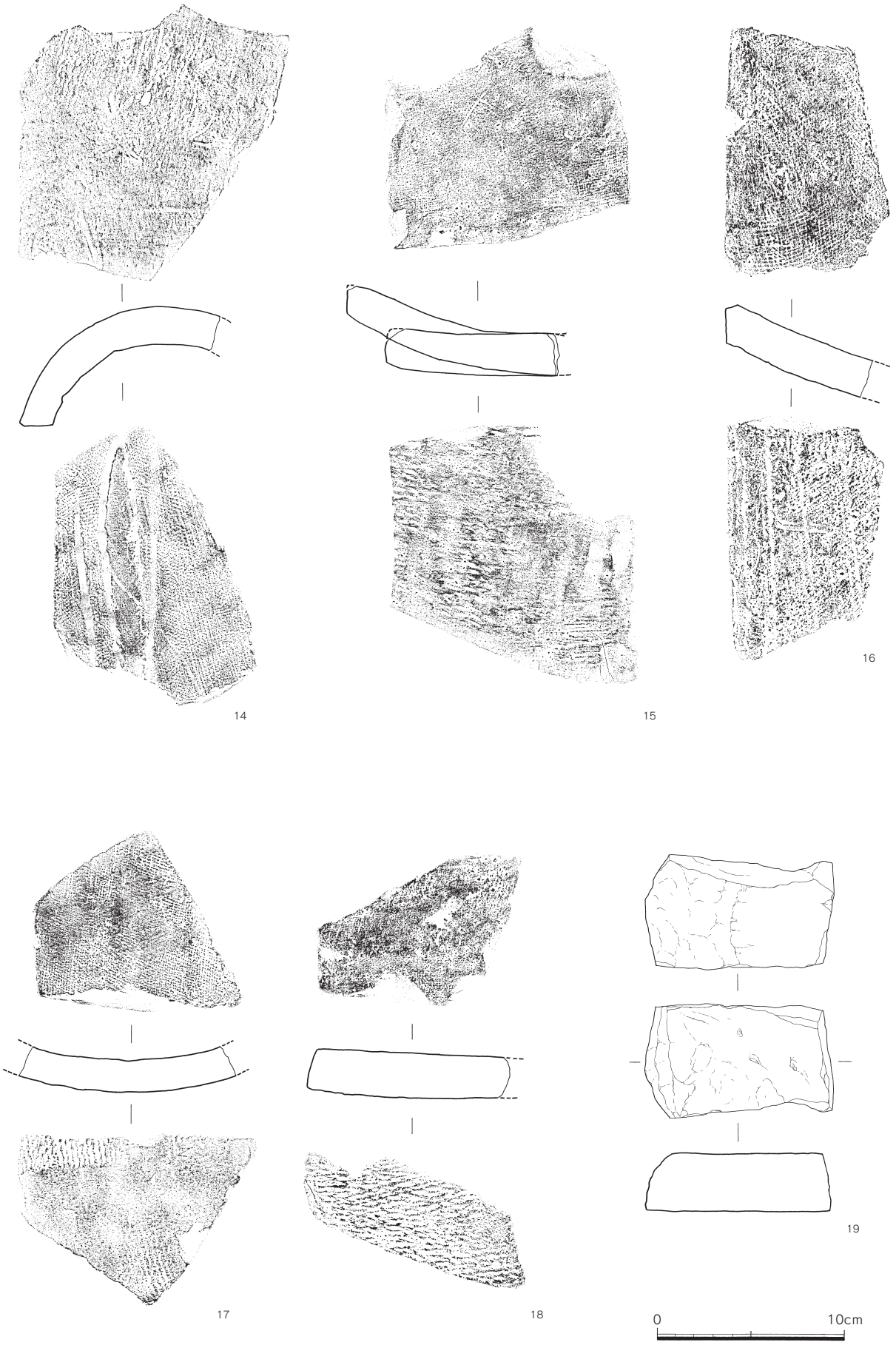


fig.66 11SK175出土遺物実測図（1/3）

坏（10） 多少端部が外に反る形状の口縁を持つ。内面にミガキbが施され明橙色を呈す。
甕（11） ユビ押さえによる成形の把手部分である。明橙色を呈す。
移動式カマド（12） 焚口の庇の部位で、全体にユビオサエと荒い筋状のナデが残る。淡橙色を呈す。
製塩土器
坏（13） 外面にユビオサエのあとが残る胴部片で内面には布痕跡はない。橙色を呈す。II-b類か。
瓦
丸瓦（14） 縄目のタタキを有す。側辺は分割の深い切り込みの痕跡があり、外側は割り取ったままで未調整。焼成は須恵質で白灰色を呈す。内面には目の細かな布目とそれをかがった紐の痕跡が見られる。
平瓦（15 ～ 18） 縄目のタタキを有す。内面には布目が見られる。16には弓切りの痕跡が、残される。焼成は15が土師質で淡黄褐色を、他は須恵質で灰白色を呈す。
石製品
砥石（19） 平板な2面が利用されるが、図上の面は半滑面状態で使用面としては未発達である。灰色の砂岩製である。
11SK184出土遺物（fig.67、写真12）
須恵器
蓋（1） 口縁は若干三角を意識した形状に止まる。焼成は軟質で白灰色を呈す。
坏（2） 薄手で先の細い形状の胴部片で、焼成は軟質で白灰色を呈す。
甕（3） 薄くて球状の胴部片で、焼成は軟質で白灰色を呈す。
土師器
鉢（4,5） 口縁は上方に直線的に開き、端部外面に沈線が入る。内面は上位に工具による横方向のナデがあり、下半部はユビオサエの後ナデて仕上げられる。外面にはハケ目のような目の細かな横方向の平行刻みのタタキが施される。未分類。
製塩土器
甕（6） 外面に格子目の内面に刷毛の痕跡を残す。所謂玄界灘式のもので淡橙色を呈す。
金属製品
鉄滓（7） 鉱物質で芯は黒色を呈す。
その他の遺構出土遺物
11SX020出土遺物（fig.67、写真12）
須恵器
蓋（1） 口縁の内側に低い返りを持つ。焼成は硬質で灰色を呈す。
坏c（2 ～ 4） 体部に丸みを持ち、底部外側に付けられた外開きの高台を持つ。硬質で黒灰色を呈す。3は底部外面に2条の平行するヘラ記号を持つ。4は平坦な底で体部は斜めに直線的立ち上がる。高台は長めで外開き気味に延びる。褐色を呈す。
壷（5） 球形の胴部中央に2条の沈線が入る。底部は凸気味。硬質で黒灰色を呈す。
土師器
甕（6 ～ 10） ゆるくカーブして広がる口縁を持つ。9と10は内面のケズリの境で屈曲部がある。6は胎土に多量の角閃石が混入し、茶褐色を呈す。他は橙色を呈す。10は被熱して内面が黒褐色化する。

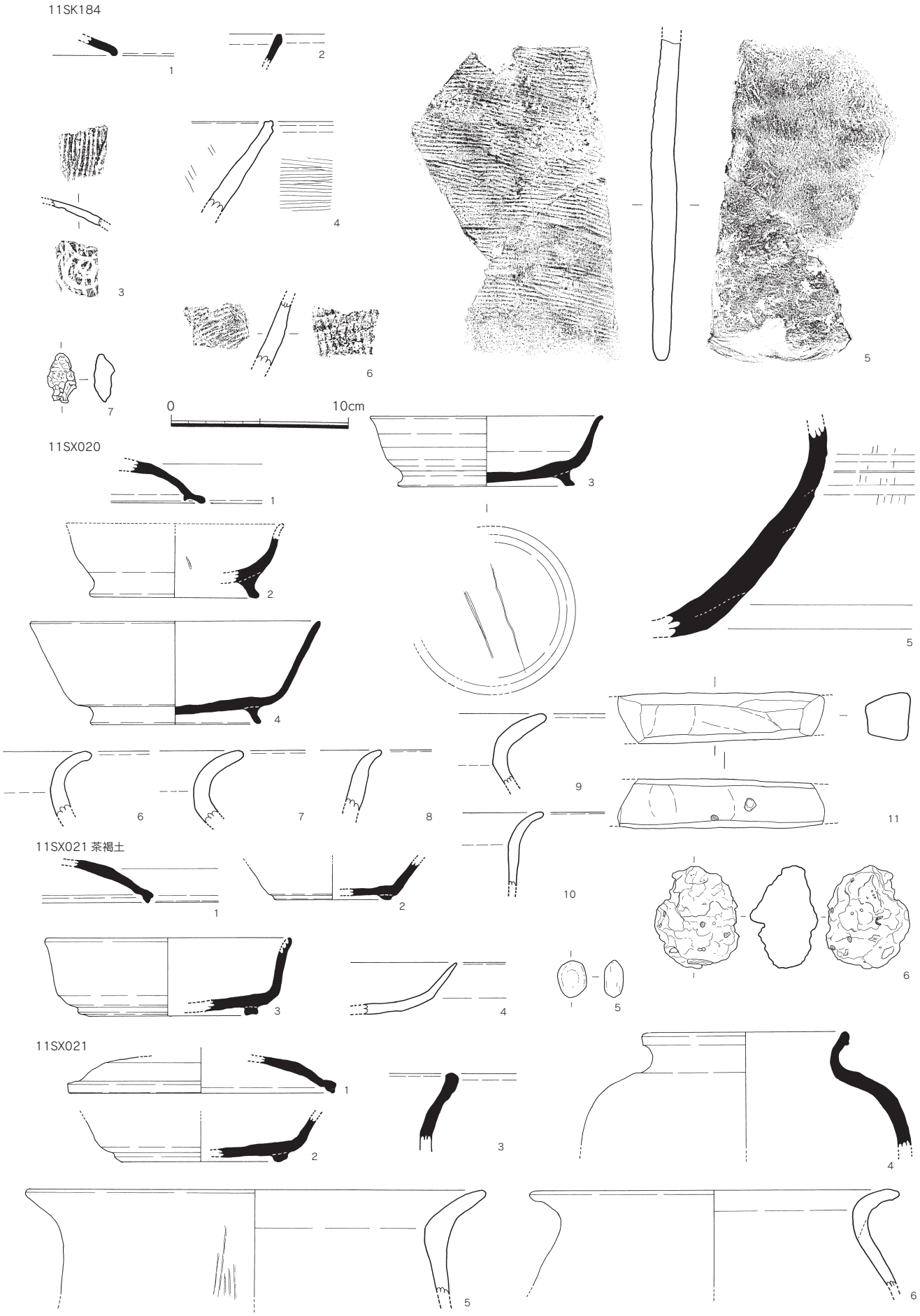


fig.67　11SK184,11SX020,021茶褐土,021出土遺物実測図（1/3）

甑（11） 底部に渡されたさんの棒状の部分で、ケズリによって成形される。橙色を呈す。

11SX021茶褐土出土遺物（fig.67、写真13)

須恵器

蓋（1） 口縁は三角を意識した形状で外面は沈線が入れられたように反る。焼成は硬質で淡灰色を呈す。

坏c(2,3） 2は小型のもので体部は直線的に広がり、底部外側に付けられた低い丸くなった角高台を持つ。3は体部に丸みを持ち、底部外側に付けられた低い角高台を持つ。焼成は両者とも硬質で灰色を呈す。

土師器

坏（4） やや外に膨らむ底部からゆるく屈曲して先が若干開く口縁を持つ。調整は残存不良で不明。平城京の坏A型の形状で明橙色を呈す。

石製品

円礫（5） 白色の平たい円礫で碁子の可能性がある。

金属製品

鉄滓（6） 芯は多孔質の黒色を呈す金属質のもので、表面は明茶色の鉄錆に覆われる。

11SX021出土遺物（fig.67・68、写真13)

須恵器

蓋（1） 口縁は三角を意識した形状で外面は平坦面を形成する。天井部には回転ヘラケズリを有す。焼成は硬質で淡灰色を呈す。

坏c（2） 体部に直線的に立ち上がり、底部外側に付けられた低い角高台を持つ。焼成は硬質で淡灰色を呈す。

壷（3,4） 口縁がやや開き気味で端部が丸く収められる。4は肩が張る形状を成す。焼成は硬質で3は灰黒色、4は灰色を呈す。

土師器

甕（5,6） 5はゆるくカーブして広がり、6はく字に屈曲する口縁を持つ。5は黄褐色を6は赤橙色を呈す。

瓦

丸瓦（7,8） 外面はロクロ引きの条線が、内面には目の細かな布跡が残る。側辺はケズリで処理される。焼成は軟質で黒灰色を呈す。

石製品

フレーク（9） 風化した安山岩製の縦長剥片であるが、二次的加工は見られない。

11SX023出土遺物（fig.68・69、写真14・15)

須恵器

蓋（1,2）1は口縁は三角を意識した形状で、天井部には回転ヘラケズリを有す。焼成は硬質で淡灰茶色を呈す。2は低平な形状で口縁は三角に垂下する。焼成は硬質で淡灰色を呈す。

坏c（3,4） 体部外開き気味に立ち上がり、底部外側に付けられた細身で先の細る角高台を持つ。焼成は硬質で淡灰色を呈す。

皿a（5） 底は平板で体部は外反り気味に延びる形状を呈す。底部外面はヘラ切り後にナデられる。

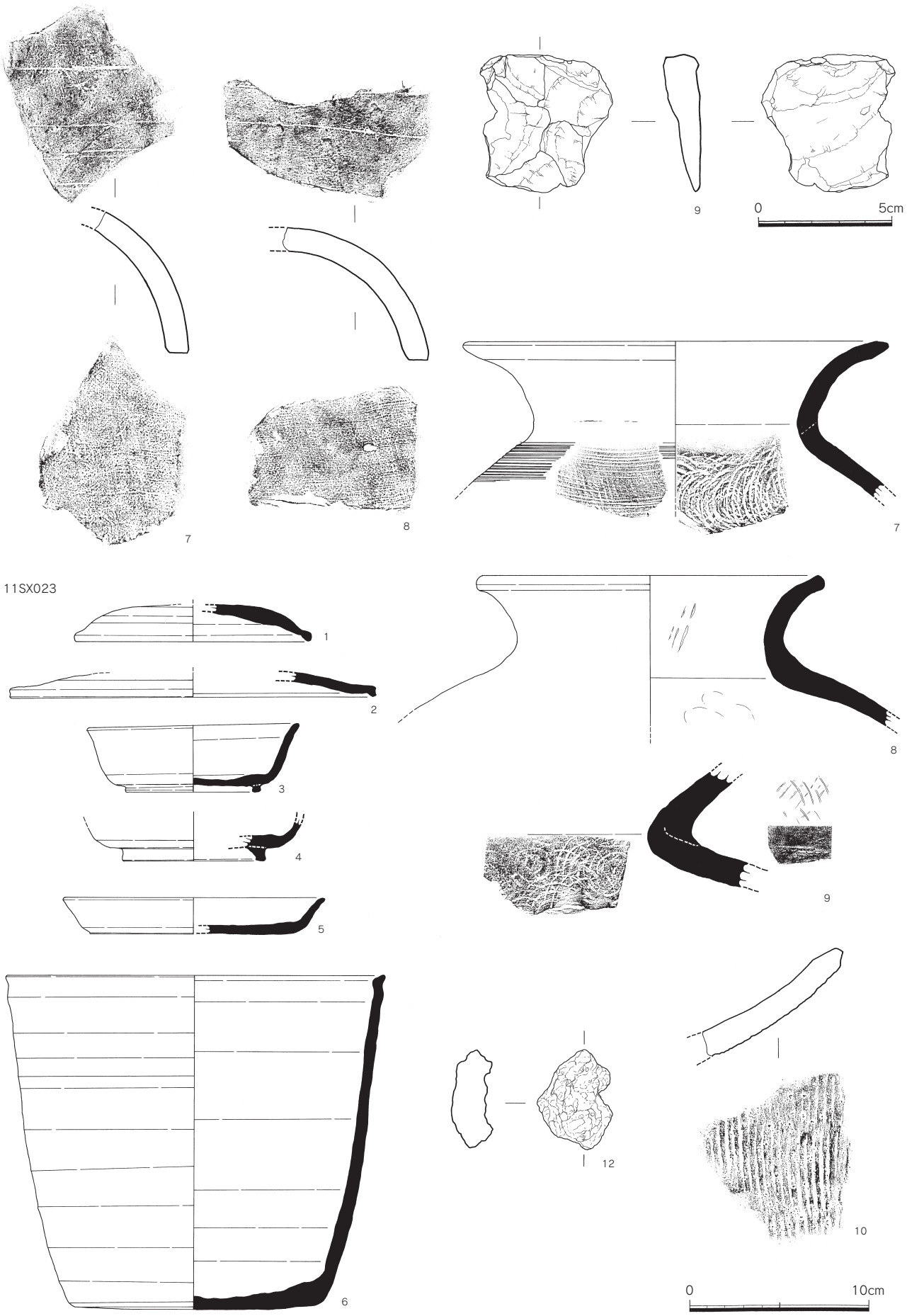


fig.68　11SX021,023出土遺物実測図（1/3,1/2）

硬質で灰色を呈す。
鉢b（6） バケツ形の形状で口縁がやや三角につまみ出される。焼成は硬質で灰色から暗灰色を呈す。
甕（7 ～ 9） 頸部からラッパ状に開く口縁を持ち、7は肩部にカキ目を有す。焼成は硬質で灰色から暗灰色を呈し、9は内面下が茶色である。
瓦
平瓦（10,11） 縄目のタタキを有す。側辺端部はケズリにより調整される。焼成は軟らかい瓦質で白灰～黒灰色を呈す。
金属製品
鉄滓（12） 芯は黒色の鉱物質で多孔質であり、表面の一部は茶褐色の鉄錆に覆われる。
11SX024出土遺物（fig.69、写真16・17）
須恵器
蓋（1 ～ 5） 1はごく短い三角の返りを持つもので、他は口縁が三角を意識した形状を呈す。5は端部がゆるく下に垂下する。天井部には回転ヘラケズリを有す。体部から口縁にかけての位置に「大旱」のようなヘラ書きの文字が見られる。焼成は硬質で1と2が茶色で他は灰白色を呈す。
坏a（6） 平板は底部から直線的に体部が開く形状を呈す。底部はヘラ切りのままで未処理。焼成は硬質で灰白～淡茶色を呈す。形状や焼成の感じは牛頸産のものでなく、肥後系の可能性がある。
坏c（7,8） 体部は丸みを持って立ち上がり、外に開く高台を持つ。焼成は軟質でくすんだ灰色を呈す。
大坏（9,10） 9は平坦な底部と先細で直線的に広がる体部からなる。高台は低い角高台でやや内側に付く。焼成は硬質で灰色を呈す。10は丸みのある体部に口縁が外に開く形状のもので、体部外面中央に二条の沈線が入れられる。焼成は硬質で青灰色から黒灰色を呈す。体部外面の横方向に傷状の沈線が二条入る。11SD165で似たものが出土している。
坏（11） 体部は直線的に立ち上がり、底部は丸みを持つ。焼成は軟質で灰白色を呈す。未分類。
壷（12） 球形の胴部から小さなラッパ状に開く口縁を持つ。焼成は硬質で淡橙茶色を呈す。
甕（13） 外面に手持ちのカキ目を残す。焼成は硬質で黒灰色を呈す。
土師器
坏（14,15） 14は丸い、15はS字にカーブする体部を持つ。14には内面にごく細い縦のミガキが等間隔に施される。15は平城京分類のA型式のもので、両者とも明橙色を呈す。
甕（16 ～ 18） ゆるく外反する口縁の形状で、16は赤橙色、17は淡黄褐色を呈す。18は把手部分でくすんだ橙色を呈す。
瓦
丸瓦（19） 縄目のタタキを有す。側辺端部はヘラ削りで調整される。焼成は硬質の須恵質。
土製品
鞴羽口（20） 内径が2cmほどに復元されるもので、胎土は淡黄褐色を呈し、茶色の土の粒子が混入する。先細になる先端は黒色を呈し差し口になる部分である。
石製品
スクレーパー（21） 安山岩製で三角形に成形される。多少の風化が認められ縄文時代の所産か。
金属関連製品

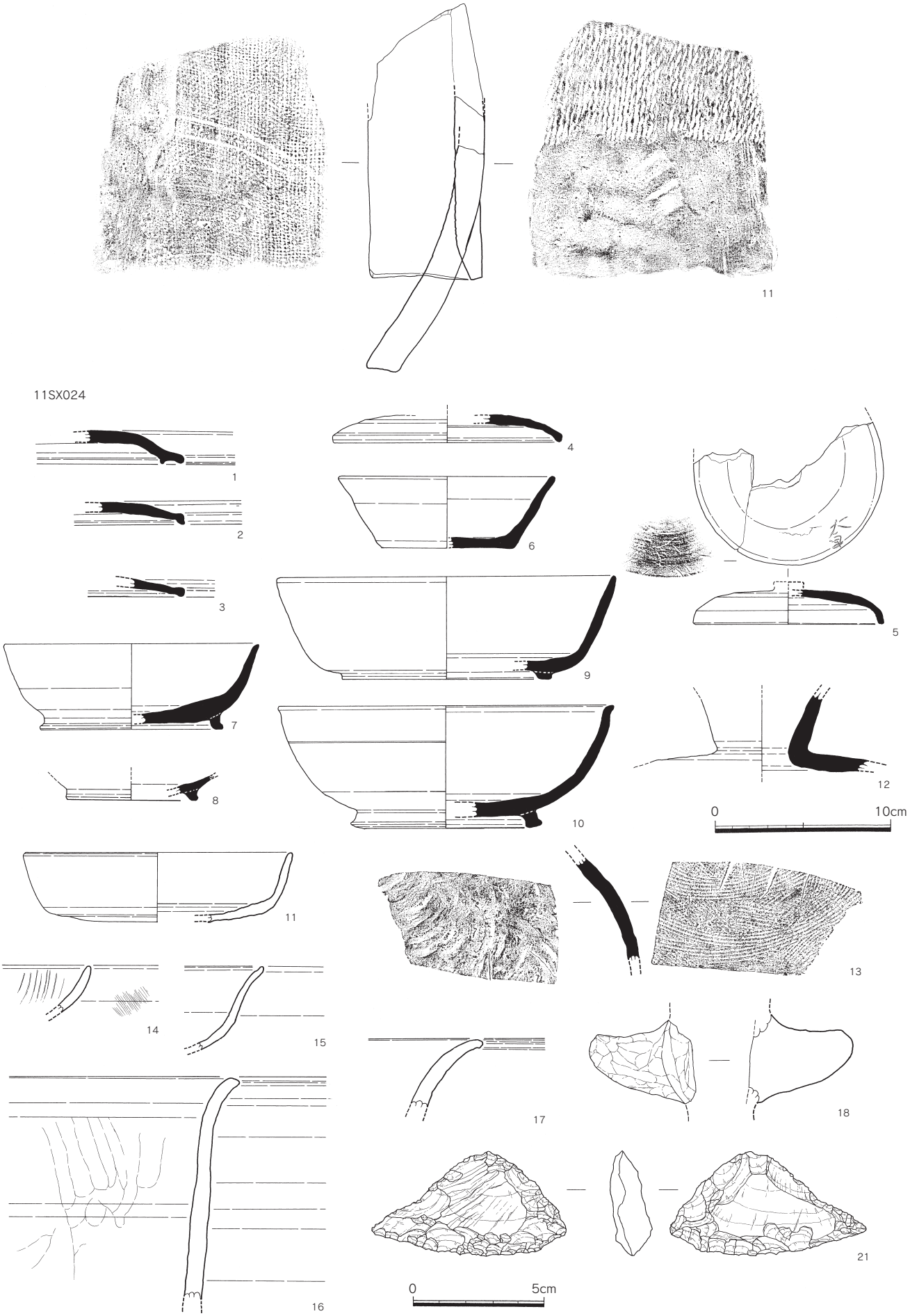


fig.69 11SX023,024出土遺物実測図（1/3,1/2）

鉄滓（22）　上面は平板、下面は丸底を呈す。芯は黒色の金属質のもので多孔質。表面は明茶色の鉄錆に覆われる。典型的な椀形滓である。

11SX034出土遺物（fig.70 ～ 73、写真18 ～ 20）

須恵器

坏蓋（1 ～ 9）　九州須恵器編年のⅣ型式に属すもので天井部から口縁端部まで丸いカーブを描く。4 ～ 8は端部が屈曲する。9は返りを持つ。天上部は回転ヘラケズリを施す。4は 1 条の5は2条のヘラ記号が残る。焼成は硬質で2は淡黄灰色他は黒灰色を呈す。8は軟質で灰白色を呈す。

小蓋（10、11）　これらもⅣ型式に属すもので端部が屈曲する。焼成は硬質で色調は淡灰色を呈す。

坏身（12 ～ 18）　同じくⅣ型式に属すもので口縁端部は短く内に立ち上がる。13はやや深い形状を呈す。底部は回転ヘラケズリを施すが、12はヘラ切りのままで未処理。焼成は硬質で淡灰色から暗灰色を呈す。

蓋（19 ～ 32）　23 ～ 25は短い三角の返りを持つもので、26 ～ 31は口縁が三角を意識した形状を呈す。21,22,30,32は天井部に回転ヘラケズリを有す。25は荒いカキ目らしいケズリがある。ヘラ記号は21に×、22に2条の平行線が見られる。焼成は23、24が軟質で他は硬質。色調は23、25が明橙色で他は灰白色から暗灰色を呈す。

坏c（33 ～ 44）　体部下位に丸みを持ち、底部外側に付けられた外開きの高台を持つ。34と43は軟質で灰白色を呈し、他は硬質で灰色～黒灰色、41と42は茶色傾向を呈す。

坏（45）　箱型の形状で体部と底の境は丸みを持ち、回転ヘラケズリが施される。口縁端部は短く外反する。焼成は硬質で黒灰色を呈す。

高坏（46 ～ 48）　48はaタイプ、他は小型の部類に属す。焼成は硬質で灰色～黒灰色の色調で、46の坏部は茶色傾向である。47は脚部中央に3条の縦の条線が施される。

壷蓋（49）　天上部は回転ヘラケズリを施す。内面に壷aの口縁らしきものが焼成時に付着している。硬質で青灰色～灰色を呈す。

壷（50 ～ 63）　50は小型の瓶形、51と52は口がラッパ形に開く形状、54と55はaタイプ、56は扁平な球形の胴部を持つ長頸壷、57と58は肩にカキ目を持つやや長胴のもの、59 ～ 61は瓶形になるものの口縁と見られる。焼成は51と57が軟質で淡灰～白灰色を呈す他は硬質で淡灰～黒灰色を呈す。

甕（63 ～ 93）　63 ～ 65,69は小型のものの口縁部。焼成は硬質で63が灰白色、他が黒灰色を呈す。他は中型から大型品のものと思われ、焼成は硬質で暗灰色を呈す。73は打ち面の充て具痕がいわゆる車輪文、74はタタキ目が正格子目を呈す。78は平坦な底を持つもので体部外面に6本/cmの目の細かな平行刻みのある横位のタタキを有す。

土師器

甕（79 ～ 87）　ゆるいカーブを描く79 ～ 83と、く字に屈曲する84 ～ 86がある。前者は内面のケズリが縦方向である。色調は橙色～淡橙色を呈す。83は小甕で淡茶褐色を呈す。87はヘラと手づくねで成形された把手の部分。

高坏（88）　短くラッパ状に開く脚部で明橙色を呈す。小高坏の部類。

鉢（89,90）　89は直線的な体部で、口縁外側に沈線が入るもので淡橙色を呈す。90は口縁がく字に開くもので把手が欠落している。明橙色を呈す。

把手（91）　ヘラで成形された小ぶりの把手で、鉢か小甕などのものであろう。淡橙色を呈す。

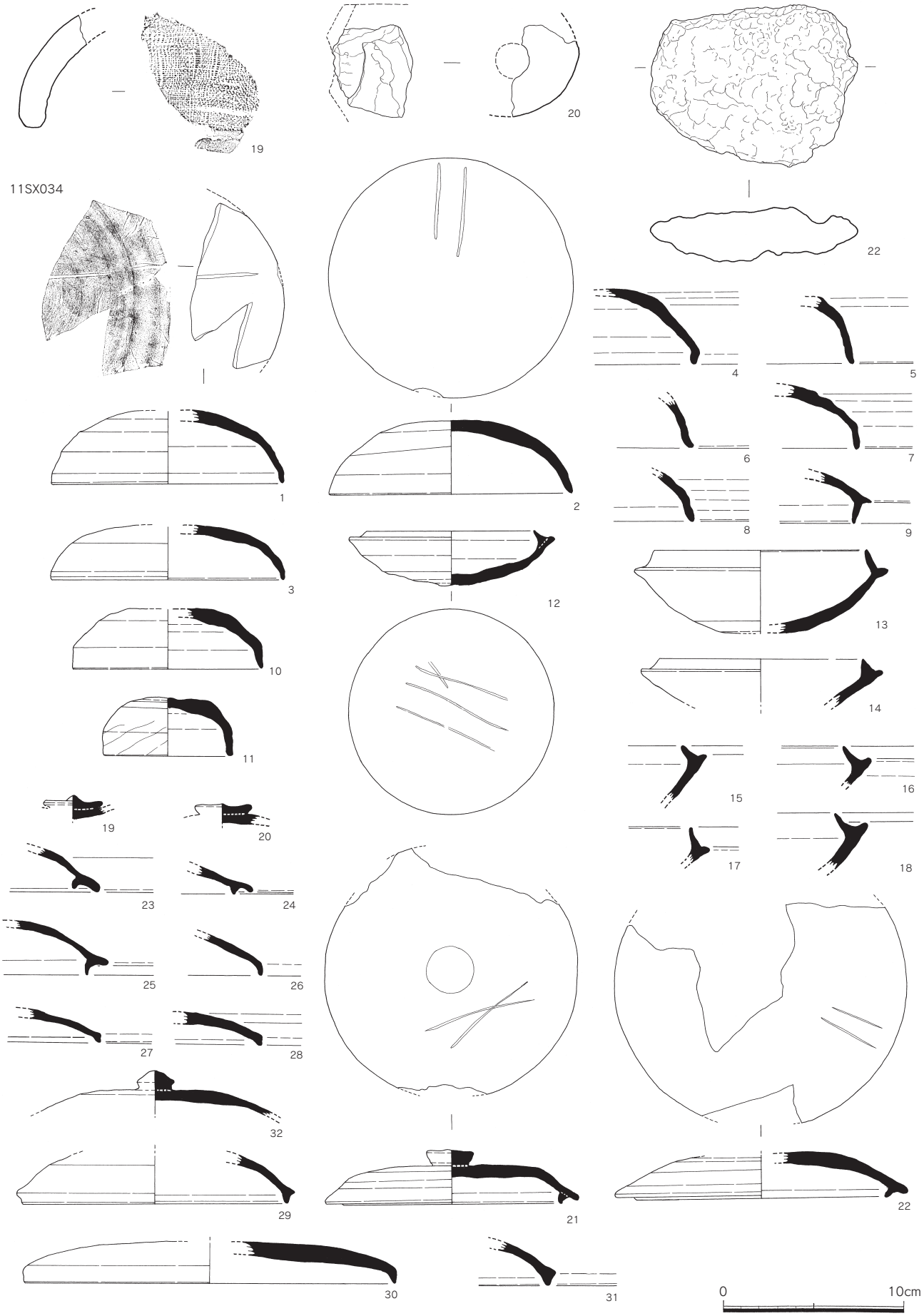


fig.70　11SX024,034出土遺物実測図（1/3）

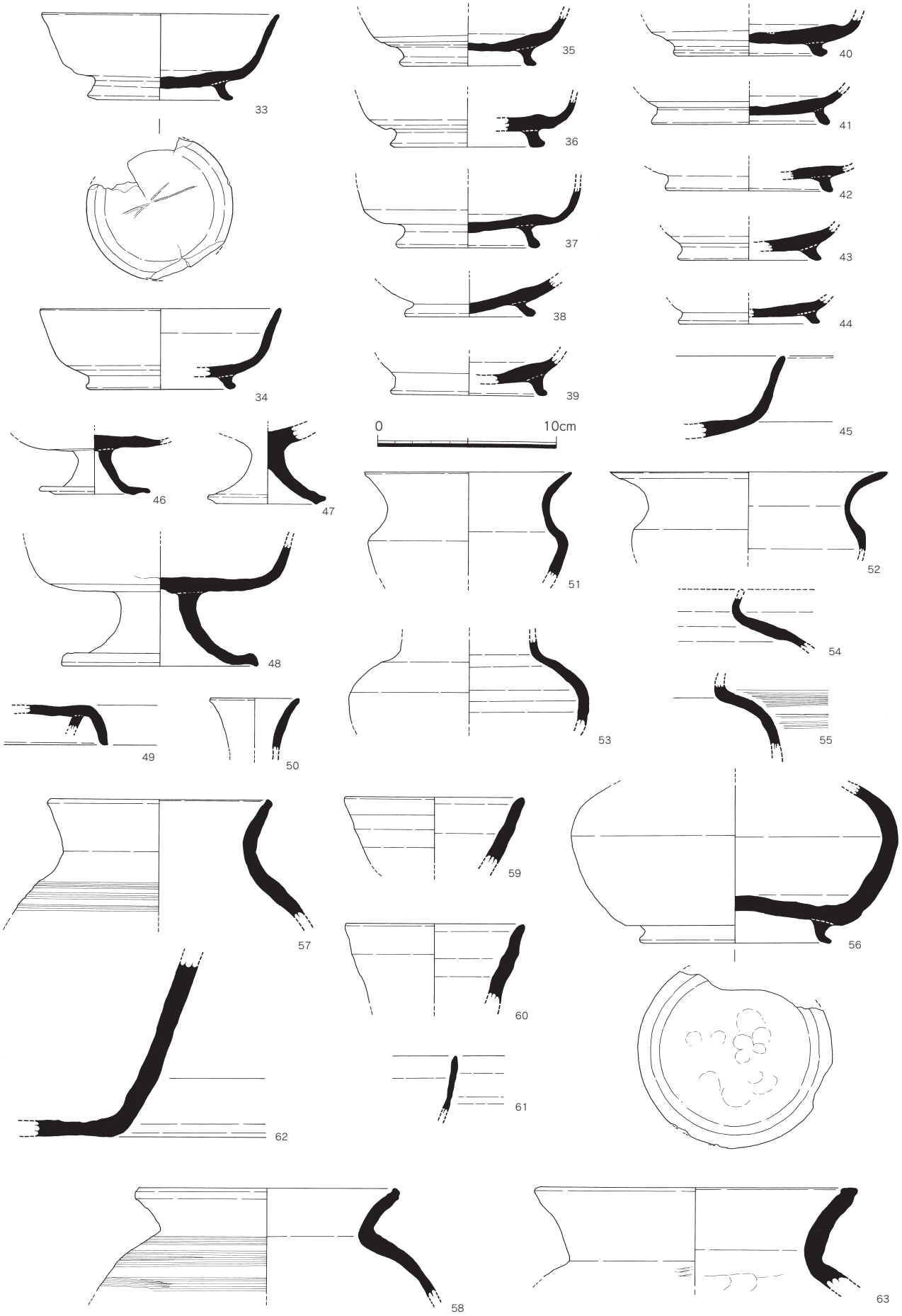


fig.71　11SX034出土遺物実測図（1/3）

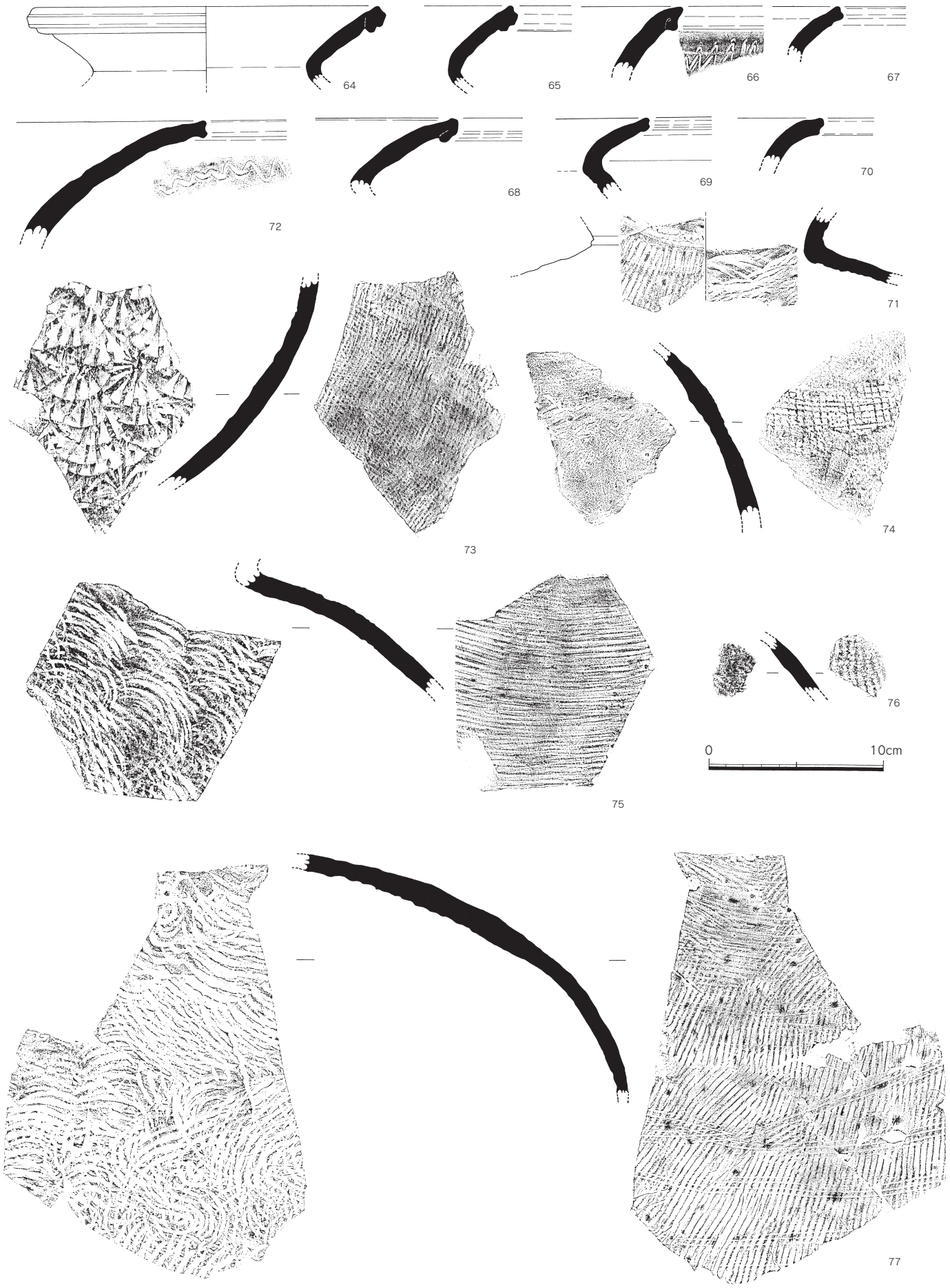


fig.72　11SX034出土遺物実測図（1/3）

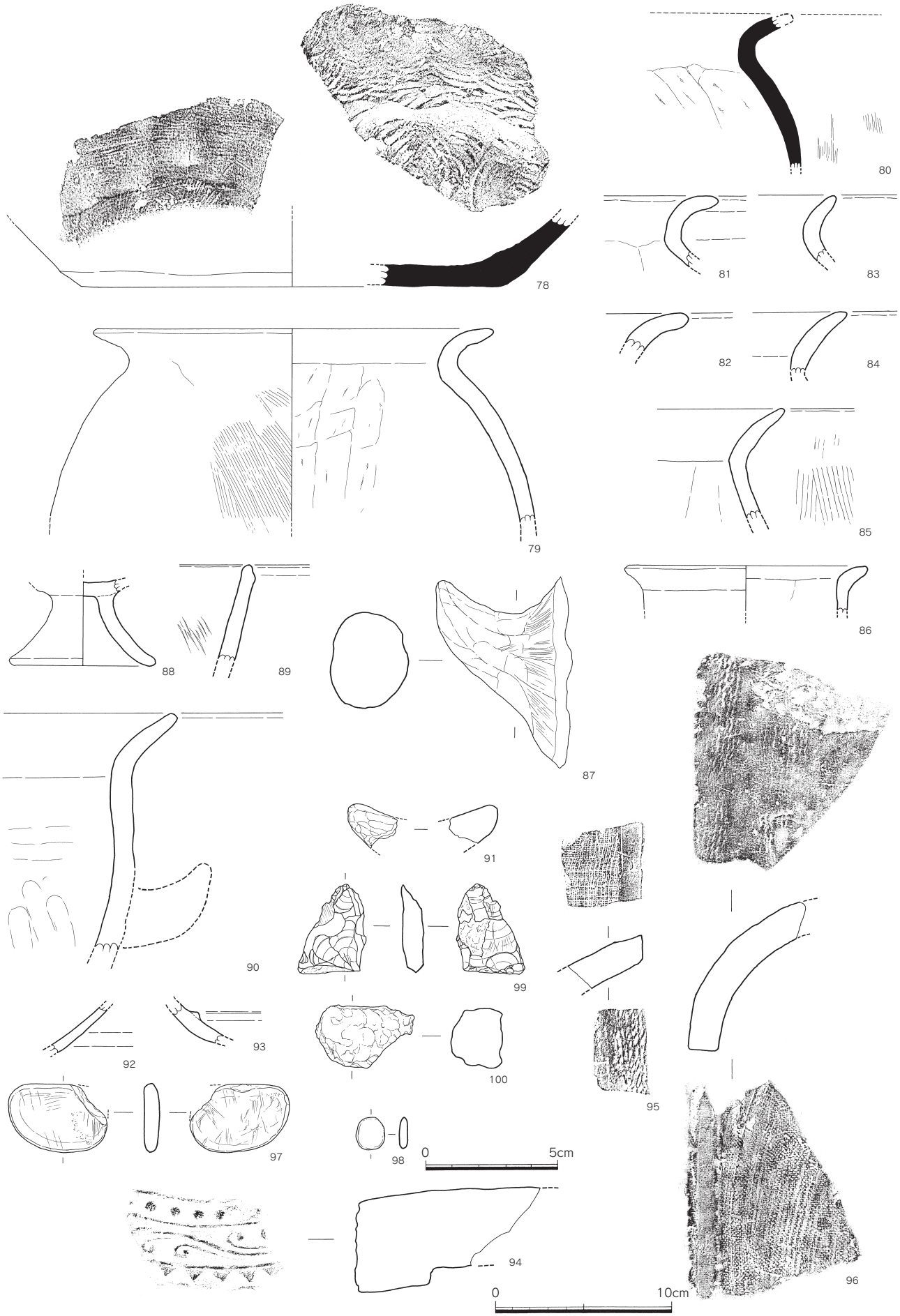


fig.73　11SX034出土遺物実測図（1/3,1/2）

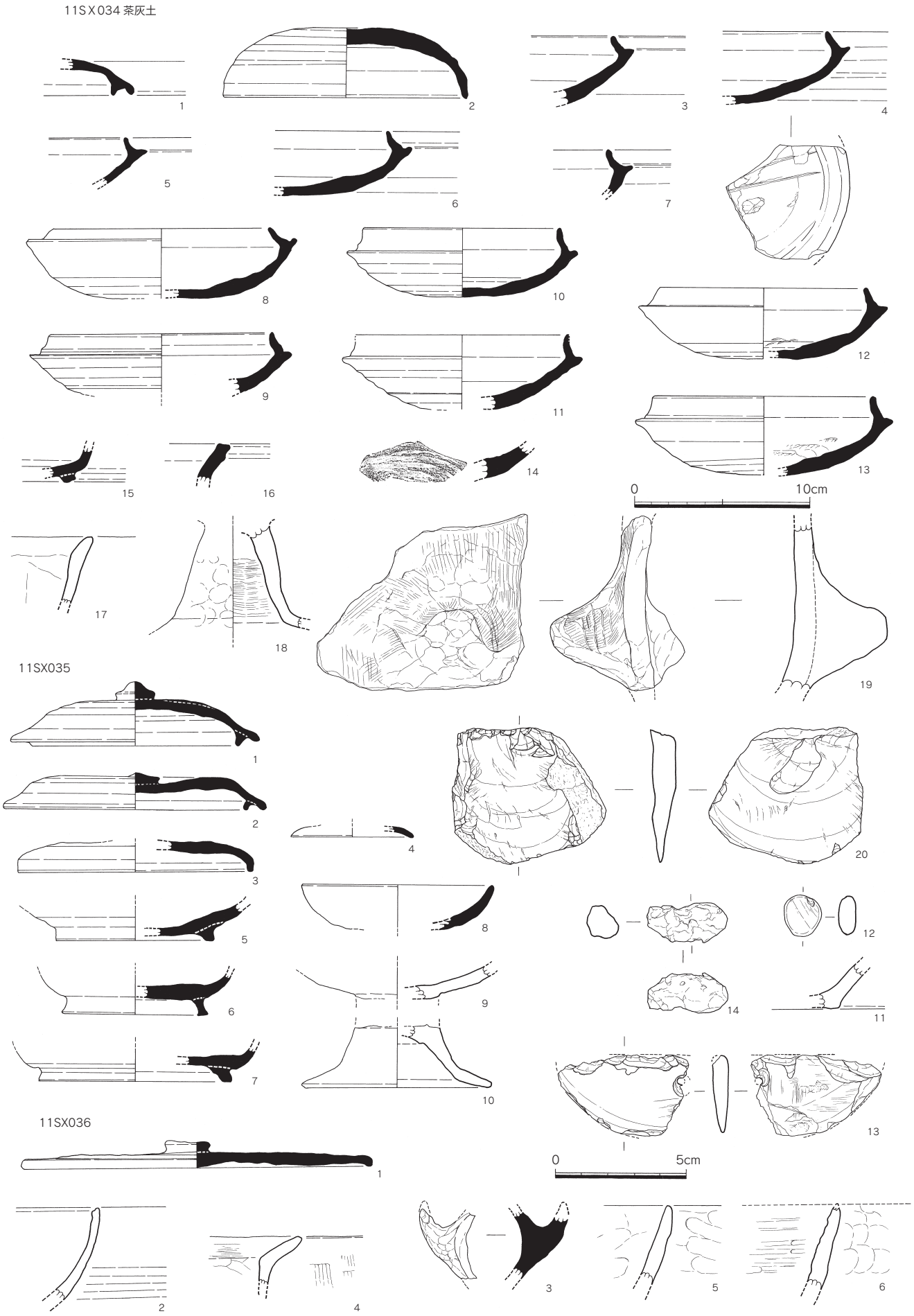


fig.74　11SX034茶灰土,035,036出土遺物実測図（1/3,1/2）

長沙窯系青磁
椀（92） 肌理の細かなザラザラな粒子状の白色の胎土を持ち、黄褐色の釉が施される。産地、器形ともに再考を要す。
弥生土器
壷（93） 頸の付け根部分の小片で、低い三角の突帯が付けられる。橙色を呈す。
瓦
軒平瓦（94） 朱文、偏向唐草文、鋸歯文からなる老司式のもので、顎の段は低く奥行きも短い。焼成は軟質で、表面は黒色化するが芯は白灰色を呈す。
平瓦（95） 縄目のタタキを有す。側辺と上部はヘラケズリで調整される。焼成は硬質で白灰色を呈す。
丸瓦（96） 縄目のタタキを有す。側辺はヘラケズリで調整される。焼成は軟質で外面は黒灰、内面は白灰色を呈す。
石製品
円礫（97,98） 扁平な楕円形を呈すもので、97は黒灰色の泥岩、98は灰色の泥岩を素材とする。碁子の可能性がある。
フレーク（99） 二次加工のある黒曜石製の剥片である。
金属製品
鉄滓（100） 黒色を呈す金属質の芯に茶色の鉄錆が覆う。
11SX034茶灰土出土遺物（fig.74、写真29）
須恵器
蓋（1） 三角の返りを持つもので、端部は丸く収められる。
坏蓋（2） 九州須恵器編年のIII型式に属すもので天井部が平坦で、体部との境に沈線が施される。
坏身（3 ～ 14） 同じくIII ～ IV型式に属すもので口縁端部は内に立ち上がり、やや深い形状を呈す。底部は回転ヘラケズリを施す。12 ～ 14は内底部に充て具の痕跡がある。焼成は硬質で淡灰色から暗灰色を呈す。
坏c（15） 短く外に開く形状の角高台を持つ。８世紀でも前半のものか。
壷（16） 口縁端部の外側が若干窪む形状を呈す。瓶のような製品の口縁部か。
土師器
小甕（17） 屈曲の少ない形状の口縁を持つ。茶褐色を呈す。
高坏（18） 内面にハケ状工具のナデが施される。古式土師器の特色を持つもので、橙褐色を呈す。
把手（19） ケズリとハケで成形されるもので、通常のものより突出が短い。明橙色を呈す。
石製品
フレーク（20） 風化した安山岩製の横長剥片で、二次加工は見られない。
11SX035出土遺物（fig.74、写真21）
須恵器
蓋（1 ～ 4） 1と2は三角の返りを持つもので、端部は丸く収められ、天井部には回転ヘラケズリが施される。焼成は硬質で1は灰白色、2は暗灰色を呈す。3は口縁端部が下方に折れ曲がる形状のもので、天井部には回転ヘラケズリが施さ、焼成は硬質で黒灰色を呈す。4は口縁端部が下方に曲がる形状で小型の製品の蓋である。

坏c（5 ～ 7） 短く外に開く形状ので、5は三角形、6と7は長めの角高台を持つ。焼成は硬質で5は暗灰色、6は黒灰色、7は灰白色を呈す。
土師器
坏（8） 浅い形状の丸底になる坏で、胎土は明橙色で内外面に赤色顔料が塗布されている。古代のものであれば大宰府では出土例が少ない。
高坏（9,10） 直接接合しないため別個体としたが、胎土などは類似している。坏部は底が丸く、脚部は柱径が高さに対して太い。明橙色を呈す。
弥生土器
壷（11） 平底からややカーブを描いて斜めに胴部が立ち上がる形状を持つ。淡褐色を呈す。弥生中期の須玖II式期のものか。
石製品
円礫（12） 扁平な楕円形を呈すもので、灰茶色の泥岩を素材とする。碁子の可能性がある。
石包丁（13） 背の部位を打ち欠いているもので、紐穴は両側から穿孔される。石材は小豆色をした立岩系の凝灰岩である。
金属関連製品
鉄塊系遺物（14） 短い棒状を呈し、全体が茶褐色の鉄錆に覆われる。
11SX036出土遺物（fig.74、写真23）
須恵器
蓋（1） 口縁端部は丸く若干下に膨らむ形状で、天井部には回転ヘラケズリが施される。焼成は軟質で全体に灰白色口縁部分のみ重ね焼きのため暗灰色を呈す。
鉢（2） 深いボウル状を呈し、口縁端部は若干沈線状に窪む。焼成は軟質で灰白色を呈す。

土師器
壷c（3） いわゆる薬壷形の壷の把手部分で、ユビオサエとナデによって成形される。
甕a（4） く字に屈曲する口縁を持つ。内面のケズリは斜位に施される。外面は淡茶色、内面は灰褐色を呈す。
製塩土器
坏（5,6） 外面にユビオサエのあとが残る胴部片で内面には布痕跡はない。6の内面には横方向の工具によるナデの条線が残る。淡橙褐色を呈す。II-b類。
11SX037出土遺物（fig.75 ～ 77、写真24 ～ 26）
須恵器
蓋（1 ～ 9） 1 ～ 3は内に向く三角の返りを持つもので、1は摘まみの中央が盛り上がる形状で天井部には回転ヘラケズリが施され、灰白色を呈す。2は酸化気味で淡灰茶色を呈す。3は返りがやや長め。4 ～ 9は口縁端部が垂下ないし三角形になるもので、8は端部の形状はあいまいに垂下する。焼成は硬質であるが、8のみ酸化焼成で淡茶色を呈す。
坏身（10 ～ 12） 同じくIV型式に属すもので口縁端部は短く内に立ち上がる。10はやや深い形状を呈す。底部は回転ヘラケズリを施す。焼成は硬質で灰白色から暗灰色を呈す。
坏c（13 ～ 20） 13 ～ 16は外に開く形状の高台を持つ。17はやや丈の高い角高台、他は背の低い角高台を有す。20は高台が丸くなる。焼成は硬質で暗灰色～淡灰色を呈す。20のみ軟質で灰白色を呈す。
大坏（21） 体部は直線的に開く形状で、底との境には回転ヘラケズリが施される。焼成は硬質で淡灰

色を呈す。
皿a（22） 平坦な底から直線的に開く口縁が折れて延びる。
高坏b（23） 脚部片で厚みが一定に仕上げられる。裾の端部はやや三角形気味につくられる。焼成は硬質で淡灰色を呈す。
鉢（24 ～ 27） 24は球形の胴部からあいまいに底部に移行する。底は手持ちのヘラケズリで逆く字に横線が入る形状のヘラ記号がある。焼成は軟質で灰白色を呈す。24はゆるいく字に口縁下で屈曲するもので、25は口縁が内反りで端部が丸く収められる。焼成は硬質で暗青灰色を呈す。胎土に角閃石が含まれる。27は上方に立ち上がる素口縁で体部上位に直角に折れる把手を持つ。
甕（28 ～ 34） 外面に平行する刻みのタタキと内面に同心円の充て具痕があるもので、28と32はタタキが擬似格子、31は格子目で、30と34は充て具が下位の部分で平行刻みのものが使用されている。30は肩の張る倒卵形の胴部にラッパ状に開く口縁が付けられる。焼成はすべて硬質で灰白色～暗黒色を呈す。
土師器
甕a（35 ～ 37） 35と36はL字に屈曲する口縁を持つ。内面のケズリは斜位に施される。35は淡黄褐色、36は外は淡橙色で内側は被熱して黒色化する。37はカーブを描いて屈曲する口縁を持ち淡橙色を呈す。
弥生土器
高坏（38） 細い脚部から横斜め上に急に開く坏部を持つ。弥生後期後半のものと思われ、橙色を呈す。
瓦
平瓦（39） 縄目のタタキを有す。外面は目の細かな布痕がある。焼成は軟質で淡黒色を呈す。

金属製品
鉄滓（40） 黒色を呈す金属質の芯に赤茶色の鉄錆が覆う。
11SX038出土遺物（fig.78）
須恵器
蓋（1） 内に向く三角の返りを持つもので天井部は回転ヘラケズリが施され、焼成は硬質で淡青灰色を呈す。
坏c（2） 底部は平板で、底部外側に付けられたごく低平な角高台を持つ。底部はヘラ切りのままで未調整。焼成は硬質で淡灰色を呈す。
甕（3,4） 3は平行刻み目、4は格子目のタタキを有す。焼成は硬質で黒灰色を呈す。
把手（5,6） ヘラとナデで成形された甕か甑の把手で、淡橙色を呈す。
瓦
平瓦（19） 縄目のタタキを有す。側辺端部はヘラ削りで調整される。焼成は軟質の瓦質で外は黒灰色、芯は白灰色を呈す。
11SX041出土遺物（fig.78、写真27）
須恵器
蓋（1 ～ 4） 1 ～ 3は内に向く三角の返りを持つもので、1は摘まみの中央が盛り上がる形状で天井部には回転ヘラケズリが施され、黒灰色を呈す。2は焼成不良で橙色を呈す。3は焼成が硬質であるが灰茶色を呈す。8のみ酸化焼成で淡茶色を呈す。4は口縁端部は下方に折れ、焼成は硬質で暗灰色を呈す。
坏c（5） 外に開くやや足の長い形状の高台を持つ。焼成は軟質で淡灰色を呈す。
坏（6,7） 全体に薄手で下半部は丸みを持ち、口縁端部は外にゆるく反る形状を持つ。焼成は硬質で淡

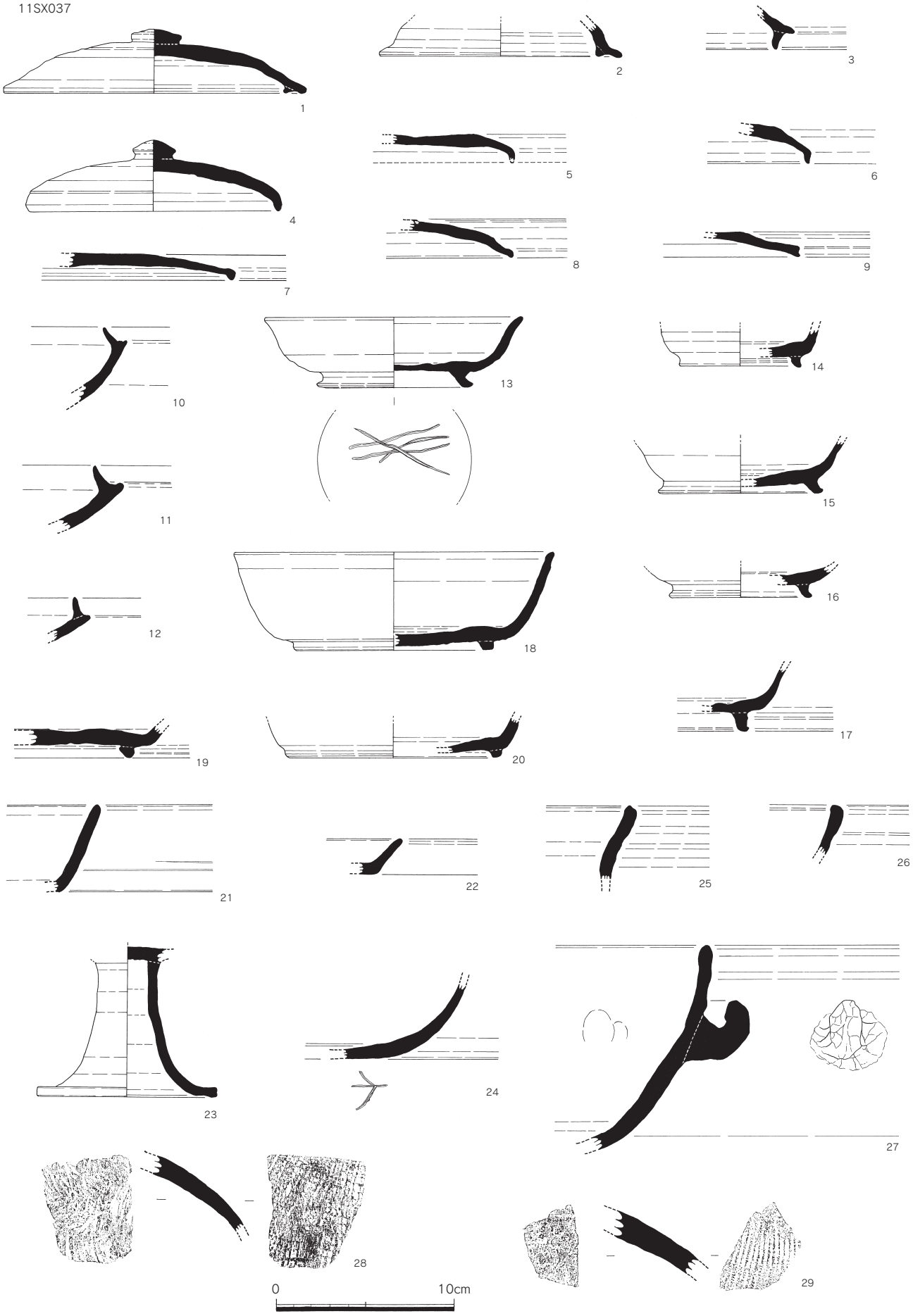


fig.75　11SX037出土遺物実測図（1/3）

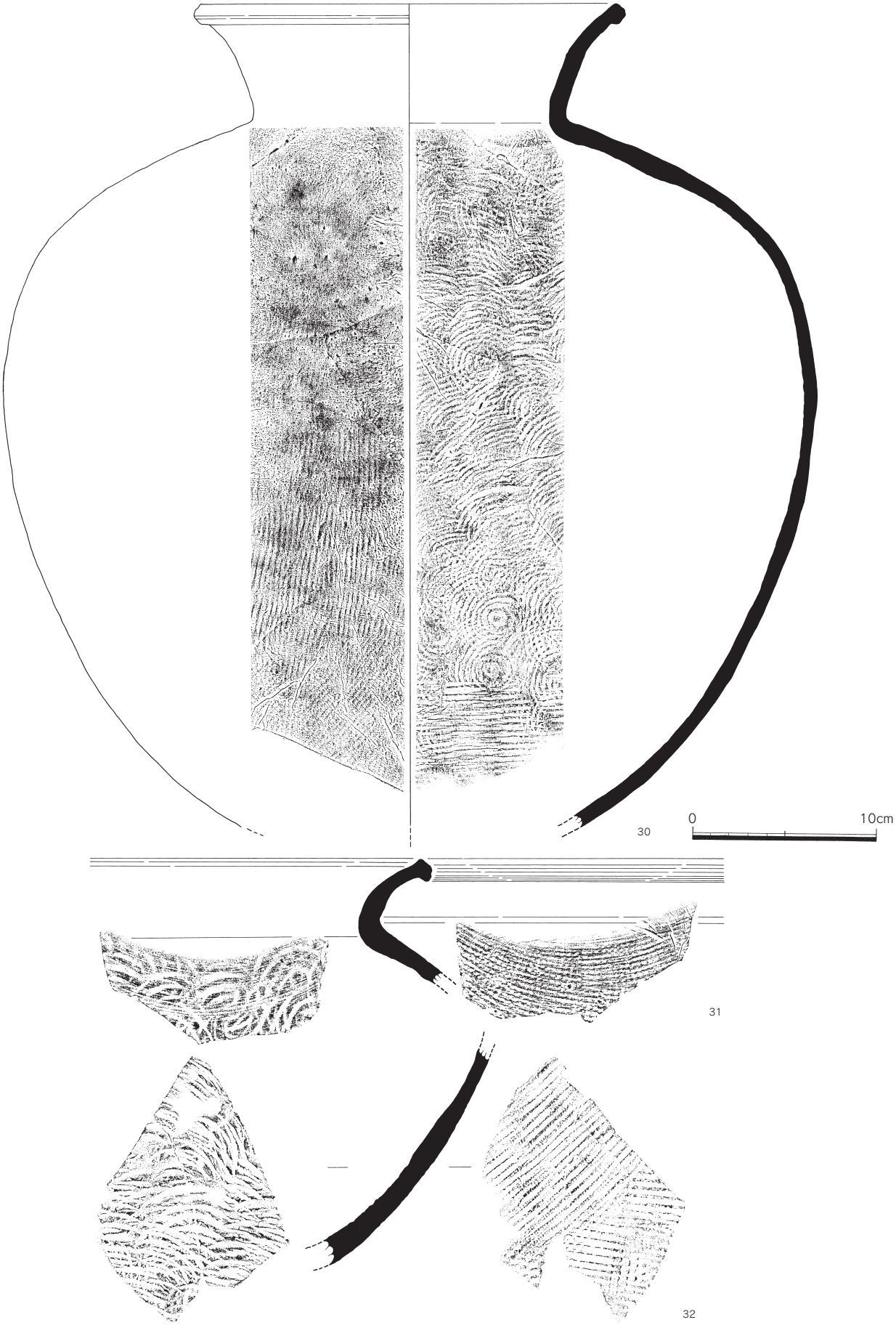


fig.76　11SX037出土遺物実測図（1/3）

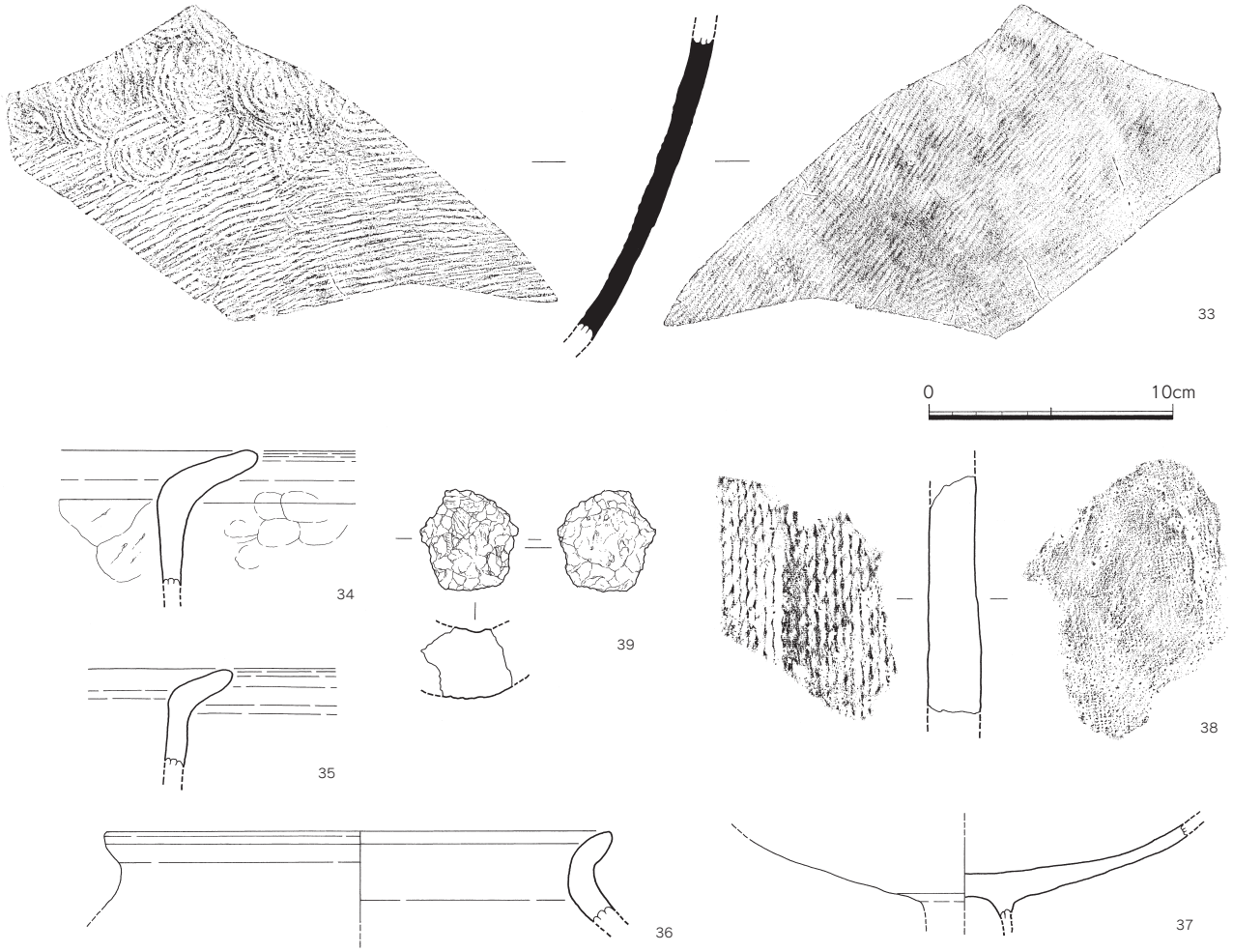


fig.77　11SX037出土遺物実測図（1/3）

灰色を呈す。
壷（8,9） 8は胴部中央に膨らむ算盤球形の胴部を持つ。口縁はラッパ状に開くものと思われる。底部はごく荒い手持ちのヘラ削りで、K字のようなヘラ記号が見られる。焼成は硬質で淡灰色を呈す。9は円盤状の厚い底を持つもので、底部外面にK字のようなヘラ記号が見られる。焼成は硬質で淡灰色を呈す。
11SX044出土遺物（fig.78・79、写真22・28）
須恵器
蓋（1 ～ 3） 1はⅣ型式のもので口縁端部が若干折れる形状で、焼成は硬質で黒灰色を呈す。2,3は内に向く三角の返りを持つもので、焼成は硬質で2は灰白色、3は淡灰色を呈す。
小坏c（4） 外にやや開く角高台を持つ小坏で、焼成は硬質で暗灰色を呈す。
坏c（5,6） 外に開く高台を持つもので、焼成が5は軟質で灰白色を、6は硬質で暗灰色を呈す。6は胎土に白色の砂が多く混入する。
高坏（7,8） 7は坏部は丸底で脚は三角形を呈し筒状部がない。胎土は白色の砂が多く混入する。焼成は硬質で暗灰色を呈す。8は筒状部を持つ短脚のもので、焼成は硬質で淡茶灰色を呈す。
壷（9,12） 9は球形の胴部下半の部分で、外面下位に平行刻みのタタキが残る。焼成はいわゆる生焼けの土師質で淡橙色を呈す。12は球形の胴部にラッパ状に開く口縁を持つ。肩の部分に浅く縦方向の平行刻みのタタキが施される。焼成は上位は硬質、下位の内側は軟質で淡茶灰色を呈す。
鉢（10,11） 10はゆるいS字の口縁を持つ。体部外面に平行刻みのタタキ、内面に同心円の充て具痕跡が残る。焼成は硬質で灰白色を呈す。11はゆるく外反する素口縁で端部は四角く成形される。
瓶（13） ゆるいカーブを描いて開く口縁を持つ。端部は方形気味に面を持つ。
甕（14） 大型の製品の肩の部分の破片で、外面は格子目のタタキが、内面には同心円の充て具痕跡がある。
土師器
坏（15） 丸底になりそうな形状で、口縁端部は一端折れて上に弱く屈曲する。残存状況が悪く調整は不明。明橙色を呈す。
甕（16） く字に屈曲する口縁を持つ。内面はケズリだが不鮮明。胎土に多くの角閃石が含まれる。火山灰由来の粘土を用いたものか。茶黒色を呈す。
11SX045出土遺物（fig.79・80、写真28 ～ 30）
須恵器
坏蓋（1） Ⅳ型式のもので口縁が体部との境で若干折れる形状で、天井部は回転ヘラケズリを施す。焼成は生焼けで淡茶色を呈す。
蓋（2 ～ 8） 2 ～ 4は内に向く三角の返りを持つもので、焼成は硬質で淡灰色を呈す。5は低平な宝珠形のつまみを持ち、天井部は回転ヘラケズリを有す。焼成は硬質で暗青灰色を呈す。6は平板なボタン状のつまみである。7は返りのない鍔のある帽子のような形状で天井部は回転ヘラケズリを有し、焼成は硬質で灰白色を呈す。8は小型の深い形状をなし、天井部から肩にかけてカキ目を有す。焼成は硬質で黒灰から灰白色を呈す。
坏身（9,10） Ⅳ型式に属すもので口縁端部は短く内に立ち上がる。9の底部は回転ヘラケズリを施す。焼成は硬質で灰色を呈す。
坏c（11,12） 11は外に開く高台を持つもので、坏部は丸底で深い形状をとる。外面下半には回転ヘラケズリを有す。焼成は硬質で黒灰色を呈す。12は足の長い角高台を持つ。焼成は軟質で灰白色を呈す。
坏（13） 直線的に立ち上がる体部を持ち口縁は先細の形状を成す。焼成は硬質で外面は黒灰色内面は

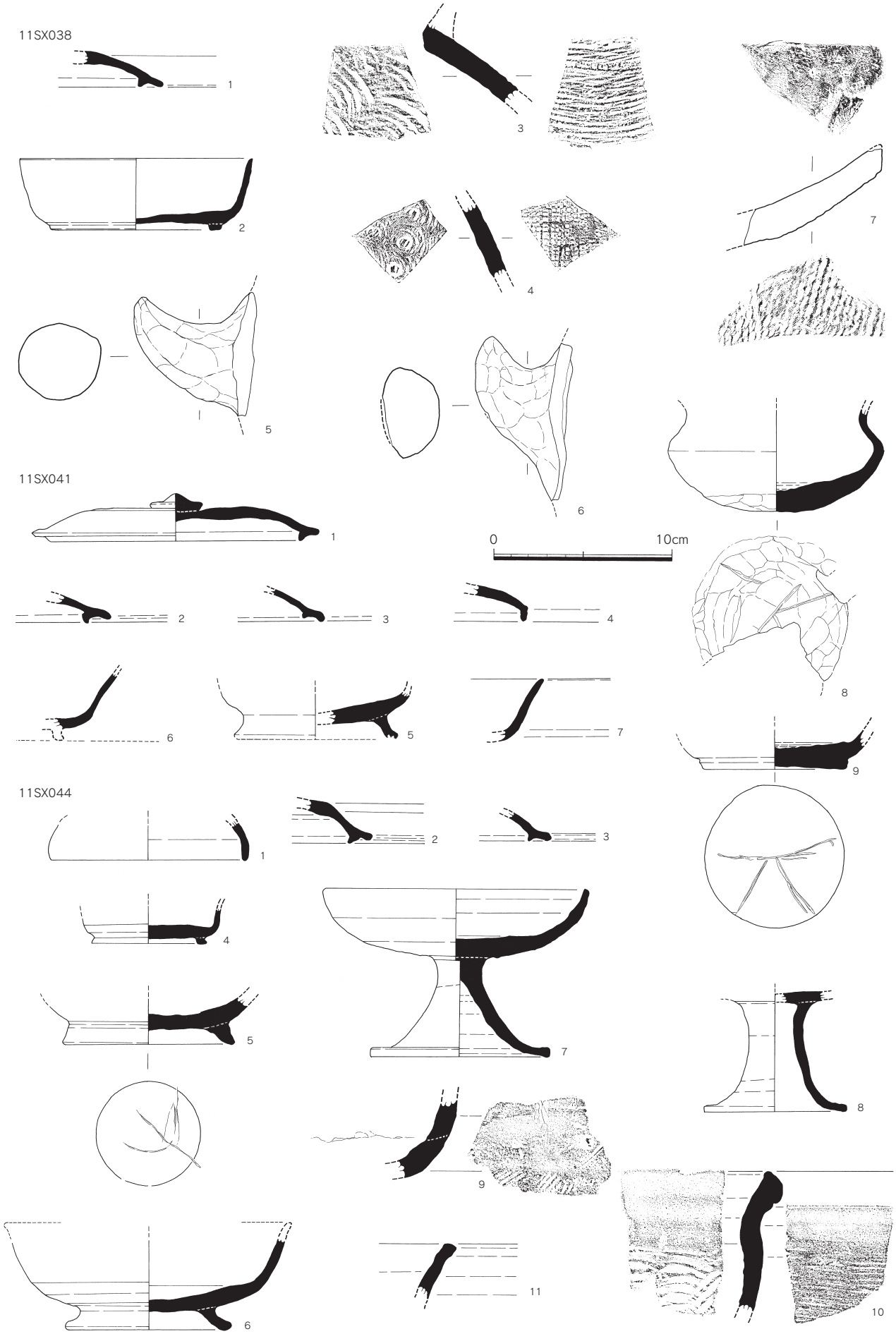


fig.78　11SX038,041,044出土遺物実測図（1/3）

灰白色を呈す。
高坏（14） 三角形の形状に急に開く裾部を呈す。端部は側辺に面を持つ。焼成は硬質で赤茶色を呈す。
壷（15,16） 15は長胴の体部から直線的に短く開く口縁を持つ。肩にカキ目を有す。焼成は硬質で灰白色を呈す。16は球形で肩の張る胴部の上位に2条の沈線が入る。焼成は硬質で上部は灰被り状態で灰白色を、下部は黒灰色を呈す。
甕（17） 肩の張る体部から短く開く口縁を持つ。擬似格子目のタタキを有す。
土師器
甕（19 ～ 23） 19と21はカーブを描いて屈曲する口縁を持ち淡橙色を呈す。20はく字を呈す口縁を持ち茶褐色で胎土に角閃石を多く含む。
甑（21,22） 直線的に開く体部を持つ。内面は胴部では縦、口縁付近は斜位方向のケズリを施す。淡橙色を呈す。
製塩土器
甕（24,25） 丸底で厚手の球形の胴部を持つ。外面には平行刻みの横方向のタタキが見られる。内面下半はユビオサエが顕著で上位は横方向のナデが入る。淡橙色を呈す。
高坏（26） 筒状の脚部から横に広がる坏部につながる。明橙色を呈す。
石製品
石槍（27） 柳葉形の端正な形状を呈すもので、基部は欠損している。風化した安山岩製で縄文時代の所産であろう。
石鏃（28） 片面に大剥離面を残す剥片鏃で、刳り込みの深い二等辺三角形を呈す。黒曜石製。縄文後期以降の所産か。
剥片（29） 黒曜石の原石を加工する初期の段階で剥ぎ取られた、原石の表皮を持つ薄片である。
すり石（30） 長細い円礫を用いたもので、図の下部先端は痘痕状の窪みと擦り痕が見られる。緑色の泥岩製である。
石鍬（31） 短かく稜を持つ短冊状のもので、図の下部は小規模な剥離がみられ刃部の可能性がある。緑色片岩が用いられる。
11SX049出土遺物（fig.80）
須恵器
蓋（1 ～ 4） 1は低平な宝珠形のつまみを持ち、天井部手持ちのヘラケズリにへ字のヘラ記号を有す。2 ～ 4は内に向く三角の返りを持つもので、焼成は1,2は硬質で1は白灰色、2は暗灰色を呈す。3,4は焼成が軟質で灰白色を呈す。
坏c（5） 外に開く高台を持つもので、焼成は硬質で灰白色を呈す。
製塩土器
坏（6） 外面にユビオサエのあとが残る胴部片で内面には布痕跡はない。明橙褐色を呈す。II-b類か。
11SX079出土遺物（fig.80・81、写真31）
須恵器
蓋（1 ～ 3） 内に向く三角の返りを持つもので、焼成は1は軟質で灰白色、2,3は硬質で灰色を呈す。
坏身（4） Ⅳ型式のもので口縁端部が短く内に折れて立ち上がる形状で、底は回転ヘラケズリを施す。焼成は硬質で黒灰色を呈す。
坏c（5 ～ 7） 外に屈曲して開く高台を持つもので、6の底部には回転ヘラケズリが外側に施される。焼成は5,6が硬質で暗灰色を、7は軟質で灰白色を呈す。

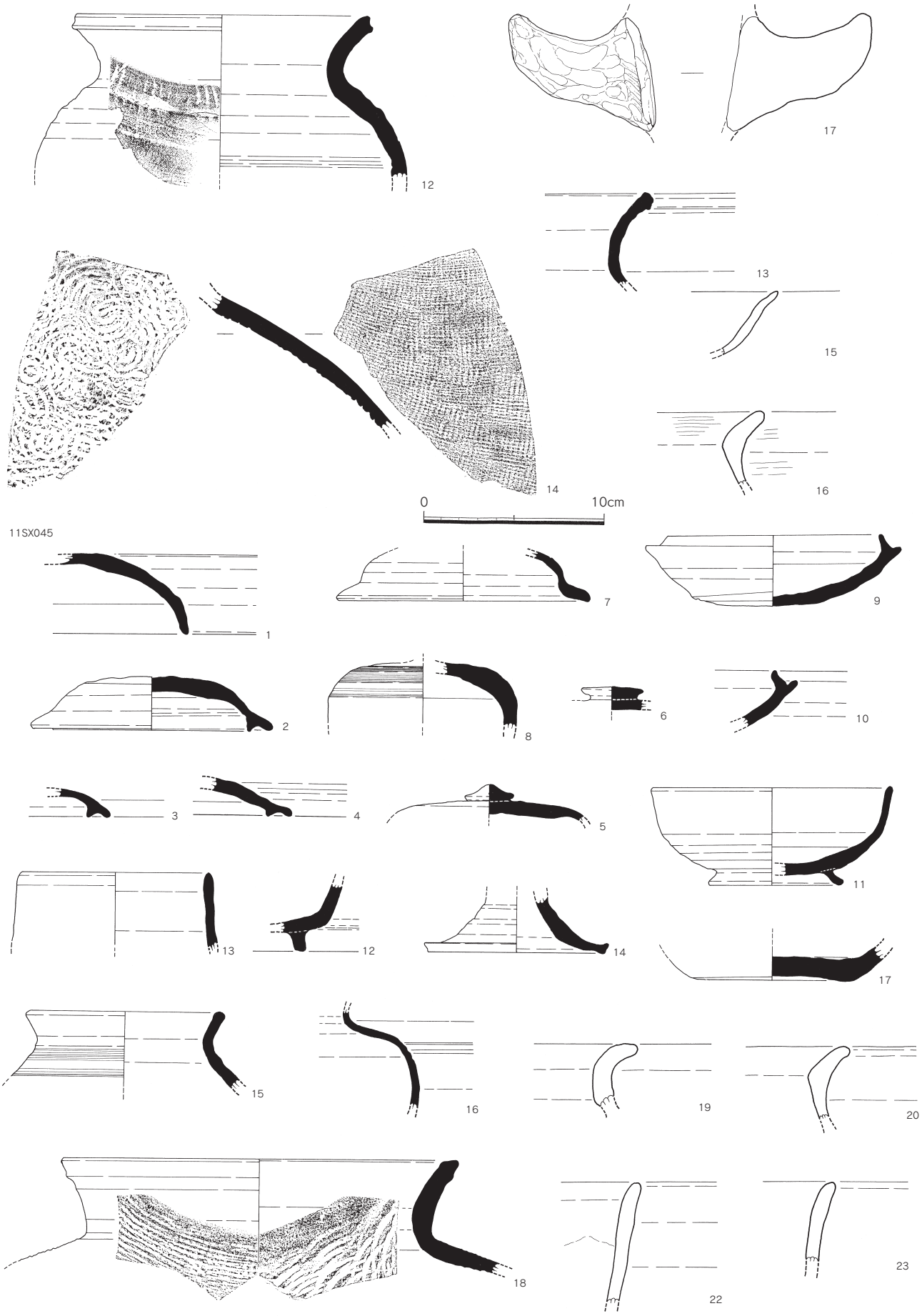


fig.79　11SX044,045出土遺物実測図（1/3）

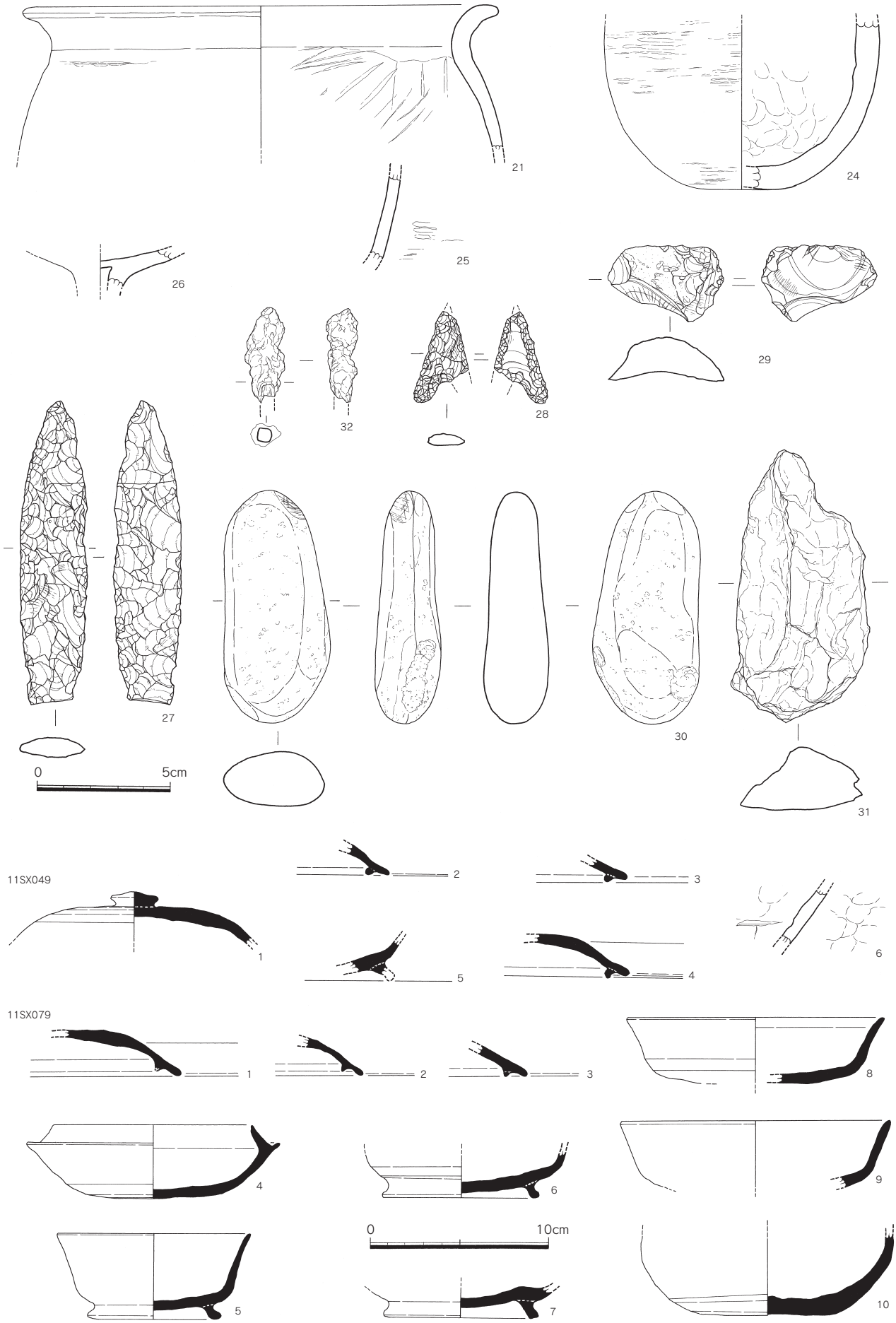


fig.80　11SX045,049,079出土遺物実測図（1/3,1/2）

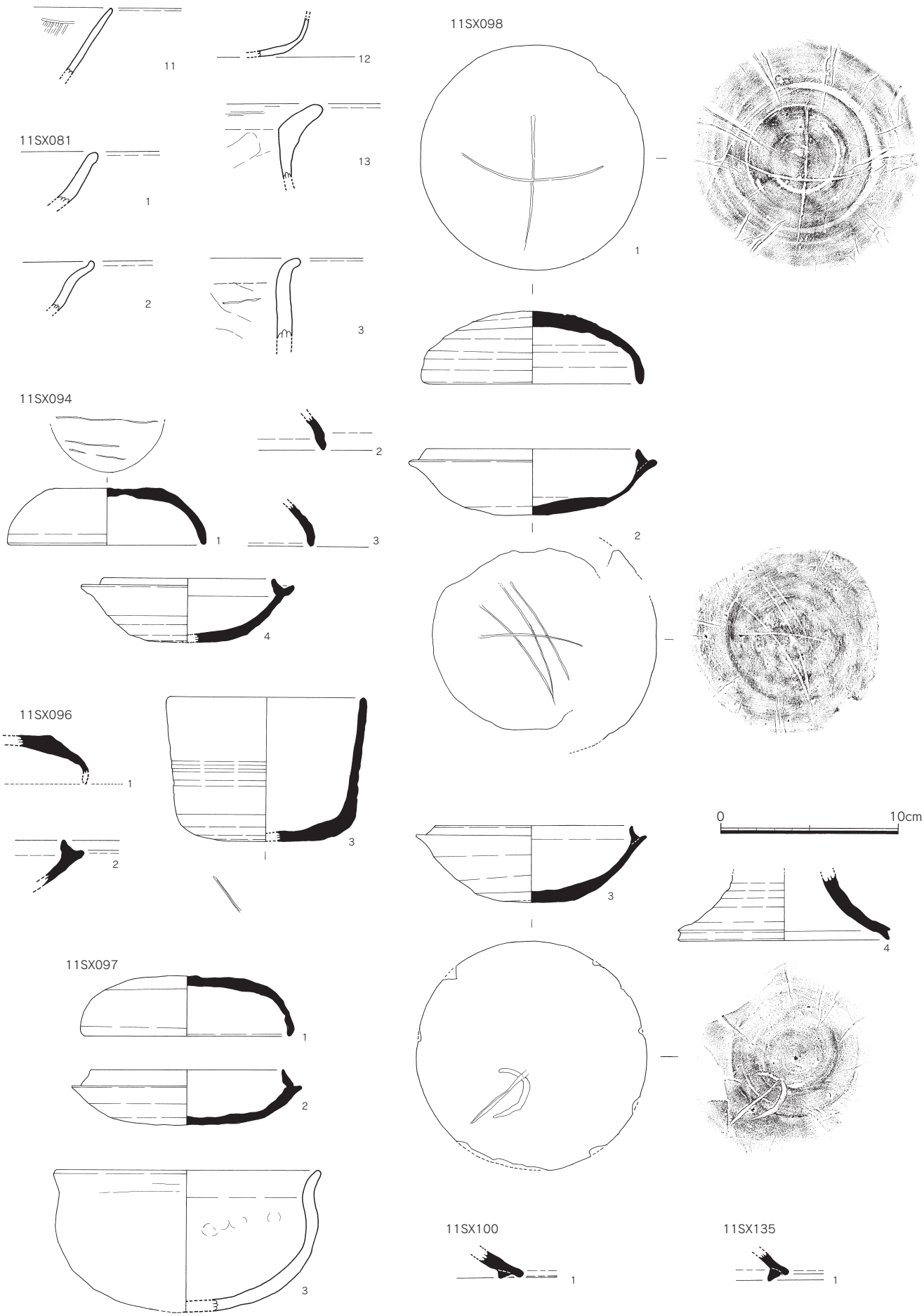


fig.81　11SX079,081,094,096,097,098,100,135出土遺物実測図（1/3）

坏a（8,9）　やや底部が膨らみ、口縁端部はやや外反り気味の形状を呈す。焼成は硬質で淡灰色を呈す。
壷（10）　扁平な球形の胴部を呈すもので、底部は回転ヘラケズリを施す。焼成は硬質で暗灰色を呈す。
土師器
坏（11,12）　11は直線的に広がる体部の内側に山形と縦筋による暗文を持つ。明橙色を呈す。12は丸く膨らむ胴下半部を持つもので、淡橙色に白色の粘土がマーブルの縞模様に入る。
甕（12）　短くく字に屈曲する口縁を持つ。明橙色を呈す。

11SX081出土遺物（fig.81）

土師器
坏（1,2）　1はゆるくカーブを描いて開く形状で、2は口縁端部が一端折れて上に弱く屈曲する。残存状況が悪く調整は不明。明橙色を呈す。
甕（3）　短くL字に屈曲する口縁を持つ。明橙色を呈す。

11SX094出土遺物（fig.81、写真28）

須恵器
坏蓋（1 ～ 3）　Ⅳ型式のもので口縁が体部との境で若干折れる形状で、1は天井部は切り離し後は未調整。焼成は硬質で灰色を呈す。
坏身（4）　Ⅳ型式のもので口縁端部が短く内に折れて立ち上がる形状で、底は回転ヘラケズリを施す。焼成は硬質で灰色を呈す。

11SX096出土遺物（fig.81）

須恵器
坏蓋（1）　Ⅳ型式のもので口縁が体部との境で若干折れる形状で、1は天井部は切り離し後手持ちのヘラケズリを施す。焼成は硬質で黒灰色を呈す。
坏身（2）　Ⅳ型式のもので口縁端部がごく短く内に折れて立ち上がる形状で、焼成は硬質で外は灰被りの状態で内面は黒灰色を呈す。

坏（3） 直線的に少し開く程度の口縁部の立ち上がりを持つもので、体部中央に2条の沈線が施される。底部には1条のヘラ記号がある。焼成は硬質で黒灰色を呈す。

11SX097出土遺物（fig.81）

須恵器

坏蓋（1） Ⅳ型式のもので口縁が体部との境で若干折れる形状で、1は天井部は切り離し後回転ヘラケズリを施す。側辺には2条のヘラ記号がある。焼成は硬質で灰色を呈す。

坏身（2） Ⅳ型式のもので口縁端部が短く内に折れて立ち上がる形状で、焼成は硬質で外は灰被りの状態で内面は黒灰色を呈す。

土師器

坏（3） ゆるいく字に曲がる口縁を持ち、胴部は深いボウル状をなす。明橙色を呈す。

11SX098出土遺物（fig.81、写真32）

須恵器

坏蓋（1） Ⅳ型式のもので口縁が体部との境で若干折れる形状で、1は天井部は切り離し後回転ヘラケズリを施す。天井部には×のヘラ記号がある。焼成は軟質で灰白色を呈す。

坏身（2,3） Ⅳ型式のもので口縁端部が短く内に折れて立ち上がり、2の底部はヘラ切り後は未調整。3条の平行線を斜めに1条が横切るヘラ記号が見られる。焼成は軟質で灰白色を呈す。3は底部に回転ヘラケズリと弧状と1条の太めのヘラ記号がある。焼成は硬質で暗灰色を呈す。

高坏(4） 筒状部から短くラッパ状に開く裾部で、端部に沈線が施される。焼成は硬質で淡茶褐色を呈す。

11SX100出土遺物（fig.81）

須恵器

蓋（1） 内に向く三角の返りを持つもので、焼成は硬質で外は灰茶、内は暗茶灰色を呈す。

11SX135出土遺物（fig.81）

須恵器

蓋（1） 内に向く三角の返りを持つもので、焼成は軟質で外は白灰色を呈す。

各土層出土遺物

灰茶色土出土遺物（fig.82、写真33）

須恵器

蓋（1 ～ 6） 1 ～ 4は内に向く三角の返りを持つもので、焼成は硬質で1は淡茶灰、他は灰色を呈す。5は口縁端部が三角形につくられ、天井部がヘラ切り後にナデが施される。焼成は硬質で淡灰色を呈す。6はドーム状の宝珠つまみの部分で焼成は硬質で暗灰色を呈す。

坏c（7,8） 7は外に屈曲して開く高台を持つもので、8は低い角高台を持つ。焼成は7が軟質で灰白色を、8は硬質で灰色を呈す。

鉢（9） 屈曲の弱いく字を呈す口縁を持ち、胴部には外側に横方向の平行刻みのタタキ、内面に同心円の充て具痕跡がある。焼成は硬質で灰色を呈す。

甕（10） く字に開く口縁部で、端部内面がゆるく窪む。焼成は硬質で灰～暗灰色を呈す。

土師器

壷（11） 球形の胴部上面に蛸口のような短く先に細い頸、口縁部が立ち上がる。淡橙色を呈す。大宰府では未分類。

甕（12,13） 12はカーブを描いて屈曲する口縁を持ち淡橙褐色を呈す。13はく字を呈す口縁を持ち内側は淡橙灰色で外面は明橙色を呈す。

瓦
平瓦（14,15） 縄目のタタキを有す。側辺は分割の深い切り込みの痕跡がある。焼成は硬い須恵質で暗灰色を呈す。15は軟かい瓦質で外面は黒色、芯は灰白色を呈す。
灰茶土出土遺物（fig.82・83）
須恵器
蓋（1,2） 内に向く三角の返りを持つもので、 1 は小型で返りが口縁外側に付く古い形状を持つ。焼成は硬質で淡灰色を呈す。
坏c（3 ～ 7） 3,4は外に開く高台を持つもので、5 ～ 7は角高台を持つ。焼成は3が軟質で灰茶色を、他は硬質で灰色～灰白色を呈す。
大皿c（8） やや外に開く角高台を持つもので、焼成は硬質で灰色を呈す。
椀（9） 先が細く内に反りながら立ち上がる体部の形状を呈す。焼成は硬質で暗灰色を呈す。
高坏（10,11） 長脚のタイプで、10は坏部が箱型を呈し、下半部外面に横沈線とカキ目を有す。焼成は硬質で暗灰色を呈す。11は長い筒状の脚部を持つb類で、焼成はやや軟質で白灰色を呈す。
壷蓋（12） 平坦な端部から折れてやや開き気味の口縁がのびる。天井部外面は回転ヘラケズリが施される。焼成は硬質で外面は暗青灰色を、芯は茶褐色を呈す。
壷（13 ～ 18） 13と14は玉葱形の体部からラッパ状に広がる口縁が付けられる。焼成は硬質で淡灰色を呈す。15は体部径に対してかなり小さな形のカーブしながら立ち上がる口縁が付けられるもので、焼成は硬質で茶褐色を呈す。16は玉葱形の体部の肩の部分にカキ目が施される。底部は手持ちのヘラケズリが入り丸底になるものと思われる。焼成は硬質で黒灰色を呈す。17は外広がり気味の角高台に玉葱形の体部が付く。焼成は硬質で上位は暗青灰色を、下位は淡灰茶色を呈す。18は球形の胴部の肩に横方向の沈線と連続する斜行線が入れられる。焼成は軟質で灰白色を呈す。
甕（19,20） 19はく字に開く口縁部で、端部下が突出する。焼成は硬質で黒灰色を呈す。20は外面に平行刻みのタタキと内面に車輪文の充て具痕跡を持つ。焼成は硬質で淡灰色を呈す。
製塩土器
甕（21） 外面に擬似格子目のタタキを有し、明橙色を呈す。
坏（22） 円柱状の厚い底部を持つ。くすんだ橙褐色を呈す。在地の土師器には類例がなく、底の形状から製塩土器の可能性を考えた。
瓦
平瓦（23 ～ 25） 縄目のタタキを有す。小口と側辺はヘラケズリで調整される。焼成は軟かい瓦質で外面は黒色、芯は灰白色を呈す。
茶色土出土遺物（fig.84、写真33）
石製品
砥石（1） 多面の棒状を呈すもので、面は被加工品にあわせて凹状を呈す。黒色泥岩製。
淡茶土出土遺物（fig.84、写真34）
須恵器

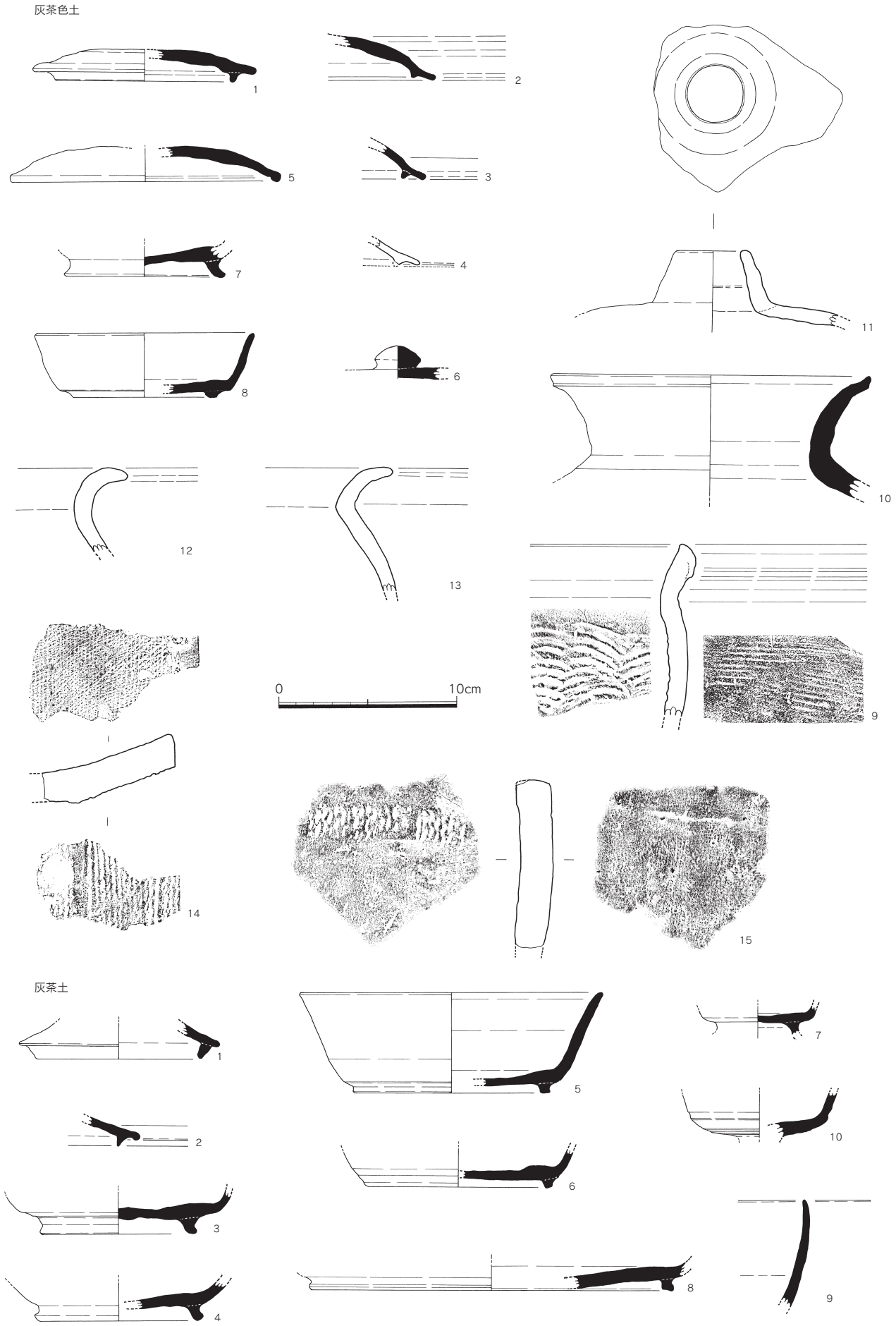


fig.82　灰茶色土、灰茶土出土遺物実測図（1/3）

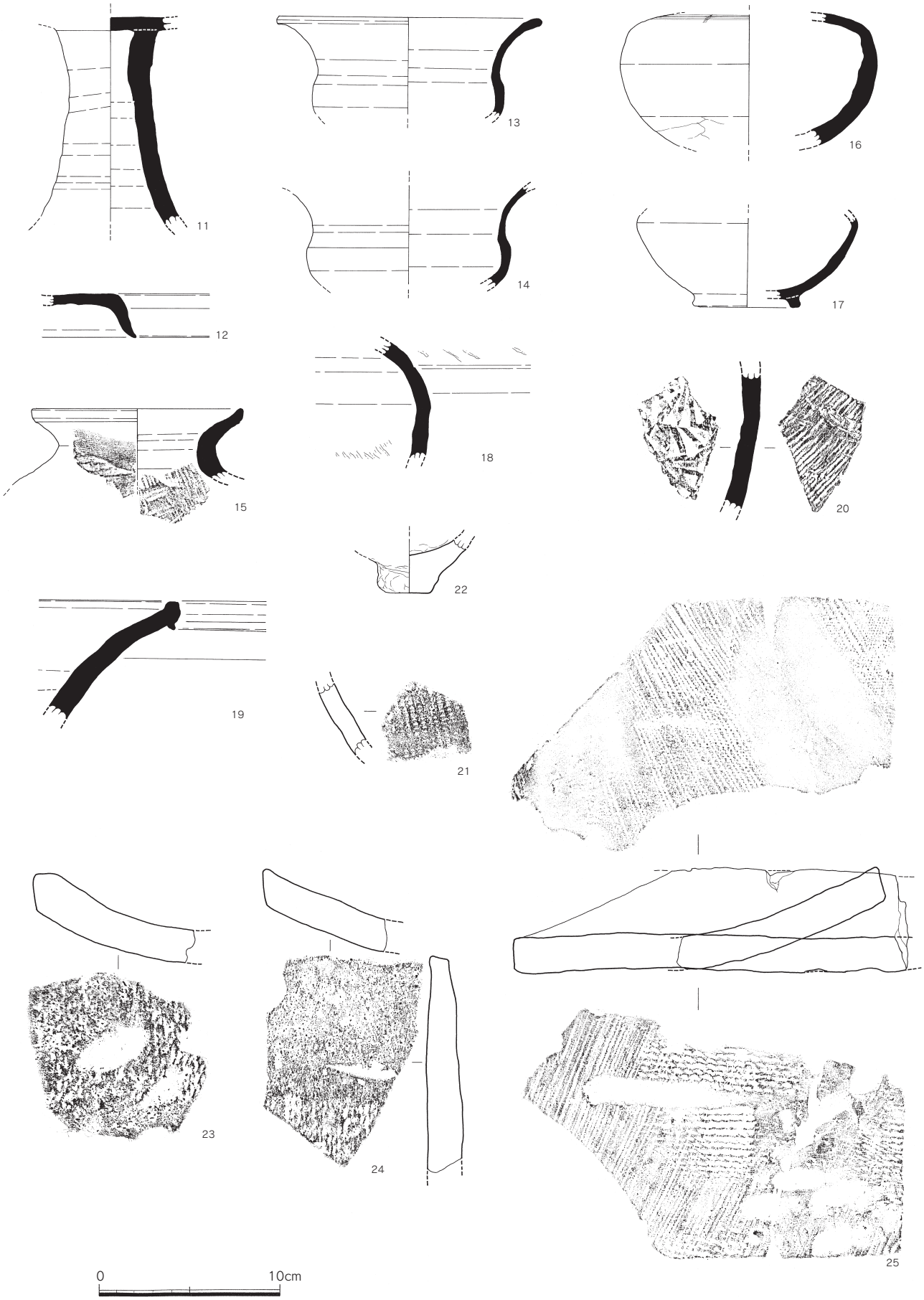


fig.83　灰茶土出土遺物実測図（1/3）

坏蓋（1,2） Ⅳ型式のもので口縁が体部との境で若干折れる形状で、1は箱型の深い形状になるもので、器壁が薄い。天井部と体部の境に小さな三角形の突帯が巡る。口縁端部は内に傾く平坦面を持つ。焼成は灰被りで硬質で外は灰白、内は暗灰色を呈す。2は丸い形状の天上部を持ち、外面は手持ちのヘラケズリが施される。
蓋（3 ～ 5） 3,4は内に向く三角の返りを持つもので、2は天井部が回転ヘラケズリを施す。焼成は硬質で3は暗灰色、4は淡青灰色を呈す。5は口縁端部が短く下に折れる、6は三角形を呈す形状を成す。焼成は硬質で5は暗青灰、6は黒灰色を呈す。
坏身（7,8） Ⅳ型式のもので口縁端部が短く内に折れて立ち上がり、焼成は硬質で7は淡灰白、8は暗灰色を呈す。
坏c（10 ～ 13） 外に開く角高台を持つもので、焼成は硬質で10が灰茶色を、黒灰色～灰白色を呈す。
高坏（14 ～ 16） すべて短脚のもので、14の坏部の底面は平坦。15は脚が短く筒状部がない。焼成は硬質で黒灰色～灰白色を呈す。
壷×鉢（17） やや膨らむ底部で、外面はケズリの後にナデが、内面はナデが施される。
甕（18） やや長胴の体部からく字に開く口縁を持つ。体部は横方向の平行刻みのタタキと内面は同心円の充て具が見られる。焼成は硬質で暗灰色を呈す。
土師器
坏（19） 底は膨らむ形状で、体部は直線的に開く。淡橙色を呈す。
小甕（20,21） 20はゆるくカーブして開く口縁を持ち、明橙色を呈す。21は平坦な傾向の底を持ち、淡橙色を呈す。
製塩土器
甕（22） 外面に擬似格子目のタタキを有し、明橙色を呈す。

弥生土器
壷（23） やや厚底の底部から斜め上に体部が開く。明橙色を呈す。弥生後期の所産か。
瓦
軒平瓦（24） 朱文、偏向唐草文、鋸歯文帯から構成される老司式のもの。顎の段は1cmほどの低いもので、幅は5cmほどを測る。焼成は軟質の瓦質で外は黒灰色、芯は白灰色を呈す。
石製品
玉類（25） 直径1cmほどの管玉。滑石製。
剥片（26,27） 黒曜石製の小さな薄片で、二次的な加工などは見られない。
金属関連製品
鉄滓（28,29） 28は芯が黒色を呈す金属質で、表面は赤褐色の錆が覆う。29は芯が黒色を呈す鉱物質のもの。
茶褐土出土遺物（fig.85 ～ 88、写真35）
須恵器
蓋（1 ～ 7） 1は三角の返りを持つもので、返りは外から見えない位置にある。端部は丸く収められる。天井部には回転ヘラケズリが施される。焼成は硬質で黒灰色を呈す。他は口縁端部が下方に折れ三角形を呈す形状のもので、天井部はヘラ切り後にナデが施される。焼成は硬質で灰白色～黒灰色を呈す。3,4はボタン状のつまみが付けられる。
坏身（8） Ⅳ型式のもので口縁端部が短く内に折れて立ち上がり、底部は回転ヘラケズリの上に1条の

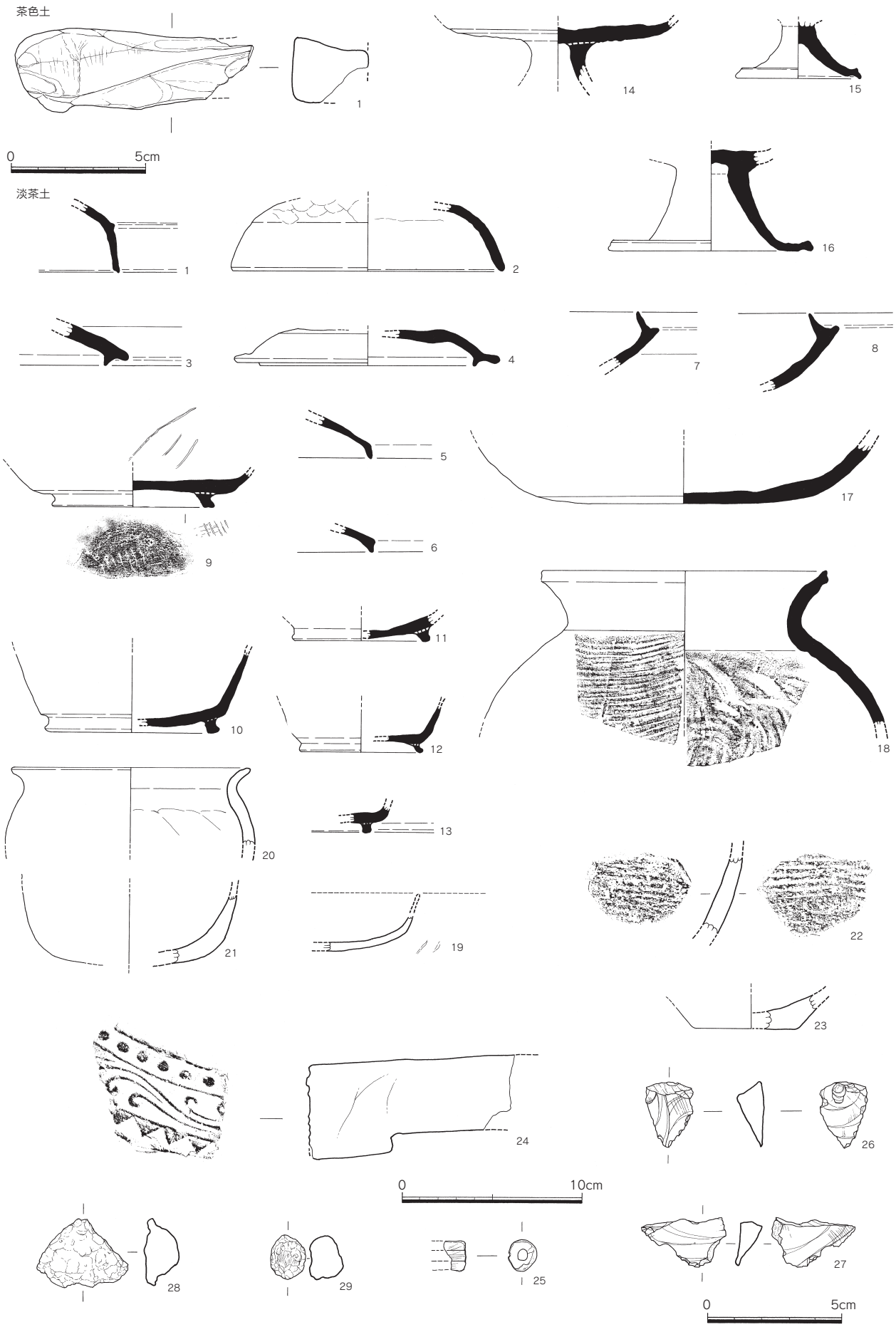


fig.84　茶色土、淡茶土出土遺物実測図（1/3,1/2）

ヘラ記号が施される。焼成は硬質で暗灰色を呈す。
坏c（9 ～ 15） 9 ～ 11は角高台を持つもので、12の底部は回転ヘラケズリが施され、他はヘラ切りのままである。焼成は硬質で淡灰～灰白色を呈す。
大坏c（16） 細身の先が外に折れる角高台を持つもので、体部は直線的で、底部は回転ヘラケズリが施さる。焼成は硬質で白灰色を呈す。
盤（17） カーブする体部に端部を丸く収める口縁部を持つ。底部は強い回転ヘラケズリを施す。焼成は硬質で灰色を呈す。
高坏（18,19） 直線的な筒状部を持つ8世紀的な要素を持つもので、19は大型のb類になる。焼成は硬質で18は淡灰色、19は白灰色を呈す。
壷（20 ～ 22） 20は外に開く脚部を持ち、玉葱形の胴部の肩に2条の沈線とその間に端整な波状文を施す。焼成は硬質で暗灰色を呈す。21は球形の胴部の肩に横方向の沈線と連続する斜行線が入れられる。焼成は軟質で白灰色を呈す。22はく字に開く口縁を持つ。焼成は硬質で暗灰色を呈す。
甕（23 ～ 30） 23はく字に開く口縁を持つ。焼成は硬質で灰白色を呈す。24は肩の張る胴部から一端頸が上に立ち上がって広がる形状を呈す。胴部内面には目の細かな同心円の充て具痕跡が薄く見られる。焼成は硬質で全体に灰茶色を、頸部外面は光沢のある茶色を呈す。外来系の製品である。25から27は頸部外面に波状文を施すaタイプの甕で27は淡茶色、他は暗灰～黒灰色を呈す。29は口縁端部が上に屈曲するbタイプのもので灰色を呈す。21は胴部に対して小さくく字に開く口縁を持つもので、硬質で淡青灰色を呈す。
土師器
大坏c（31）平坦な底の外側に角高台が付けられ、体部は反らずに直線的に開く形状をなす。残りの状況が悪く調整は不明。明橙色を呈す。
坏c（32） 体部の外側に外開きの高台が付けられ、体部は丸みを持って立ち上がる。
坏（33） 丸底傾向で体部はゆるいく字形に屈曲して広がる。口縁端部内側にごく浅い段があり平城京分類の坏Aに形状が似る。淡橙色を呈す。
坏d（34） 底が小さく斜めに体部が立ち上がる形状で、一部にミガキbが見られる。内面は煤が付着する。明橙色を呈す。
鉢c（35） 平坦な分厚い底部から斜め方向に体部が延びる。底には先に細い丈のある高台が付けられる。明橙色を呈す。
甕（38 ～ 40） 38はカーブする肉厚の口縁を持つ。色調はくすんだ橙色を呈す。39は肩が一度すぼむ形状で、口縁は短くカーブしている。内面はユビオサエのままで、外面に薄く平行刻みのタタキの痕跡がある。淡橙色を呈す。40は若干外に開く口縁の形状を呈す。内面のケズリは縦方向。赤茶色を呈す。
移動式竈（41,42） 前面に焚き口を持つ素口縁のもので、41は歪みがあるためうまく径が復元できないが、図以上の大きさを持つ。淡橙色を呈す。42は焚口の庇部分が剥落したものである。
黒色土器A類
椀c（43 ～ 45） ややカーブを持つ底に外広がりの高台が付けられる。内面の調整は不明。43は明橙色、44、45は灰褐色を呈す。
越州窯系青磁

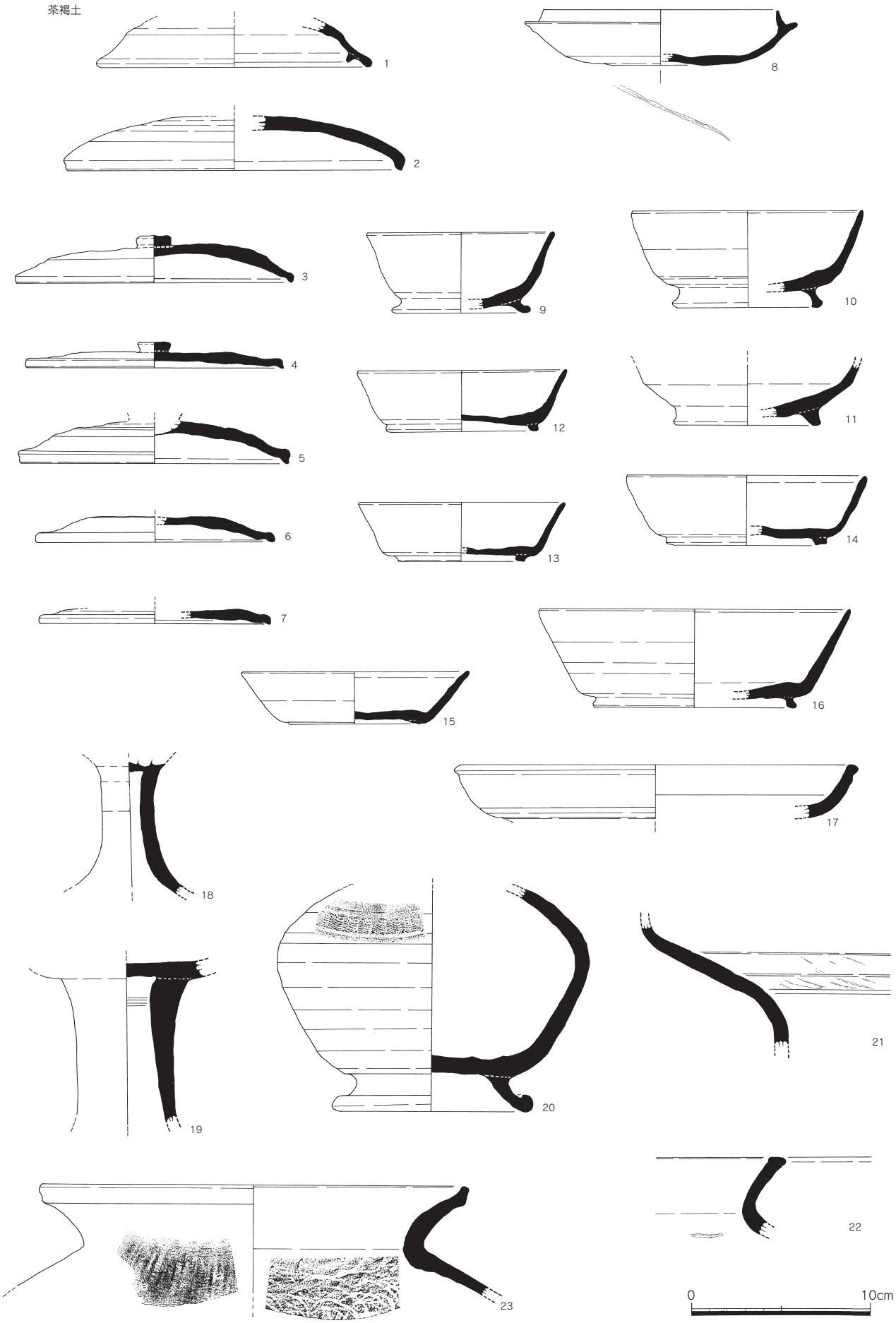


fig.85　茶褐土出土遺物実測図（1/3）

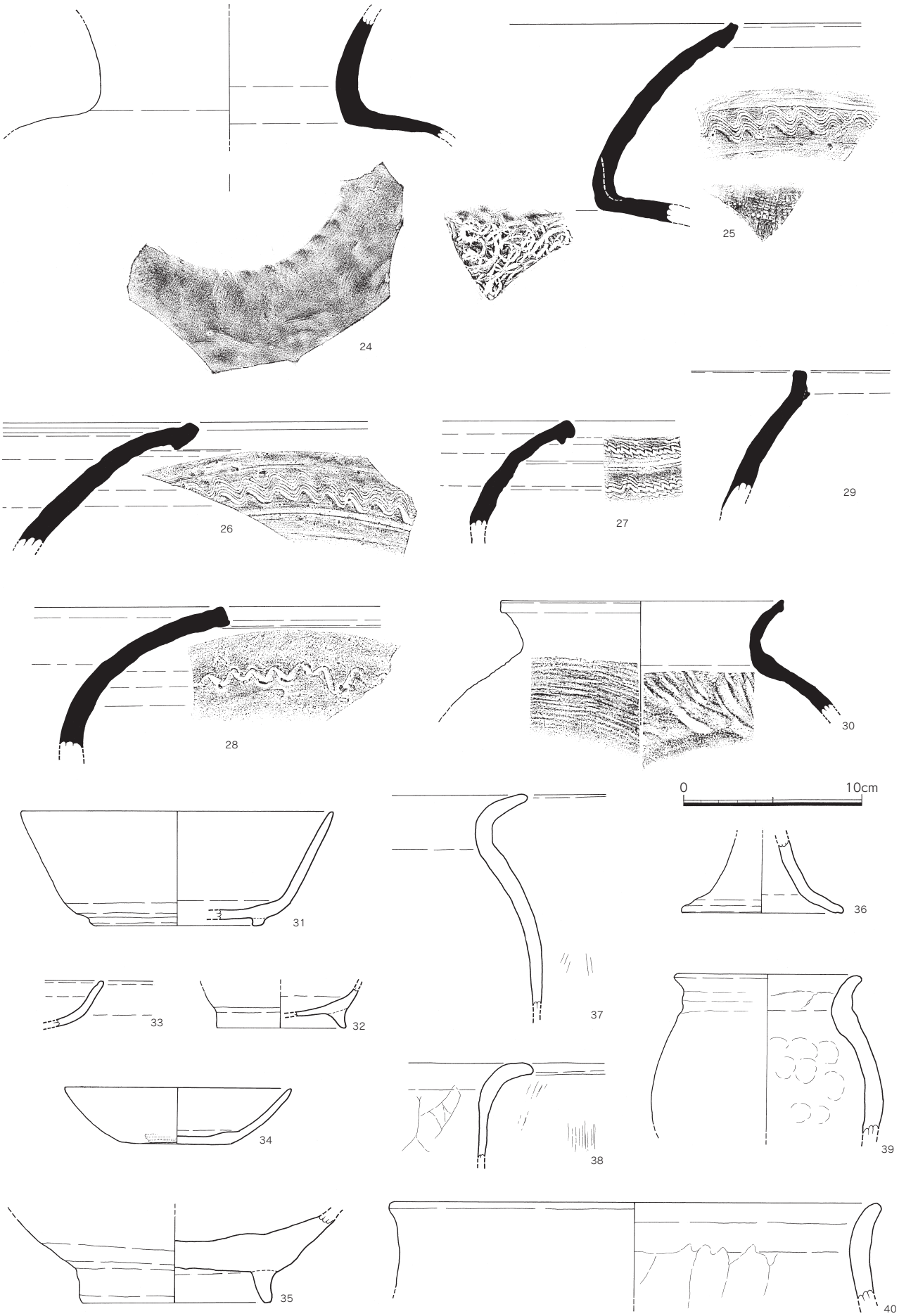


fig.86　茶褐土出土遺物実測図（1/3）

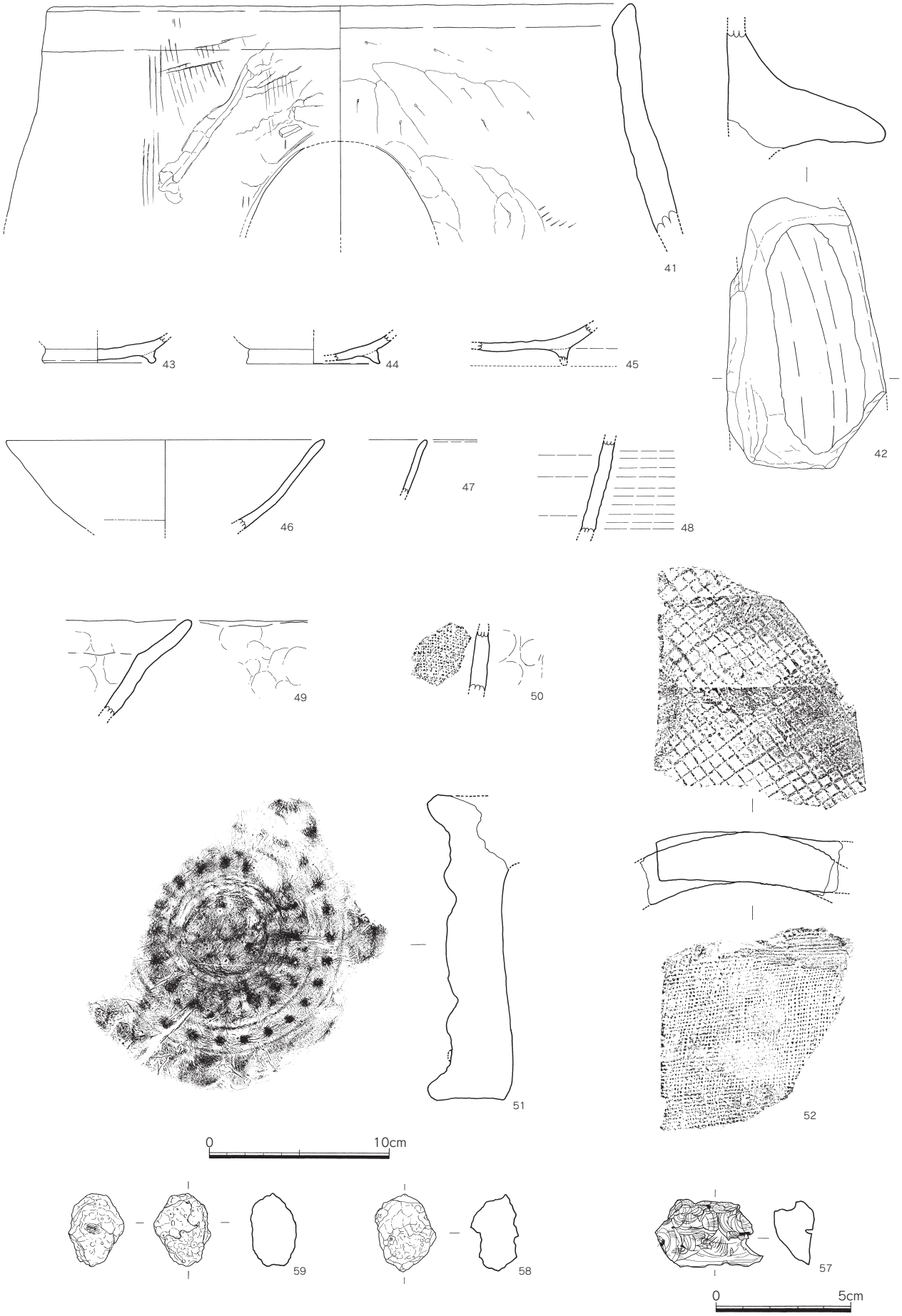


fig.87　茶褐土出土遺物実測図（1/3,1/2）

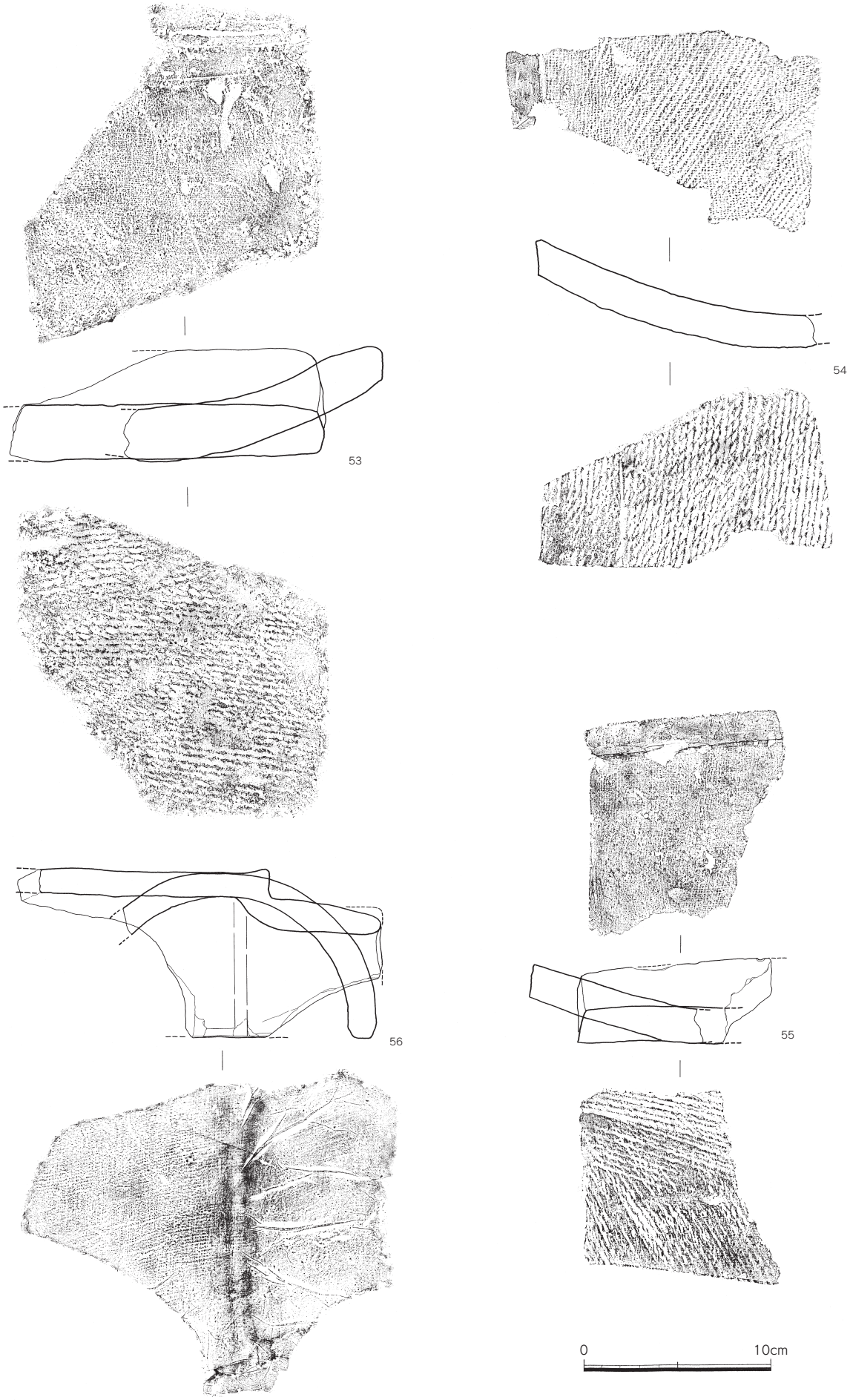


fig.88　茶褐土出土遺物実測図（1/3）

椀（46，47） 精製された明灰色の胎土にオリーブ色の釉が掛かる。46の下部外面は露胎している。露胎部分は茶灰色を呈す。
壷（48） 精製された明灰色の胎土に灰褐色の釉が厚く掛かる。外面はロクロの凹凸が顕著である。
製塩土器
坏（49,50） 49は口縁が一端屈曲する形状で、ユビオサエの痕跡が顕著に残る。明橙色を呈す。II-b類。50は体部は直線的で内面に布目が残る。橙色を呈す。I類か。
瓦
軒丸瓦（51） 周縁が高い形状を持つもので、外縁には鋸歯文帯が見られる。老司式から派生した意匠のもので、九州歴史資料館分類の291型式にあたる。焼成は軟質で灰白色を呈す。
丸瓦（52,56） 52は正格子目のタタキを有す。焼成は硬質で灰色を呈す。56は無文で玉縁部分はロクロ引きの条線が見られる。焼成は軟質で表面は黒色、芯は灰白色を呈す。
平瓦（53～55） 縄目のタタキを有す。小口や側辺はケズリで調整される。焼成は53が軟質で表面は黒色、芯は灰白色を呈し、他は硬い須恵質で暗灰～白灰色を呈す。
石製品
剥片（57） 黒曜石原石の表皮を持つもので、加工初期に破棄されたものであろう。本遺跡からは複数出土しており、縄文後期以降頃にこの場で加工されたものと考えられる。
金属関連製品
鉄滓（58,59） 芯は黒色を呈す鉱物質のもので、表面は赤褐色の鉄錆に覆われる。
灰色土出土遺物（fig.89）
須恵器
壷a（1） 球形の胴部に丈のある角高台が付けられる。下半部外面は回転ヘラケズリが施される。焼成は硬質で外面が黒灰色、内面が淡青灰色を呈す。
土師器
把手（2） ハケ工具とナデで成形された短い突起状の把手で、明橙色を呈す。
移動式竈（3,4） 3は焚口の上部、4は裾部の破片か。3は内面がケズリの後にナデが施される。内面は褐色で外面は淡橙色を呈す。
表土出土遺物（fig.89）
須恵器
大皿c（1） 底部外側に角高台が付けられ、底部外面は回転ヘラケズリが施される。口縁は端部で短く外反する。焼成は硬質で淡灰色を呈す。
鉢b（2） バケツ形の体部の下に縦耳が付けられる。外面の下地は回転ナデでのちに弱い回転ヘラケズリが施される。焼成は硬質で暗灰色を呈す。
甕a（3） く字に短く開口する口縁を持つ。焼成は硬質で外は灰被りで灰白色を、内面は黒灰色を呈す。

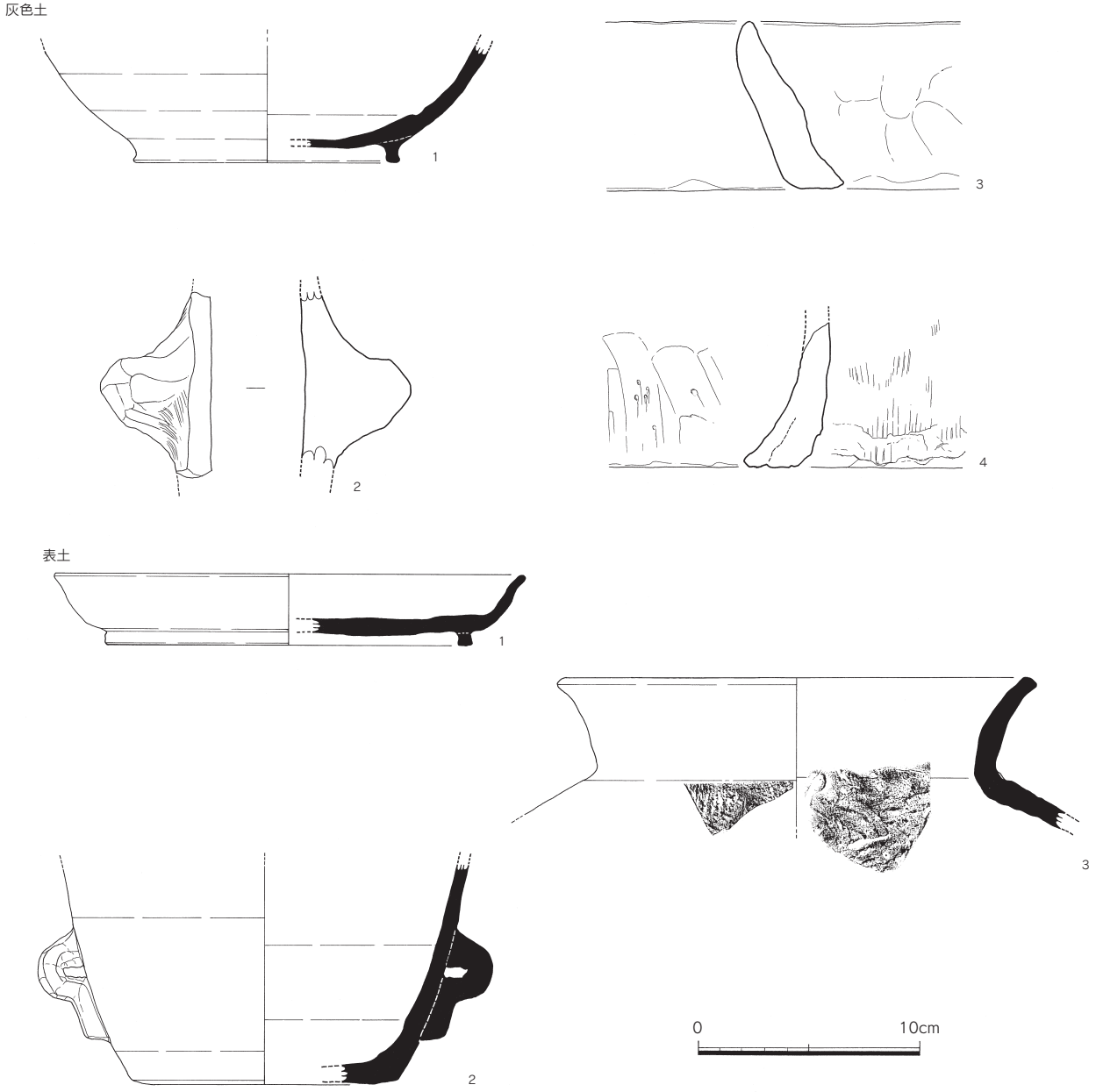


fig.89　灰色土、表土出土遺物実測図（1/3）

5. 小結

大野城のある四王寺山の南裾部にあたり、標高45mほどの丘陵東斜面に位置する。かつて御笠団の印が発見された地点から南約100mで、第6次調査の南隣接地にあたる。今回の調査では軍団、特に御笠団関連の遺構の検出が期待された。

遺構検出面は大きく3分され、上層で8世紀後半～ 10世紀代、中層で8世紀前半～中頃、下層で7世紀代と考えられる。

下層遺構群は11SX045,097とした淡茶色の堆積土壌の下面、砂レキ地盤の上面で検出されるもので、ピットは少なく、炭粒が入った幾つかの小規模な土壙で構成される。須恵器には九州須恵器編年のIV型式の坏を含んでいることから7世紀中頃以降の形成と考えられる。また、西側の斜面の一部が方形に削られた箇所が観察された。したがってこの段階から谷部を計画的に利用することが始まったと考えられる。11SX045,097淡茶土上面には屋外炉と考えられる11SX100や炭が溜まった遺構11Sx126などが形成され、住居などは見られない。集落というより何か生産に特化した形でこの場が利用されていた観がある。

中層遺構群は11SX035とした茶色粘土の下面から検出されたもので、ピットと土壙で構成されており、特に焼土壙がめだっている。この焼土壙は内容物の選別では鉄片や骨片は1点も見られず、伏せ焼きという技法の炭焼き窯である可能性も考えられる。近隣の例では製鉄関連の遺構の周辺で見つかることがあり、後述する上層の遺構との関連が気になる。同じ遺構は北隣接地の第6次調査でも見つかっている。分布は調査区北側の11SX076と093と南側の11SX010,133,135,108の二つの群に分かれる。

上層はピットが稠密に存在し、8世紀代中頃から9世紀前半頃には土地利用が頻繁におこなわれ11SD165の東西溝をはさんで北と南に2棟ずつの掘立柱建物2群が検出された。南の11SB170の柱穴から緑釉皿と白磁片が出土している。南北両方のエリアに一つずつ円筒形の炉の底が見つかり、北側では少量の鍛造によると考えられる鉄片が検出されており、ここで小規模な鍛冶がおこなわれていた可能性が指摘される。

今回の調査でも軍団に直接的な関係を示す遺構の存在を明らかにすることはできなかったが、土地利用が7世紀に遡り、この時期に斜面を削り取る形成があり、8世紀後半以降には区画溝と掘立柱建物と炉が組み合う遺構のセットが見られた。小規模な鍛冶と見られる炉の存在は遺構の性格を考える上で一つの鍵となるが、生産は出土した鉄片の量からは規模の大きなものを想定することはできない。

焼土壙や焼土がつまった土壙は御笠団印出土地周辺での各調査で点々と見つかっており、一つの共通点としての意義をもっている。

遺物では9世紀前半代に位置づけられる越州窯系青磁と胎土が土師質の緑釉陶器（京都系）が散見されること、同じ頃のものとして須恵器の壷、甕類と一部供膳具に肥後系と思われる硬質で褐色焼成気味の須恵器が一定量存在することなどが特記されよう。また、中、下層においては須恵器IV型式のものとVI,VII型式のものが供伴している状況があり、小片ではあるが瓦が出土している。瓦は8世紀以降では老司系の縄目叩きのものから、9世紀にかかる時期のもとして格子目のタタキのある瓦が散見された。またこれ以外に焼成が褐色系で平行刻みの叩き具をしようしたものが少量存在する。福岡平野での7世紀から8世紀の瓦の様相変化を整理、概観した状況から、須恵器IV型式A（古相）が主体となる段階の土器形成手法期（1期）（太宰府市神ノ前窯、福岡市那珂遺跡22次SX-04ほか）、須恵器IV型式B（新相）が主体となる段階で土器形成手法に一部桶巻きなど瓦製作技法が取り入れられた時期（2期）（大野城市大浦窯、月ノ浦窯、平田窯、春日市浦ノ原A地区竪穴ほか）、須恵器V、VI型式が主体となる土器形成手法が淘汰される段階（3期）（福岡市那珂遺跡13次215住居、21次61号井戸ほか）、須恵器VII型式が主体となる大

宰府系瓦生産が開始される段階（4期）が設定されるが、本遺跡から出土した先の瓦の焼成状況は硬質傾向であるが褐色系の色調を持ち、叩き具は平行刻みを用いているところから筑紫での瓦生産3期に相当するものと考えられる。出土量が少ないことから詳細は言及できないが、大宰府政庁第1期段階に相当するものであり、政庁後背谷部において出土している意義は考える必要があろう。

遺跡の性格としては下層の7世紀段階に於いては本調査区北西側の7,9,10次地点のような住居のある居住域ではなく、炉や炭を廃棄した溜まりなどがあり、鉄塊系遺物や鉄滓などが出土していることから小規模な金属生産に関連する様相が指摘される。8世紀後半までの中層の8世紀には小規模な土坑や焼土坑群があり、群として南北に分かれる傾向が見られる。8世紀代から9世紀にかけての上層では調査区中央に南北の区画を意図したと思われる溝が掘られ、その南北に小規模な掘立柱建物が展開する。建物は正方位を採用せず柱筋もズレが見られ柱穴も小さく、政庁周辺の建物とは比較にならない。小規模な鍛冶炉などもあり官衙周辺の営繕などに係わる関連施設とも考えられるが、結論は慎重にならざるを得ない。

Ⅳ．まとめ

本報告（第３，４，５，６,11次調査区）での人の活動は、遺物の出土状況から縄文、弥生時代にその痕跡が認められる。縄文は6次調査の北側の地山直上に単純層が存在した。弥生は中期須II式段階の遺物が３，６,11次で見られ、石包丁などを伴うことから一定の居住があった可能性は考えられる。しかし、確実に遺構が展開するのは7世紀を待たねばならない。

本報告調査区の北側にある西に傾く谷での第7,9,10次調査区では、正方位に制約された溝や小ピットからなる区画と掘立柱建物、竪穴住居跡からなる集落が検出されている。そこでは竪穴住居は九州須恵器編年のⅣ期のものとⅣ～Ⅵ期のものがあるとされ、それらが7世紀末頃に整地で均されて区画と掘立柱建物群からなる遺跡構成に変容するようである。

この様相は本報告の軍団印が出土した地周辺とは多少異なるといえる。こちらでは上記第７，９,10次調査区の７世紀代に始まる計画的な土地の利用は見えにくく、11次調査区のある南側では７世紀後半段階では、炭焼きに関わる可能性がある焼土坑と、鉄を素材とする金属加工の場として散漫に土地が利用されていた。焼土坑は11次西の丘陵反対斜面での大宰府条坊跡第97次調査区でも複数検出されており、ある程度丘陵を取り巻いて広域に展開する状況が見られる。

８世紀前半から中頃には顕著な活動は見られない。再び積極的な人の活動が見られるのは８世紀後半から９世紀に至ってであり、丘陵裾部全体が面的に整地されて、小規模なピットからなる非計画的で密度の濃い生活面として利用されている。出現する建物の方向は正方位に捕らわれることなく、また、小規模で建物は直交軸の採用も疑わしいものであり、政庁周辺の官が域の様相とは比べるべくもない。

8世紀末9世紀初頭では初期の緑釉陶器、長沙窯系青磁、越州窯系青磁等の出土が特筆されるが、小規模な消費に留まっている。ただ、6次調査の木棺墓は在地首長クラスの優位な副葬品を持つもので、これが集落的様相に組み込まれるものか、まったく背景が異なるものかは、今回の調査では判断できなかった。土師器が供伴しないために詳細な帰属時期は掴めないが、いずれにしても包含層の遺物を見てもⅥ期後半以降のものは量的には存在しないと言え、墓自体は遺跡の終焉する時期に営まれたと考えられる。

また、御笠団印の出土については5次で触れたごとく、現地表面が大きく改変されていなければ、８世紀後半から９世紀に形成された包含層中に印が含まれていた可能性が強いと考えられる。縷縷報告した8世紀後半以降の頻多なピットが非計画的に形成される生活面が軍団に関わるものか否かは、今回の検討では及ばなかった。

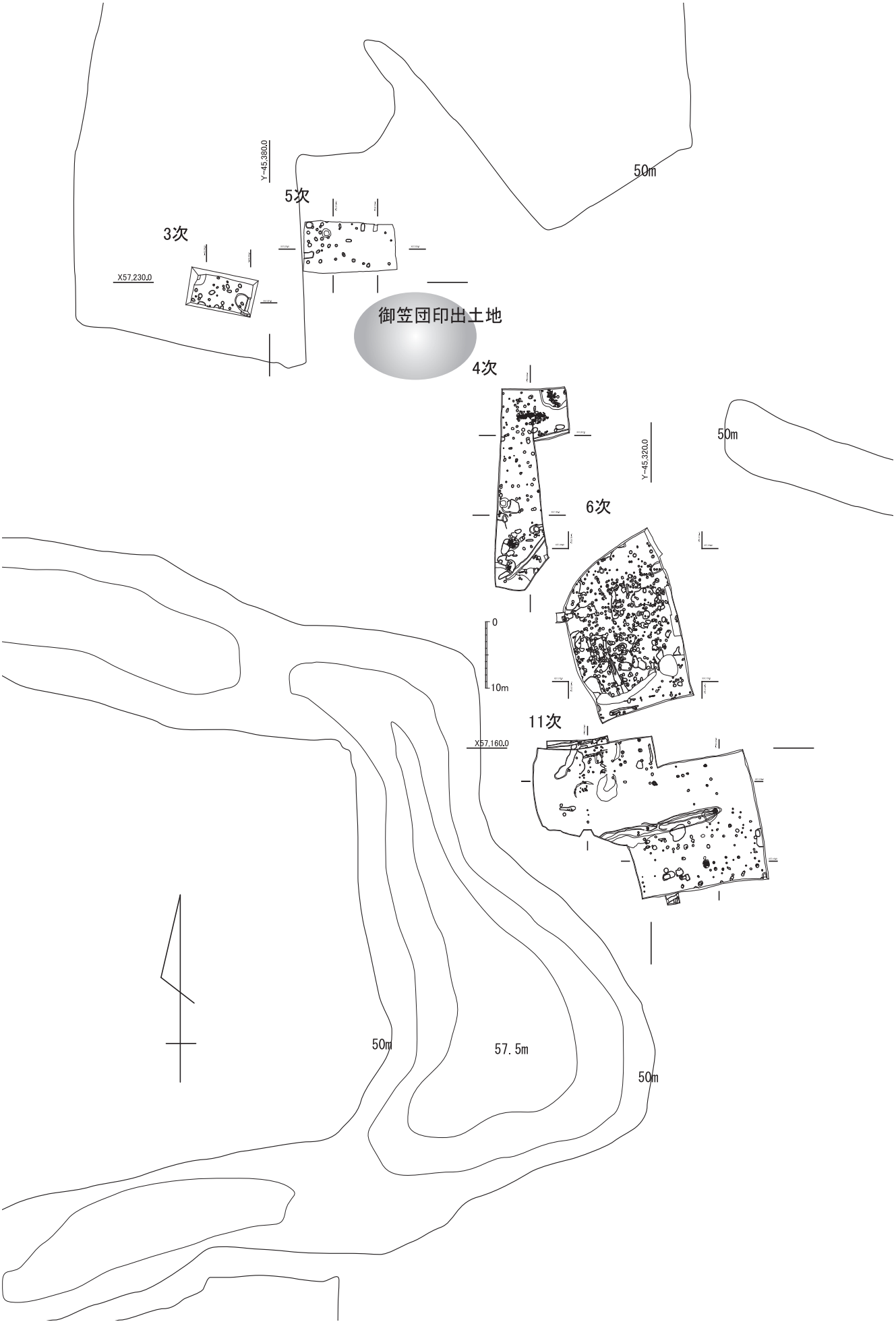


fig.90　御笠団印出土地周辺遺跡の様相

phot.1　調査地周辺俯瞰（北西から）

phot.2　第 3 次調査全景（東から）

phot.3　第 4 次調査全景（南東から）

phot.4　第 5 次調査全景（東から）

phot.5　第 6 次調査全景（右が北）

phot.6　第 11 次調査全景（北から）

報　告　書　抄　録

ふりがな	みかさだんいんしゅつどちしゅうへんいせき
書名	御笠団印出土地周辺遺跡
副書名	第 3,4,5,6,11 次調査
シリーズ名	太宰府市の文化財
シリーズ番号	98 集
編著者	城戸康利・山村信榮・下高大輔
編集機関	太宰府市教育委員会
印刷	株式会社　三光　　〒 812-0015　福岡市博多区山王一丁目 14-4　　TEL　092-475-6271
所在地	福岡県太宰府市観世音寺 1 丁目 1 番 1 号
発行年月日	2008（平成 20）年 3 月 31 日

ふりがな 所収遺跡名	大宰府条坊 【鏡山復原案】	ふりがな 所在地	コード座標（国土座標第 II 系）				調査期間		調査面積 ㎡	調査原因
			市町村	遺跡番号	X	Y	開始	終了		
御笠団印出土地周辺遺跡 第 3 次調査	条坊外	太宰府市坂本 3 丁目 754 番地の 4･15	402214	2100105	57227.00	-45390.00	19831124	19831205	55	専用住宅建設
	遺跡種別	時代	主要遺構		主要遺物		特記事項			
	集落	古代	廃棄土坑				官衙周辺の関連施設			

ふりがな 所収遺跡名	大宰府条坊 【鏡山復原案】	ふりがな 所在地	コード座標（国土座標第 II 系）				調査期間		調査面積 ㎡	調査原因
			市町村	遺跡番号	X	Y	開始	終了		
御笠団印出土地周辺遺跡 第 4 次調査	条坊外	太宰府市坂本 3 丁目 756 番地	402214	2100105	57200.00	-45340.00	19890109	19890330	200	専用住宅建設
	遺跡種別	時代	主要遺構		主要遺物		特記事項			
	集落	古墳～古代	掘立柱建物・柵列		緑釉陶器、越州窯系青磁		官衙周辺の関連施設			

ふりがな 所収遺跡名	大宰府条坊 【鏡山復原案】	ふりがな 所在地	コード座標（国土座標第 II 系）				調査期間		調査面積 ㎡	調査原因
			市町村	遺跡番号	X	Y	開始	終了		
御笠団印出土地周辺遺跡 第 5 次調査	条坊外	太宰府市坂本 3 丁目 757 番地の 10	402214	2100105	57235.00	-45370.00	19910917	19911022	200	専用住宅建設
	遺跡種別	時代	主要遺構		主要遺物		特記事項			
	集落	古代					官衙周辺の関連施設			

ふりがな 所収遺跡名	大宰府条坊 【鏡山復原案】	ふりがな 所在地	コード座標（国土座標第 II 系）				調査期間		調査面積 ㎡	調査原因
			市町村	遺跡番号	X	Y	開始	終了		
御笠団印出土地周辺遺跡 第 6 次調査	条坊外	太宰府市坂本 3 丁目 52 番地	402214	2100105	57170.00	-45333.00	19930420	19930804	500	専用住宅建設
	遺跡種別	時代	主要遺構		主要遺物		特記事項			
	集落	古代	木棺墓		緑釉陶器、越州窯系青磁、製塩土器		官衙周辺の関連施設			

ふりがな 所収遺跡名	大宰府条坊 【鏡山復原案】	ふりがな 所在地	コード座標（国土座標第 II 系）				調査期間		調査面積 ㎡	調査原因
			市町村	遺跡番号	X	Y	開始	終了		
御笠団印出土地周辺遺跡 第 11 次調査	条坊外	太宰府市坂本 3 丁目 54 番地の 1	402214	2100105	57150.00	-45320.00	19941012	19950322	1,100	専用住宅建設
	遺跡種別	時代	主要遺構		主要遺物		特記事項			
	集落	古墳～古代	掘立柱建物・柵列		緑釉陶器、越州窯系青磁、製塩土器		官衙周辺の関連施設			